
カン違いにもほどがある！

乃梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カン違いにもほどがある！

【Zコード】

Z5089R

【作者名】

乃梨

【あらすじ】

美春は駆け出しのWebデザイナー。優秀な弁護士だが中身は？
な兄と二人暮らしをしている。ある日派遣先の会社で社内運動会に
出て活躍したことから社長に気に入られてしまい、何かとチヨツカ
イを出されるウザい日々を送っていたが、異動してきた新しい上司
によつてその生活に変化が訪れる。なぜなら、社内でも評判のでき
る男でいい男である彼の秘密を知つてしまつたから
果たして社長の真意は？ 次々と襲いかかる悲劇（喜劇？）を乗
り越え、美春は幸せをつかむことができるのか？

* ラブコメちょっとシリアルなお話です。* 番外編『ふたりの休日』移転しました。* 現在第1章を加筆修正しています。詳しくは活動報告にて。

登場人物紹介

越智美春（おちみはる）二十一歳。Webデザイナー。秋田県出身。インターハイ陸上女子四百メートル四位入賞の経験を持つ。家では兄、会社では社長と、ウザい人たちに悩まされる日々を送っている。色気より食い気。ベタ好き。彼氏なし。純愛に憧れているが、自分の恋愛には無頓着である。

瀬尾達也（せおたつや）二十七歳。PR事業部から異動してきた新係長。美形でモテるが社内恋愛はしない。仕事のできる男として周囲からも認められ、出世も早い。以前とある場所で見かけたことから美春の関心を引いてしまい……

越智悠人（おちゆうと）二十八歳。美春の兄で弁護士。幼い頃から美春の面倒を見る。頭脳明晰・成績優秀・眉目秀麗で、誰もが認める「理想の兄」だが、その実態は……？

藤田徹（ふじたとおる）二十六歳。美春の同僚でWebプログラマー。高校時代の同級生と純愛一直線の人。美春の憧れ。

相沢杏子（あいざわきょうこ）二十七歳。美春の同僚でWebデザイクター。美春の姉的存在。頼りになるアネコ肌。

佐久間佳祐（さくまけいすけ）二十八歳。Webプロデューサー。主任に昇進する。部署の若手社員をまとめる存在。瀬尾とは同期。工口軍団の一人。

石津浩太（いしづこうた）二十五歳。美春の同僚。工口軍団の一
人。

小林亜矢（こばやし あや）二十四歳。美春の同僚で、おやつ仲間。おとなしい性格だが、激しい一面も。常にブログネタを探している。

斎藤 WEB事業部社員。

西嶋 同上。

山本 同上。美春と同じWebデザイナー。Hロゴ軍団の一人。

倉田 WEB事業部女性社員。美春の弁当仲間。

大森 同上。美春の弁当仲間。

手塚 WEB事業部のお局的存在。

工藤貴文（くどう たかふみ）三十四歳。WEB事業部課長で美春の上司。元広告代理店勤務で、自他共に認める仕事のできる男。部下から信頼されている。瀬尾の元上司でもある。

工藤みどり（くどう みどり）一十七歳。工藤課長の妻。旧姓金子。元WEB事業部社員で瀬尾と佐久間の同期だった。

秦野真司（はたの しんじ）三十三歳。WEB事業部主任。クリエーターをまとめてWeb制作を統括している。

松永繁（まつなが しげる）四十四歳。WEB事業部部長。

片岡麻里子（かたおか まりこ）二十六歳。PR事業部一課社員。瀬尾の元同僚。

長野遙（ながの はるか）二十六歳。PR事業部一課社員。片岡の後輩。

川嶋真一郎（かわしま しんいちろう）四十八歳。H&G

「ミュー」ケーションズ常務取締役人事部長。半田社長の大学時代の友人。美春の味方？

半田暁（はんだ あきら）四十七歳。H&G「ミュー」ケーションズ社長。やり手でワンマン。美春を気に入り何かとチヨツカイを出すが、果たしてその真意は？

半田光（はんだ ひかる）十七歳。半田社長の長男。高校で陸上部に所属している。美春を先輩ランナーとして尊敬するが、なにやら思惑も？

滝沢信広（たきざわ のぶひろ）二十八歳。営業部一課主任。瀬尾とは同期で彼をライバル視している。美春と偶然会ったのをきっかけに近づくが、その目的は……？

比嘉朋之（ひがともゆき）三十二歳。営業部二課課長。H&G「ミュー」ケーションズで最も若くして課長になつた人物。瀬尾が営業部時代に指導係を務めた。

登場人物紹介（後書き）

物語開始時点での年齢です。
登場人物は順次追加予定です。

プロローグ

第一走者の齊藤さんからバトンを渡されたとき、青いTシャツの裾をはためかせた背中はすぐにも手の届きそうな距離にいた。軽くストライドを伸ばして追い抜くと、靴底から感じるトラックの感触が五年前の記憶を身体に呼び覚ました。

そう。どう走ればいいのか、もう私の身体は分かつている。

走りだした瞬間から放射する熱を風が冷却していく。コースに出る前にずっと溜めていた熱。一番を目指す熱だ。

あの日々はもう思い出になってしまったけれど、細胞のひとつひとつに記憶は刻み込まれていて、溜め込んだ熱を発散させて得られる快感を貪欲に求めている。

風と一緒になる快感を。

速く走ろうとすればするほど強く抗う空気が、次第に私を受け入れ、包み込んでゆく。

空気に溶け込む。風になれる瞬間。

この瞬間が欲しくて、あの頃は走っていたんだ。

やがて黄色いTシャツの背中が大きく見えてきた。あれはビックの部署だつたろう。長身のわりには身体が安定しているけど、思つように脚を動かせていないみたい。

彼の呼吸音が風に流れて耳に入つてくるほど近づき、横に並んだときにはもう、私の目は前方を走るオレンジのTシャツを見ていた。抜かしたときにチラッとこちらを見たような気がしたけど、女だと知つてびっくりしたかもしれない。

身体が叫んでいる。もつと速く。もつと。

空気と一緒にになった私の脚は重さを感じない。いつもより百メートル短いから、ペースを落とさずこのままいけそうだ。でも普段忙しくてなかなか運動できないサラリーマンには三百メートル全力疾走はきついだろうな。アンカーはもつと大変だけど。

次第に大きく見えるオレンジのTシャツ。かなり上体が揺れている。その先では、黒のTシャツに包まれた身を大きく動かしてアンカーの石津さんが何か叫び、バトンタッチの体勢に入った。

ああ、もうすぐ終わってしまう。

オレンジの背中に追いついたときには、苦しさよつ名残惜しさの方が大きかった。

もつと走っていたいのに。だつてこの瞬間は風のよつて自由でいられるから。

本番一時間前にちょっと練習しただけだったのに、バトンタッチは小気味良いほど上手くいった。幸運の女神が微笑むとはまさにこのことだと思う。反対にオレンジチームはとことんツキに見放されたようで、逆転され焦ったのか、アンカーがバトンを落としてしまった。

もはや前方には誰もいないトラックを石津さんが駆け抜けでゆく。わずかに距離を縮められたものの独走態勢は揺るがなかつた。一周して再びここに戻つてくる彼を、少しずつ身体のほてりを冷ましながら見守る。

それは私だけでなく、すでに出番を終えた走者たち、観客席にいるどの部署の社員も同じだつた。先頭を走る黒いTシャツの姿を皆が目で追い、歓声を上げて迎え入れる。

だからそのとき、私のことをじつと見つめる人がいたなんて、気づくわけがなかつた。

これがすべての始まりだつたことも。

プロローグ（後書き）

初連載です。

つたないとこねはいろいろあるかと思いますが、楽しんでいただけたら嬉しいです。

第一話 ワケあり(?)の正社員登用

「で、部長、何だつて？」

「ヤニヤした顔で隣の席の藤田さんが尋ねる。朝イチで松永部長に呼ばれた私をてぐすねひいて待っていた様子だ。

彼には悪いと思いながらも、私は仏頂面で返事をした。

「正社員として契約したいって」

「やつぱりね。絶対そう来ると思つてた。で、ビツさん？ 今度は受けれるの？」

私は無言でモニターを睨みつけると、意味もなくマウスを数回クリックした。そのせいで加工した画像の色が暗くなつたのを見て、彼が意外そうな声を出す。

「あれ、何かちょっと怒つってる？」

眉をひそめて私の顔をのぞき込む藤田さんは、心配半分興味半分と言つたところか。正社員契約を打診されて怒る理由など思い当たらないのだろう。

私は心情を訴えることにした。彼ならきっと私の気持ちを分かってくれるはずだ。

「部長、私にお寿司を奢^{おご}ってくれるって言つたんですよ

「は？」

藤田さんは目を瞬かせた。部長の話が予想とは違つていたからであらう。そりや、朝つぱらから部下を呼んで「寿司を奢る」なんて言つ上司は普通いない。

しかし話は寿司だけでは終わらなかつたのだ。

「それに、焼肉もつけるって言つんです」

瞬かせた目を今度は細めて、彼は無言で先を促した。寿司、焼肉と来てさすがに不審に思つたようだ。

「なんなら、しゃぶしゃぶも連れて行つてもいいつて。だから、正

社員になれって」

話の行き着く先が見えてようやく腑に落ちた彼は、なるほど、とつぶやいた。これならば私の気持ちに同調してくれるに違いない。

彼はとても優しい人なのだ。

「私のことなんだと思つてるんですかね、部長は？ まるで食欲魔人みたいに！ 食べ物さえ出せばなんとかなると思つてるところが、悔しいんですっ」

私は部長に対する憤りをぶちまけた。しかしそれを聞いて藤田さんの口からぽつりと漏れたのは、部長への非難や私への慰めの言葉ではなかつた。

「……正しい戦略だつたと思つけどな」

なんで藤田さんまで！

私が、越智美春（おちみはる）二十一歳。職業はWebデザイナー。PR会社H&G・GミニアーケーションズWEB事業部が現在の職場だ。派遣社員として働いて約半年になる。

実は三ヶ月前の契約更新時にも同様に正社員契約を持ちかけられたのだが、とある理由によりお断りした。今回もまた首を縦に振らないと思ったのか、工サをちらつかせる作戦できたのだろう。

確かに寿司「回転寿司じゃないぞ」と部長は念を押したには心が惹かれた。それは否定しない。だけど、更に焼肉だしゃぶしゃぶだと置みかけられて、単純に私が喜ぶと思われていることが屈辱なのだ。

ちょっとと考えさせてください、と返事は保留してきた。考えたところで答えは決まつているような気もするのだが

「美春ちゃん」

……來た。

正社員になる話をすんなりと受け入れられない原因が。

「今日も暑いねー。ほら、水ようかん持つてきたよー。一緒にお茶にしようかー」

彼が「こう言えれば従うしかない。「いつもありがとうござります」と少々引きつった笑顔で、共に休憩室へ向かう。ちょうど良いレイアウトを思いついたところだったのに、作業は全て後回しだ、彼のお陰で。

「こんなに暑いと仕事やる気にならないんだよねー。でもビックリスケジュール入れられちゃってさ、秘書の印を盗んで逃げ出してきたんだよ、美春ちゃんとお喋りしたくて」

私の方こそ逃げ出したい。彼とお喋りしている時間がもつたないな

い。
「疲れたときにはやっぱ甘いものだねー。」の水ようかん、取引先の社長さんからもらつたただけじゃ、美春ちゃんに食べてもらおうと思つて冷やしといたんだよー」

そんなに疲れているように見えないぞ。水ようかんは美味しいけど。

話を聞き流しながらじつと彼をつかがう。今回の正社員登用について一言でも言及しようものなら、部長の背後に彼がいることを確信できるのだが。

何を考えているのか、はたまた何も考えていないのか、彼はどうでもよいお喋りを続けた　探しにきた秘書に連れ戻されるまで。

行きつけの洋風居酒屋は、とにかく机に配置された観葉植物が邪魔をして空席状況が分かりにくいのが特徴だ。それでも冷房が効きすぎない席をなんとか見つけて、とりあえず生ビールと料理をいくつか頼む。

大きく広がったヤシの葉がぼんやりと影を落とすテーブルに、泡

立つビールが先に運ばれてきた。乾杯して喉に流し込む。

共に同じテーブルを囲むのは藤田さんと相沢さん。職場で一番親しくしている同僚だ。

「あー、うまいっ。やつぱ仕事のあのビールは最高」

私の向かいで威勢の良い声を上げる相沢杏子さんはWebディレクターだ。今年二十七歳になる。アネゴ肌でとても頼りになり、派遣として働き始めたときから彼女にはいろいろと世話を焼いてもらっている。

その隣りに座る藤田徹さんはWebプログラマーで杏子さんは同期である。穏やかな性格の人で、技術上の質問にはいつも丁寧に答えてくれる。

このふたりとは同じチームで仕事をすることが多く、自然と仲良くなつた。三人で飲みに行くことも少なくない。でも今夜のお誘いは明らかに正社員契約の話をするためで、藤田さんが部長の発言に絡めて説得に乗り出した。

「まあ、デリカシーのない言い方だつたかもしねいけけど、それだけ部長も本気でポチのこと欲しがつてるんだからさ。正社員になれば？ 条件だつて悪くないんだろ？」

ちなみにポチというのは職場での私の愛称である。藤田さんが子供の頃に飼っていた犬に似ているそうだ、私が。

犬に似てるつて、なんかショック。だつて『ポチ』だよ。名字は越智だけど。

この愛称のせいなのか、職場で一番年下だからなのか、日頃からなにかといじられることが多いのだ。

やがて杏子さんも藤田さんに加勢し始めた。

「そうよ、才能を認められたようなもんなんだから。それにウチは基本、定時上がりでしょ。残業しないのもスキルのひとつってね」
そのとおり。このH&Gコミュニケーションズは私にとって初めての派遣先なのだが、残業ゼロを目指す会社なのだ。こん

などこらもあるのかと新鮮な驚きでもつて働き始めたことを思い出す。

前に勤めていたWeb制作会社では若い女の社員であろうと残業・徹夜・残業・徹夜の繰り返しだった。しかもサービス残業だ。一度時給に換算してみたら涙がこぼれそうになつたものの、私のような新人、ペーペーデザイナーは認められたいからやるしかない。

同居している兄に「若い女が朝っぱらから栄養ドリンク飲んでるようじや世も末だぞ」と言われようとも。

もともと私は朝型人間で従つて就寝時間も早い。それが昼出勤・深夜残業の職場では生活サイクルが合つわけがなく、無理に合わせたのがいけなかつたのか、十ヶ月頑張つた挙句に倒れた。

病院のベッドの上で気がつくと傍らには心配そうな顔でのぞき込む兄がいて、気が動転していたのかずれた表現で無理をした私を叱つた。

「お前が先に死んだらいつたい誰が俺の葬式を出すんだよー!? 知るかそんなこと！」

と言いたいのを飲み込んだ。また話がややこしくなるから。

しかし激怒した兄は会社側を訴えると息巻いて、なだめるのが大変だつた。職業が弁護士であるため理論武装には長けているのだ。心配をかけたことは事実だつたので、素直に謝り退職の意志を示すとやつと落ち着いてくれた。

専門学校を卒業して、最初にアルバイトで入つたデザイン会社やWeb制作会社も正社員はやたらと残業が多くつた。この業界と残業は切つても切り離せないのかい！

結局、一ヶ月休養して派遣会社に登録した。派遣社員ならば残業を強いられないからだ。そして最初に派遣された会社が、Ham p-Gコミュニケーションズだった。

良い仕事をして認められればいつかは正社員になれるかもしれない。頑張ろう。これが最初の目標だつた。

運ばれてきたタコのマリネサラダに早速箸をつけ、空っぽの胃袋に送り込んだ。「リコリしたタコの食感を楽しむ私に、藤田さんと杏子さんは正社員の有利な点を説き続ける。

「キャリアアップだってできるよ？ ディレクターになれば収入もアップするし」

「派遣は不安定でしょ。あんただつていつも言つてるじゃない」職場環境だけを言つなら申し分ないと思つていて。それで正社員になつて安定した収入が得られるなら御の字だ。

それを伝えると杏子さんが訝しげに訊く。

「だったら何が問題あるの？」

「オッサンですよ」

ふたりは顔を見合させ、そろつて大きくため息をついた。

「社長かあ……」

ほり、ふたりだってちゃんとわかってるのだ。オッサン　社長
が唯一無二の問題である」と。

半田暁社長。今年四十八歳になる自称ナイスミドル。元広告代理店勤務で、三十歳のときに転職したのが現在のH&Gコムニケーションズ。傾きかけていた同社を再建し、三十九歳で社長に就任、売上高三十億の企業に成長させた。

このやり手社長が、普通ならば一派遣社員なんぞが口を利くはずもないお偉いさんが。

ウザい。

暇を見つけては私が所属するWEB事業部に顔を出し、差し入れだよと言つては一緒にティータイムを強要し、フリーズしちゃつた

と言つてはノートパソコンを持ち込み、挙句の果ては同僚の前で私を「美春ちゃん」と呼ぶ。

はつきり言つて邪魔！ 作業が波に乗つているときに社長のお相手を務めるのは著しい効率ダウンなのだ。業務妨害と言つてもいい。が、ワンマン社長ゆえ誰も注意してくれない。こんなことがもう三ヶ月も続いている。

素直に正社員の話を受け入れられないのは、この面倒くさい社長がいるからに他ならない。三ヶ月前に断つたのも彼が原因だ。今回の話も彼が裏で糸を引いているような気がするのだ。

正社員になつたらこれまで以上に遠慮もせずに邪魔をしに来るのではないか。ますますウザくなられたらどうしたらいいのか。

……こんなことになるのなら、コレーハなんか出るんじゃなかつた。あの社内運動会の日を境に社長のWEB事業部通いが始まつたのだから。

なぜあのときコレーハ出ると言つてしまつたのか。もしも時間を巻き戻すことができるのなら、決しててしまはずひたすら風になつているものを。

第一話 WEB事業部の人々

忘れもしない、五月も末のある日のこと。

その朝、本日残業のない者も全員居残りとのお達しは聞いていたものの、派遣社員である自分には適用外とばかりに終業時間になつて帰り支度を始めた私を、工藤課長が曰ぞとく見つけ声をかけた。

工藤貴文課長は我がWEB事業部において自他共に認める仕事のできる男である。自信満々で不遜な態度をとることもあるが、その自信に見合つだけの業績を上げているのが彼のすごいところだ。さっぱりした性格で面倒見もよく、部署の皆の尊敬と信頼を集めている。去年独身生活に終止符を打つまでは、女性にはスゴ腕の男だったらしい。

「ポチ、お前も残るんだよ。……残業代は出さないけどな」チクリと一言忘れない課長に心で悪態をついたが、興味がそれを上まつた。

「何があるんですか？」

「社内運動会のメンバー選考」

「社内運動会？　イマドキですか？」

私の心の声が聞こえたのか否か、課長は苦笑している。

「コミュニケーションを商売にしているウチが、伝統的にやつてる社内コミュニケーション。だから派遣社員にも出てもうつんだけどね。……休日手当は出さないけどな」

あくまで私側のサービスであることを強調するといひ、工藤なだけにクドイ。

まあ、私はもともとこういう行事は嫌いじゃないし、この会社での最後の思い出になるかもしれない。もうすぐ契約満了だし。社員さんだけではメンバーの足りない種目があつたら、ちょこっと出るくらいはいいが。

そう考えながら、単なる見学者のように同僚たちの輪の一一番外側に椅子を持ってきて、ちょこんと座つたのだった。

メンバーの選考は初めから揉めに揉めた。これは毎年のこと「らしく、特にリレーはどこの部署でも押し付け合いになるそうだ。

社会人になつて数年あるいは十数年、運動から遠ざかっている人たちにはガチンコリレーは不人気ナンバーワンなのである。それだけにこのリレーに出て活躍した男性社員は一気に株が上がり、その後飲み会や合コンのお誘いが引きも切らない……らしい。

「俺またアンカーですか？ 今年こそ新入社員に押し付けようと思つたのに！」

入社三年目の石津浩太さんは元サッカー部で俊足を誇っていたそうなのだが、大学時代はチャラチャラとテニスサークルで女の子を口説きまくつていたとかで、すでに現役を離れて約七年。にしても、その逃げの姿勢、男らしくない。普段は「オトコは肉食でなんぼ」なんて言つてるくせに。

ちょうど研修が終わつて各部署に新入社員が配属される時期でもあることから、若いという理由だけで彼らがリレーのメンバーになることが常であるのに、去年入ってきたのは女性社員で、今年はなんどゼロ。石津さんとしては文句のひとつも言いたい気分なのだろう。

新規リレー要員 新入社員はリレーのために入つてくるのではないが、がいな以上メンバーは去年と同じで、という流れになつたときに問題が生じた。メンバーの一人である西嶋さんは現在、右足小指骨折で治療中の身なのだ。

「お前つ、使えねえつ、優雅に自転車通勤なんかしやがるからだ」通勤途上で転倒して怪我をしたにもかかわらず、その日一日勤務をこなした西嶋さんを『サラリーマンの鑑』と称して褒めちぎつて

いたくせに、リレーから逃れるとなつた途端、罵倒する佐久間さんもまたメンバーの一人である。

佐久間佳祐さんは入社六年目。若きWebプロデューサーとして活躍している。口は悪いが統率力があり、部署の若手社員をまとめているリーダー的存在だ。このメンバー選考でも積極的に指揮を執つていて。

「この際、怪我を押して出ろよ」「みんな

「無茶言わないでくださいよ」

代わりに誰がメンバーになるかで、場は紛糾した。

「藤田がいいんじゃねえ?」

「俺文化部出身ですよ」

「若いだろ。歳いくつだ」

「二十六ですけど、最後に運動したのは大学一年の体育の授業です」

「平野さん」

「俺はボウリングぐらいしかしたことないよ」

「山本さんは?」

「運動はベッドの上だけだね」

「ソファの上もでしょ」

「風呂場でよけいに汗かいちゃうときもあるな」

「要するに場所は選ばないってことですよね」

いつたん工口い話題が出ると止めどもなく脱線していくのが、Web事業部男性陣の特色だ。

「相沢さん、女バレ出身ですよね。どうです、サクッとスターターで」

今度は石津さんが杏子さんに話を振った。

リレーのメンバーは男女不問だから、勝つためには男性社員が出て方がないんだろうけど、元運動部の女性だったら充分戦力になるだろう。

しかし杏子さんはキツとした顔で石津さんを睨んだ。

「絶対やだっ！ 入社した年に走つて、もう一度とやるもんかつて誓つたんだからね！」

女性に声をかけては断られることに慣れている石津さんは、めげずに次々と女性陣に話を振つていった。

「小林は？」

「ダイエットが必要な人間に訊きます？」

「手塚さん」

「ゴルフならいいけど」

「富樫さん」

「妊娠中だつつの！」

なおも女性社員に持ちかけようとする石津さんを、佐久間さんが遮つた。

「石津、お前俺に第三走者やらせる気か？ ああ？」

なぜ女性が出ると佐久間さんが第三走者になるんだわ。ハテ。佐久間さんがガラ悪く睨みつけても、石津さんは悪びれもせずに言い放つた。

「死なばもろともつてことで」

「誰がお前と一緒に心中するか！」

ここで斎藤さんが横やりを入れる。

「あ、僕は第一走者の仕事を全うするんで、佐久間さん、あとほどお願いします」

「斎藤、どっちが先輩だ？」

先輩後輩の垣根を越えて、麗しい押し付け合いが始まつたそのとき。

「まあまあまあ」

收拾のつかない場に割つて入つた工藤課長がふと、一番後ろで事の成り行きを見守つていた私に目をやり冗談めかして言つた。

「ポチ、お前、走つてみるか？」

突然指名されてとつさに出て返事は、聞き苦しいことに上なかつた。

「えへほいいんえふか？」

タイミングの悪いことに、頂き物のバウムクーヘンをちゅうりふ口に入れたところだったのだ。運動会の花形種目といえばやはりリレー、派遣社員なんかがでしゃばって出ちゃいかんだろひ、と黙つて控えていたのだが、空腹には勝てない。

慌てて飲み込んでからもう一度訊く。

「私が出てもいいんですか？」

いつもよりトーンの高い声。もはや確認ではなくイエスの意思表示だ。ただ、この場にいた全員が一斉にこちらを振り向いたのにはぎょっとしてしまった。

「私、中学高校陸上部で短距離やつてました。あ、リレーもやつてました」

胸を張つて少々自慢げに言つたその瞬間、つおおーといつ歓声で部屋は包まる。

「何だよ、早く言えよ

「あー、助かつた」

「ポチのくせにー」

次々と上がる喜び（？）の声。

「ポチ、第三走者、いける？ 三百メートルだけど」

顔をほこりばせた石津さんの問いかけに、よつやく私は納得がいつた。

「スウホーテンリレーなんですか！？」

スウホーテンリレー。

第一走者の百メートルから始まり、第一走者が一百、第三走者が三百、最終の第四走者は四百メートルと順に走る距離が増えていくリレーである。あの走者ほどしんどくなつてバテてくるわけだが、走る距離が長い分デッドヒートが多く見られ、運動会では盛り上が

ることウケアイの競技なのだ。

熱が身体の奥からせり上がりてくるのを感じた。久しぶりに本気で走れる場を与えられたことで、身体中の細胞が眠りから覚めて活動し始めたかのようだった。

「いげまス、いげまス。はい！」

いかん。興奮してつい訛なまつてしまつた。

「ちょっとポチ、何、その妙な自信？」

藤田さんが二コ二コしながら「何か隠していることがあるなら全部言つてござらん？」という目をして言つものだから、再び胸を張る。

「わたくし、越智美春、インターハイ女子四百メートル四位入賞でゴザイマスっ！」

一瞬シン……となつたあとに雨あられと降ってきたのは。

「なんで最初っから言わねえんだよ！」

「思いつきり時間無駄にしたじやん！」

「今日のティー間にかけてたのに、このタコー！」

「ポチのくせに！」

「という怒号がありました……」

そして社内運動会本番。

リレーで一位となつた我がWEB事業部は、部創立初の優勝に輝き社長から金一封を受け取り、私は三人を『ごぼう抜きして部を優勝に導いたとしてMVPに選ばれ、社長とツーショットで記念写真に収まつたのだった。

第三話 社長のお気に入り

「おはよー、美春ちゃん」

「あ、社長、おはよーひざいます」

「これね、来る途中のコンビニで見つけたの。おやつにどうぞー」

「えつ。これ一日限定三個のミルクプリンじゃないですか。いいんですか、こんなレアもの」

「もちろん。美春ちゃんのために買つてきたんだからねー。あ、今

日お昼一緒にどう?」

「すみません、私お弁当を持ってきているので……」

「そうか、じゃあ明日はどう? 懐石ランチの美味しいお店があるんだよー。もちろん僕の奢りね」

「えええつ、本当にいいんですか?」

「うんうん、じゃあ明日の予約しておこうかー」

……思えばこの頃の私は可愛かった。どうやってか私の嗜好を嗅ぎつけた社長に、無邪気に餌付けされていた。思い返すたびに忌々しさを感じる。

半田社長はリレーで活躍した私をいたくお気に召したらしく、運動会の翌日には社長室に呼び出されて三十分もお喋りに興じた。企業のトップにいる人と話をするのは初めてのことでも最初は緊張したが、気をよく話し上手で話題の足りない人だった。

その後WEB事業部を訪れては差し入れを持ってきてくれたり、優しく声をかけてくれたりして、私にとっては社長というより親切なおじさんだった。

一緒にランチに行つたときには前の会社の労働環境はどうだったとか、今の職場に不平不満はないかとかいろいろ訊かれて、働きやすい職場であると力説した。

私が朝型でできれば残業を避けたいために派遣をやつしていることも正直に話した。社長は「ヨニヨシながらうなずいて話を聞いてくれた。

同僚たちは「じやつて「すっかり社長に気に入られちゃつて」と鷹揚に構えていて、私への特別扱いを特に不快に思う人はいなかつた。「『ド田舎から出てきた女の子に都会で味わえる美味しいものを食わせてやる親戚のオジサン』なシチュエーションだよな」などとからかわれた。自分たちも社長の差し入れのご相伴にあづかつていたのだから、文句を言える筋合いではなかつたのかも知れない。

そんなある日のこと、上司である松永繁部長に呼ばれてついていった社長室で、正社員としてこの会社に迎えたいと言わたのだった。

「君みたに元氣のある子にぜひ入つてもらいたいんだよねー。君もウチの会社気に入つてくれてるみたいだしー」「チラッと部長を見やるとかすかに苦笑いしている。

「あ、大丈夫だよ、松永部長には僕からちゃんと話しこいたからねー。君のような将来性豊かな子はウチで採るべきだつて」

心が急速に冷えていつたが、その下ではフツフツと負の感情が沸騰し始めていた。

……このオッサン。今言つちゃいけないことを言つたね。

なんで社長が一部署の人事に口を出す？

私は、能力を認められるなら現場の同僚や上司に認められたかった。それで正社員として誘つてほしかつた。それを現場とは直接関係ない社長から言われたつて。

社長、あなたは私の仕事ぶりを一度でもちゃんと見たことがあるんですか。

私のことを気に入つてから誘つてくれるだけじゃないんですね

か。

「ワンマン社長には誰も逆らえないと分かつてて。

「……せっかくのお話ですけど、自分がまだまだ力不足だつてことはよく分かつてますのでお断りします。でもこの職場が好きなのは本当ですし、もし私を必要としてくださるなら派遣として契約更新をお願いします。今はそれ以上のことは望んでいませんので」

一気に言つてふたりとは田を合わせないよううに部屋を出た。プライドが傷つけられたことは自覚しても、それをこのふたりに見透かされるのははじめんだった。

WEB事業部室へと向かう廊下を肩を怒らせ早足で突き進みながら、私は激情に捕えられていた。

悔しい。

部長に認められる前に社長にフライングされたことが。

悔しい。

私の実力が未だそんな程度だつてことが。

「悔し　い！」

抑えきれずにしてどうとう口に出してしまった場所は部署の入り口だった。

「うわー

「びっくりした

「何だよいつたい」

皆が驚いた顔でこっちを見る。もうこの人たちともお別れかも。あの社長の「」意向に逆らつたんだから、契約更新だつてもうないだろつた。

「」のとき私の心は絶望に支配されていた。

食事に誘つてくれた杏子さんと藤田さんは正直な気持ちを話した。

「あんたって負けず嫌いというか、損な性格だよね」杏子さんのため息をよそに、味噌ラーメンをズズズツと吸い上げる。

今日はやけ食いだ。ラーメン餃子に半チャーハン。あと、デザートも必須だな。たとえ絶望していようがご飯を食べるのが私の信条なのだ。

速攻でラーメンを平らげると彼らに再び主張した。

「現場の人に認められたいんですよ。社長の鶴の一聲なんか要りません。あとで惨めになるだけじゃないですか」

「俺たちは認めてるつて」

「そうよ、秦野主任だってあなたの契約のこと、前から気にしてくれてたじやない」

秦野主任というのはクリエーターたちをまとめて実際のWeb制作を統括している人だ。現場で最も近い上司と言つていい。彼に認められることを第一目標に頑張ってきたけれど、それもむづむづ終いだ。

「もういいんです。どうせ社長のお気に入りじゃなくくなればお払い箱だらうじ」

藤田さんの麻婆豆腐を勝手にチャーハンにぶっかけた。

「部長が簡単に辞めさせなさいって。ほら、やけ食いはやめなよ」

翌日、出勤した私を待つっていたのは派遣契約更新のお知らせだった。切られるものとばかり思っていたから、狐につままれたようだつた。

WEB事業部にやつてきた社長は見るからに上機嫌で、私は自分の目を疑つた。

「いやー、美春ちゃんたら、僕のツボにハマってくれちゃって参つたなー、もう」

彼の笑顔に何やら悪寒を感じたとしても致し方あるまい。

「真っ直ぐで不器用で純粋で、ホント可愛いんだから。あ、ドーナツ買ってきたから一緒にお茶にしようかー」

それからとこりもの、『社長=ウザいオッサン』の定義が私の中でできあがつたのだつた。

松永部長からエサ付きで正社員に誘われて一週間が経つた。同僚たちは「さつさと正社員になれ、こき使つてやるから」と、どこまで本気か分からぬ表現で背中を押してくれようとしたが、私は返事を保留したままでいた。

そんな状況を変えるべく現れたのは工藤課長だ。昼休みの休憩室になどいつもは来ない彼の登場は、何かあると思わせるには充分だつた。

「お疲れさまです」

「お疲れさん」

自販機でアイスコーヒーを買い、向いの席に座つて私が読んでいた雑誌をパラパラとめくる。さりげなさを装つてはいるが何やら言いたそうな雰囲気に、こちらも身構えた。

「そろそろ決めたか

……來たな。

返事を延ばし延ばしにしていたが、いよいよ決断しようと迫られるのか。

何か言わなくてはと思い口を開くも、気の重さが口調にも現れる。

「……悩んでます。社長の真意が分からなくて。あれ以来正社員のせの字も言つてこないし」

「もともと各部署の人事は部長が権限持つてるんだ。今回は正真正

銘部長の意向だぞ。てこづか前回だつてそのつもりだつたさ。社長に先越されただけで

私を思いやつてか、課長は現場の意向であることを強調した。

「それはもういいんです。私のつまんないプライドなんかひとつくで傷口ふさがつてます。ただ社長がウザいだけです」

「それなんだよなー」

うなるような声を上げる課長。彼もまたお手上げ状態なのだろう、あのオッサンには。しかし彼はひとつ問題を提起して逃げ道を塞ぎにかかりた。

「だけどな、次の派遣先がもつといい職場である保障はないんだぞ。お前にとつて『いい』つて意味だけど」

それはよく分かつております。

「ウチの連中、みんな心配してるよ。お前辞めないだらうなつて。もうちゅんと認められてんだ、周りからはな。秦野なんか、お前を当てにしてチーム編成やつてんだから、辞められたらむしろ困るつて言つてるぞ」

優しげな口調で的確にポイントを突いてくる。さすが課長。元女たらしといつだけあるな。

「課長はどうなんですか。私、見込みありますか?」

「お前はやる気はあるし、勉強熱心だし、いい仕事してると思つよ

「……ホントに?」

課長がこんなに褒めるなんて、胡散くさい。この人、職場では愛情込めてボロクソに言うタイプだから。

「お前にはもつと色んなことを学んでもらいたいと思つてゐる。クライアントとの交渉もだけど、マーケティングも。コンサルティング全般ができるようになつたらもつと面白くなるぞ」

考えたこともなかつた未来の選択肢を示され、軽く驚く。「デザインやるだけじゃダメですか」

「それはお前次第だけどな」

色々な可能性が広がつてゐるところだとなんだらうか。

考え込んでいると、思つてもみなかつた方向から攻めてこられた。
「社長にはセクハラされてるわけじゃないだろ。」の際社長を練習台にして男のあしらい方を覚えるつてのはどうだ」「な、ななな何ちゅうことを。

私があたふたしているのを見て苦笑いを浮かべる。

「まあ、それはハードル高すぎるか。お前つて見るからに処、……」
課長は慌てて口を抑えだが、心に寒風が吹き込むのを止めることは遅すぎた。

……聞いたよ。聞きましたよ、ちゃんと。

はいそうですよ。悪かつたつすね、処女で。しかも彼氏いない歴イコール年齢ですよ。デートだつてしたことないですよ。

いきなり冷たい空気をまとわりつかせた私を、課長はなだめにかかった。

「いやあれだ、きつと、そういうウブなところが社長のお気に召したというか、ほら、機嫌直せ？」

別に社長の好みなど知りたくもない私はブスッとしたまま報復攻撃を考えた。やられたまではいい。そして頭をぐるぐると巡らせた結果、天啓をひらめいたのだ。嫌でも課長を巻き込む方法を。ニヤリとして彼を見やると、少々ひきつった笑顔が返ってきた。

「……ひとつ条件があるんですけど」

数日後、人事部、派遣会社そして私との間で契約書が交わされ正式に社員になつた。この会社に派遣されたときからの目標に到達できたことはやはり嬉しい。社長という問題は残つていてがちゃんと手は打つてある。自分で自分を褒めてやりたい。

その足で松永部長に報告に行くと、そこには顔の緩んだ工藤課長となぜか苦虫を噛み潰した顔の杉本係長がいた。

なんとなく嫌な予感がして部長と課長に視線を走らすと、ニヤけ

た顔の一人が交互に口を開いた。

「社長命令が出てたんだよ、部長と俺に。絶対お前を正社員にしちゃって。できなかつたら減棒だぜ？ もつすぐ子供が生まれるつてのにそりやねえだろ？ あー良かった、お前がオッケーしてくれて」「食いもんに釣られてくれなくて初めはどうじょうかと思つたぞ。お前さんもあれだな、社長がちょっかい出すようになつて学習したんだなあ」

「あ、お前が出した条件、『社長がちょっかい出してきたら体よく追つ払う』役は係長に任せるから。部下が働きやすい環境を作るという仕事はそろそろ係長にやつてもらおうと思つていたところなんだよ」

「社員になつたんだからこれからやつかまれるぞ。背中に気をつけた方がいいかもしけんぞ？」いやー、お前さんも大変な人に見込まれたなあ」

がつちりと握手を交わしたふたりをぼんやりと見つめた。

……やられた。

私が心の中で課長の首を絞めることは言ひまでもない。

第四話 異動の季節

「おはよー」やこまーす

Hントリーンスホールに立つ警備員のおじさんに挨拶すると、田深にかぶつた帽子の下から少し眠そうな田がこちらを見た。

「おはようさん。いつも早いねえ」

派遣社員としてこの会社で働くようになつてから、そして正社員となつた今でも、職場では一番乗りの私である。誰もいないオフィスに足を踏み入れる瞬間、競争しているわけでもないのに「勝った！」と思つてしまつのだ。

「あ、美春ちゃん」

Hレベーターホールとは反対側へ向かつ私をおじさんが呼び止め、「ヤリ」と笑う。

「走るんでねえぞ？」

「分かつてますよお、もつ」

自分のやつたこととはいえ、いつたいいつまでいじられるのかと思つと恥ずかしくなるのだが、気を取り直してそのままホールを抜け、非常階段へ向かう扉に手を掛けた。

Hレベーターを使わずに階段を上つてオフィスまで行くことは、すでに日課となつてしまつた。仕事柄パソコンの前に座つている時間が長いので、適度な運動は必要不可欠なのだ。

週末の朝にはジョギングやダッシュなど走り込みをして、負荷を求める身体の欲求に応えてやつてはいるし、この会社で働くようになつてからは代々木公園にある陸上競技場、通称織田フィールドにも時折行つてはトラックの感触を忘れないようにしてはいる。一般開放日には無料でトラックが使えるとあつては、走らない手はない。つづく私は走ることが好きなんだなあ、と思つ。

恵比寿駅から徒歩七分の距離にあるエ&エム・Gビル二ケーションズは、十階建てのビルの八階から十階の三フロアを占めており、我がWEB事業部は最上階にある。

エレベーターの脇にある階段は、日中はシャッターが空けられるため見た目を意識した作りになつており、社内のフロア間の行き来にはこちらが使われることが多い。

一方、私が利用する非常階段は防火壁及び防火扉によつて遮られ、無機質で簡素な階段室となつており、ここを十階まで上つてフロアに入り、IDカードを使って裏口から社内に入る」としている。

私の他に非常階段を使う人なんていないから、つい鼻歌が出てしまつても全然問題ない。それどころか、実はこつそりカラオケの練習までしているのだが、そのことはまだ誰にも言つていない。

「この階段がほぼ私専用であることに味を占め、一ヶ月ほど前、かねてよりやつてみたかったことに挑戦した。一階から十階までダッシュで上つてタイムを計るのだ。

ちょうどスニーカーを履いていたから、まさにじつてつけの日だつたと言えよう。階段室への扉を開けたときにぐふふ、と漏れた声を聞いた人は誰もいないはずだ。

が、私の階段ダッシュは防犯カメラにしつかり捉えられており、何事かと跳んできた警備員さんにこっぴどく叱られてしまつた。その後松永部長に呼び出されて赴くと、これまでに見たこともないほどしかつめらしい表情をした彼が私を待つていた。

「お前さんが足が速いことはよく分かつた。分かつたけどな、非常階段はやめとけ？」

すみません、と身を縮こまらせて蚊の鳴くような声で謝罪する私の前で、部長はぐるつと椅子を回転させて向こうを向くと肩をブルブルと震わせた。

お……怒つてるぅうつ。

部署に戻った私を迎えたのは同僚たちの爆笑だった。

「涙目！ 涙目になってるよ、ちょっと！」

ひどい。そりや、自業自得だけど。

例のオッサンからは、

「美春ちゃん、松永部長に怒られたんだって？ 可哀相にー。僕が慰めてあげるから一緒にランチに行こうよー。うな重なんてどう？」
最後の一言には大いにそそられるものがあったが丁重に断った。

正社員になつてからも社長のＷＥＢ事業部詣では続き、意外な効果を我が部にもたらしている。いくら私田当てに来るとはいえ、社長を前に同僚たちも氣の抜けた仕事はできないから、途端に集中して真面目に取り組むようになるのだ。

「部内の総残業時間が減った」と喜ぶ課長だが、私の冷たい視線に気づくと咳払いをして誤魔化そうとするのも当然見逃さない。

よくも逃げたな、課長のヤツ。

私の目配せ（別名ガン飛ばし）に気づいて、社長を部屋から丁重に追い出そうとする係長の作戦は成功率一割五分といったところで、あまりはかばかしくない。上司の連帶責任で何とかしてくれつての！ この日も課長に対する恨みつらみをグダグダ考え、どのようにして報復するのが一番効果的かと一通り思案してから業務に没頭していたら、パソコンメールが来ているのに気づくのが遅れた。私はいつも気持ちは入つてしまふと、集中しすぎて周りを遮断してしまうことがあるのだ。

メールは杏子さんから私と藤田さん宛で、内容は《極秘情報ゲット。今日飲みにいくよ》

彼女は社内の情報通で、そんなこと私に話してくれぢやつてい

んですか！ なんて思うことまで気持ちよくバラしてくれるのだが、WEB事業部外の人たちと交流のない私には誰が誰やらさっぱり分からなくて、いまいちバラし甲斐がないようで申し訳ない。

だいたい、ディレクターならばクライアントや営業と会議はするし、連動して仕事をすることもあるPR事業部とも顔見知りになるけど、私のような駆け出しデザイナーはディレクターの指示どおりに動くのが主で、他部署の社員と顔を合わせることもない。

加えて、大所帯のPR事業部は八階に、営業・総務・経理・広報部などは九階にあり、杏子さん提供の噂の社員と遭遇することもない。

十階にはWEB事業部の他、少数のリスクマネージメント部と対メディアマネージメント部、社長室、重役室や資料室、あとは役付き会議などが行われる会議室ぐらいか。

それほど社内の人間関係には疎かつたので、この日も飲みに誘われたのは嬉しかったけど、極秘情報とやらば酒の肴にすらならないはずだった。

「え？ 杉本係長が？」

「そ。この度めでたく課長に昇進、リスクマネージメント部に異動だつてさ」

聞き流しながら春雨サラダを咀嚼する。会話はふたりに任せて次は焼き鳥に手を出した。

杉本係長はWEB事業部の中では珍しく、私をからかうたりしない人だ。なのに異動とは残念だな。……え、ちょっと待つてよ、そしたら……

「でもそれのどこが極秘なの？ いづれはみんなが知ることだよ」

それがね、と言つて杏子さんはぐつと顔を近づけ、小声になつた。「リスク部の現課長は総務に異動して、総務の現課長は部長に昇進の上、経理に異動」

「経理の部長は？」

「子会社に出向。しかもその理由がなんと
更にヒソヒソ声になる。

「フ・リ・ン」

えええええつ！

驚きのあまり手にしていた焼き鳥の串をポロッと落としてしまった。

しかし藤田さんは冷静に疑問を呈する。

「ウチの会社、プライベートには関与しないでしょ。大人同士がすることなんだからって」

「会社が不利益を被らない限りはね。そこんとこ、社長はすっごく
厳しい人だから。今回は被っちゃったんだよ」

「奥さんが会社に乗り込んで修羅場つたとか？」

ひょっとしてと思って口にした予想はあっさり外れてしまう。

「ポチ、それ昼メロだから。……実はね」

経理課のベテラン大崎佐和子主任は直属上司ビックリカ社長の信頼も厚い、とにかく仕事ができる人だった。

各部署から上がってくる予算書をくまなくチェックし、各種税金の申告を一手に引き受け、外部開示資料を作成する。毎年の経営計画は彼女が提出する素案を基にして作成されるとも言われており、日々の地道だが精密な業務遂行を評価され、社長賞に輝いた経歴を持つていた。

そんな彼女が寿退社することになり、会社側は慰留に努めたが本人の意志は固く退職。

しかし半年後に偶然再会した元同僚が、彼女から涙ながらに打ち明けられた話とは。

経理の高浜部長と不倫関係にあったこと。妻と離婚して彼女と再婚するという話を信用して会社を辞めたが、結局離婚はかなわず、

ふたりは別れた。

元同僚からこの話を聞き社長が激怒、高浜部長は左遷されたとい
う。

「ここからがウチの社長らしいといえばらしいんだけどさ。別に不倫がどうこうっていうのが問題じゃなくて、会社の大切な人材だった大崎主任を退職に追い込んだのが許せなかつたみたい。会社にとっては著しい不利益だつて」

オッサンらしいのか、それが？

「高浜部長つて、何てことないフツーのオッサンなんだけどねえ。いつたいどこが良かつたんだか……つて、ポチ、あんた食いすぎ！」杏子さんが私の前に置かれた、すでに食べ終わつた焼き鳥の串の数を指摘した。藤田さんがため息混じりにそれを見つめる。

「いつの間に……俺の分まで」

本當だ。気づいたらふたりの焼き鳥にまで手を出していた。いかん、言い訳しろ。

「食欲の秋ですから」

「一年中だろ！」

藤田さんは私にピーポパンをひとつ食らわせ、枝豆をつまみ始めた。

「で、ウチの後任係長には誰が来るの？」

「そうそう、それなのよ！ 本日のメインディッシュは」

杏子さんがよくぞ訊いてくれました、とばかりに目を輝かせる。

「不倫の話じやなかつたんですか？」

ふつふつふ、と不敵な笑みを浮かべると、彼女はとある人物の名を口に出した。

「聞いて驚け。瀬尾主任よ」

誰？

「誰？」

私の心の声を代弁してくれた藤田さんと全く反応のない私に、杏子さんはガクツと肩を落とした。

「俺、一緒に仕事した人ぐらいしか知らないもんなあ。あとは同期の連中。どんな人なの？」

「ＰＲ事業部一課にいるんだけどね。一言で言つなら、できる男。最速で主任になつたと思つたら、もう係長に昇進よ。あー楽しみ」その意見は納得しがたい。仕事ができる人つて部下にも自分と同じレベルを要求しそうだから、楽しみだなんて思えない。それに、工藤課長のような厳しいながらも愛を感じさせれる上司は稀だと思つ。まれ

私の心の動きなど察するはずもなく、杏子さんは瀬尾主任とやらの人物像に言及した。

「いい男なのよ！ イ・イ・オ・ト・ン。一見、爽やか王子様。だが立ち居振る舞いからではかとなく漂つ色気、フロロモンに群がる女たち」

宣伝マップーのような文句を口にしつゝとつとする様子は、とても彼氏持ちとは思えない。

「会社に来る楽しみが増えるのはいいことでしょうが。田の保養にもなるし。あんたもねえ、少しさはいい男を見て色氣を養いなさい」「色氣じゃお腹は膨れないですよ」

「そんなんだから彼氏ができるないのよ。つたく」

杏子さんと私の色氣談義に藤田さんが割つて入つた。

「そんなの、男にとつては楽しくもなんともないじゃないか。ウチの奴らが歯ぎしりする姿が今から田に浮かぶよ」

一般的な男性の意見であろう。ＷＥＢ事業部の男性陣なら歯ぎしり以上のことをやりそうだ。

私にとつても、新係長の見てくれなどはざびつでもいい。

「那人、若いんですね？ ちゃんと社長を追つ払つてくれるんですか？ 私はそっちの方がずっと気になるんですけど…」

あの工藤課長でさえ杉本係長に押し付けたのだ。どれだけ仕事ができるか知らないが、そんなエリート街道を突っ走るような人に社長をうまくあしらえるのか？

それに私は、王子様なんて呼ばれる人の実態を知り尽くしている。声を大にして言いたい。外ヅラに騙^{だま}されるな！

第四話 奴の暴動（後書き）

相手役、やつと名前だけ登場です。

織田フイールド： アマチュアのランナー や学校の陸上部も多く利用している陸上トラックです。

第五話 兄と私

多摩川沿いの道を緩やかに走りながら、きらきら輝く川面に目をやる。鼻腔をくすぐる朝の空気は少しだけひんやりとして心地良い。九月も末になり、朝晩は少し気温も下がって過ごしやすくなつた。季節の移り変わりが川面にきらめく陽の光からも窺える。

川のあるこの風景は私が育つた田舎を思い起こさせる。周りにある住宅の数は比べ物にならないけど、天候によつて表情が変わる川のうねりは、どの土地もどの時代も変わらない。もしかしたら兄は、のために、私がこの土地を好きになることが分かつていて、選んだんじゃないかとさえ思つ。

田園都市線、二子玉川駅から徒歩十分のマンションに、突然兄が引越しを決めた。今から三週間ばかり前のことだ。場所も部屋も私は何の相談もされていない。ある日いきなり言ったのだ。

「美春、引っ越すぞ」

私と五歳違いの兄、おおちゆうじん越智悠人は弁護士を生業としている。私の収入には不釣合な小洒落たマンションに住めるのも、ひとえに兄が高額所得者だからだ。

思えば兄と私には幼い頃から格差があつて、『成績優秀な兄と走るしか取り柄のない妹』という構図が一般的であつた。だからと言って兄は決して私に劣等感を感じさせることはしなかつたし、それは今でも変わらない。互いの収入に見合つた生活費を出し、協力して家事を行う。

パツと見には仲の良い兄妹が共同生活を送つているように見えるだろう。

……あくまでパツと見だが。

ジヨギングを終えてマンションに戻る。オートロックの入り口に部屋の鍵を差してドアを開ける。以前住んでいたマンションにはなかつたので、三週間たつても未だに慣れずにドアの前でまじまじして鍵を探してしまつ。

シャワーを浴びてキッチンへ向かうと、ダイニングテーブルの上に紙片が置いてあるのを見つけた。

『十時に起こして』

またか。二十八歳・成人男性の言葉とは思えない。目覚ましで起きろ！……と面と向かって言いたい。言つたらあとが怖いから、決して言えないけど。

いつものあの台詞で起こさなければならないのだろうか。考えるだけで恥ずかしい。

身悶えする思考から逃れるために、朝食作りに取りかかることにした。

兄と私は秋田県出身である。

私が幼少の頃に脱サラをして父は新聞販売所を始めたのだが、今でも習慣として残る早起きはその頃から身体に叩き込まれたものだ。仕事柄休みも少なく家族と一緒に旅行に行つた思い出もないし、特に裕福な生活をしていたわけでもないが、毎日毎日同じことを黙々と続ける父の姿はむしろ、格好いいことだと思つていた。……これは多分に兄の影響によるのだけれど。

仕事の忙しい両親に代わつて私の面倒を見てくれた兄は、各家庭で毎朝毎晩新聞を読めるのは父のおかげ、たとえどんなに地味で変化のない仕事であろうが社会の役に立つてているのだ、だから父を誇りに思え　と、小学生の私に何度も説いた。

兄は幼い頃から頭脳明晰・成績優秀で、高校に進学してからは勉強ばかりしていた。私は毎晩食におにぎりを持つていき、「頑張

れ、あんちゃん」と馬鹿の一つ覚えみたいに言つていた。
やがて東京の国立大学に合格した兄は故郷を後にした。

父が亡くなつたのは私が中学一年の秋だつた。折からの長雨で地盤が緩んでいたところに大型台風が直撃し、各地で土石流の被害が出た。長年の顧客である独居老人を心配し様子を見に行つた父は、崖下にあるその家で土砂崩れに遭い、帰らぬ人となつた。

新たに人を雇つて新聞販売所を続けた母は、病で逝つた。私が高校三年の秋のことだつた。ショックのあまり進路も何も考えられなかつた私は、兄の勧めに従つて上京し、専門学校に入学した。

午前十時。兄が指定した起床時間である。

のののと兄の自室に向かうのは心理的抵抗が足を重くさせてくるからだ。しかしこれをやらないと、後が怖い。

意を決して部屋のドアを開け、ベッドに近づき、兄の身体をそつと揺する。

「……お兄ちゃん、起きて。もう朝ご飯できてるよ。ほら、お兄ち
ゃんてば」

気色悪くならないみつこ、努めて平坦に言つたつもりだったのに。背筋が寒い。

兄はこぢらに背中を向け、布団をかぶつたままで返事をした。

「何だよ、その棒読み。もっと心情込めて言えよ。はい、やり直し」とつぐに田が覚めていたんじゃないかと思えるほど明晰なお言葉だ。クソッと思つたが、面倒くさくなる前に片付けててしまいたい。

「お兄ちゃん、起きて。『飯が冷めちゃう。今日は買い物に連れていつてくれるつて言つたじやない！』ほらあ、早く起きてつてばあ顔を引きつらせながら糖分過多な声を出す。すると、わざとらしく伸びをした兄は、

「日曜ぐらい寝かせりよお、もづ、仕方ないなー、美春は

やれやれといった表情で、むりくじと起きたした。

ウザい。変態。

心の底から思つた。

母のお腹に宿った第一子が女の子だと分かつた瞬間から、両親は兄に思想教育を施した。

『おとなしくて可憐な妹を守る、強くて優しい兄』『わがままな妹に甘い兄』『いつもあとにくつつくお兄ちゃん子の妹の面倒をついつい見てしまう兄』などといふ、古くから漫画や小説で使い回されてきた設定が大好きなベタな両親が、我々兄妹にもそのパターンを当てはめようとしたのだ。

何かにつけ、妹を守れだの、優しくしろだの、兄とはこういうものだと、私がまだ生まれてもいないときから洗脳された結果、面倒見が良いと言えば聞こえはいいが、やたらと心配性で過干渉な兄が出来上がる。

未だ幼児であつた兄が慣れない手つきで私のおしめを替え、離乳食をスプーンで私の口に運び、よちよち歩きの私の手を引く。

それだけではない。私が聞き分けのないことを言えば優しく諭したりをすれば一緒に謝り、危険なことをすれば厳しく叱つた。思えば何という分別くさい子供であつたことだろう。

成長するにつれて両親からは『理想の兄』、周囲の大人たちからは『よくできたお兄ちゃん』との評価を受けるようになった我が兄であつたが、妹の私はといふと、これがちつとも理想的ではなかつた。

つまり『おとなしくて可憐』でも『お兄ちゃん子』でも特別『わがまま』でもなかつたのだ。

お転婆で元気いっぱい、近所の子供たちと徒党を組み、売られた

ケンカは必ず買い、負けても泣き言は一切言わず、その上逃げ足も速かつた。

両親と兄は軌道修正に励んだものの、生まれ持った性格ゆえか、私は家族にとつていつまでたつても理想とはほど遠い存在だつた。しかし陸上部に入つて活躍し始めると、『自慢の娘』『自慢の妹』としての地位を獲得し、『理想の妹』という幻想は忘れ去られたと思つていたのだが。

シャワーを浴びた兄が朝食の席に着く。Tシャツにスウェットパンツというラフな格好でも絵になるのがムカつく。オフの時だけ垂らした前髪の下には形の良い眉とくつきり一重の目。すつきり通つた鼻筋と少し薄めの唇。長身に長い脚。くつろいだ王子様がここにいる。

味噌汁を一口すすつた兄が口を開いた。

「で、今日は何の買い物をしたいの、美春？」

さつきのあれば思いついた台詞を口走つただけだ。別に付き合つてもらうような買い物なんかないから！

兄と一緒に買い物をする気などさらさらしない私は、先約があることを思い出させた。「あんちゃん、今日デートだべ？」

途端に皿をすつと細めて低い声を出す。

「お兄ちゃんはいつだつて美春優先だよ？ そんなこと今更言わせるなよ」「

ああっ、ウザい。私のことはいいから、デートに行つてくれ！
またフラれたつて知らないからね！」

兄が東京の大学を受験すると知り、私は心中ほくそ笑んだ。毎夜おにぎりを差し入れて応援したのも下心があつたからだ。煩わしい兄がいなくなれば平和な生活が訪れる。

受験勉強の息抜きと言つては私の勉強に鬼教師のように口を出し、休日に友人と出かければ誰どこに行つて何時に帰つてくるのかとしつこく問い合わせ、陸上部の練習のあと男子部員と一緒に帰らうものならどういう関係だと詮索する。

これだけならどこにでもいる　かどうかは分からぬが　過保護・過干渉な家族の一例に過ぎないだろ。しかし兄の場合、その外見ゆえに厄介な事情がついて回つた。

私が物心ついた時から兄はモテていた。毎週のようにラブレターをもらい、デートに誘われ、バレンタインデーにはチョコレートが山積みになる。

王子様的容貌もさることながら、妹に対して王子様であろうとする心根が外にも漏れるのか、「なにげない笑顔からも滲み^[じん]で優しさ」（某クラスメート談）にオチた女子の多いこと多いこと。

しかし『理想の兄』である彼は、常に私が優先で、それをおかしいとも思わない。

「妹の宿題見てやらないと」とか、「妹の買い物さ付き合わねば」とか、こつちが頼んでもいいのに積極的に私に関わろうとするため、どれだけ妬まれたことか。

だから、兄が大学に合格して心の中で快哉を叫んだ。やつとこれで自由だ。地元の女子たちには氣の毒だが、兄も東京でいってる女性たちを相手に、妹の関わらない自由恋愛を楽しんでくれるだろ。そして、自然と妹離れをしてくれるだろ。

そう願つていた。

しかし、母の死で独りぼっちになってしまった私を東京に呼んだ兄は、今度は保護者としての責任も背負うことになり、過保護・過干渉ぶりを更にパワーアップさせたのだった。

朝食を食べ終わって新聞を読み始めた兄に熱いお茶を差し出し、私も自分の分を湯呑みに注いで手近にあつた煎餅に手を出す。

「あんちゃん、お墓参りどうする？」

「あー、裁判の準備で行けそうもない」

「へば私一人で行つてくる」

兄はお盆に行つていたな、そついえば。

「早いなあ。あれからもう五年か」

ふと兄がつぶやいた。

本当にそのとおりだ。来年はもう七回忌。また節目の年がやつてくるんだなあ。

感慨に浸つていると、兄もまた昔を懐かしむ顔をしている。

「今にも泣きそうな顔で俺につかまつた美春が、もう会社勤めしてるんだもんなあ」

心の中でガクツとよろめいた。

そこかよ。……思い出したくないことを。

新幹線から降り立つた私を出迎えた兄は、これまで一番、優しくて頼もしかつた。

母の死のショックを引きずっているのに加え、大都市の喧騒、人の多さ、狭い空 要するに慣れない都會への不安に怯えていた私を、暖かく包み込むように受け入れてくれた。

五年に渡る東京暮らしで兄自身、もまれて強くなっていたのかもしれない。

しかし私は知らなかつたのだ。心細くて袖に縋る私を気遣いながら、内心兄がほくそ笑んでいたことに。

両親が教え込んだ『理想の兄妹』の肖像が、数年間離れて暮らす間に次第に兄の中で変質していくことを知る兆しは、専門学校への入学手続きが終わつたあとに起きた。

「これから人前では『お兄ちゃん』で呼べよ」

「これを聞いて目が点になり、

「あんちやんは、あんちやんだべ？　『お兄ちゃん』で、あべわり

(気持ち悪い)……」

一瞬眉間にしわを寄せたものの、すぐさま微笑んで兄は言った。

「美春にそう呼ばれたいんだ。ほら、言つてじらん、お兄ちゃんつて」

背筋がゾゾッとした。こんな兄を見るのは初めてだ。

再び兄に促され、嫌々ながら口に出した。

「お……おに……ちゃん……」

途端に鳥肌が立つた。

しかし兄はそんな私の心情などおもんぱかることもなく、

「萌えるなあ」

「あんちやん……なんかおかしい。

次は、ふたりで買い物に行つたときのこと。

私がストレートジーンズを選んでいる傍らで、何やら物色していた兄が喜色を浮かべて近づいてきた。

「これ着てみるよ」

兄が渡したそれは、真っ白いワンピース。フリーリングだが露出は多くない。が、私なら決して選ばないデザインだ。無理やり試着をさせられたものの、着ていく機会もないし要らないと言つたのに兄は勝手に購入した。

何か変だという予感は、後日兄の友人たちと会う機会がありその服を着るようになると『命令』されたときに、現実のものとなつた。

白いワンピースに包まれた私を見て、彼らは驚きの声を上げる。その不躾な視線が痛くてつい兄の背中に隠れたのがまずかった。

「かわいいーーー！」

「ほんとに言つたどおりだな」

そこで言い含められていた呼び名を、兄を見上げて口に出した。

「お……お兄ちゃん」「

彼らの間に衝撃が走り、歓声が上がる。

「こりゃ萌えるわー」

「いいなー」

何なんだ、この人たちはつつ！

肩を引き寄せられて兄を見遣ると意地悪な笑みを湛たたえている。

「お前らにはやんない。」いつ、俺見て育つてたから理想高いし

「うわ、ムカつくー」

兄よ……友達選べ。

その後も兄は自分好みの服を買っては私に着せて連れて歩いた。繰り返すうちにようやく飲み込めてきた。兄は『理想の妹が服着て歩いたらこんな』を実践しているのだということが。

両親から植え付けられた『理想の妹』像は朽ち果てることなく、兄の中で生き続けていたが、時間的物理的な距離によつて徐々に歪められていったと思われる。肝心の私がちつとも『理想』になつてくれないので、強制的手段を取ることにしたのだ。都会に出てきたばかりで心もとない私につけこんで。

それだけではない。

専門学校時代は門限を課し、交友関係には口を挟んだ。男女交際はもちろんのこと、合コンも一切禁止。

恋愛には興味はなかつたけど、締め付けが厳しければ反発心も湧いてくる。

子供時代のように兄に食つてかかると、いちいちもつともな理屈をつけては私の主張を封じ込める。昔からティベートでは負けたことがなかつた兄だが、弁護士になつて理論武装に更に磨きをかけたようだ。

理論では勝てないので感情に訴えると、決まり文句が炸裂する。

「俺は家長だよ」「家長を何だと思ってるんだ」「家長の言つ」と

がきけないのか」

あんまり家長家長言つものだから、携帯の兄の登録名を【かちょー】としてやつた。

しかし、最大の衝撃は私が門限を破つて帰宅した夜に起きた。

ウザい兄から一時でも自由になりたくて、携帯の電源を切つて専門学校の同級生たちとカラオケに行つた私に、黒い笑みを浮かべて「お仕置きだな」と一言告げる。

ビクつとして身構えると、私の部屋からあるものを持ってきて着替えるように促された。

高校時代のセーラー服。

そしてソファに腰を掛けた兄の目の前に立つて、用意した台詞を言わされた。

「お兄ちゃん、『ごめんなさい』

「お兄ちゃん、もうしません」

「お兄ちゃん、許して」

……最後に一番恥ずかしい台詞を口にしたときは、悶絶死寸前だった。

「お兄ちゃん、……好き」

変態！

結局午後のデートを断つた兄は、駅前の百貨店に散歩がてら出かけようと提案した。いそいそと支度をする兄を横目に、うかつにもあんな台詞を口走った自分を呪つ。

いつものことだが、兄は断る口実に私を使つた。

「『ごめんね。妹がどうしても俺じやなきや嫌だつて言つもんだから。昔からわがままでね、困った妹なんだ』

これでは執着しているのは完全に私ではないか。それが兄にとつては『理想の妹』だと分かつていても、いや、分かつてているからこ

そ、忌々しいのだ。

エントランスで同じ階に住む奥様がたとすれ違い、声をかけられ
た。

「お散歩ですか？」
「… パツと見はね。」

翌日の月曜朝、心中でブツブツ言いながら出勤した。兄のお陰でせっかくの日曜日が台無しになつたのだ。ひとりでリラックスしたかったのに！

オフィスに到着してもフツフツ言っていたら、ふと空気がいつもと違うことに気づいた。同僚たちが何だかそわそわしている。特に女性陣。やたら机まわりを片付けたりとか、何度も鏡をのぞいたりとか。

「何なんですか、みんな」
壁に掛かったホワイトボードの汚れを拭き取りながら、一番近くにいた小林さんに訊いてみた。

クスクス笑つて続ける。

「彼はお詫びが絶れて、もうおもひ来るこゝじゃない」

真後ろでいきなり声がしたのでびっくりして振り向くと、佐久間

さんだつた

「あれ、佐久間さん、今日遅くないですか？」

「ボチ、俺のことは今日から佐久間主任と呼べ」

「……改名したんですか？」

「……天然か、それともわざとか、ああ？　どの口が言つてんだあ？」

両頬を摘まれて左右にびよーんと引っ張られる。

「す、すびばせえん」

「……お前たち、入口を塞ぐんじゃない」

呆れ顔で入ってきたのは松永部長。

「つたく、しようもないことやってんな」

工藤課長は苦々しげに。

そして、クスッと笑つてこちらを見た人物は、涼しげな表情で。

「これが瀬尾係長か。」

印象的な二重の目が興味深そうな色を浮かべている。すっきりと通った鼻梁の下には笑みを乗せた薄めの唇。自然な黒色の髪は、トップは長めだが耳周辺と襟足が短く清潔感にあふれ、整った顔立ちに嫌味を与えない。

背筋がぴんと張った立ち姿は長身の身体を更に大きく見せていた。細身だが決して貧相ではなく、むしろ引き締まつた体つきは野生の鹿を連想させる。

まるで絵のモデルにでもなりそうな というより、一枚の絵から抜けだしてきたかのような美しい人。

WEB事業部、本日王子様御降臨。

第五話 兄と私（後書き）

ようやく相手役登場。これで次回から話が動き出します。

これまで分割していたものを一つにまとめました。

秋田弁については、誤りがありましたらご指摘いただけますと助かります。

若者が話す言葉なので、コテコテの秋田弁よりは少し標準語に近い感じなのかな、というイメージで書いています。

* 秋田の方からご指摘をいただき、秋田弁の表記を多少改めました。

第六話 係長の秘密

「王子様、もとい、瀬尾達也係長。一十七歳、東京生まれ。K大法学部出身、入社六年目。身長百八十二センチ体重六十九キロ。

一年間の営業部勤務のあと、PR事業部に異動。化粧品、アパレル、家電等々の会社のPRを担当し、彼が指揮するチームは社長賞を一度獲得。入社四年目に主任に昇進。

社内恋愛は一切しない主義。それでも『あわよくば』を狙う女性社員から果敢にアタックされるも全く相手にしない。『もつたないい……』との声が男性陣から聞こえてきそうな、実際石津さんあたりから漏れ聞こえてきたような気がするが、本人は周囲のやつかみなどどこ吹く風である

「お前、それは何なんだ」

「瀬尾係長のプロフィールですよ。石津さん、知りたがってたじやないですか」

「だからそれになんて俺の名前が出てくるんだ！」

「続きまだありますよ！ 石津さんが知りたがってた女性関係。ええと、これまでに交際した女性は多数。全てが女性からのアプローチによるもので、平均交際期間は約五ヶ月。同時期に複数の女性との交際もあり。未確認ですが三股かけていたとの情報も。『あいつは女を口説いたことがない』とは同期であるS間主任の証言です。また『あいつの傍にいるとオコボレがもらえることもあるんだよな』と二ヤつきながらつぶやいたことから、どうやら実際にオコボレをもらつたと推測されます」

「ポチお前っ、俺の名前出すなつて言つただろつが！」

「相手は美人でキャリア志向の女性が多い。職業は雑誌編集者、テレビ局ディレクター＆AD、キャビンアテンダント、ファッションモデル、芸能人……」

「マジー？」

「それはガセネタ」

噂話で盛り上がる場に響き渡る魅惑的なテノール。皆が部屋の入口に振り向き、声の持ち主を確認する。王子様の登場だ。

「おはよございます」

「おはよう」

真つ直ぐこちらに近づき輪の中に入る瀬尾係長。

「朝から盛り上がってるね」

声に含まれた皮肉な調子に、現場を押さえられた同僚たちは慌てて責任転嫁を始めた。

「あっ、いやっ、こいつが面白いネタがあるって言つから」「ゴシップなんてくだらないからやめろって言つたんですよ」

そろつて私に非難の視線を浴びせる。みんな喜んで聞いてたくせに！

係長は困ったような目をこちらに向けた。ヤバい、何を言われるのかと身構える。

しかし彼は苦笑して同僚たちにチクリと言葉の針を刺した。

「噂話っていうのは一人じゃできないと思うけど？ 今度僕に関する面白いネタが入つたら、僕も混ぜてもらおうかな」

あまり怒つてはいない様子の彼にとりあえず安心して、皆が白々しい笑いを返す。そこに松永部長と工藤課長が入ってきたので、輪を解いてそれぞれ持ち場に戻った。

瀬尾係長が異動ってきて一週間。

このどちらかというとガサツで下品なWEB事業部に端然とおわす王子様は、果たして馴染めるのだろうかという周囲の心配をよそに、あつという間に自分の居場所を見つけてしまった。女性社員はもちろん、男性社員の信奉も集め、現在人気沸騰中。寄ると触ると

彼の話題で盛り上がりがついている。

何と言つてもその外見がまず目を引く。物腰は柔らかで口調も丁寧だ。王子様というのもなるほどうなずける。が、時折見せる「H口号ツコ」といふ（某同僚談）表情もまた彼の魅力の一つで、女性たちを惹きつけてやまない（のだそうだ）。

そこがウチの兄と違うところで、兄の場合は職業柄、知的で真面目でシャープな印象を『ええ』（よつて見せていく）。

さて、係長のモテ度の高さは毎日毎時になると確認できる。すなわち、ランチのお誘い。

取つ換え引つ換えどこの部署の女性社員たちが、あるときは単独でまたあるときは複数でやってくるのだ、ここ十階のWEB事業部まで。これには私たち全員が仰天したと言つても過言ではない。

女性社員からのティーナー や飲みの誘いには絶対に応じない係長であるので、ランチだけが彼女らに残された唯一の希望なのだろう、とは杏子さんの意見である。聞くところによると、誰が係長とランチに行くかを巡つて喧嘩になつたこともあるそうな……

私たちWEB事業部が十階で平和を享受している間に、階下ではそんな争いが繰り広げられていたとは、あな恐ろし。

ちなみにこの一週間、係長は彼女らの誘いには応じず、WEB事業部の同僚たちとランチに行く方を選んでいる。これは、新しい職場に早く馴染もうとする彼の立場からすれば当然だろう。そういう事情を彼女らもちゃんと汲んであげればいいのに……

パソコンのメールチェックを始めたといひで肝心なものを石津さんから受け取つていないうことに気づき、直ちにメールで督促した。

『情報料』

このために職場のお姉サマ方による噂話に首を突っ込んではネタを集めていたのだ。この世の中、情報を制する者が勝つ。

ところが彼の返事は実に素つ気なかった。

『ガセネタに払う金はない』

私の努力をむだにする気が。

『他にもいいネタありますせ』

『要らん』

ちつ。ケチ！ 今日のお昼代にしようとしたのに。

報酬をもらひそこねてムスッとしていると、藤田さんから声をかけられた。

「ポチ、これあげる」

田の前にポトンと置かれたものは、抹茶フレーバーのミルクキャンディ。

「きやうーん、藤田さん」

藤田さんはプログラマーとして技術上のサポートをしてくれるだけでなく、時々こいつしておやつのサポートもしてくれる。いい人だなあ。いや別に餌をくれるから懷いているわけではない、念のため。情報料をもらえなかつたのは残念だったが、おやつが降ってきた。收支はトントンだ。それに係長のはほとんど「シップの類だつたしなあ。でも本人に聞かれていたのは大いにまずかつた。怒つてないみたいだからよかつたけど。

そつと瀬尾係長に目を向けてみると、彼も自分の席からこぢらをじつと見ていて。どきっとして慌てて田を逸らした。

やっぱり怒つてるのかな。うわ、ますいなー。これはますます訊きびりくなってしまった。

というのも、同僚たちが瀬尾係長フィーバーするなか、私はどうも心に引っかかるものがあつて気になつてているのだ。係長とどこかで会つたことがあるような気がする いわゆる既視感というものの。でもどうしても思い出せない。

係長がこれまで所属していたP R事業部は八階に、I J C M E B事業部は十階にあり、業務が重ならない限り顔を合わせることはない。

もちろん同じ会社にいる以上その可能性は低くはあってもゼロではなく、例えば主任以上の管理職は毎朝十階の会議室に赴くから、遭遇することもあり得る。

ただWEB事業部室とここの重役室に近い奥まった場所にあり、会議室の方が十階の入り口からは近いために、役付きの面々と顔を合わせることなど滅多にないのだ。それに彼ぐらいの美形なら社内で言えば印象に残るはずだ。

さりとて社外での接点となると更にないわけで、どんなに考えても答えは見つからない。

だからと言って係長本人に尋ねるのもためらわれた。「どこの会つたことありませんか?」なんて、ナンパじやあるまいし、恥ずかしくて訊けるかつて。

しかし係長は私を知っているような素振りはまるで見せない。思ひ違ひだったのだろうか。訊こうにもきっかけがつかめずもやもやとしていたところに、噂話をしていたことで悪印象を抱かれてしまつてはお手上げだ。そう思っていた矢先。

「あー腹減った。俺もうお昼行くね」

時計を見ると十一時四十五分を指していた。

我がWEB事業部では昼休みの時間は各自の裁量に委ねられる。各自の仕事の進捗状況によって、キリのいこところで行つてよいのだ。

「藤田さん、私も一緒に行つていいくですか?」

「あれ、お弁当じゃないの」

私は節約のため毎朝弁当を作る。弁当派の女性社員は他に一人いて、時折おかずを交換するのも楽しみの一つだ。

「お米切らしちゃって。買うの忘れてたんですよ」

「ポチはよく食べるからね」

日頃から兄には「たくさん食べて大きくなれよ」などと言わされて

いるせいか、我が家の中の消費量が多いのは確かである。しかしすでに二十歳も超え、今さらどこをどう大きくしろというのか。

唯一思い当たる部分に目をやつた。……ま、小さくても困る人は誰もない。

しかし藤田さんには無難に反論することにした。

「食欲の秋ですからねえ」

「だからポチの食欲は一年……」

「瀬尾さん」

馴染みのない甲高い声が彼の声をかき消した。

部屋の入口には係長のファンと思しき若い女性社員三人が立っていて、笑顔を振りまき彼ばかりが同僚たち全員の注意を引いている。一番手前にいて目についたのは明るい茶色の巻き髪をした女性で、存在感のある胸を見せつけたいのか身体にピタッと貼り付くようなカットのブラウスは、嫌味と捉えても差し支えないだろう。

係長が近寄つて一言三言会話を交わす。途端に笑顔がしぶんではえー、またですかあ」と三人は不満げに帰つていった。

「たまには一緒に行つてやんねえと人気落ちるぞ」

佐久間主任のからかいを係長は笑つていなす。

「じゃあ落ちる頃に行くことにするよ。かなり先になると思うけど

「お前が言つても冗談に聞こえねえからムカつくんだよ」

同期ふたりの掛け合いに他の同僚たちの間から笑い声が起きた。

藤田さんと私はパソコンの電源を落として、休憩に入るべく席を立つた。周りはまだ立ち上がる気配がないので、「お先でーす」と声をかけて入り口に向かつ。

先程の女子社員たちが立つていた場所には残り香が漂つていた。その匂いとあのやけに明るい茶色い頭が妙に私の記憶層を刺激することに気づく。

あの髪の毛の色、この甘い香り、覚えがある。どこでだった……？
埋もれた記憶を掘り起こそうと夢中になつていたら、いつものよ

うに非常階段に足が向かってしまい、背中から藤田さんに声をかけられた。

「ポチ、どこに行くんだよ」

「へ？」

「あ、そうだ。外にお面おはんを食べに行くんだった。エレベーターで……」

その瞬間、頭に冷水をぶっかけられたようにこれまで眠っていた部分が突然目を覚ました。さもよつていた記憶の湿原で少しづつ霧が晴れてゆき、今まで覆い隠されていたものが露になる。

「あああっ！」

走つて部署の入り口に戻り内部を見渡すと、私を訝しげに見る皆の視線の中で、瀬尾係長のそれにばつちりとぶつかった。

あれだ、あのときの。間違いない。

「何だどうしたポチ」

「ビックリするじゃないよ」

日々に驚きを伝える同僚たちの傍らで、係長の田たには不審の色が浮かぶ。

「何でもありません」

焦つた私は急いで踵を返しその場を逃げ出した。

あれは今年の四月。今日のように弁当を持つてこない日があつた。ただその理由はお米の買い忘れでなく、兄に強奪されたから。

その日、午前中は家で資料を作成し午後から出勤する予定だった兄は、昼食を作つたり外食したりする手間を省くために、私が早起きしてせっかく作った弁当を分捕つた。その代わりしつかりランチ代はもらつたが。

午前中の仕事が一段落して席を立つたのが十一時十五分。すでにほとんどの社員は昼休みに入つており、私はひとりで部屋を出て、終業後にいつもするように非常階段へ向かつた。

階段室に入るとふと違和感を覚える。いつもなら静寂が包むそこにかすかに人の声が聞こえるのだ。話し声が近づくにつれ、声の主は若い女性と分かつた。どうやら電話中のようだ。時折クスクス笑う楽しそうな様子がこちらにも伝わってくる。

スニーカーの靴音は軽すぎて彼女には聞こえないだろう。ゴム底の靴にありがちなキュッキュッという音もこの階段では発生しない。突然上から現れた私に驚かなければいいけど。

七階まで降りると突然女性の声が止んだ。オフィスに戻ったのだろうか。が、耳をすますと人の気配はする。そして、衣擦れの音と、「ん……」というぐもつた声。

何だろ? 好奇心に駆られて、息を殺し足音を忍ばせ、更に階段を降りる。

踊り場から六階に続く階段に足を踏み出そうとしたそのとき、嗅覚が甘い香りを認識し、視覚は非常扉から少し離れた壁際に、ある情景を捉えた。

一ミツの隙もなく体を密着させた男女のキスシーン。しかもかなり濃厚な。

生まれてこのかたこんなに濃い　いや濃くなくても　キスシーンを生で見たのは初めてのことだ、つい目が離せなくなってしまった。

別にのぞき見したかったわけではないのだが、結果的にのぞき見だつたと言われば、はいそうでしたと認めるしかない。

本能に従つて行動する男と女の『生』に圧倒されている自分がそこにはいた。

やがて男の唇が女のそれから離れ首筋に伝つ。女は明るい茶髪の頭を少し後方に仰け反らせ、その角度を変え、そして目を開けてトロンとした視線を泳がせて　踊り場で足を凍りつかせている私を

認めた。

「ひつ！」

これは私の悲鳴だ。自分の声が足の呪縛を解き、秒速で回れ右をしてもと来た道を今度は駆け上がる。八階に到着して防火扉を開け中に飛び込み、IDカードでピピッと裏口を通過し、反対側のエレベーターホール目指して急ぎ足で廊下を歩いた。

八階に来たのは初めてだつたが、十階とレイアウトは同じなので最短距離を脇田も振らずに突き進む。幸い昼時のためにオフィスにはほとんど人影はなく、私を見とがめる者は誰もいなかつた。

下りのエレベーターの中で一息つくと、私が逃げ出す必要などなかつたことに気づいた。非常階段は公共の場所であるのだから、あんな所でキスなんかしている方が悪い。

とはいっても見てしまったという後ろめたさがあつたのも事実だし、素知らぬ顔をしてあのふたりの前を通り過ぎることができるほど、私は大人ではなかつた。

あのふたりは六階のオフィスで働いているんだろうか。

制服に身を包んだ二十歳くらいの若い女。そして二十代後半くらいで、顔の造作が整つた長身の男。私の顔を男は見ていないはずだから、この先ビルの中で万が一余うことがあつても気づくことはないだろう。

ディープキスを生で見た動搖は、私の前に注文した生姜焼き定食が運ばれてくるまで続いたが、やがてドラマのワンシーンのように現実味のない映像として頭の中で処理されていった。

その日以降私は昼休みに非常階段を使うことはなく、あの制服は五階に入っているオフィス機器リース会社の受付嬢たちが着ていることが分かつたが、女にも男にも一度と出会つことはなかつた。

そしてこの日のことは誰にも告げぬまま、いつしか私の脳裏から

忘れ去られた。

第七話 十年愛

眠っていた記憶を完全に呼び覚ますと、瀬尾係長の姿が目の前に浮かんでの情景の中にぴたりとはまった。

係長はあのときの男だ。私をいたく動搖させた生キスの張本人。

あー、思い出すだけで恥ずかしい！

あの場に居合わせたことが！

バッヂリ見ちゃったことが！

あの男が現在私の上司として同じ職場にいることが！

あれからすでに五ヶ月以上がたち、あのとき感じた後ろめたさなどもはや微塵も持ち合わせていない。代わって私の心を支配しているのは、上司の秘密を握つたという優越感。

爽やか王子様が、昼休みに、非常階段で、恋人と逢引。ねつとりディープキス。

クククク。

それにしても同じビルに彼女がいるなんてなあ。いや、すでに元カノ？ 平均交際期間は五ヶ月だつたつけ。

「何考えてんの、ポチ」

「へつ？」

意識を目の前にいる藤田さんに向けると、不思議そうな目がこちらを見ていた。

「さつきからニヤニヤして。顔も赤いし」

「あ、え、えーと、海老フライ定食楽しみだなーって」

カントリー調の様式で統一されたこの洋食屋は藤田さんの行きつけの店だ。木目を生かした粗雑感のあるテーブルが肩肘をはらはらとろげる雰囲気に一役買っている。お陰でランチセットを注文したあとはすっかり気が緩んで、思い出したばかりの記憶にどっぷりと

浸つてしまつた。

誤魔化されはいなさそくな彼の様子を見て、強引に話題を変えることにした。

「そうだ、都さんはお元気ですか？」

「うん、元気。再来週修学旅行の引率で京都だつて都さんというのは彼の恋人だ。一度会わせてもらつたことがあるが、ふんわりと人を包み込むようなタイプの女性で藤田さんとは似たもの同士、ふたりと一緒にいたら縁側でひなたぼっこをしているような気分になつてしまつた。

高校で国語教師をしている彼女はこれでは生徒たちになめられるんじやないかと心配になるが、学校では『ピシピシ厳しいお姉さん』というキャラの先生らしい。だからこそプライベートでは恋人の藤田さんに見せる顔がふにゃっと柔らかくなるのかなと思つたりもする。

「いいなあ。京都かあ」

「本人は大変だつて言つてるよ。やんちゃな子たちばかりだから、何も問題が起きずに帰つてくることだけ考へてるつてさ」

都さんのことを語るとき、彼の表情や声には温もりが現れる。周りの空気をじわじわと温めていくぐらいの、体温より少しだけ高めの心の温度。早い話が互いを深く想い合つていてるカップルというわけだ。

「そりやあ、修学旅行つていつたら高校生にとつては一大イベントですもんねえ、藤田さん？」

言外に含まれた意味を察して彼は少し赤くなつた。

「よく覚えてるなあ」

「忘れるわけないですよー。あの話思い出すだけでお腹いつぱいになっちゃうんだから」「……ポチに限つてそれはないと思つけど」「どういう意味ですか！」

そこに海老フライ定食が運ばれてきた。藤田さんには煮込みハンバーグ定食。ハンバーグソースのツヤツヤした色合いを見てそちらも美味しそうだと思つていると、向かい側から小さなつぶやきが聞こえてきた。

「……そういう意味だよ」

藤田さんと都さんの馴れ初めを初めて聞いたのは、私が派遣社員として働き始めたときにWEB事業部で開いてくれた歓迎会だった。まだ職場にも慣れず年齢も一番下の私は緊張ばかりしていたが、前の会社のこととか、どこの専門学校に通つてたとか、とつつきやすい話題を振られて少しづつ硬さも解れてゆく。

酒が入るとやはり気分がよくなつて舌も動きやすくなるのか、突つ込んだ質問をされるのはお決まりと言つてもいいだらう。

「彼氏いるのー」

「」で計算してわざと否定する女の子たちも存在するが、私の場合本当のことなので計算する理由も必要もない。

「えー、いませんよー」

「うん、そんな感じだねー」

そんな感じって何？

この頃の私はまだ同僚たちの為人を把握していなかつたから、彼らが心の中で笑い転げていることには気づきもしなかつた。

オフィスでも隣の席でこの場でもたまたま隣に座つた藤田さんは、遠慮しがちの私のために率先して料理を取り分けてくれて、「どんどん食べて」と優しく笑つっていた。思えば私の嗜好はすでに見破られていたのかも知れない。

そんな彼に甘えて気安く恋の話を振つたのがそもそもの始まり。

「藤田くんはねー、十年付き合つてる彼女がいるんだよ」

にまにましながら杏子さんがバラした情報に、私は食いついた。

「十年！？」

藤田さんと都さんは高校三年間同じクラスで、このせわりだけで私は「さやつ」と奇声を上げ、「一年半の片想いの末にようやく都さんに想いを告げ、「いやーん」と悲鳴を上げ、卒業後は別々の進路となるも今の今までずっと交際を続けてきたと聞いてテーブルに突っ伏した！

「素敵！ 純愛！ 十年愛！」

もはや緊張や遠慮のかけらも見せずに私は叫んだ。驚いた藤田さんは身を引きつつ謙遜する。

「いやあのそんな大げさなもんじゃ……」

「十年もひとりの人を想い続けるなんてすごいですよ！ 憧れますよ、女の子なら誰だって。ね、そうですよね？」

興奮気味に彼をたたえ、同じテーブルを囲む女性社員たちに同意を求めた。

「うんうん、いいよね、純愛」

「私もしたーー！」

「ホラホラホラ。で、どうなんですか、今でもずっとラブラブなんですか？」

ランランと輝いているであらう私の目を見てもはや逃げられないと諦めたのか、藤田さんは十年越しの恋人との現況を語つた。

「ラブラブっていうより、もう空氣みたいな存在かな。そこにいたら『あれいたの』って感じだし、いないとなんか物足りないような『そこにはいるのが当然など』といふ描写に私は悶えた。^{もだ}

「もうだめ、これ以上聞けないつ。耳の毒！ ……で、告白はどうやって？」

「え？ ……訊くの？」

しかしさかこれほどまでに悶える展開が待つているとは思いもしなかつた。まるで純愛映画にでも出てくるような都さんへの告白

シーン。

なんと修学旅行の班別行動で、強引に手を引っ張つてふたりきりになった上で一年半に及ぶ想いを告げたのだそうだ。驚いた彼女が泣き出してしまい焦つたが、嬉し涙と知つて気が緩みその場に座り込んでしまったのだとか。

「ぎやああ、もうダメえ」

「こちらの萌えるツボを見事に突いてくれたお陰でもはや悶絶死寸前だつた。同席する女性社員たちも紅潮した顔の二マ二マがとまらない。」

このあとはもう質問攻め。初めてのデートはどうだったとか、一番最初のプレゼントは何だったとか、まだ結婚しないのとか。照れながら質問に答える彼はとても幸せそうで。私の歓迎会だったはずが、途中からは『藤田さんから幸せをお裾分けしてもらひうる』に変わっていた。

話が一段落したところで私は藤田さんに身体」と向き直り、心を込めて想いを告げた。

「藤田さん、好きです」

「はい?」

他の女性のことでもなんぞん惚氣の抜けている男性に向かつて告白する女に、周囲はギョシとなつた。

「一途愛を貫く藤田さんって格好いいです。どうかこれからもずっと彼女さんのこと好きでいてくださいね。浮気なんかしちゃダメですよ? 彼女さんのこと裏切つたりしたら嫌いになっちゃいますよ?」

彼はしばらくポカンとしていたが、やがて破顔して私の頭にポンポンと手を載せた。

「うん、分かった」

……それ以来、藤田さんと都さんは私にとつて憧れの純愛カップルで、ふたりの萌え萌えエピソードを聞くことが、ともすると枯れて

しまいそうな私の乙女心に水を与えてくれている。

昼休みが終わり部署に戻ると、人影のないがらんとした部屋で最初に目に入ったのは瀬尾係長の机だった。するとあのキスシーンが彼に焦点を当てて再び蘇る。

貪るように女の唇を求める男。長い腕が包み込んだ女の身体に押し付けるように重ねられる男の身体。隠されない欲望は鮮烈で荒々しく、刺激的だった。

でも私はゴシップをばらまきたいわけじゃない。本人にも他の誰かにも言つつもりはないけど、心理的に優位な位置に立つたことは確かだ。

ふつふつふー、係長、私あのコト知ってるんですよー。あんなふうに情熱的になっちゃうんですね。私だけが知っているヒ・ミ・ツ。

とはいっても、やがて続々と戻ってくる同僚たちの中に彼の姿を認めて、つい一ソーマリとしてしまった私はまだ大人として修行が足りないのかもしれない。

それにもしても、係長のように取つ換え引つ換え女性と付き合つ男性と比べたら、やっぱり藤田さんは素敵だなあと思う。情熱的じゃなくてもいいからひとつひとつ愛情を積み重ねてふたりの歴史を作っていく、そんな男女のありように私は惹かれるのだ。

その日の業務が終わると、私は休憩室に行つて兄に電話をかけた。

今日は外で一緒に食事をする約束になっていたのだ。

正直兄との外食など気が進まないのだが、『高級レストランになかなか自腹では行けない妹に日頃の家事労働をねぎらつて食事を共にする兄』の設定を楽しみたいらしい。

つげづくウザい兄だが、高級レストランの料理には罪はないので堪能させてもらひことにしよう。

「……ん、七時ね？ 新宿のど？」……わがんね。怖いがら改札を迎えさ来て」

こんなことを言つたらあの兄を喜ばせるに違ひない。しかし、いい年をして迷子になる恥ずかしさを思えば、甘えるのは癪に障るが我慢するしかないのだ。

兄は私が頼めば喜んで会社にだつて迎えにくるだつが、変態と一緒にいるところを同僚に見られるのだけは御免被る。

「越智さん」

通話を終えると背中に声をかけられた。この魅惑的な声の持ち主が誰かは見なくても分かる。振り向くと、そこにいたのはやはり瀬尾係長だった。

「ちょっといいかな」

「はい」

何だろ。係長とふたりきりで話をするのは初めてだ。自分が少し緊張しているのが分かつた。

「今朝のことなんだけどね」

女性たちを魅了する王子様の微笑みを私に向け、係長は今朝の噂話について言及した。

「誰が言つてるのかなあ？ 僕がモデルだの芸能人だと付き合つてるつて」

口調は柔らかいが、ひんやりした空気を感じる。

「私が聞いたのは大森さんです。でも大森さんも又聞きだと思いますよ。係長がモデルの藤村レイナと一緒にいるのを見た人がいるつて」

「ゴシップをばらまいた犯人探しをしたいのだつうか。むだなような氣もするが。

しかし田を細めた係長は思いがけない言葉を口にした。

「それは本当に僕だったと思つ?」

「え?」

「もしかしたら見間違つてこともあるよね? その場で僕と話をしたわけじゃないんだろ?」

噂の信憑性について言つているわけか。でもそれが「シップ」というものだし、今朝披露した話はどれも出回つているネタを集めただけで私が流しているわけではないのだが。

「確証もないことをペラペラ喋るのって無責任じゃないかな。越智さんはどう思つ?」

柔らかな口調と笑みを湛えた口もと。そしてそれらに不調和な険しい目。そこから真っ直ぐに放たれる視線が私をたじろがせる。王子様の仮面に隠された顔だ。沸き起こつた警戒心がそう告げていた。

そしてある確信が心の中で水位を高めていく。

この人は私があのキスの場に居合わせたことを知つていて、知つた上で釘を刺してゐる。ペラペラ喋るなど。

「……申し訳あつませんでした。私が軽率でした。以後気をつけます」

「はとりあえず退くのが賢明だ。」

「うん、ありがとう」

彼の目から険しさが消え、再び王子様のにこやかな微笑みが現れる。

「それじゃ、お先に失礼します。お疲れさまでした」

「お疲れさま」

足早に横を通り過ぎようとして、もう一度声をかけられた。

「六十九キロじやなくて六十七キロ」

「はい?」

「僕の体重。訂正しといてね」

その爽やかな口調も私の心中ではもはや清涼な響きとはならなかつた。

この男 要注意。

第八話 歓迎会

「はい、こちらです。一番奥ですから。ちょっと山本さん、女の子は放つとしてとつととお店に入つてくださいよもう」

店の前に立ち、工事現場の交通整理よろしく肘から先の腕を左右に振つて誘導する。

今日は瀬尾係長の歓迎会である。幹事となつて仕切るのは部署で最年少の私の役目だ。

場所はいつもの洋風居酒屋を選び、宴会用個室を予約した。これならば多少騒いでも迷惑にはなるまい。何しろあの人たちときたら周囲の顰蹙も顧みず平氣で猥談をするのだから。

全員が入店したところで店側に合図をし一番最後に個室に入る。二つある長テーブルにはすでに同僚たちが着席していたが、ものの見事に男女で分かれていた。女の園と化したテーブルの中心には黒一点の瀬尾係長。彼女らの下心が見え見えの座席配置である。

女性社員たちに囲まれた彼の困った様子がまた好感を誘う。しかし美しい仮面の下に隠された素顔を一瞬垣間見た私としては、あれも計算の内だろ、と意地悪な見方をしてしまつ。酒の席で彼がボロを出さないかどうか見届けたいところだが、今日は幹事なのでそれもできない。

食べ物はコースで決められてるので、今は飲み物の注文が先だ。私は店員に渡された紙とペンを手に握った。

杉本前係長の送別会　　と言つても同じフロアにある別の部署に異動になつただけなのだが　　でもそつだつたが、同僚たちは人使いが荒い。しかもザルのようによく飲む。

追加注文のために呼び鈴を鳴らしても忙しいのかなかなか来られ

ない店員に直接注文しにいき、その間に空いたグラスを片付け、サワーをテープルにこぼしたからと布巾を取りに行き、戻ってきたらまた追加注文が入り、ちつとも落ち着いて飲み食いができない。

「ポチ」

私を呼ぶ声に振り返ると藤田さんが手招きしている。

「もういいから座つて食べなよ」

そう言つて数種類の料理が載つた皿をすつと寄越した。

「え、これ、私のために取つといってくれたんですか？」

「冷めちゃつてるけど」

「わーん、藤田さん好きー」

もし私に尻尾が生えていたとしたら、間違いなく振つていたはずだ。嬉々として藤田さんの隣に腰を下ろし彼からの好意を早速口に入れ始める。

そこへどうやら中座していたらしい瀬尾係長が、向いの空いていた席にやってきた。

「越智さん、幹事ご苦労さま」

私にまで好感度アップを図りたいのか爽やかな笑顔を浮かべて、部下の労苦をねぎらう上司を演じる（よつて見える）係長。

「いえ、とんでもないです」

無難な返事をする一方で思考はぐるぐると渦を巻いていた。

休憩室での一件以来私は彼を警戒の目で見るようになつたが、つぶさな觀察もまた怠らなかつた。『瀬尾係長觀察日記』が書けるほどだ。

その結果分かつたことは、呆れるほどに爽やか・穏やか・涼やかな態度を崩さず冷静沈着に業務を遂行する、完璧な王子様の姿だけであった。しかしあのとき確信したことを否定できずに思考を重ね、ひとつ興味ある疑問にたどり着いたのだ。

なぜ五ヶ月以上も前のことと今更秘密にしたいのか。

昼休みに逢引していたなどと言つて触らされればバツの悪い思いをすることは想像に難くない。しかし恋人同士が会うこと自体は悪いことでもなんでもないし、もしも元カノだとすればそれこそ『今更』ではないか。

そこで越智探偵が思つて云ふ

「越智さんと藤田くんは仲がいいよね。もしかして付き合つてゐる？」

「何を言つてゐるの、この人？」

係長が放つた突拍子もない質問は推理で稼働中の頭には負荷が高すぎ、一瞬返答が遅れた。

「そんなんぢやないですよ」

「そんなんぢやねえよ」

後の台詞は誰が……と思つたら、係長の左隣、私の斜め向かいに座る佐久間主任だった。

「こいつ、藤田のファンだからさあ」

「ファン？」

きょとんとする係長に、純愛一直線の藤田さんに私が萌えまくり、ついでに愛の告白までした件を主任が語る。

「彼女一途の藤田が好き、浮氣をする藤田は許せない、だからこのふたりが付き合つことは永遠にナシ」

「それは……不毛の愛だねえ」

笑いをこじらえるような表情が私を妙に苛立たせた。

「藤田さんのファンつていうより、純愛のファンなんですね」

分かつたように論評したのは私の右隣に座る石津さんだ。

「お子チャマなんだよなあ、ポチは。どうせ『トート』したことねえんだろ」

片方の肘を椅子の背に載せて寄りかかり、馬鹿にした田で主任が私を見る。

「初日におやげで来てびっくりしたわ。ビルの田舎の高校生かと思つた」

「それじゃ田舎の高校生に失礼ですよ」

黙つていれば言いたい放題の彼らに我慢がならず、私はとうとう叫びだした。

「おさげでなんか来てないですよ！ それに田舎田舎つて言つけど、冬は寒くてやることないからみんな恋愛するんですよ！ 恋愛経験豊富なんですよ、田舎の高校生は！」

厳密に言つと私はその中に含まれていないのだが、そんなことは分かるまい。

「ポチって部活少女だつたんだろう？ 冬場も室内練習場でトレーニングばっかりしてたつて言つてなかつたつけ？」

石津さん、何でそんなことを覚えてるんですか！

反論できずに口をパクパクさせていたら、周りにどつと笑われた。悔しさと恥ずかしさで脳みそが沸騰するかと思つたほどだ。これを静めるには飲むことしか思い浮かばず、だいぶ汗をかいだレモンサワーのグラスを口に運びグイッと傾けた。エロ軍団への仕返しを心に誓いながら。

エロ軍団とは佐久間主任、石津さん、山本さんそして工藤課長を指す。飲み会のたびにエロについて語り、武勇伝を競い合つているのだ。

今夜ももれなくエロ談義に花を咲かせ、私が藤田さんに呼ばれて席についたときには『一回のセックスで何度もイカせられるか』について盛り上がっていた。当然私としては関わりたくない話題であるので、彼らに背を向けて聞こえないふりをしていたのに。

瀬尾係長の魅惑的な声が響いたのはそのときだった。

「デートの相手ならいるよね、越智さん？」

あまりの自然な言い方に名前を呼ばれても自分のことだとは分か

うす、しばりベピンと来なかつた。

「電話で話してゐるの聞いちゃつて、待ち合わせ場所が分からぬ、怖いから迎えにきてつて甘えてたよね」

なんすと?

びつくりして声も出ない私は逆に、なぜか得意げな様子の彼の舌は止まらない。

「越智さん秋田弁使つてたし、もしかして、一緒に上京してきた彼氏とか? だつたらそれこそ純愛相手じゃないか。越智さんもすみにおけないな」

なんつーことを…

「マジ! ?」

「ありえねーだろ」

男性社員たちが半信半疑につぶやいた。それにかぶさるよつて隣のテーブルから飛んできた杏子さんの鋭い声。

「ちょっと、あたしそんなの聞いてないわよつ」

このタイミングの良すぎる食いつき。よもや離れた席で聞き耳を立てていたのか?

「あ、そういうえばポチ、最近引っ越したつて言つてたよね。まさか同棲してんの?」

なぜそつなる…

飛躍しすぎの質問をわざと冗談として流そうとする田論みは、彼女の周りにいるお姉サマ方によつて潰えた。

「え つ!」

「うそ !」

「ポチのくせに !」

荒々しく椅子を蹴つて立ち上がる勢いで迫る女性陣に恐れをなし、藤田さんを縋る田で見た。私の味方はもはや彼だけだ。……と思つたのにいつも優しい眼差しはどうやら、その目は笑つて私を突き放していた。

「ポーチー。今までわざわざ俺のことは聞くだけ聞いて、自分のこ

とは話してくれないのかな？「うん？」

……もはや孤立無援か。

再び頭が沸騰しそうになつたが、落ち着け自分、と言ひ聞かせて状況把握に努めた。

係長が電話で話しているのを聞いたという内容からすると、相手は兄しかいない。なのにそれを田舎から一緒に上京してきた彼氏だと？ よくもそんな当て推量を皆の前で言つてくれたな！

これではもう下手な言い訳は通用しない。ああ、あの兄のことを話さねばならないのか。せっかく今まで隠しに隠してきたのに……

私はため息をついて口を開いた。我ながら驚くほど低くて暗い声だつた。

「……兄ですよ。あの田は兄と一緒に食事をする約束をしていて」「そりやつてまたベタな言い訳を」

言い逃れは許すまじといふ旨の田が怖い。

「本当ですって！ 一緒に暮らしてゐるのも兄ですからー！」

「証拠は？」

「こには取調室かよ！」

仕方なく財布に入れっぱなしにしている兄の名刺を取り出して藤田さんに差し出した。

「平岡・渡辺・越智総合法律事務所、弁護士、越智悠久」

彼が名刺を読み上げるとあちらいらから驚きの声が上がる。

「弁護士！？」

「マジ？」

「自分の事務所持つてんの？」

正確に言つと兄は一年半の司法修習を終えると現在の事務所に就職。三年間イソ弁（雇われ弁護士）として勤め、今年の一月からパートナー（共同経営者）になった。

それをもじりと口の中で小さく説明しながら、同僚たちの手か

ら手へと渡つていいく兄の名刺を見守つてゐるが、妙に艶っぽい声が落ちてきた。

「ちよつとお、ポチ、お兄さんこいつ？」

ほり、きたよきたよきたよ。

早速食いついたのは手塚さん。二十九歳、独身、彼氏なし。

「……二十八歳です」

わあつという歓声と共に空気が華やぎ、お姉サマ方の顔から厳しさが消えた。なんと現金な！ こうなることが分かつていていたから兄のことは話したくなかったのだ。

「独身だよね？」

「年収いくら？」

打つて変わつて今度は獲物を見つけた肉食獣のように迫つてくる彼女たち。

ひいいい。誰か助けて！

「いい男かな」

「ポチのお兄さんなら悪くないでしょ」

「合コンしよ、合コン！」

いやいや、絶対会わせたくないですから！ それに監さん、ついさつきまで瀬尾係長フィーバーしてませんでしたっけ……？

「やだねー、女って。愛よりも肩書きか。純愛よりも年収か」

女性陣の露骨な欲望に呆れた男性陣を代表して、佐久間主任が冷たく言い放つた。

激しく同意して首を縦にブンブンと振つていたが、彼が続けて口に出した言葉でそれも止まる。

「それに比べたらエロスは普遍だよな」

一方、非難された彼女たちは怯む色も見せずにきつぱりとやり返した。

「肩書きのある人との純愛が理想なのよー！」

……見事なまでに開き直った答えは拍手ものであつた。

「条件をつける時点ですでに純愛じゃねえっての」

普段純愛とは付き合いのない主任の批評など受け入れる気もない

彼女らは、毒をもつて応戦した。

「エロい足軽とじゅうたんは受け取れないのよー。」

「誰が足軽だよー。」

いきり立つ男性陣対女性陣。いつたいなぜこうなつた、瀬尾係長の歓迎会のはずが……そうだ、係長だ！

テーブルを挟んで向かいには、騒がしい周囲にもひとり端然と微笑む彼がいた。私の視線に気づいたのかこちらに美しい顔を向ける。そしてかすかな薄ら笑いを口もとに浮かべたのを見て確信を抱いた。わざとだ。わざとやつたんだ。

皆が食いつくと分かつていてわざと私のことを話した。どうして？ 彼の私生活を面白おかしく吹聴した私への意趣返し？ それとも部署内の興味を自分から逸らしたかった？

どちらにしても彼のせいで兄の存在がバレたのだ。お姉サマ方がら合コンを迫られる事態に陥っているのは、他でもない係長のせいだ！

怒りにワナワナと震えていると、ふと黒い考證が頭をよぎった。

いつそのこと皆の前での濃厚キスシーンの細部までバツチリ喋つてやろうか？

そう決意しかけると、係長が申し訳なさそうな表情で口を開いた。「ごめんね、越智さん。やつぱり憶測でものを言つちゃいけないね。何の証拠もなく他人の噂話なんてするもんじゃない。いや、普段自分があれこれ言われてるものだから、つい。本当にごめんね」

性格悪い……

口を塞がれ為す術もなく私は肩を落とした。

第八話 歓迎会（後書き）

イソ弁：『居候弁護士』が元の意味らしいです。弁護士事務所の従業員ですね。

第九話 似てる？

体内でふつふつと湧き上がった怒りが皮膚に到達し、全身の毛穴という毛穴から立ち昇っていく。決して目には見えないはずの負の揺らめきだが、隣に座る藤田さんには感知できているようだ。

「なんか黒いオーラがってるよ、大丈夫？」

怒りの噴火が起きないかどうか心配げに見守る彼に心中で返事をする。

もちろん大丈夫じゃありませんとも。

女性社員の皆様から兄及び弁護士仲間との合コンの約束をさせられたのだ。極力人前には出したくない兄が、お姉サマ方と合コン！……あり得ない。

目の前で同僚たちと談笑する瀬尾係長を睨みつけた。

こうなったのはすべて係長のせいだ。彼の策略によつて兄のことを話すハメになつたのだから。

報復だ。仕返しだ。田には田を、歯に歯を。やられたらやり返せ。思いつく限りの『復讐』の類義語を並べて、粘度の濃い暗黒な情熱の温度を上げていつた。彼に対する好戦的な気持ちを作つていくために。

何としても係長をぎやふんと言わせてやる。私だって変態とはいえ抜け目がない兄の妹だ。同じ血が流れているのだ。用意周到に黒い計画を練つて、彼の美しい顔を歪ませてやらねば。

皮膚の下には青い血が流れているんじゃないかと思えるほどの冷たい決意表明だった。そうともなればたとえ暗い目的のためとはいえ私の脳細胞は活性化する。ここ数日の間に係長を観察して導きだしたある疑問を検証するのだ。

すなわち、数ヶ月も前の非常階段でのキスを口止めしたいのはな

ぜか。

推理その一。昼休みにこいつそり逢い引きしていたといつ事実を秘密にしたい。

推理その一。相手の女の存在を隠しておきたい。

「これらを検証するにはまず状況分析が必要である。あの女の身元を確かめるのだ。そうすれば秘密にしておきたい理由も必ずと分かる。

「おおっ、なんだか探偵小説っぽくなってきたぞ。何を隠そう、論理的に推理を組み立てていくのは私の得意とするところなのだ、何しろ兄が弁護士だから。

越智探偵はさらに思考を進めたいたが、今は飲み会の真っ最中、いつも周りがうるさいくては脳内回路もきちんと作動しない。仕方ない、今は飲んでやる。

心に溜まつた汚泥を流すべくレモンサワーのグラスを一気に空けた。

そこに新たな話題を提供したのはまたしても瀬尾係長だった。

「工藤課長、金子チヤン 奥さんは元気にしてますか」

佐久間主任の左隣で、松永部長や秦野主任と共に先程からの騒ぎを傍観していた課長は、いきなり自分に話を振られて目をパチパチさせた後でニヤッと笑った。

「おう、元気元気。お前がノ社の広報どどうなつたのか知りたがつてたぞ」

「うわ、ヤブヘビ。もうすぐお子さんが生まれるって聞きましたよ。おめでとうございまーす」

工藤課長の奥さん、旧姓金子みどりさんは以前WEB事業部に勤務していた社員で、瀬尾係長や佐久間主任と同期にあたる。私は社内運動会で杏子さんに課長ではなく引き合わされた。在

籍当時ふたりは一番仲が良かつた先輩後輩で、今でも頻繁に連絡を取り合っているのだとか。

退職したにもかかわらず情報に通じているのは、杏子さんが積極的に職場の近況を 特に課長の言動を 知らせているからだ。要するにスペインね。

『もしウチの人があイタをしたら、遠慮なく言ってちょうだいね』
につっこりと微笑んだその顔は年齢のわりに幼さを残してはいたが、家庭ではしっかり夫の手綱を握っていると見た。

「あの金子チャンがねー、母親になるって何か信じらんねえよな。
まあ課長が父親になる方がもつと信じらんねえけど」

佐久間主任の揶揄に周囲がどつと笑う。放つとけ、とふてくされた顔で課長はビールをぐいと呷った。

当時のことを知らない私は課長の恋愛話に興味津々だ。女性にモテモテで自身生活を謳歌していた彼に結婚を決意させた女。乙女心が動こうというものである。

「課長の奥さんってどんな人だったんですか？ 今は課長のことしつかり尻に敷いていそうだけど」

同期のふたりが目を合わせてふつと吹き出すと、合わせたように周りの皆もゲタゲタ笑い出した。そんなに笑える関係だったのだろうか。

やがて主任は笑いを收めると課長夫妻の馴れ初めについて語り始めた。それを聞きながら忍び笑いをする同僚たち。「俺は尻に敷かれてなんかいない」という課長の言葉は誰も聞いていなかつた。

工藤課長はかつて広告代理店に勤めていたが七年前に我が社に転職、係長としてPR事業部に配属されて手腕を發揮する。

営業部から異動してきた瀬尾係長（当時は平社員）は彼のもとでPRのノウハウを叩き込まれ、女関係が派手なところもついでに受

け継いだようだ。つまり上藤課長と瀬尾係長は様々な意味で師匠と弟子の関係といつわけ。

その後課長は昇進してWEB事業部に異動するのだが、そこで出会った部下、金子みどり嬢を食っちゃった。

「く……食っちゃった?」

「そ。食っちゃったの、文字どおり」

「佐久間。えげつない言い方はやめてくれ」

「他に言い方あります? あ、手込みにしたとか」

「俺は悪代官か」

みどりさんは両親からそれはそれは大切に育てられた一人娘だった。女子高・女子大出身で男性慣れしておらず、真っ直ぐに育てられたせいか他人を疑うことを知らない。様々な誘惑から娘を守るために両親は社会人という身分になつても彼女に門限を課した。

過保護とも言える両親に反発を感じながらも最終的には彼らの意見に従う『良い子』であったことは、みどりさんにとって葛藤の一部であつたらしい。そこを巧みに突いた課長の手練手管により彼女が陥落するのは自然の流れとも言えた。

「年下のあたしから見てもとにかく無防備で隙だらけ、これはもうあたしが守つてあげなくちゃ、と思って実際ずっと守つてきたのにさ。よりによつて異動してきたエロ上司の毒牙にかかるちやつて。例えるなら、毒グモの巣に絡め取られた蝶」

「相沢。上司への敬意を微塵も持ち合わせていないのか、お前は『ミジンコ程度なら持つてますよ』

「それは何だ、オヤジギャグか」

「はい、とあるオヤジについてのギャグです」

みどりさんの変化にいち早く気づいたのは、さすがに長年手許で

慈しんで育ててきた両親だった。

彼女の帰宅時間が日毎に遅くなり、ついには門限を破るに及んで二人は娘を問い合わせた。嘘がつけないみどりさんは、職場の上司と付き合つていることを打ち明ける。

烈火の如く怒った父親は会社に乗り込み、松永部長をも巻き込んで抗議した。上司が七つも年下の部下を弄ぶなど言語道断、どうやつて責任を取るつもりなのか、云々。

田頃職場恋愛には寛容な部長も鼻田まさるをえない。客観的に見て、女には百戦錬磨な工藤課長が『風に揺れる一輪の野の花・金子みどり』を手折つたことは明らかだから。しかも上司という立場を利用したとあらば、ことは単なるプライベートの問題では済まなくなる。

「こつした突き上げに対し課長は開き直る。職場では上司と部下であろうが外に出れば大人の男と女、互いに合意の上の関係であり、しかも自分は独身、いつたい何の問題があるとこいつのか。

結局、「責任を取れ」という周囲の声に対してもにじねて、いくつものすつたもんだの末ふたりはようやく結婚した。

主任が工藤課長の所業を毒づいた。

「処女は面倒くさいから嫌だ、なんて言つてたくせに金子チャンを食つちやつたんだから、自業自得だよな」

「それが違うんですよ、佐久間さん。本当はね

課長に流し田をくれた杏子さんが意味ありげな含み笑いをする。「課長つてば本当はみどりさんと結婚する気マンマンだったのに、先に先方の『両親から『責任取れ』って言われてむくれちゃつたんですよ、あまのじゃくだから。プロポーズのときも『責任を取るために君と結婚したいんじゃない』なんて言つちやつて」

恥ずかしい台詞を暴露され泡を食う課長。動搖が声に現れる。

「おまつ……何でそれ……みどりか！？」

「さやー、課長が照れてるつ。明日雪が降るー。わははは」
課長が眞面目くさつてプロポーズするところなんか想像したら……
ひいいつ、笑える！

遠慮もせずに大笑いしたら、一睨みして彼はうなるように言った。
「ポチ！ 後で覚えてろ」

照れ隠しであることは誰の目にも明らかで、それがまたからかうネタとなる。仕事で厳しくやり込められるお返しとばかりに皆が彼を冷やかした。なんだかんだ言つて愛されている上司なのだ、工藤課長は。

やがて空氣の中に笑いの残滓が融けてしまつ頃、ぽつりとつぶやく声が聞こえた。

「越智さんつて、あの頃の金子チャンに似てるなあ」
初めて見る和らいだ笑顔で瀬尾係長が私を見ていた。

愛おしむような優しさが溢れる表情。目と唇が描く緩やかな曲線は、普段彼が見せる完璧で隙のない笑顔から無機質さを取り除いてしまつたよう生き生きとして、まるでフィルターを外した心情がこぼれ出でているみたいだった。

心の一番純度の高い部分をすくい取つたような、何も手を加えられていない、自然で暖かい笑顔。いつまでも見ていたいと思わせるような笑顔。

それは私の心に鮮やかな像を描いて刻み込まれた。

……「んな笑顔ができる人だつたんだ。

誰しもに振りまく魅力的な王子様の笑みではなく、深い情感から生まれる笑顔。『あの頃の金子チャン』に向けられた愛おしさが作り出している表情だ。きっと係長にとって『あの頃の金子チャン』はとても大切な存在で、同期として友人として共有した時間は鮮やかなまま彼の中で息づいているのだろう。もしかしたら彼女のこと

がひそかに好きだったのかもしれない。

そんなことを思い巡らしてしまったのもまた、乙女心の一部だったりする。

私がみどりさんに似ているという係長のつぶやきに、我が意を得たとばかりに応じたのは佐久間主任だった。

「あ、やっぱりそう思う?」

「思う思う」

このふたり、同期入社だからなのか全然違うタイプなのに気が合うのが不思議だ。入社六年目にして初めて同じ職場の同僚となつた彼らは、上司と部下の間柄になつても感情の齟齬そきを見せることもなく、信頼関係を築き上げているようだ。

とはいえる彼らの見解には納得しかねるので反論させてもいい。

よ

「そういうんじゃなくてね。雰囲気が」

どういう雰囲気だとか、言いあぐねる係長に主任が横から口を出した。

「もつとはつきり言つてやれよ。色気がなくて男慣れしてなくて見るからに処女でちょっと親切にされると信用してホイホイあとついて行くような無防備なところ」

……よくも噛まずに言い切つたな。田頃から練習していたんじゃないか?

どうだこの滑舌とむしろ得意げな主任に反撃しようと口を開けた途端、目の前の人物が涼やかな声で邪魔をした。

「越智さんの場合は食べものをくれる人にホイホイついて行くんじゃないか」

一同、どつと笑う。　なんて、ト書きみたいなこと言つてる場合じゃない!

「失礼なこと言わないでください、係長！　私そんな子供じゃない

ですよー。」

「そりやつヒムキになるとこりが子供だつちゅーの」

「石津さんー。」

「お前、氣をつけろよ。そりやつといひにつけんで課長は金子チヤンを食つちやつたんだから」

「佐久間。俺に恨みでもあんのか……？」

その後は工口軍団による工口話が再び始まり、係長を含めたその他の男性たちも参戦した。いたたまれずに真っ赤になつて逃げ出した私を、皆がからかい、いじりまくる。

兄のことを話すハメになつたのもそつだが、私がこんな田に遭つているのは係長が原因だ。課長の奥さんに似てるなんて言つからだ。そりや色氣はないけど。しょ、処女だけどつ。……男慣れしてない？　いやいや、そんなことば。高校だつて共学だつたし、私にだつて……

普段は閉めたままにしている心の引き出しがすつと開いた。学生服を着た彼が微笑みかける。五年前から変わらない姿に回顧と安心と悔恨の情が入り乱れて、場所もわきまえず夢想に耽つた。

「ポチ？　どしたの？」

杏子さんに声をかけられ、ハッと我に返る。

「何でもないです」

レモンサワーのグラスに手を伸ばし、勢いよく飲み干した。瞼の裏にゆらゆらと揺れる映像がすつと薄くなつていぐ。もう大丈夫。

H口軍団としょうもない話に興じている瀬尾係長に手をやつた。心中で思いきつ罵倒し誓いを立てる。

ザーフたい、ざやふんと言わせてやるからー　待つてみよ、瀬尾ー。そしてまた飲んだ。

それからのこと……記憶がない。

第十話　思い出がもたらすもの

多摩川の土手で夕陽を眺めながら、私は誰かを待っていた。オレンジ色に染まつた空が明日の予定を訊いてくる。

うん、まずは布団を干して太陽の光と熱をいっぱい吸収させておこう。そしたら夜はまたぐっすり眠れるだらうから。それからジョギングに行つて……

越智さん、お待たせ

待ち人が現れた。王子様だ。

はい、お待ちかねのたこ焼き

王子様にこんな庶民の食べものを買いに行かせちゃってごめんなさい。

はい、あーんして

食べさせてもううなんて、畏れ多い。でも口開けちゃお。

おっと、ごめん

王子様つたら、慣れないことをするもんだから、たこ焼きがポロッと落ちて土手を転がつていっちゃつた。

今取つてくるから待つてね

たこ焼きを追いかける王子様。でもどんなに走つても追いつけない。

王子様、遅い！仕方ない、こここの美春さんの出番です。ほーら、あつとこの間に王子様に追いついた。たこ焼きもすぐ手に届きそう。もうちょっと……私のたこ焼き……あと一センチ。

そこで誰かに頬をむぎゅうと摘まれる。邪魔をするのは誰？王子様？

「みーはーる。もつ起きなわー」

ふえ？ 田を開けるともうひとりの王子様。

「新幹線に乗り遅れるぞ。全くしようがないなあ、美春ちゃんは」

そうだ、新幹線！

ガバッと起きるとキャミソールとショーツのみでアラレもな
い格好だった。

「ぎやっ

「酒臭い服のまま寝かすのは忍びなくてねえ。でも昔を思い出した
よ。いつも俺が美春を着替えてやつたあの頃。もう自分ででき
るのに、俺のところに来て甘えてさ、『ボタンかけて』って」
いつの話だ。兄の頭の中で作り上げた妄想じやないのか。

「でも、しばらく見ないうちに成長したなあ、美春も。お兄ちゃん
は感激だ」

やめろ変態！ それ以上口にするな！

何とか無事に新幹線に乗り込み、ようやく一息ついた。お気に入
りのZARDを聴きながらタベのことを思い出してみる。

半分寝ていたからところどころ記憶が抜け落ちているが、確かカ
ラオケボックスでの一次会の最中に眠り込んでしまい、起こされた
ときには同僚たちは帰り支度をしていた……ような気がする。隣に
はなぜか瀬尾係長がいて、私を見て笑っていた……ような気がする。
駅までの道中は杏子さんにもたれかかって歩いた……と思つ。

遅くなるのは分かつてていたので、兄が迎えにくることになつてい
た。頃合いを見て電話をかけるはずだったのに酔っ払ってしまった
ため不可能となり、業を煮やした兄からのホールにより一発で酔い
が覚めた。ちょうど渋谷で電車を乗り換える前で、なぜか一緒にい
た工藤課長をもう大丈夫だから、と先に帰したのだった。

兄の車に乗つてしまつたあとは再び睡魔に襲われ、朝まで爆睡し
たようだ。

あんなに飲むはずではなかつたのに、ビリビリと間違つたんだか。

シートに身を沈めて目をつむつた。

この列車が向かっている故郷の映像が蘇る。その風景の中に収まる家族は一人減り二人減り、彼の地にはもう誰もいない。私は土の下に眠る両親に会いに行くのだ。

映像の中の私は、何年たつても十七歳のまま同じ場所で立ちすくんでいる。忘れられない記憶が追いかけてきては、現在の私を五年前に連れ戻す。

母の死が近い未来に既定のものとなり、絶望という言葉の無慈悲な意味を理解した高三の夏。

インターハイへ出場するよりも母のそばにいようと、練習にも出ずに病院に入り浸つた。母がなんと言おうと聞く耳を持たなかつた。残された時間を片時もむだにしたくなかったのだ。

そんな私を叱りつけたのは兄だ。

「お前はお前にしかできないことをやるんだ。時間をむだにするな、

美春」

私とは違うベクトルで母のことを想う兄に諭され、トレーニングに戻つた。走つている間は何も考えずに済む。私にとってはむしろその方が楽だつたかもしれない。

四百メートル走で四位に入賞して帰つてくると、母は精いっぱいの力で抱きしめてくれた。パジャマを涙で濡らしてしまつた私とは対照的に、目を潤ませることさえなく、美春はきっとやつてくれると思つてた、と笑顔だけを見せて。

暑い夏が終わつていぐと歩調を合わせるように母の生命力も低下していき、そして秋。偶然にも父と同じ命日に、母は逝つた。

母の死には心の準備ができていたが、その後の生活まで思い描いていたわけではなく、予想以上の寂しさが私の心を支配した。父の死後、兄は東京におり、私たちは女ふたりで仲良く支え合つて生きてきたのだ。

でももう、母はない。独りだ。心にポツカリ穴が開くとはこう

「…」

た。 いうことを言うんだらうな、とまるで他人」とのように自分を眺め

母の死の前後は私についていてくれた兄も司法修習生として忙しい身で、東京と秋田を往復して諸々の雑務を処理していた。その中には私の進路決定も含まれていたが、私自身何も考えられない状況が数ヶ月続き、一步も前に進んでいなかつた。学校も休みがちになつていた。

そんなある日。

クラス委員の水野くんが私を心配して訪ねてきた。休んだ分のノートの「コピー」やらお菓子やらと一緒に、クラスメートや先生の言動を面白おかしく報告してくれる。

彼は明るくて格好良くて人の心をつかむのが上手で、絵に描いた
ようなクラスの人気者だった。私が初めて県大会で優勝したときは
「将来のオリンピック選手だな。オレ、一生友達を自慢できる」と
言って喜んでくれた。

私は、彼に恋をしていた。

学校の様子を語り終えると、水野くんがポツリと言った。
け

「越智がいないとつまんね。早く学校を来」

その瞬間、涙がこぼれ出した。抑えていたものが堰せきを切つて溢れてくれる。

顔を見られたくなくてうつむいた。狭まつた視界の中で、またまた涙がこぼれて、詰襟をぎゅっとつかむと、彼も私を抱きしめる腕に力を込める。

たと畳に落ちるしづくの向こうに水野くんの膝が見えたときにはもう、抱きしめられていた。

どれくらいの時間がたつたのか、ようやく私の激情が静まり、まだ目は少し濡れていたが顔を上げた。

「「」めん。服濡ら

言い終わらないうちに唇を塞がれた。何が起こっているのか分からず呆然としたが、彼がいつたん唇を離して再び口づけてやつと、キスされているのだと気づいた。

初めてのキス。大好きな水野くんと。

それはずっと心の中で描いてきた情景で、現実にはあり得ないはずだった。でもこれは夢じゃない。

ねえ、水野くん、私ずっと好きだつたんだよ。ずっと。ずっと。息が苦しくなつて私から唇を離した。そうすると彼と目が合つて慌てて面を伏せた。心中でつぶやいた「好き」が伝わってしまった気がして恥ずかしかつた。

ところが彼は左手で私の頸をつかみ顔を上げさせ、後頭部も押されて三度目のキスをした。今度は唇を割られ舌が入り込んでくる。

「んっ……んぐっ」

その生々しさに思わず両手で彼の肩を押すと、両手首をつかまれて押し倒された。少し乱暴に唇が押し付けられ再び舌が侵入していく。私はどうしていいのかも分からずただされるがままで、身体にのしかかる彼の重みと嵐のような激情を受け入れていた。

嫌ではなかつた。これから起きることに不安は確かにあつたものの、好きな人と触れ合う喜びがそれを凌駕し、未知の領域へふたりで進む一体感に心は酔っていた。

そして首筋にかすかな吐息を感じた刹那、この場に似つかわしくない軽快なメロディが重なつた身体から流れる。ビクつとして身を起こし携帯電話を取り出す彼。

私も続けて起き上がつたが、たつた今彼と行つた行為、これから行おうとしていた行為を思い描いて羞恥のあまりうつむいた。

誰からの電話なのか、水野くんは短く、後でかけ直すと早口で言つて通話を切る。

「わり

小さくつぶやく声が聞こえた。

「わりがつた」

謝られても、恥ずかしさから口を利くことも彼の顔をまともに見ることもできない。水野くんもそれ以上の言葉は続けず、そつと立ち上がり田の前から去つていった。

結局行為は最後まで行き着かなかつたが、それだからこそ、彼の気持ちを確かめたかった。あのキスで私たちの間に何かがつながつたような気がしたけど、やっぱり言葉が欲しい。確かなものが欲しい。私は独りではないのだと安心したい。

明日は学校へ行つて彼に会おう。私の想いを伝えよう。彼の気持ちを確かめよう。

それは寂しさが支配していた真つ暗な心に突然差し込んできた一筋の光であり、幸せの予感だつた。

ところが、期待混じりの決意はその夜にかかつてきた電話でぐじかれる。

隣のクラスの小松さんからだつた。水野くんの彼女。

カン違いをしてごめんね

彼女はいきなり高みから謝つてきた。

水野くん、優しいがらほつとけねんだ。越智さん可哀相だし可哀相つて何が？

慰めだがつただげなんだ。その場の雰囲気で、キスしちゃつただげで

違う、そんなんじゃない。そんなキスじやなかつた。

だからカン違いせねで欲しんだ

カン違いつて何？ 彼も私を好きかもしないと期待したこと？ だつて私を抱きしめてくれたじやない。キスしてくれたじやない。それつて私が可哀相だからなの？ 好きでもないのに抱こうとし

たの？

私、そんなに可哀相なの？

間もなく日付が変わろうとする時刻、東京の兄に電話をかけた。 独りで過ごす空間が恐ろしく静かすぎて私を圧迫し、怖くてたまらなかつたのだ。

ところが用意しておいた愚にもつかない話題は、兄の声を聞いた瞬間にどこかに消えてしまった。私はひたすら唇を噛み締めた。

どうした？

涙が出るの。

どうした、美春？

嗚咽が聞こえないといいんだけど。

美春、何があつた？

言葉にならないんだ。

美春、そつちは寒いか？

……うん、寒いよ。

そもそも鍋食いたくなつてきたな、美春

うん、ウチはみんな鍋大好きだもんね。

美春、じつちに来いよ

え？

東京に来い、美春

あんちゃん……！

一緒に鍋食おう、美春

返事のできない私に何度も何度も名前で呼びかける兄の声。私はその声に縋りついた。

翌日の新幹線に飛び乗つて東京へ向かう頃には、進路を模索するためという口実を使った自分を省みて自己嫌悪できるぐらいには立

ち直っていた。

これが逃げであることは充分自覚していた。でも勇気を出して差し出した手を水野くんに拒否されるのは怖かったし、可哀相だからと手を取られるのはもつと嫌だった。

そんなところにばかりプライドの高さが現れる自分を愚かだとは認めながらも、他にどうしようもなかつた。

慣れない東京の生活にあたふたしながら、どうせなら全て新しく一から始めてみようと決意するに至つた。一番にはなれなくていいから、毎日パソコンと積み重ねて生きていけるように。私たちの両親のように。

そしてWebデザイナーの道を見つけたのだった。

あれから恋はしていない。

勉強が忙しくて、東京の生活に慣れるのが大変で、仕事を覚えるのが優先で。

そんな言い訳をお守りがわりにして、カン違いが起こらないように努めてきた。

やり方は簡単。初めから恋の対象として見なければいい。そうすれば、甘い期待も幸せの予感もあとでカン違いだつたと失望せずに済むのだから。

水野くんへの想いは心の底にたゆたつては、ふとしたときに顔を出して幻想と後悔を抱かせた。やっぱり彼も私を想ってくれていたんじゃないだろうか。どうしてあのとき逃げてしまつたのだろう。

今更確かめる術もなく、確かめたところでどうしようもない。それ以上に確かめるのはやはり怖い。

宙ぶらりんな想いを抱えたまま月日だけが過ぎ去つていつた。

お墓参りは淡々と終わつた。母の死から五年がたち、心の中では一区切りができる。あの頃流した涙も時と共に思い出に変わつた。

変わらないのは初めてのキスの記憶だけ。お盆や正月に帰ることをためらうのは、帰省する彼に会うのが怖いから。あの記憶は引き出しに仕舞つて鍵を掛けてしまおひ。いつものようだ。

「美春ちゃん東京を行べつて聞いたときは泣いて帰つてぐるて思つたども、頑張つてよお。だからおめらも安心せ」

伯母が両親の眠る墓に向かつて語りかける。「ふたりに聞こえるよう」に明るく大きな声で私は言い添えた。

「んだんだ。泣いてなんかねえから。仕事も頑張つてっから」

だから大丈夫だよ、お母さん。私は大丈夫。

第十話　思い出がもたらすもの（後書き）

美春はもむちゃんNARD世代ではありません。あるじとがさつかけで聴くよになつたといつ設定です。

第十一話 上司の秘密を握る女

両親の墓参を終え、その夜は伯母の家に泊まった。

伯母は、自慢の料理を味わいながら仕事や同僚のことを語つて聞いて聞かせる。そこに杏子さんから、昨夜はちゃんと無事に帰れたのかという内容のメールが届いた。だいぶ酔っ払っていたので心配をかけてしまったようだ。反省、ちゃんと帰りました、「心配なく」と返信した。

同僚と仲良くやつている様を見て、伯母も安心したらしい。

「お土産いつも用意しながら、持つてつたけれ」
この伯母がいっぱいと言つからにはかなりの量に違いない。職場で配れというのだろう。

伯母らしい思いやりに、心から礼を述べた。

翌日の日曜日、母校に立ち寄り陸上部の練習に顔を出した。

名前も顔も知らない後輩たちばかりであつたが、私の名は知られているらしく、顧問の根津芳弘先生が紹介するやいなや歓声が上がり、握手責めにあって何とも面映ゆい。

先生と最後に会つたのは母の三回忌だから、実に三年ぶりの再会だ。東京での暮らしをあれこれ訊かれたので真面目に仕事していると答えると、本気で驚かれた。年賀状のやり取りはしていたから近況は知らせてあつたのに、私つてそんなに信用がないんだろうか。

ブツブツ言つていたら、「走つてるおめしか知らねがら」と笑われた。

思えば根津先生とは師弟として濃密な時間を共に過ごした。私の進路を最後の最後まで心配してくれたのも先生だった。何とかして陸上を続けさせようとする彼の説得にも結局応じることはなかつた

けれど。

あの頃は本当に毎日が充実していた、と先生が言つ。才能のある人間が開花していくのを傍で見ることができ、自分がその成功に寄与することができて、本当に幸せだったと。

私も一人で勝ち上がつたつもりは毛頭ない。先生や他の部員たちはいつも私を最優先で練習計画を立ててくれた。時には励まし時には慰め、精神的にも支えてくれた。皆がいなかつたらインターハイで四位に入賞することもなかつたはずだ。あれは私個人でなく、チームで勝ち獲つたものだ。

皆で一番を目指した熱い日々。私にとっては唯一無二の宝。あの頃のような熱をいつかまた身体に感じる日は来るのだろうか。

車窓の景色を眺めながらもう一度恩師や陸上部員たちの顔を思い浮かべ、彼らと共有した時間に思いを馳せた。できればこのまま東京までまつたりとしていたいのだが、そもそも言つていられない事情がある。

懸案事項である『瀬尾係長にぎやふんと言わせる計画』を立案せねばならない。頭を切り替え、脳みそを活性化するのだ。

これまで係長は女性との交際に関しては常にオープンで、会社近くでデートを目撃されたことも数知れずだったという情報はすでに入手済みだ。目撃されるたびに相手の女性が違うことを冷やかされても、そつのない笑顔でかわしてきたという。

つまり、これまで交際相手を秘密にすることはなかつた。ではなぜあの五階の受付嬢のことは隠しておきたいのか？

昼休みに逢引してキスしていた事実を社内で言いふらされればあまりが悪いから、というのが推理その一。しかしそんな数ヶ月も前の話を今更蒸し返したところで、客観的に見て信憑性はないし、ど

れだけの社員が本気にするだろうか。

そう考えるとより蓋然性が高いのは推理その一だ。つまり、相手の女の存在を隠しておきたいから。係長は彼女と交際している事實を秘密にしたいのではないか。

それはなぜか。

他人には知られたくない秘密の関係だから。

すばり、不倫。

あの受付嬢は人妻なのではないか。

そう考えるとピタリとはまるような気がする。隠しておきたいのは彼女を守るため。

いくらウチの会社がプライベートには関与しないといつても、不倫ともなれば虚実入り交じつた噂になるのは必定、同じビルで働く者同士気まずい思いをするのは間違いないし、いずれ彼女の夫の耳に入る可能性だって充分にあるのだ。

彼女が係長の大本命で、華やかな女性関係は全て隠れ蓑みのだつたらしたら

あの情熱的なキスがすべてを物語つているような気がした。昼休みという短い逢瀬の時間に入目を忍んで会うには、誰も来ない非常階段は絶好の場所なのだ。

今や『係長不倫説』は私の中で確信に変わりつつあった。次にすぐべきことは証拠固めだ。まずはあの女の身元調査のために五階に潜入して、左手薬指に指輪があるかどうかを確認しよう。

彼女は私の顔を覚えているだろうか？ もしものために変装した方がいいかもしない。

フツフツ、面白くなってきた。

今後の行動計画を練ろうとしたところで、ふと素朴な疑問が浮かぶ。

あのふたりは、数ヶ月たつても未だに不倫継続中なんだろうか。

離婚協議が長引いているとか。そもそも離婚するつもりもないとか。係長はそれで納得しているんだろうか。愛する人が他の男のとへ帰ることを。それはあんまりだ。

いつの間にか、心の中で彼に向かつて呼びかけていた。係長、それは良くないよ。不倫はやっぱり良くないよ。彼女の旦那さんだけじゃない、彼女も、係長も傷つくよ。なんでそんなつらい恋愛をするの？

ふたりで幸せになる道を模索しているというなら、そのためにもう少し周囲には隠しておきたいというなら、喜んで口をつぐんでいるのに。

間もなく仙台到着を告げる車内放送が、思考に没頭していた私を現実に引き戻した。空腹を感じて、秋田駅で購入した秋田比内地鶏の鶏めし弁当に手を伸ばす。鉄道の旅には何と言つても駅弁が欠かせない。

次第に列車がゆるゆると減速して仙台駅のホームに滑りこむ。まだ秋の観光シーズンには少し早いとはいえ、この週末は爽やかな秋晴れの行楽日和だったので、列車を待つ人の群れがホームに溢れかえっていた。

更に速度が落ちていきやがて完全に停車したとき、最後のつくねを口に放り込んでなげなく窓の外を見た。すっと流した視線がかを捉え、確認するため再び水平移動して戻す。

ホームの人混みの中には見知った顔がいた。工藤課長だった。

私服姿でリラックスムード漂う彼が、乗降口に向かつてノロノロと進んでいる。課長の陰に隠れてよく見えないが、女性が一緒にいるようだ。

あらら、課長つてば、奥さんと仙台旅行？

飲み会で聞いたふたりの馴れ初めを思い出して顔が一やついた。

妊娠八ヶ月だと聞いているが旅行などして身体の負担にはならな

いのだろうか。それとも出産前に夫婦水入らずを楽しんでいるのか。子供が生まれたらふたりきりでゆっくり旅行もできなくなるだろうし。

明日会社で課長をからかうネタができた。内心でほくそ笑みながら、わずかに残っていた弁当をすべて平らげる。目を再びホームにやると、人の群れが動いて次々と乗車していき、課長の陰になつていた奥さんの位置がずれて姿を現した。

……私の目がおかしいのだろうか？ 妊娠八ヶ月の妊婦には見えないのだが。

カチッとしたブラウスとパンツのスタイルからはスレンダーな体型であることが一目で見て取れる。あれは妊婦じゃない。というより、あれは奥さんじやない。一度会つただけだが、もつと背は高かつたと思う。顔つきも全然違う。それなら、あれは誰？

寄り添い合うふたりが醸し出す、大人の男と女の妖しい雰囲気。断言してもいい、絶対に友人と仕事がらみの関係ではない。

課長、仙台で何してるの？ これってまさか。

不倫旅行？

嘘！ なんで？ 課長が！？

あわあわしていたら、件の女が前方から車内に現れた。まさか同じ車両とは！

女の後ろに課長の姿を認めて、慌てて前の座席の陰に隠れる。隣に座る三十代とおぼしき男性が明らかに不審そうにこちらを見ているのを無視して、そろそろと頭を上げ、目から上だけ出した状態で様子をうかがつた。

キヨロキヨロと該当する座席を探す女の、チケットを持つ左手薬指にキラリと光るものを見つけて、更に衝撃を受ける。

……ダブル不倫！？

映画やドラマでしかお目にかかつたことのないアレが、現物が、

生モノが、今私の目の前に……！

女は三十代前半と思われる、しつとつとして少し陰のある美しい人。いかにも課長の食指が動きそう。そもそもなんと言つべきか。座席を見つけたふたりが並んで腰を下ろした。私もようやく背もたれに背を預けて、気持ちを落ち着けるべく深く息を吐く。しかし落ち着くどころか身体に充満し始めたのは、工藤課長に対する怒りだつた。

妻の妊娠中に浮氣する夫。ひどい。ひど過ぎる。こくらH口課長だからって

彼がかつて女性にはスゴ腕だったことは知っている。でも部下だつた奥さんと真面目な恋愛をして、女性遍歴は独身生活と共に過去のものになつたのだと信じていたのに。結婚しようが女好きは変わらないってこと？ 最低！ こんな裏切りつてない。

課長といい、係長といい、どうして私の上司は人の道に外れたことばかりするの？

このやり場のない怒り、いつたいどうしたらしいのか。

奥さんに報告すべきだらうか いやいや、妊娠中の人にそんなショックを与えただめだ。でももしも課長がこのまま奥さんを裏切り続けるとしたら、見て見ぬふりなんて私にできるの？

杏子さんに相談しようか。……ダメだめ！ きっと怒り狂つて大騒ぎになることは目に見える。どっちにしても奥さんの耳に入る。ああもう、どうしたらしいのぉ！

自問自答を繰り返しても納得のいく答えは出でこなかつた。ならば、とりあえず逃げよう。それだけは決心がついた。

東京駅への到着が近づくと早くも行動を起こした。荷物を棚から

下ろし、両手に下げてよたよたと後方のデッキへ移動する。

課長は六列前に座つており、このまま到着まで座席にいれば降車の際にはこちらに気づくことは間違いない。姿を見られたくないのはむしろ彼の方であろう。しかし見てはいけないものを見てしまった側が逃げるのが定番というのだ。あの衝撃的キス日撃事件（いつの間にか事件になつてゐる）のときもそうだった。

三十六計逃げるに如かず。都合の良いことに私は逃げ足が早い。

停車して乗降口が開くとさつと一番でホームに降りる。伯母が渡してくれた両手に抱えきれないほどのお土産が、足枷となつたかのように動きを緩慢にしている。私はエスカレーターの上では移動しないことをモットーとしているが、今日はそれも返上だ。とにかく急ぐのだ。

それにしても荷物が重い。手提げ袋の持ち手の紐が指に食い込んでちぎれそうだ。汗も吹き出してきた。きっと真っ赤な顔でヒーフー言つてるよつてひとから見えるんだろう。……ああ、なんと無様な。

改札を抜け在来線への通路までやつてきて、ようやく一息つく。

ここまで来れば大丈夫だ。課長が追いつくとはない。

テンポの速い呼吸を繰り返すうちに何かおかしい、とこう思ひに捕われ始めた。

何だつて私がこんな理不尽な目に遭わねばならないのか。悪いことをしているのは課長なのに。上司の秘密を見たくて見たわけではないのに。

口の中で愚痴をこぼしつつ、在来線改札口に向かおうとしたそのとき、横合いから声をかけられた。

「すんません、東北新幹線の乗り場はどうかね」
杖をついたおばあさんが不安げな顔で私を見上げている。

在京五年にもかかわらず未だに東京には不案内な私であるが、今

回はたつた今歩いてきた道を指せばいいだけのことである。

「ここを真っ直ぐ行つたところです。表示に従つて行けばわかりますよ」

しかし日曜日の午後のこゝと、駅のコンコースは「」た返していて、立ち止まって表示を見上げるのもおばあさんにはしづらそうだ。

「一緒に行きましょか」

こゝのおばあさんを放つておく」との良心の痛みの方が強かつたので、元きた道を戻つたが、見れば前方からは工藤課長が件の女どちらに向かつて歩いてくる。

たら一つと冷や汗が流れた。

「すんませんねえ」

「いえいえ」

おばあさんに微笑みながらも視線は課長を追つ。

どうかこゝちを見ませんように……女と喋つていれば大丈夫かな

……あつヤバい、こゝちに目を向けた！ 見つかる！

土産が詰まつた紙袋をとつさに顔の前に掲げて隠した。そのまま通路を進んでふたりと通り過ぎる。

……いつたい何をやつているのか、私は。

精神的疲労が肉体的なそれを上回り、イライラを通り越してムカムカしてきたのを自覚する。これを誰かにぶつけてやらねば気が済まない。誰か そんなもん、あの男しかいない。瀬尾係長だ！
ゼーんぶあんたのせいよ！ あんたが不倫なんかするから！ あんなどこでキスなんかするから悪いのよ！

心中で思いきり彼を罵倒した。課長と係長のそれぞれの不倫の間には何の関係もないのだが、このときの私はとにかく瀬尾が悪い、すべてを片付けることに決めたのだった。

私つて上司の不倫現場に出くわす星の下に生まれたんだろうか。

課長と係長、二人そろって不倫するなんて、師匠と弟子つてそういうことなのかい！

不倫上司一人の下で、これからどんな顔して働けばいいのつー？

上司の秘密なんて握るもんじやない

明日からのことを憂えて早くも盛大なため息が出てきた。

第十一話 酒は飲んでも……

人影もまばらな早朝のエントランスホールを、普段とは逆の方向へ向かう。降りてきたエレベーターの箱に乗り込み壁に寄りかかると、自然とため息が口をついて出た。

非常階段を使わるのは秋田の土産を両手に下げているからとうだけではない。直属の上司二人の不倫現場を目撃したことがこんなにも私を悩ませ、活力を奪っているのだ。

ため息ひとつで幸せもひとつ逃げていくというなら、今日だけで一生分の幸せが私を見捨てて逃げ去ったのではないだろうか。いや、実際は昨日からすでに数えきれないほどのため息をついているぞ。私の幸せは夜逃げしたと表現する方が的確なかも知れない。

瀬尾係長についてはさやふんと言わせることは決まっている。不倫をしているという確信はあるが、相手の女の素性がわかつていないため全体像がおぼろげで、実感は今ひとつだけれど。

だが工藤課長は違う。奥さんとは面識があるしふたりの間にはもうすぐ子供だって生まれるのだ。何も見なかつたふりをして今までと同じ部下としての顔を見せる自信がない。

若くして課長に昇進しただけあって、誰もが認める腕の立つ上司。性格は問題あるけど、仕事上は頼りになるし、尊敬できる人でもある。でも奥さんを裏切っていることを知つてしまつた今、課長を軽蔑する心は隠しておけそうもない。

信頼できない上司とどう接してゆけばいいのだろう。

オフィスに入つてもため息が何度も漏れる。このやるせない心情を誰かわかってくれ。ひとりでこんな秘密を抱えているのは私には荷が重すぎる。いつそのこと、大声で叫んだらすつきりするだろうか。どうせ誰もいないんだし。

「朝からため息なんて越智さんらしくないね」「ぎやつ」

突然声をかけられて飛び上がった。振り返ると、瀬尾係長が入り口から訝しげな表情でこちらを見ている。「か……係長……いきなり声かけないでくださいよ……心臓止まるかと」

朝の定例会議にいつもは直接会議室に行く係長が、先にこじりこ来るとは珍しい。

「これから会議ですよね。何か資料でも？」

それには答えずすたすたと私のところまで来ると、手近の机に軽く尻を落とした。そして気遣わしげな表情をしてためらいがちに口を開く。

「越智さん……あのあとは大丈夫だったの？」

「はい？」

「ちゃんと帰れた？ そのひ……課長は」

「課長？」

今まさに悩みの種となっている人物が話題に出て、思わず彼の言葉を遮りてしまった。だめだ、やつぱり課長のこと、平静でいられない。

「課長が何だつてんですか」

嫌悪感を隠すことができず、つい吐き捨てるように呟いてしまった。そんな私にただならぬものを感じたのか、係長は眉をぴくんと上げ険しい表情を作る。

「まさかと思つけど、越智さん」

そこへ新たな声が乱入した。

「ポチ、おはよ……ひるせいします、係長」

前半後半でこれほどローンの違う挨拶も珍しい。いつも始業時間ギリギリに来る石津さんがこんなに早く来るのも珍しい。

「おはようございます。石津さんがこんなに早く来るなんて、何か

のどつき?」

軽口を叩いたのにやり返しもせず真つ直ぐにひびきやつてくる。その上仕事中にも見せないような真面目な表情で私を見下ろした。女の子の口説き文句を考えているときと同じくらい真剣な顔。

「金曜日の夜、ちゃんと帰れた?」

へ? たつた今係長にも同じことを訊かれなかつたつけ?

「はい……兄が車で迎えにきてくれたので」

奇妙に思ひながらも事実を告げると、石津さんは見るからにホッとした。

「それならいいんだけど」

「あ、そうだ、二次会の会計とか石津さんにやらせちゃつたみたいで、すみません」

幹事のくせに眠り込んだのは失態だつた。口といはえ一応先輩なので謝るに越したことはない。が、何とも思つてないよつに彼は首を軽く横に振つた。

「ああ、そんなのはいいんだ。ポチ、だいぶ酔つてたし」「なんだか妙に機嫌がいいなあ。どうしたんだろ。」

ふと横にいる係長を見ると、こちらは逆に不機嫌丸出しだ。そんな彼に石津さんは勝利者のような笑みを浮かべて言つた。

「係長、もうすぐ会議始まるんじやないんですか?」

とつと行つたらどうですか的ユアンスを前面に押し出した台詞に私は啞然とした。

「そんなことは君に言われなくてもわかつていいよ」

係長の返答はブリザードが吹き荒れるかのようで、啞然を通り越して呆然とする。

何なの、このふたり……!? 仲悪くなかったよね?

そこへ第三の声、乱入。

「ポチ! ちょっと」

入り口で杏子さんが呼んでいる。これで意味不明の緊張感から解

放される、と正直ホッとして立ち上がった。係長も会議に行くよつだ。

しかし引つ張られるよつにして連れて行かれた休憩室で、さすがに尋常でない事態に気づくことになる。すでにお馴染みとなつた質問を繰り出されて。

「メールでも訊いたけどさ。念のためにもう一度訊くよ。金曜日の夜はちゃんと帰ったのよね？」

「何なんですか。係長と口津さんにも同じことを訊かれたんですけど」

「帰ったのよね？」

三人が三人とも同じことを訊く不可解さに首をひねつたが、置み掛けて訊く彼女の迫力に押されて、あの夜帰宅した経緯をぼつぼつと語つた。

「遅くなるときはいつも兄が迎えにきてくれるんです。あの日も渋谷で電車を乗り換える前に兄から電話が来て、もう渋谷まで来てるからつて。それで、車に乗つたら私そのまま寝ちゃつて、朝起きたらベッドの中でした」

兄が服を脱がせたことは黙つておこへ。

「よくできたお兄さんねー。ますます会うのが楽しみだわ。……それに比べて妹は、まつたくもつ。あの夜どれだけヒヤヒヤしたかわかつてんの？」

彼氏持ちにもかかわらず弁護士たちとの合コンに向けて意欲的な彼女は、とろけるような笑顔から一転して厳しい視線をこちらに向けた。急に不安が胸に押し寄せる。

「私、何かやらかしましたか……？」

否定されることを期待していたのに、彼女の返事は私をもつと不安にさせた。

「それだよ、その顔。それはヤバいつて」

「ヤバいと言われても、今更顔は変えられませんよー。」

「いや、そうじゃなくてさ……まあ、聞きなさい」

そう言って杏子さんは、私の記憶の曖昧な部分をつまびらかに語りだした。

すでに通常の酒量を超えて飲み過ぎていた私は、二次会が始まつてまもなく心地よい眠りの園へ誘われた。隣に座っていた杏子さんにもたれかかって。しかもカラオケがガンガンかかる状況にもかかわらずぐっすり眠り込んで目を覚まさない。

杏子さんは私をそのまま寝かせておくことにしたが、自分が歌う順番が来て席を立つことを余儀なくされる。そこへちょうどミスチルを歌い終わつた瀬尾係長がやってきたので席とついでに寝ている私の世話を交代することになった。

「係長、すいません」

「別に構わないよ」

係長が了解したことで、杏子さんは安心してマイクを手にドリカムを熱唱する。その間私は係長に寄りかかって引き続き夢の国をあ散步だ。ところが歌い終わつて戻つてくると、なんと私は係長の膝枕でスースー寝息を立てているではないか。

「げつ、すみません係長、この子つたらもう。席替わりますから」

「いや、いいよ、せっかく気持ちよく寝てるんだし、このまま寝かせてあげて」

「ひつ……膝枕！？ ウソー！ 私が係長の膝枕なんてあり得ないですっ」

「疑うなら他の人に訊いてみなさい。あの場にいた全員が見てんだからね」

ずうずうしきくも憧れの瀬尾係長の膝枕で寝るなどといふ行為に女性社員たちは憤慨したが、係長本人がこのままでいいと言つ以上、指をくわえて見ていいのを見ていた。

「いいなー、私もガンガン飲んで寝てやれば良かつた」

「あたしには無理。寝顔を他の奴らに見せるなんて恥ずかしくてできないって」

「見てみなよ、あのポチの寝顔。罪のない顔しちゃって」「絶対、お兄さんと合口onsoさせてやる」

結局二次会が終わるまで係長の膝枕で眠りこける。お開きになり、起こされても半分だけしか覚醒せずに、今度は杏子さんにベタツと抱きつく私。

「わっ。ポチ、苦しいつ。重いー」

「わー、いいにおーい」

哀れ、彼女は私を抱えて恵比寿駅までの道をよたよたと歩くハメになつた。

「あ、その辺は何となく覚えてます。杏子さんの香水の匂いも一緒に……へへ」

「あんた、犬か。こつちはもう抱きつかれて重くて大変だつたんだから。それでつい石津くんに代わつてもらつて」

「石津さん！？」

「やっぱ覚えてないんだ」

さすがに女一人の力には限界があり、杏子さんは抱きついた私ごと倒れそうになつたのだが、そこをとつとつと支えたのが石津さんだつた。

「あぶねーなあ。相沢さん、俺が代わりますよ」

私の腰に腕を回してしつかりと抱える。支えが強固なものに変わつて安心したのか、私が次にとつた行動は石津さんの胸に抱きつくことだつた。

「ポチ、これじゃ歩けない」

「じゃあ、カ一歩きしましょー」

「わや——。もつやめてくだわこ。これ以上聞いていられません！」

「まだまだ」んなもんじやないの！ ちやんと聞けー！」

なんとか無事に駅に到着すると、相変わらず石津さんに抱きついたままの私を誰が送るかという話になつた。

「ポチ、家どこなの？」

「ふたもたまわ……」

「二口タマか。じゃ、俺が送つてくわ。同じ田園都市線だしな」名乗りを上げたのは工藤課長だった。

「タクシーで帰るか？ 電車だとこの時間、すげー込むぞー。ワッショ並みかもな」

「ヤダー、そんなのに課長と乗つたら妊娠するー」

嫌がつて石津さんにますます強くしがみつく私を見て、課長は鼻白む。

「お前、酔つてるくせに、ボケてんのか……？」

「課長の本質を言じ表してるじゃないですか。歩く種まき機

石津さんの揶揄に私はどうやら興味を引かれたらしい。

「何の種をまくんですかあ？」

「子孫つて種かなあ」

「しそ？ しその葉なら食べられますねえ」

「そうだねー、と適当に相槌を打ちながら、さりげなく石津さんは私の背中に手を回す。

「石津、何かよからぬこと考えてないだろうな

「いやー、こんだけくつつかれてるし、いくじやポチとはこえその気になっちゃうかも」

「やついた顔で際どい冗談を吐くものだから当然周囲はぎょっとした。しかし当事者である私は引き続き植物の話題だと思つたらしい。

「私がどの木になるんですかあ？ へへへ」

場が一気に脱力したところで、辺りを払う明晰な声で瀬尾係長が話を軌道修正させた。

「越智さんは僕が送つて行くよ。僕の歓迎会の幹事をやつて疲れさせちゃったんだし。一口タマなら家近くから

まさかの係長からの申し出で、石津さんは慌てて口の表情を消した。

「わざわざ係長の手を煩わせる」とないですよ。もひ乗りかかった船なんで、俺が送りますから」「ひ

やんわりとだが明らかに拒絶に係長は眉根を寄せて尋ねる。

「石津は家どこなの」

「中野です」

「じゃあ遠回りじゃないか。いいんだよ、ひつけ。上司として責任もあるしね」

自分こそが適任だと言わんばかりに余裕すら見せて笑んだ係長だったが、石津さんは断固拒否の姿勢で相対した。

「俺も先輩なんで、後輩の面倒はひやんと見ますよ」

「無理しなくていい。僕が送るから」「ひ

「無理じゃないです。俺が送ります」

「ちょ、ちょ、ちょっと待つてください。なんで私を送ることどうたりが張り合うんですか？」

自分の言動に顔が赤らむ思いがしたが、そちらの疑問を解くのが先だ。

「だーかーらー、係長と石津くん、あんたがお持ち帰りされると思つてお互いに警戒し合つてたのよ」

「おっお持ち帰り！？」

私には縁のない言葉を聞かされてもどうせひんと来ない。でも杏子さんの口調には冗談の影すらなかった。

「あんたってばとろーんとした目つきでへラへラ笑つてゐし、やた

らとスキンシップ求めてくるした。あたしん家に泊まるかつて訊いたら、明日は用事があるから帰りまーすって

酔っ払いながらも秋田に帰ることを忘れてはいなかつたか。そこだけは自分を褒めてやうづ。それにしても『お持ち帰り』云々はどうも現実味が薄い。

「でも石津さんはともかく、係長は社内の女の子には手を出さない人ですよ？ 私は係長のタイプと全然違うじ、いくらなんでもお持ち帰りは」

彼について情報収集したから自信を持つて断言できる。しかも私は直属の部下なのだ。黙っていても女性が寄ってくるのに、後々面倒なことになるかもしない部下と関係を持つなどあり得ようか。

しかし杏子さんは生暖かい目をこぢらに向けた。

「係長、一次会での後どんなに勧められても一度と歌わなかつたのよ。あんたを膝枕する役は渡さないゾ、みたいな。『子犬みたいな』なんて言っちゃつて、あんたの寝顔ずっと見てたし、なにげにあんたの髪触つてるし」

衝撃のあまり息が止まつた。頭が沸騰して湯気が出ているんじやないかと錯覚を起こすほど体温が一気に上がつた気がする。

「よつぽどあんたのこと氣に入つたみたいだつたから、そしたら石津くんじゃなくてもみんな同じこと考えるわよ。もともと女関係派手な人だしね」

ぐおおお、とうなり声を上げて頭を抱えた。が、杏子さんが再び氣になることを言い出したので顔を上げる。

「結局、間に入つた課長があんたを送ることになつたんだけど、それはそれでみんな心配でさ」

「なんですか」

「みどりさん食つちやつた前科があるからね。みどりさんによつてあんたもヤバいんじゃないかって。で、課長と係長と石津くんでしばらく三すくみ状態。三人が三人とも自分以外は信用できないって

思つてたよ、あれは

そ、そんなことがあつたとは……

ふと先ほどの係長と石津さんの様子を思い出した。

「じゃ、じゃあ、さつき石津さんの機嫌が良かつたのつて

「あなたのお持ち帰りを阻止できて嬉しかつたんでしょう。モテ

モテの係長に一矢報いてやつたつもりなんぢやないの」

「……係長が機嫌悪かつたのは？」

「善意を誤解されたのが不本意だつたのか、それとも本当にお持ち
帰りを邪魔されたのが悔しかつたのか 上司だしそれはないと思
いたいけど、課長とみどりさんとの件もあるからねえ」

「……考えたくない。知りたくない。それ以前に、酔っ払つて正体な
くした事実をなかつたことにしてしまいたい！」

石津さんに抱きついた。係長の膝枕で寝た。金曜日の夜にもう一
度戻れるのなら、誓つてそんな失態は犯さないものを……！

あの日やたらとお酒を飲んだのは、どうしてだつたつけ？

ああ、そうだ。係長のせいで兄のことを話すハメになつて、係長
のせいでの間にからかわれて、係長のせいで……彼のことを思い出し
たんだ。

なんだ。全部係長が原因ぢやないか！

杏子さんがぐどぐどとお説教をするのを聞きながら、今日もまた
瀬尾係長を心の中で罵倒した。

瀬尾のバカ！ 不倫男！ 何もかもあんたのせいよ！ そもそも
あんたが不倫なんかするから、回り回つて私がこんな目に遭つてる
んだからね！

頭の片隅では「それってハツ当たりでは……？」と理性が弱々し
く訴えかけていたが、嵐のごとく猛々しい感情がそれを退けた。

そもそも係長が秘密を抱えているのがいけないんだ。彼が不倫の

恋を守るうとするから、目撃した私がとばっちりを食つているんだ。
でもこれでよくわかつた。不倫は周りの人間（私のこと）を不幸
にする。

昨日からついたため息の分の幸せを返せ！

不倫をやめさせよう。係長の不倫も、課長の不倫も。
心が決まったのはそのときだった。

第十二話 作戦開始

要約すれば『酒は飲んでも飲まれるな』といつ格言に行き着く内容のお説教と、『男性と一人つきりでの飲み』禁止令を杏子さんから頂戴した私がＷＥＢ事業部室に戻ると、まもなく始業時間だというのに女性の同僚たちが一ヶ所に集まってワイワイと騒がしい。その中にモニターがあることから、どこかのホームページが騒ぎの原因とみられる。

皆さん、すでにオンになっていたとは。私も仕事、仕事。オフでの失敗はオンで取り戻せ。そんな社是がこの会社にあるかどうかは知らないが、「喜んで取り戻させていただきます!」とう気になってきた。つくづく人生に失敗はつきものである。

「あ、ポチ! どこ行つてたのよ」

小林さんが私に気づいて輪の中に引っ張った。杏子さんの話によると、『瀬尾係長の膝枕で寝た女』としてお姉サマ方はたいそうご立腹だったということなので、できれば距離を置きたいところながらそういうらしい。

モニターの前に連れてこられると、画面上にはあまりにもよく知った人物の画像があった。爽やかに微笑む、我が変態王子の画像が。「何で今の今までお兄さんのこと隠してたのよ。こんなにオトコマエだったなんて」

「ねーねー、お兄さん彼女いるのー?」「年収いくら?」

……なるほど。兄が勤める法律事務所のホームページを見ていたのか。思いつきりオフだつたんですね……

「でもこのホームページ、どこの会社が作つてんのかな。なんかマイチだよね」

「あたし、お兄さんに個人的にコンサルティングしてもいいなあ

「あ、抜け駆けなしだからね」

そういうアプローチの仕方もあるのか、仕事が仕事だしね。でも皆さん、先週までは瀬尾係長が断トツ人気だったくせに、変わり身の早い……

そうだ、すっかり忘れていたが、今こそお土産の出番だ。すでに兄の画像を見たことで、私に対する係長絡みの怒りは収まっている。だから、これをお姉サマ方にバラまけばダメ押しとなるに違いない。怒りの矛先を回避できるのなら、何だって利用してやる。

「あのーこれ、どうぞ召し上がってください」

いくつかの秋田銘菓を配ると、お姉サマ方はますます上機嫌になつた。

「えー、秋田に帰つてたの？」

「うわー美味しそー」

「いやーん、このなまはげ、可愛いー」

なまはげクッキーを手に顔をほころばす彼女たち。内心でガツツポーズだ。伯母さん、ありがとおお。

そこに突然聞こえてきた、できれば聞かずに済ませたかった、あら人の声。

「美春ちゃん、久しづりー、元氣だつたかーー」

一難去つてまた一難とはこのことか。

久々に聞くこの能天気な声は、もちろん我がH & amp; G M I ユニケーシヨンズ社長のもの。アメリカ・台湾・香港・上海と视察に行つてくれていたお陰で、一週間ほど静かな日々を過ごしていたのに……チツ、もう帰つてきたのか。

「お久しづりです、社長、お帰りなさい」

それでも、精一杯の営業スマイルを浮かべて社長を迎えた。

「早く美春ちゃんの顔が見たくて、会議が終わつて飛んできちゃつたよ」

ずっと来なくても良かつたのに……

「専務の奴、分刻みのスケジュールなんか組むもんだから、美春ちゃんのためにゆっくりお土産を買う時間もなくてねえ」別に欲しくありませんから。

「あつでも香港でパンダクッキーだけはなんとか買えたから。皆さんも一緒にどうぞー」

可愛いパンダの絵柄のついた箱を差し出す社長。クッキーには罪はないのでそれだけはありがたくいただくことにする。

そこで私も社長に秋田土産を渡すことにした。何しろ伯母ときたら「上司の皆さんに渡しだけれ。おれこんな『どしができねんども』と言つて同僚用・上司用の土産を大量に用意したのだ。

「美春ちゃん、秋田に帰つてたのかい？」

「はい、この週末に」

ちょうど部長以下の役付きの面々が部屋に入つてきたので、部長、係長、一人の主任、最後に課長の順で土産を渡していく。

係長の前に立つたときには、被つた迷惑に対する憤りと膝枕をしてもらつた恥ずかしさとが相まって、髪の毛が逆立つような錯覚に捕えられた。しかし『瀬尾係長にぎやふんと言わせ不倫をやめさせる作戦』を発動させるから首を洗つて待つてろ、と心の中で挑戦状を叩きつけることにより氣を落ち着かせた。

課長を最後にしたのはもちろんわざとだ。

「へえ、秋田に帰つたのか

「はい、新、幹、線で」

わざと切つて発音してやつた。「私は見たんだよ。申し開きできんのか？ できないよな？」というメッセージを意外に含ませて。

課長の不倫をやめさせてやると決心した以上、思い悩むことはもう何もない。

『ブツ切り新幹線』は即効性があつたらしく、課長は眉根を寄せて

土産から私に視線を移した。私も目を細めてにらみつける。

そこへゆっくり近づいてきた社長が、ふいに爆弾を落とした。

「美春ちゃん、田舎で見合いでもしてきたの？」

シン……とした空気がすぐさま驚きの色に染まる。

「えええーっ！」「ウソー！」「何それ

何バカなことを言つてるんだ、このオッサンは。

口々に叫ぶ同僚たちの前で、社長は悪びれる素振りも見せない。

「盆や正月でもないのに帰るなんて、見合いぐらいしか思い浮かばないんだけどー」

他にもいろいろあるでしょ！ 親戚の法事とか、友人の結婚式とか！ 憶測でそういうきわどい話題を口に出すなー！

「ポチ、本当にお見合いしたのっ！？」

案の定と言つべきか、鬼気迫る表情で詰め寄る女性陣。

何てこと言つてくれたのよ、このオッサンー お姉サマ方は『結婚』『見合い』『婚約』ってキーワードに敏感なんだからーーーっ！

「してない。してません。お見合いなんかしてませんからっ！」

ブンブンと首と両手を振つて全力で否定したら、呆気に取られた上司たちが私をイジり始めた。

「お前さん、正社員になつたばかりでもう辞めるのか？」

「辞めませんから！」

「見合いから始まる純愛つてのはありなの？」

「純愛ネタはやめてくださいっ！」

「お前を嫁にもらつ奴つてチーター並の脚力がねえと無理じやね？」

「そんな人がどこにいるんですか！」

課長と係長は無言でいたが、それぞれ異なつた様子で私を凝視した。

課長は目を細め、首をかしげながら。

係長は冷たい光を目に灯して。

その様子は何か怒つているようにも見えて、顔が綺麗なだけに怖

そもそも半端ではなかつた。

席に着いて仕事に取りかかつたが動きがどうも鈍重だ。朝っぱらから次々と身に降りかかる災難が、私を疲れさせている。酒の上の失敗を取り戻そと、廐のようにグングンと上昇していははずのやる気だつて、社長が引っ搔き回してくれたお陰で超低空飛行になつてゐるではないか。

これではいかん。頭を切り替えよう。

トップページをクリスマス仕様に変更する案件が幾つも来ている。私の心もクリスマスバージョンに衣替えするのだ。目をつぶればほら、クリスマスケーキが見える。チキンが見える。シャンパンも！……いや、酒はやめておこひつ。

午前の仕事が一段落し、昼休みに入るべく、お弁当を手に休憩室に向かう。

「お先でーす」

デスクで書類をチェックしている課長の前を、通りしなにチラッと見たら目が合つた。即座に睨みつける。こいつやってサインを送りつけてやれば勘の良い課長のこと、何かあると氣づくはず。

名付けて『工口課長の不倫強制終了作戦』、課長の方から先に始めるのには理由がある。何と言つても奥さんは身重の体、さつさとあの女と手を切らせ、彼女のもとへ帰さなければならないからだ。課長が接触してきたら何を言つのが一番効果的だろう。一緒に旅行するぐらいなんだから相当のめり込んでいるのかもしれない。すると私の説得などに果たして耳を貸すだらうか、あの課長が。どうも考えにくい。

その場合「奥さんにバラす」と脅しをかけてはどうだらう。結婚生活を犠牲にするつもりがなければ、あの女の関係を精算するのではないか。

「この日のランチタイムは同僚とのお喋りもそこそこに、作戦の詳細について思案したのだった。

お弁当仲間の先輩ふたりは先に休憩に入っていたため、時間が来ると部署に戻った。私は淹れ直した熱いお茶をフーフーしながら、なぜか係長の顔を思い浮かべる。

寝ている私の頭を膝に乗せて、係長はいつたい何を考えていたのかな。子供だなーとか思ってたんだろうな。髪の毛を触つてたって……それはセクハラ？　まさか本当にお持ち帰りするつもりじゃなかつたよね！？

途端に顔が熱くなつた。お持ち帰りされた私と係長のあれやこれやを想像し……

ぎゃーっ、何考えてんの、私！

ないないない。係長には大本命の彼女がいるんだから。誰にも秘密にしておきたい女性がいるんだから。

ふと、そこで何かが引っかかった。

ちょっと待つて。そしたらあの係長が急に私に興味を示すつておかしくない？

もう一回整理してみよう。

係長は何らかのきっかけで私がキス現場の目撃者だと知つた。何としても口止めしておきたい。

そこで自らのゴシップを逆手にとつて私に釘を刺した。電話での兄との会話を盗み聞きし、「証拠もなく噂話をするな」と更に念を押すのに利用し、ついでに部署の特に女性陣の注意を自分から逸らすのに成功した。

でもいつまでも私が黙っている保証はない。いつ気が変わって『昼休みに逢引する上司』というネタをばらまくかわからないのだ。

とすると、係長にしてみればもつと安心確実な方法を選ぼうとはしないだろ？

例えば弱みを握るとか、逆に味方に付けるとか。

弱みって言つたつて、私みたいに清廉潔白な人間にはそんなもんじゃないのだ。そこで手懐ける方法を探る。私に興味があるフリをして、近づいて、惑わす 自分の魅力を最大限利用して。

私が酔っ払ったあの夜は絶好のチャンスだったが、石津さんに邪魔された。今朝不機嫌だったのはそれが理由だ。

そういえばさつきも、ありもしないお見合い話を聞いて怒つているようだった。私に婚約者でもできたら、手懐けることができなくなるから…。

……………どうしよう、ピッタリはまっちゃったよ。私ってやつぱり探偵に向いているんじゃないだろうか。

「お前って、百面相だな」「ぎやつ」

工藤課長が入り口に立っていた。

本日一度目のこきなり声かけ。心臓に悪いったら……まったく、課長といい係長といい、不倫男は人を驚かせるのが趣味なのか？

「ちょっといいか？」

「どうぞ」

冷たい視線と返事を妻を裏切る男にぶつけたと、彼はわずかに怯んで向かいの椅子に腰を掛けた。いつもの自信満々な『俺はできる男だぜ』な態度が消えている。多少なりとも後ろめたい気持ちがあるからなのか。

課長は気がかりなことを確かめたいかのよつな、だがあまり気の進まない様子で口を開いた。

「俺、朝からお前に睨まれてるよつて感じるのは気のせいいか？」

思つたとおり、早くも食いついてきたな。

「もうろん氣のせいじゃありませんとも」

「こゝは強氣で行くべし。

手招きして顔を近づけてきた課長の耳もとへ、口を寄せつづぶやく。

「仙台」

途端にバツと口を押されて彼は青くなつた。

「やつぱり……東京駅のあれ、お前だつたんだ……」

『あれ』つて何よ。

「仙台から一緒に車両でもうバツチリ

つ、ともう一度口を押さえる。

「最低ですね、課長」

思い切り軽蔑を込めて言つてやると、彼は顔色を変えて否定した。

「違う」

課長としてはあつさつと認めるわけにはいかないのだろう。予想の範囲内の反応を無視して嫌みたらしく続けた。

「夫の最初の浮氣は妻の妊娠中つていうのがパターンらしいですけどね」

「俺はそのパターンには当てはまらないぞ」

「えつ！ もう何度も浮氣してるつてことですか」

「違うわ！ ちゃんと説明させてくれ」

「別に説明なんか聞きたくありません。それにもう時間切れです」

休憩時間が終わろうとしていた。立ち上がりて課長を見下ろす。

「これだけは言わせてもらいます。の人とは別れください」
身を翻すと小走りで休憩室を出た。これ以上彼の言い訳なんか聞きたくなくて。

課長に対する憤りで気が昂ぶりたか、廊下を進む足取りが乱れる。

何を説明するといつのか。それをするべきは私にではなく奥さんだろ！

独りで冷静になれる場所を求めて化粧室に急いだら、角を曲がったところで誰かとぶつかりそうになつた。

「うわっ」

ほとんど相手の胸に飛び込む形になつて、二の腕を掴まれる。

瀬尾係長。

気が昂ぶつたままの私は何も言えずに係長を見上げた。すると興奮する田の色に氣づいたのか、ハツとして私の腕を掴む指に力がこもる。

「越智さん？　どうしたの？」

心配そうに私を見る瞳には優しさが溢れていた。

でも。違う。

頭の奥で警報が鳴る。　その優しさは一セモノだ

「何でもないです」

係長から離れ、足早に化粧室へ飛び込んだ。明るい蛍光灯の下に見える鏡の中の自分は泣きそうな顔をしている。慌てて頬を両手でびしゃっと打つた。

お生憎さま係長。その手には乗りませんから。だって私はカン違いしたりしないもの。

五年前に聞いた彼女の声が鮮明に蘇つた。

『カン違いせねで欲しんだ』

……そう。

私は、カン違いなんかしないもの。

第十四話　社長の愛人！？

「美春、お兄ちゃんに弁当くれ」

その瞬間、目の前が真っ暗になつた。夕べから下ごしらえしてあつたおかげと弁当用冷凍食品とを組み合わせ、伯母からもつた漬物を詰め合わせて会心の出来となつた豪華弁当を、あつさり兄に奪われるなどあり得ない。

「今日は一日事務所で書類仕事。外に食いに行く時間もほか弁買ひに行く時間ももつたいたないから、可愛い妹が兄のために作った弁当が必要なんだ」

事務の人にも買ってきもらえばいいのでは……？

「指定した弁当がなかつた場合、いちいち電話で指示を仰いでくる奴だから面倒くさい」

ああ。私の血と汗と涙の結晶がああ。やっぱり電車で来ればよかつた。

昨日一日で溜まつたストレスを解消すべく、今朝は五時起きで走りに行つた。週末は秋田に行つてたし、昨日は土産が重くて階段を上つていないので、身体が負荷を求めている。こんな気分のときは運動するに限るのだ。

充分なストレッチをして体を解してからみつちり走り込んだ。その後のシャワーの爽快なこと。思わずZARDの歌が口から漏れる。兄が東京へ進学した際にもらつたお古のCDラジカセに残つていたのが、ZARDのベストアルバム。なにげなく聴いてみたら、軽快なメロディと心を打つ歌詞、それに大人の女性の可愛い歌声につかり魅了されてしまった。陸上の大会では走る前に必ず聴いて心を落ち着かせたものだ。

兄が自分で買ったのか他人から借りたのかは定かではないが、ど

うせ忘れているに決まっている、兄のモノは私のモノ、と勝手に頂戴した。

数年後に私が上京し、CDを見つけた兄が「お前が持つてたのか」と言つたときには心底驚いたが、返せとも言われなかつたので正式に私のモノとした、曰く付きの（？）CDなんである。

そんなZARDを口ずさみながら、弁当を作り、朝食を済ませ、出勤態勢が整つたときに兄が声をかけてきた。

「今日はお兄ちゃんが送つてあげるよ」

兄はその日の仕事内容により、時折車通勤をする。雨がひどい日などは「そんなにお兄ちゃんの車に乗りたいのか？ しうがないなあ」と、こちらが頼んでもいないので送つてくれるしぶしばあるが、今日は天高く馬肥ゆる秋晴れの日でいつたいどういう風の吹き回しかと思つたものの、満員電車に乗らなくて済むといい楽な道を選択したのが間違いの元だつた。

弁当を強奪され、落胆して兄の車が走り去るのを見送つた私は、足取りも重く建物に入つた。兄の財布は現金残高が低く、千円しかもらえなかつた。高給取りのくせに。

「忙しそぎて金を下ろす暇もない」などとのたまつてくれた兄は、普段、買い物を電子マネーかクレジットカードで済ます。一方、職業に比して案外アナログな私は、専ら現金決済だ。財布が札で膨らむ方がずっと嬉しい。

とにかく今日は千円でランチだ。何を食べようかな。非常階段を上る間、次々と脳のメニューを想像しては今日一日の活力を充電することに努めた。

オフィスに入ると、途端に昨日の工藤課長とのやり取りが脳裏に再生される。

落ち着いて一晩考えてみたが、私のような小娘に言われたくらい
での工口課長がすんなり女と別れるとは思えない。また、本当に
別れたかどうかを確かめる術は今のところ私にはない。

うーん、どうすべきかなあ。

「越智さん」

「ぎやつ」

突然近くから声をかけられ飛び上がった。見ればすぐ横に瀬尾係
長が立っている。

またもやこのパターン。私の寿命を縮めたいのか、この男。ああ
あ、心臓バクバク……

深呼吸をしてようやく声を出す。

「…………おはよひござります、係長」

「おはよひ。僕が入ってくる音にも気づかないなんて、何か考えご
と?」

そうです、ここ数日頭がハゲるほど考えごとをしているんです、
あなたのせいだ。

が、口に出してはいつまでも。

「別に何でもないです。今日のお昼何にしようかなって」

「…………本当にそれだけ? 何か悩みがあるんじゃないの?」

悩みの原因に向かって言えるかい。

「その…………僕でよければ話を聞くから。ひとりで抱え込むのはよく
ないよ」

どうやって不倫をやめさせるか、本人に相談しろってのかい!

しかし係長の真摯な表情には、彼が私を手懐けようとしているこ
とを知つていてさえも、強く心を打つものがあった。それが彼の手
だとすれば、その演技力には脱帽する。

でも係長、残念でした。あなたの意図に私が気づいていることを、
あなたは知らない。

フフフフフ。ホーッ、ホツホツホ。……実際にこんな高笑いをや

つてみたい。

「千円でデザートとコーヒーも付いてるランチって、どこで食べられますかね？」

「は？」

「田下のところ、それが悩みなんですけど」

「冗談めかした返答を聞いて、彼は明らかに気分を害したようだった。自分の魅力と優しさが通用しない女は不愉快なのだろう。これ以上ここにいられても何かと厄介だ。彼にはさっさと会議に行つてもらおう。

「あつ係長、早く行かないと会議に遅れますよ！」

「越智さん、ちょっと待つ」

「ダメダメ、できる男は常に余裕を持たないと」

「彼がまだ何か言いかけているのも聞かず、背中を押して無理やり部屋から追い出した。

そのうちに続々と同僚たちが出勤してきた。席について早速パソコンを起動した藤田さんを、本田のランチに誘う。

「いいけどさ、ポチ、先週お米買つたばかりなのにもう全部食べちゃったの？」

「なつ」

「いくら私でも一週間で米十キロは消費できんわ！」

「違いますよ、今日はお米がないからじゃなくて」

疑惑を晴らすべく兄によつて弁当を強奪された事情を話していると、会議を終えた上司たちが部屋に入ってきた。課長はチラツと私に視線を走らせ、すぐにはずし、本田の伝達事項を皆に向かって伝え始める。

私はねめるように彼を見つめた。視線で人が刺せるものなら課長の全身は今、ハリネズミのように無数の視線の針が突き刺さっているはずだ。エロハリネズミ。略してエロハリ。妻を裏切った男には

これでも上等な呼び名だ。

ふと視線を課長から横に流すと、係長が目を細めてこすりを見ていた。さつき追い立てられて不首尾に終わつたものだから、私への新たな懐柔策でも練つてゐるのか？

そんな暗い情熱を燃やすくらいなら、不倫をやめろつて。

始業早々、社内メールが一通届いた。差出人は課長である。

『話がある。昼、空けといてくれ』

振り返つて彼にガンを飛ばしてから返信した。

『先約あり。おととい来てください』

なんでおに不倫の言い訳すんのさ。奥さんにしろつての。いや、實際にするのはまずいな。お腹の子に悪影響が出そうだ。もし男の子だったら、将来父親のようなエロハリになつてしまつかもしけない。

『大事な話。仕事が終わつたら会おう』

食い下がる課長に、今度はたつぱり時間をとつてから嫌味なほどニッコリ笑つてやつた。

『仕事の後は速攻で家に帰る予定が入つています』

『つれないことを言つな。メシおごるから』

『私に言い寄るしつこい上司がいるつて、杏子さんに相談しようかな』

『それはダメ！ 相沢には絶対言つな』

『じゃあ、奥さんの許可をもらつてから』

次に来たメールはこれまでとは一変した調子だつた。

『お前に頼みたいことがあるんだ。一生、恩に着るから』

課長らしからぬ下手に出た内容に眉をひそめる。何か裏があるんじゃないか。

でも一生恩に着せるのも悪くないと直した。私に頭が上がりない工藤課長……

楽しそうな未来図に軍配が上がった。キーボードの上で指を踊らせる。

『わかりました。時間と場所は?』

どうせ不倫絡みに決まっているが、彼の頼みを聞いてやりつつ別れさせる道を模索できるかも知れない。『H口課長の不倫強制終了作戦』の新展開に思わず顔が緩んだ。

さて、藤田さんとの楽しいランチタイムがやつてきた。上司ふたりのドロドロ不倫で胸焼けがしていたから、久しぶりに悶絶必至の純愛エピソードを聞いて萌えたい。

場所は歩いて五分の定食屋。安くてボリュームがあるとあって昼時はいつも大賑わい、私たちが店内に入つたときにはすでに満席だった。

「空いてなさそうですねー」

「んー」

諦めて余所へ行くか、と、踵を返しかけたときに声をかけられた。

「藤田くん、ここおいでよ」

四人掛けのテーブルに座る一人の女性のうち一人が手を振つている。どうやら藤田さんの同期らしい。ランチの女神様は私たちに微笑んでくれたようだ。

「ポチ、構わない?」

「はい、もちろん」

二人はPR事業部一課の片岡麻里子さん、そして長野遙さんと名乗つた。藤田さんの同期である片岡さんは以前、一課に所属していたので瀬尾係長の元同僚だ。私のことも一人に紹介してもらつた。

片岡さんが私の顔をチラチラと見るのが気になる。顔になんかついてんのかな。いや、だったら藤田さんが言ってくれただろうし。やがて好奇心に負けたのか、彼女はおずおずと切り出した。

「越智さんて、あの越智さんだよね？」

あの？ とは？

含みのある質問に藤田さんも食いついた。

「何？ ソレ」

「いや、社長のお気に入りつて専らの噂だから」

PR事業部にまで知られているのか……

「でも、ねえ」

「はい、思つてたのとちょっと……」

目を合わせて「ゴー『ゴー』言つ彼女たちの仕草が何とも氣になる。何よ！ はつきり言つてよ！」

藤田さんも同意見だつたらしい。

「どういう噂になつてんの？ そつちでは」

氣心の知れた仲らしくアイコンタクトで会話を交わしたふたりは、やがて覚悟を決めたのか私に関する噂を交互に口にし始めた。

「社長がしそつちゅうＷＥＢに出入りしては越智さんにチョッカイかけてるとか」

それは事実です。迷惑します。

「ランチやデートに誘つてるとか」

ランチはあるけど「デートはないぞ！」

「一緒に飲みに行つてるとか」

それは「データラメ！」

「すでに愛人……わわわ」

「なんですつてえ！」

気がついたらガタンと立ち上がつて叫んでいた。店内の視線がすべて私に集まつたが、んなもん氣にしてられつか！

愛人！ 私が社長の愛人！？ あ、頭がくらくらしてきた。

「ポチ、ちょっと落ち着いて、ね？」

藤田さんがなだめてくれたが、憤激は收まらない。

この私に社長の愛人疑惑があるなんて知つたら、さぞかし両親は

草葉の陰で泣くことだらう。ああ、情けないつたら！

ちょうどそこに肉じゃが定食が運ばれてきたので、たっぷりと汁の染み込んだじやがいもを親の敵とばかりに箸でズブズブと刺す。しかし私が黒い熱情を定食に向けている間に、藤田さんは状況改善に乗り出した。

「確かにポチは社長に気に入られてるけど、愛人なんてどんでもないよ。WEBの連中ならみんな知ってる。PRでもそいつ言ってやってくれないかな」

藤田さん！ 大好き！ 胸の前で小刻みに拍手する。

「付け加えさせてもらうと、一緒に飲みに行つたこともないし、データなんてたとえ誘われたつて絶対行きませんよ。はつきり言つてそんな噂、大迷惑ですっ！」

愛人疑惑を払拭するため藤田さんに倣つて私も身の潔白を言い立てる。すると真剣さが通じたのか迫力負けしたのかはわからないが、彼女たちは顔を引きつらせて私の主張を受け入れた。

「向井のときとはずいぶん違うのね」

向井？

ポツリとこぼれた片岡さんのつぶやきに好奇心がすかさず反応した。

向井里佳子。去年四月に入社した大卒社員。PR事業部に配属されるやいなや社長の目に止まり、気に入られてオン・オフ共に特別扱いを受ける。

彼女の教育係として社長自らPR事業部のエース、瀬尾主任（当時）を選び、彼が担当する案件にはすべからく関わらせてPRマンとしての教育を施そうとした。

終業後には食事に誘い、休日にはゴルフに誘う。常に瀬尾主任もお供させて。

「若い女性一人では気後れするだらう？ 君は教育係なんだから」

と、完全に公私混同の理由を付けては主任を引っ張り出す。

確かに向井里佳子は美人で研修中は男性社員の注目を浴びたもの、元々勝気な性格で、少しずつ社長の寵愛を力サに着始め、職場ではたびたび同僚と摩擦が起きるようになつていつた。

これには上司たちも頭を悩ませたものの、ワンマン社長に苦言を呈する者はいなかつた。

しかし職場の雰囲気が次第に悪くなる中で急転直下、クライアントである某食品会社社員と電撃結婚し退職。

去年の十一月のことだつた。

「できちやつた結婚だつたのよ。まあ辞めてくれてこつちはみんな助かつたけど、新入社員だよ？ 無責任つちや無責任でしょ？ 一人の社員を育てるのにどれだけ時間と金がかかるかつて話」

「瀬尾さんと組んで仕事やりたいつて人は男女問わずたくさんいたのに、よりによつて口クに仕事も覚えられない向井の教育係になつて、じう言つちゃなんだけど、結局瀬尾さんの時間はすべて無駄になつたつてことですよ」

「瀬尾さんは何も言わなかつたけど、オン・オフ両方で引っ張り回されて絶対迷惑してたよ。社長がいないときは向井とはあからさまに距離置いてたし。それがわかつてたから周りも暴発しないでいたけど」

「『社長に直訴して会社辞める』って言つた女の子がいて、瀬尾さんが『もう少し様子見てだめなら僕が社長に話すから、あとちょっと辛抱して』つてなだめたんですよ。主任がそう言つながらつてみんなとりあえず納得したんだけど」

片岡さんと長野さんは当時の怒りを思い出したのか、身を乗り出して興奮気味に語つた。そういう事情で揉めごとが起きる様を想像して、彼女たちに同情する。

あのオッサン、こんなに不平不満を社員に抱えさせるなんて、は

つきり言つて社長失格じゃないの？ だつて企業のトップにいる人がひとりの社員ばかりえこ^{ひいき}顛^{ひん}覆^{ふく}してたら誰もついて行かなくなるじゃない。ヤリ手社長つて言われるのに、変なの。

向井さんの何がそんなに社長のお気に召したんだろう。ふたりの話では仕事のできる人ではなかつたみたいだし。単に美人だつたから？

それにしても、あとからあとから出てくる係長のエピソードには正直驚いた。

「係長つて、ずいぶん人望が厚かつたんですね」

片岡さんは興奮を静めると、元上司の話題に嬉しそうな顔で答えた。

「うん、ただ仕事ができるだけじゃなくて、先輩後輩関係なく周りに配慮できる人なんだよね。瀬尾さんがイライラして周りにあたるところなんて見たことも聞いたこともない。モテる人だからさ、プライベートが充実してるから仕事にいい影響が出るのか、仕事ができる人だからモテるのか、どっちなんだろうね。WEBではどうなの？」

「さあ、来たばっかりだし、よくわかりません」

私にとつては『不倫の恋を守るために手段を選ばない男』なんだけど、上司としてはどうだろう。

瀬尾係長はWebPRを担当している。一方私はWeb制作のクリエーターだ。

私が指示を仰ぐとしたら佐久間主任や秦野主任だし、係長がWebデザインの範疇で具体的な指図をすることはない。

しかしWEB事業部の係長職として、一つ一つの業務をきちんと把握しようと努めているし、そのためにクリエーターとも積極的に会話をこなす。専門的なことでわからないことはわからないとはっきり言う。知ったかぶりしないのがいい。

部下への指示は簡潔で的確だし、旨をまとめることに長けてる。今朝は悩みがあるんじやないかって訊いてくれたなあ。昨日廊下でぶつかったときに私の様子がおかしいと感じたんだろう。彼の思惑が多分に絡んでいるとしても、部下を気遣う気持ちは嘘ではないってことなのかな。

……あれ。ちょっと。なんか私、気持ちが流されてない？

背筋を伸ばして姿勢を整え、流されかかっていた気持ちもきちんと立て直す。

『係長にぎゅふんと言わせ不倫をやめさせる作戦』遂行のためににはこれじゃダメダメ。

少なくとも半年以上は続く不倫だ。本気の相手なら係長だつてそう簡単に諦めないだろ。作戦成功のために私はもつとピシッとしないとね、ピシッ。

気合いが新たに入ったところで、片岡さんが再び口を開いた。

「一度は瀬尾さんと同じチームに入つて一緒に仕事したかったんだけどなあ。WEBに異動しちゃつてちょっと残念。まあ本人が希望したから仕方ないけど」

本人が希望した？ それは初耳だ。

「係長つて、WEBに異動希望出してたんですか？」

「PRの一課でも係長のポストが一つ空いてね、一課か三課の係長職の中から一人が異動することになつたんだけど、瀬尾さんはWEBを希望したらしいの。前からやつてみたかったんだって」

ふーん。で、異動してみたら自分の不倫を知る女がいて、口封じにかかつたと。

そこでふと疑問が頭に引っかかった。……ちょっと待つて。

係長はいつから私のことを知っていたのだろう？

異動してすぐに気づいたってこと？ でも誓つてあの非常階段では私の顔を見ていないはずなのに、どうやって私だと知ったの？

こつたこづりやつて？

係長が異動さえしてこなければ、私が気づくことはなかったのに。
彼の存在すら知らないまま、キスを目撃した記憶も色褪せてしまつ
ただろう。元

皮肉な巡り合わせに軽くため息が出た。

第十五話 課長の告白

指定された店は中目黒にある創作和風ダイニングだった。飲食店ばかりが入ったビルの三階の奥にあり、入り口は風雅な佇まいを見せている。

工藤の名前を出すと、年の頃二十代後半のウエイトレスが私に踏みするような目を向けた。

本日の服装はキャミソールの上にブラウス、下はコットンパンツという出で立ちで全く普通のオフィスカジュアルのつもりなのだが、この店にはそぐわないとでも思われたのだろうか。

私は基本的にパンツルックで、足もとはスニーカーかヒールの低い靴を好む。だってスカートでは走れない。いつでもどこでも走る態勢を整えておくのが越智美春、なのだ。

案内された個室は処々に青竹を配した、清々しく明るくシンプルな内装で、木目の美しいテーブルの一端にはすでに工藤課長が着いて私を待っていた。

ウエイトレスがもう一度チラッと私を見る。
ははーん、そういうことか。

何しろ課長は今年三十五歳の男盛り、ガツチリした体格を持ち、精悍な顔つきをしたオトコマエであると同時に大人の男の色気をムンムンと漂わせている。隣に侍らす女はお色気度百一十パーセントくらいの美女が相応しいとも思つたんだろう。こんなオトコマエの連れが私みたいな色気なしの小娘で悪かったね。

課長の向いのソファに腰を掛けると、ウエイトレスから飲み物を尋ねられた。食事はすでにコース料理を注文してあつたらしい。

「烏龍茶を」

酔つ払つて醜態を晒さらしたばかりなので今夜は酒を控えることにした。

ウエイトレスが下がると課長が口を開いた。

「遅かったな」

「迷つたんですね」

「お前の方が先に出たよな」

「迷つたんですね」

「交差点から目と鼻の先つて言つたよな」

「迷つたんですね！ それ以上追及したら帰りますよつ」

……だから初めての場所は嫌い。東京の街並みはどこもかしこも同じに見えるから。

「で、頼みというのは何ですか」

单刀直入に訊くことで、話題を強引に変えた。

「……その前にお前が見た女性のことなんだが

「ダブル不倫の相手ですね」

「違うつて」

「信じません」

「信じる」

「ヤダ」

「

ここで前菜の盛り合わせが運ばれてきた。塩炒り銀杏・栗の甘煮・秋刀魚の酢漬け。秋の味覚である。

空腹だったので一気に食べてしまつてから、話を元に戻した。

「……あんなの誰が見たつて不倫旅行じゃないですか。他に何があるつていうんですか」

課長は冷酒を一口含むと静かにグラスを置いた。

「数年ぶりに電話がかかってきた。取り乱してて、心配になつて仙台に会いに行つた」

「誰なんですか、あの人」

「昔付き合つてた」

なんだ、やっぱりそういうことなんだ。

「で、昔の恋が再燃したんですね」

「してない」

「でも一緒に泊まつたんでしょ」

「何もないぞ。お前が想像してるようなことは。ただ泣いて取り乱す彼女をなだめていただけだ」

エロハリがそれだけのためにわざわざ仙台まで行くなんて信じられない。

「それで？」

「力になるつて約束した」

次に運ばれてきたのはお造りの盛り合わせ。「こちらも全て平らげてから、課長に対して厳しい声音で迫る。

「何があつたか知りませんけど、どうして課長が力にならなきやいけないんですか？ 奥さんに黙つて元カノに会いに行くつて時点で、すでに裏切りは始まつてるんですよ。課長だってそれが後ろ暗いから奥さんに知られたくないんでしょう？」

「それは認める。俺が悪い。でもなあ、あんな風に電話で泣かれて、放つとくことはできなかつたんだよ」

空を見つめる課長。懐かしい何かを思い出すように。

「恋人である以前に同僚だつた。広告代理店にいた時の二期後輩ですね。同じチームでしんどい仕事が多かつたけど、モノを作り上げる苦労も喜びも一緒に分かち合つた仲間とでも言つかな」「どうして別れたんですか」

「『同僚』と『恋人』を使い分けできなくなつたんだ。一人だけで会つてゐる時も仕事の話ばかりで喧嘩にもなつたし、それなら恋人でいる意味がないって関係を解消した。嫌いになつて別れたわけじゃない。俺が転職してからも連絡先くらいは残しておいたから、お互に結婚した時は祝いの品を贈り合つた。そういう関係だよ」

初めて聞く、課長の昔の恋。若くて、仕事に情熱かけてて、器用

には立ち回れなくて、自分も彼女も傷つけて……最後にはそれぞれ別の道を見つけた。そんな恋だったのかな。

課長は私たち部下にはボロクソ言いながら厳しく結果を求めてくる上司だけど、決して情のない人ではない。それが分かってるからみんな彼を慕つてついて行くんだと思う。

そんな課長が昔の同僚で恋人だった人を捨ててはおけないだろう現在困った状況にあると分かっていて。

「あの人、何があつたんですか」

田中奈緒子、旧姓橋本、三十三歳。元広告代理店工社勤務。二十九歳の時に仕事で知り合ったイタリア料理のシェフと結婚。夫の独立・開業の際には独身時代に貯めておいた貯金を提供、広告代理店を退職し、レストラン経営を手伝う。二年前に長男が生まれるが同居の姑に預けることが多くなり、やがて嫁姑が長男の教育問題で対立する。

夫に苦情を言つ妻。息子に愚痴をこぼす母。どの時代にも繰り返されてきた光景。

パートナーとは妻のことであり、自分たち夫婦が家族の基礎をなすと考えられる夫であるなら、母親に対しても線引きできたであろう。だが夫と姑は母子一人で生活してきた時間が長く、夫に対する姑の影響力は大きかった。次第に夫との間に溝ができ、穏やかな家庭生活を送ることが困難になつてしまらした頃、奈緒子は相談に乗つてくれた店のマネージャーと関係を持つてしまう。酔つた上での出来事だった。

このことを知つた夫は離婚請求し、奈緒子は家を出る。

話を聞いてそれは辛いだろうなと思った。

どちらが一方的に悪いというものでもない。女の立場から言うな

ら、旦那さんが奈緒子さんをきちんと守るべきなのであります。母子一人で生きてきたという境遇を聞いたり、母親を無下にはできないのも理解できる。

自分の考えを述べると、課長は「ふーん」と意外そうに言った。
「女つてこういう時、旦那か姑を攻撃するもんと思つてたけど、お前は違うのか」

それは私自身が母と一人で寄り添つて生きていたからだろう。父は死に、兄は遠く離れて、私たち一人強い絆で結ばれていたから。「私が考える親子の絆つて……うまく言えないんですけど、伸びたり縮んだりしながらもしなやかで強靭で絶対に切れたりしないんですよ」

「何となく言いたいことは分かる」

「でも夫婦の絆は何年もかかつて太くなつていぐもので、油断すれば簡単に折れる」

「それは同感だ」

だからこそ、年輪を重ねた夫婦が強く美しく見えるんだと思う。

「だから、課長も奥さんとの絆、ポツキリ折れないように気を付けてないとねつ」

「お前は一言多いわ」

「ところどどうして仙台だったんですか」

「夫婦の思い出の場所なんだと。姑抜きで一人で話し合いたくて旦那を呼び出したけど、応じなかつたんだな。それで俺に電話してきましたよ、もう終わりだつて」

それって辛すぎる。お姑さんのことは抜きにして、好き合つて結婚までした二人がどうしてそんなことになつてしまつんだろ。

「奈緒子さん、どうするつもりなんですか」

「離婚には応じてもいいって。でも子供の親権は欲しい。それとな。レストランの開業に当たつてあいつが金出してるだろ。その辺の権

利関係もあるから、話が複雑になりそうなんだ」「なるほど」

「そこでだ。お前のお兄さん、紹介してくれ」

「えっ。びっくりした、突然。

「課長だったら弁護士の知り合いなんて、いくらでもいるんじゃないですか。クライアントつながりとか」

「顔広いもんなー、何しろ。

「そのクライアントつながりにいくつか紹介してもらつた弁護士事務所の中に、お前のお兄さんのところのがあつてさ。こりやもひ、運命だと思ったね」

「課長みたいな現実主義の人間が口にする運命ほど胡散臭いものはない。そう思つたが、黙つたまま先を促した。

「あいつ今、人間不信っぽくなつてんだよな。例のマネージャーってのが元々姑の紹介で入つた奴で、関係を持ったのも姑の指図じやないかつて」

「げつ。それじゃ昼メロじゃないですか」

「弁護士なんて皆がみんな信用できるわけじゃないし、高い相談料取られて何も残らないんじや嫌だと」

「それなら課長を頼つたのも納得できる。今現在の奈緒子さんは何の関わりもない、でも心から信用できる相手。それが課長なんだろう。

「で、何でウチの兄を?」

「あいつ自身は岩手の人間なんだけど、お袋さんが秋田の人でね。秋田は第一の故郷みたいなもんなんだよ。だからお兄さんなら、少しは警戒心も和らぐんじゃないかと思つんだよな。元々あいつって田舎をすごく大事にしてるヤツだから。で、お前もあいつに会つてやってほしい」

「どうしてですか?」

「話し相手になるだけでいいんだよ。お前見てたら十年前の自分を思い出して元気になるだろ、きっと。な? 頼むよ、同郷のよしみ

で

随分と広い「同郷」だな、それは。

しかしここまで話を聞いて、私自身も彼女を応援したい気持ちになっていた。

「分かりました。兄に話してみます。一生恩に着てくださいよ」「それは絶対約束するから」

ふむ、これくらい恩着せがましくしておけばいいだりつ。ふふふ。

「あ、あと一つだけいいですか」

「何だ」

「奥さんには仙台外泊の言い訳、なんでしたんですか」

「ポチ、顔がニヤけてる。……先週末はカミさん、高校時代の友達の結婚式で名古屋に行つてたんだよ。体を心配した両親も一緒にな」「ふうーん

「何だよ」

「妊娠中に家を空けるのは要注意つてことですね。いい勉強になりました」

翌日、朝イチで打つた社内メールにて、昼休みに課長を呼び出した。夕べ早速兄に事情を話したのだ。

私が待ち合わせ場所に行くと、指示どおり課長が待っていた。よしよし。

「何だ、あのメールは」

「とっても分かりやすい指令だつたでしょ?」

『本日、十一時十五分、裏の非常階段で待て』

「お前、俺は一応上司なんだが、待て、はないだろ?、待て、は

「このことに関しては私の方が立場が上ですからねえ

腕組みをしてにこやかに課長を見上げる。弁当を持ったままなので今イチ様にならないが、この際良しとしておく。

「さて、兄からの伝言があるんですが

「話してくれたのか」

「はい。えーっと、類似したケースをすでに扱つたことがあるのでも引き受けることに問題はないが、やはり御本人から一度詳しく話を聞き、方針を確認した上で費用を納得していただきたい。通常最初の相談から法律相談料を頂戴しているが、今回は愛する可愛い妹の上司の方からのお話なので、僕個人の裁量でお話を聞きましょう、とのことです」

「うん、長かつたが兄が言つた内容に逐一間違いはない。

『美春の上司が絡んでるんじや、お兄ちゃん頑張んなくつちやなあ。私の兄は日本一の弁護士だつて自慢させてやるからな、美春』

ウザい台詞まで一緒に思い出してしまい、慌てて先を続けた。

「それで、兄は明日の夜なら時間が取れるがどうか、とのことですが、どうします？ それ以降だと再来週まで忙しいし、通常の業務時間となると相談料が発生してしまつやうですし、課長も一緒つてわけにはいかなくなりますけど」

「分かった、明日の夜だな。あいつに連絡しとく。お前も来るんだろ？」

「はい、ウチの兄、人見知りですし」

「……」

今後必要になる時もあらうと、携帯番号とメールアドレスを交換しておいた。

「じゃあ、私お弁当食べに行きますから、課長はこのまま階段を下りて行つてくださいね」

「十階分下りりつてか」

「食前運動ですよ。気持良ぐ」飯が食べられますよ。はい、行つた行つた

課長はムスッとしたが、言われたとおりに下りて行つた。

立場が上つて気持ちいいな。

気持ちいいのはそれだけではない。課長が不倫をしていなかつた

という事実、昔の恋人の力になろうとしている事が私の心を暖かくしていた。一度は課長を軽蔑しかかっていたのだ。上司への信頼を取り戻したことが無性に嬉しかった。

「ごめんなさい、課長。頭から疑つてかかるつて……ま、これぐらい謝つておけばいいだろう。

ふと思いついて携帯を再度取り出し、課長の登録名を【エロハリ】と変えた。この呼び名が今や愛らしい響きを持つて聞こえるのだから、人の心というものはつくづく不思議だ。せつかくだから、こつそりと上司をおちょくりつつ活用しようではないか。

裏口から再び社内に入り、誰もいない廊下を休憩室へ向かう。鼻歌が出そうなほど陽気に足取りも軽く角を曲がると、ギクッとして歩みが止まつた。

うつむきがちに壁に寄りかかった人が一人。ゆっくりと顔を上げる。

「係長……」

何をやつてるんだろう、こんな所で。

「あの、休憩じゃないんですか？」

私の問には答えず、影を落とした目でじつといちらりを見る。

「係長？」

再度呼びかけると、彼はつと視線を外してボソッとつぶやいた。「今から行く」

いつもの爽やかさや柔軟さは完全に消え失せ、代わりに沈鬱な空氣をまとわりつかせて、彼は私の前から去つて行つた。
何なんだ、アレ。

首をひねりながら休憩室に入ると、すでに食べ終わつていた弁当組の一人が何やら盛り上がりつゝている。

「予想したとおりの展開で笑つた笑つた」

「あたしはあの演技力に笑わせてもらつたわ」

どうやら昨夜の連続ドラマが話題のようだ。私は二人に挨拶しテープルに弁当を広げて、お喋りの仲間に加わった。しかし、先程見た係長の様子がどうも気になる。

「あれがなんで『恋人にしたい女性芸能人』で一位になるの？ 男の評価って謎だね」

「隠れ巨乳だからじゃない？」

隠れ巨乳。いや、今は巨乳じゃなくて係長だ。

何があつたんだろう、あんな暗い顔をして。仕事は順風満帆、プライベートだつて私を懐柔してでも守りたい、情熱的な恋をしているというのに。

その時、ふとある可能性が思い浮かんだ。

もしかして。……不倫の恋がうまくいっていない？

「俳優の水原丈と不倫してたんだよね。愛妻家つて評判だったのに『童顔と巨乳のギャップは破壊力抜群だからねえ』

あの女も巨乳なのかな……だから巨乳じゃなくて係長だつて。

彼にしてみれば、愛する女に夫がいるつて状況は耐え難いだろう。いつまでずるずると不倫を続けるつもりなのか。

あの日の光景が目の前に浮かび上がる。恍惚の表情を浮かべた女の顔。自分の夫にも、係長にも、あんな顔を見せているのだろうか。幼くも見える妖艶な表情で一人の男に笑み、時間差で愛を囁くやうにしているのだろうか。やっぱり巨乳……これはどうでもいい。急に腹が立つてきて、ガツガツとご飯を口に詰め込んだ。さつさと離婚するなり、係長との関係を解消するなり、はっきりしなさいよ。

それは、初めてあの女に対して抱いた嫌悪感だった。

第十五話 講義の冒頭（後書き）

ハチ公前は祭りかと見まじつほどの人口密度であった。すでに陽も落ちて人工的な光が瞬く駅前を、家路を急ぐ人、遊びに出かける人が此方彼方で行き交う。

こんなにたくさんの人の中から課長を見つけられるのだろうか。体が大きいから目立つとは思うけど。

田中奈緒子さんは現在渋谷のビジネスホテルに滞在している。課長と待ち合わせて、これからそのホテルに向かうところだ。内容が内容だけに、ホテルの部屋の方が落ち着いて話せるだらうという判断からである。恵比寿で待ち合わせなかつたのは、もちろん人目を避けるためだ。そして、兄とは直接ホテルで落ち合つことになつていた。

「あのースイマセン」

話しかけられて顔を向けると、私と同じ年頃の男性が恥ずかしそうにこっちを見ている。

「道玄坂の？ つてライブハウスに行きたいんですけど、場所分かりますか？」

私がライブハウスなんぞに行くように見えるのかね、君は。

「すみません、渋谷は詳しくないので」

渋谷どころか東京は全部詳しくないんだが。

「困ったなア。あ、地図は持つてるんスよ。でも僕地図見るの苦手で」

と言いつつ雑誌から切り抜かれたらしい紙片を私に見せる。まあ、地図があれば私にも分かるかもしれん。

「えーっと、ハチ公がここだから、こつ見て、あー、あつち方向じゃないですか？」

実に大雑把な案内だが納得してくれるだろうか。

「え？ どつちですか？」

「えっと、あっち、あの道です」

背伸びをしながら指をさす。

「よく分からなア。人が多くて。ちょっとそこまで一緒に来てもらえませんか？」

そう言いつつ私を促して移動する。仕方ないなあ。

もう一度一人で地図をのぞき込んで交差点の前まで来たといひで、突然真横に大きな人影が現れ、言葉を発した。

「俺の連れに何か用か？」

課長だった。え、何、凄んでるよ、ちょっと

「え、いや、何でもないっスよ」

慌てて青年は走り去つた。反対方向に。だからライブハウスはそつちじやないって。

ボケツと青年を見送ると、課長は呆れたように言った。

「何ナンパされてんだお前は」

ナ……ナンパ？ 違う、違う。

「道を教えてただけですよ？」

「さり気なく移動してただろうが」

「だから道が分からなイって」

「流されやすそうな女の子見つけて、ちょっとずつ自分のベースに持っていくんだよ。なし崩しナンパ」

「流されやすいつて……失礼なつ」

課長つてば自分がエロだからって、誰も彼もをそんな目で見なくたつていいのに。

「大体何だつてハチ公前なんか待ち合わせ場所にしたんだ、こんな人の多いところ。見つからないから電話かけるところだつたぞ」

「だつて渋谷といったらハチ公じゃないですか。私はベタが好きなんです。それにね、ハチ公も秋田出身なんですよ。やっぱり同郷の犬を応援するのが人情つてもんじやないです。あ、課長知らなか

つたでしょ、ハチ公が大館からもらわれていったこと

「もういい。行くぞ」

私のお喋りにウンザリした顔をして先に歩き始めた課長の跡を追つた。

「お腹空いたなあ。ピザ取りましちゃうね、課長の奢りで」

「分かつた分かつた」

スクランブル交差点の信号が青に変わる。一斉に動き出す、人、人、人。巨大スクリーンの音と光が降り注ぐ下、それぞれが目指す方向へ。しかし私は無秩序な人の流れに乗ることができず、まじりつき、課長を見失いそうになる。

課長、ちょっと待って、課長！

思わず腕を伸ばし左袖を掴んだ。突然腕を後ろに引っ張られた課長は、目をパチクリとしてこちらを振り返る。

「ま……迷子になりますよ、課長」

マズい。「誰が」つてツッコミが来る。

が、課長はニヤリと笑つただけで再び歩き出し、私も彼の袖を掴んだまま半歩後ろをついて行く。

「お前もなー、もうちょっと素直にならないと、いつか幸せ逃すぞ」とにかくこの人混みを抜け出すことで頭がいっぱいだつた私は、課長の言葉など気にする余裕もなかつた。

ホテルは交差点から五分くらい歩いた場所にあった。外壁にパステルカラーを使用した、メルヘンチックな外観のビジネスホテルだった。

入り口の自動ドアが左右に開く。課長に続いて足を踏み入れた瞬間、背中にゾクッと寒気を感じた。

何……？

不自然な動きを課長も見逃さない。

「どうした？」

「いえ、ちょっと。寒気が」

「風邪は引き始めが肝心だぞ。気を付けるよ」

何でもないことのように言われて、私も三秒後にはすでに忘れていた。お腹の虫が鳴り、意識は全て食欲中枢へと向けられたのだった。

その夜ベッドに入ると、ホテルの部屋で見た奈緒子さんの表情が思い出された。

四人が一同に介し、それぞれの紹介を始めた時こそ、ギクシャクした空気が流れてはいたが、私が秋田弁全開で喋り始めた途端、奈緒子さんの頬に赤みが差し、目には光が宿った。兄が「課長さんが置いていかれてるぞ」と言わなかつたら、一人で何時間でも喋つていたかもしれない。

出身地が近いから。似たような言葉を話すから。でもそれは、ただのきっかけだったと思う。彼女はもうとっくに準備運動を終えて、スター・ティングの位置に着いていた。あとはピストルの音が鳴るのを待つていただけで。

何故なら、兄に詳しい事情を話す間、彼女はもはや一滴も涙をこぼさなかつたから。

とつぐに覚悟を決めていたんだろう。強い女性なんだな、と思つた。工藤課長と張り合つて仕事をしていただけあるなあ。

最終的に彼女は兄に依頼することを決め、後日のアポイントメントまで取り付けた。

子供の親権を取るのは難しいのだろうか。旦那さんにももちろん言い分はあるうが、母子で暮らせるようになつてほしいと心の底から願う。

奈緒子さんと私は個人的にまた会う約束をした。十歳も年下の私が手助けできることは何もないけれど、私と話していると元気が出ると言つてくれた言葉は素直に受け入れられた。

ベッドの中で体を反転させ、目をつぶつた。今夜はぐっすりと眠れる気がする。課長の不倫の件が片付いて、肩の荷が一つ降りたのだ。不倫は結局濡れ衣だったわけだが。

次は係長の番だ。明日になつたら作戦をじっくりと練ることにしよう。

しかしそこで、影のある暗い表情が瞼^{まぶた}の裏にチラついた。昨日、一人壁に寄り掛かって物思いに耽っていた彼。今日になつてもあの影は取り扱われることなく、むしろ濃さを増してあの美しい顔から光彩を奪っていた。

私の危惧は当たつているのかもしれない。つまり、あの女とうまくいっていない。

そうだ。いつそのことこのまま別れちゃえればいいんじゃない?と、私はひどいことを考えた。

きつともう潮時なのだ。不倫は所詮不倫だ。長く続けることなんてできやしない。いい加減に目を覚まして、ちゃんと真っ当な恋愛をすればいいのだ。

そうなれば係長だつて私を手懐ける必要はなくなつて、放つておいてくれるだろうし、私だつて面倒なことをせずに済む。手を汚さずにおいとこだけいたければいいのだ。ラクチンラクチン。

そうだよ、係長。別離だ。破局だ。それでいこう。

実際に建設的な方策を見つけて、私は眠りについた。

これが浅はかな考え方であつたと、思い知らされることになるとも知らずに

「この企画書、結局趣旨が何だかよく分からぬ。書き直して、地を這つような低くて暗い声が、今日何人目の犠牲者なのか分か

らない西嶋さんに飛んだ。同僚たちが田と田を合わせ、声にならない声を互いに聞き取る。

(怖えええ)

瀬尾係長が異動してきて以来初めて見せる、イライラして不機嫌な顔。

昨日まで色濃い影を落としていた顔に氷点下の冷たさが加わって、彼を見る者的心に一陣の寒風が吹きつける。

遠巻きに見ているだけならまだ良い。その冷氣に直接当たられた者は背筋に悪寒を感じ、運が悪ければ氷の矢の視線と舌鋒をまともに受けて凍りつく。

一体彼に何が起きたのだ。やはりあの女か。五階の受付嬢か。昨日彼女と束の間の逢瀬を楽しむはずがドタキヤンでもされたか。はたまた離婚話をのらりくらりとかわされたのか。

どちらにしても彼の恋が危機的状況にあるのは明らかだ。この先どういう結末が待っているのやら。

ただ一つ分かることは、係長は果報を寝て待つタイプの人間ではない、ということだ。可及的速やかにこの事態を開拓しようと動くだろう。

折しも今日は金曜日。この週末が彼にとつては勝負ビーム……いや、違う。

不倫カップルにとつて「休日」はタブーだ。家族と共にいる相手を想つて一人寂しく過ごす休日つてのが不倫のセオリーデはないか。そんな歌詞を乗せたメロディを私はいくつも聴いている。ということは、係長は彼女にも会えず不安な気持ちを抱えたまま、週末を悶々と過ごすのか。……痛ましい。

週明けの月曜日。

案に違わず係長は不機嫌を持ち越していた。やはりあの女とは会

えなかつたのだろう。

「誤字脱字だらけだぞ。パソコンの漢字変換に頼りすぎなんだよ。相手に読んでもらおうって気があるのか？企画以前の問題だろ、これじや

氷の礫が石津さんに襲いかかつた。首をすくめて冷氣をやり過ごす彼に皆が同情の眼差しを送る。他人事ではないからだ。自分がWebデザイナーで良かった。係長とは業務で関わることはありませんから。とりあえず安全は確保できたと胸をなでおろす。しかし、私語を交わしていた女性社員一人がギロツとにらまれたので、考えが甘かつたと悟つた。WEB事業部員はもれなくハツ当たり攻撃の対象となるらしい。

そこへ工藤課長がちよづど部長のところから戻ってきたのを認めて、総務へ提出する備品申請の承認をもらひに近寄つた。こんな仕事を部署で一番下つ端である私の役目だ。

課長、と呼びかけようとしたら強い視線を感じる。そちらに首を動かすと、まるで非難するかのようにじっと私を見つめる係長と真っ向から目が合つた。

サボつてませんよ？ これも仕事ですよ？ お喋りもしてませんよ？

心の中で必死に釈明を試みたが、怖かつたのでつい課長の陰に隠れたら、今度はにらみつけられた。

私が何をしたというの！

そうだ。PR事業部の片岡さんは瀬尾係長のことと何と言つていた？

『瀬尾さんがイライラして周りにあたるとこなんて、見たことも聞いたこともない』

同姓同名の別人の話か？ そんな訳ないだろ！

つまり滅多にお目にかかることのない、瀬尾係長のハツ当たり攻撃。超レアモノだからと言つて嬉しくも何ともない。

しかしこんなものは嵐の前兆に過ぎなかつた。この日の午後、と

ある出来事がWEB事業部を震撼させることになる。

現在抱えているM社案件はサイトの全面リニューアルで、トップページを三通り作つて提出することになつてゐる。一日後にはクリエイントとの打ち合わせがあるため、できれば今日中に全て終わらせたい。すでにプランAとBは出来上がつていたが、プランCの作成に産みの苦しみを味わつていた。それでも何とか形が整い、パソコンに打ち込みを始めたその矢先、緊張感を一気に失わせる声が聞こえた。

「美春ちゃん、いるかい」

先週まさかの「見合いしたのかい」発言をしやがつて以来姿を現さなかつた　きっと本業が忙しかつたのだろう　社長が、愛用のノートパソコンを持つていそいそとやつてきた。これは一番嫌なパターンかも知れない。

ちょっとお喋りをするとかお茶をする程度ならば適当に話を切り上げさせることもできようが、パソコンの使い方を教えてくれなどと言わた日には私の貴重な時間が奪われることは必至だ。

「何かさー、動作が重くて遅いんだよー。ちょっと見てくれないかなー」

いい年こいたオッサンが語尾を伸ばして喋るな。

「あの、三沢課長は？」

三沢課長とは社長専任秘書である三十代後半の男性だ。我が社の重役には専任秘書はつかない。「自分のことは自分でしよう」と社長が掲げた方針によつて、高給を取つている分働かされている感がある中、唯一社長だけは秘書がついている。

三沢さんは総務部秘書課の課長なのだが、重役会議で社長以外の全員一致でつけられた秘書というよりお目付け役だ。この人がいないと社長がフラフラとどこかに行つてしまふからって……徘徊するのか、このオッサン。

社長は空いていた椅子を引つ張つてくると、私の横に屈座る態勢を整えた。

「三沢くんは今書類作成に忙しくてそればいじゅないって言われちゃつてさ。僕のことなんか後回しでいいと思つてるんだよね、ヒドイでしょ」

それどじり？ 秘書がそんなことを言つていいんだらうか。

「社長はそのノートブックで何をなさいたいんですか？」

「ほら、視察旅行で撮つた記念写真を見ようと思つてー」

そら、後回しにするだろ。

「えつと、最近新しいソフトを入れましたか？」

「うん、入れたねー」

「そのソフトがパソコンのスペックに比べて重いとか、相性が悪いのかかもしれませんよ。一旦アンインストールして……」

「三つも入れちゃつたんだよー。全部しなくちゃ駄目なの？」

「三つも？ おこおい、こんなことに付き合つてたら、仕事終わんなこよ。

こいつ時に社長を追つ払つ役の杉本前係長はもついない。が、すぐに天啓がひらめいた。

「藤課長だ！ 私に一生恩に着ると言つた言葉、証明してみせて！」

課長。課長はあ？ 課長どこよ！

隣の藤田さんに口の動きで所在を訊く。

（か・ちよう・は？）

（しょう・だ・ん）

うぬぬぬぬ。こんな時に。

そこにヒンヤリとした声が響いた。

「社長」

いつの間にか私の背後に立つた係長が、頭上から声を落とす。

「私が社長のお手伝いをしますよ」

もしかして杉本前係長から、オッサンを追つ払う役田まで引き継いだいのだろうか。しかし社長を適当にあしらうことなど、若い瀬尾係長には荷が重いと見た。オッサンも取るに足らないことのように、あつたりといなす。

「あれ、瀬尾主任、じゃなかつた係長だつたつけ？ 悪いけど僕、美春ちゃんにお願いしたいんだ」

「越智は業務中です。ご遠慮下さい」

空氣を切り裂くかのような鋭い声に憚いた私は、振り返つて係長を見上げた。

私だけではない。藤田さんも、隣りのシマにいる杏子さんも、その他の同僚たちも、まるで競技場のウーハーのようにならぶと係長に視線を集中させていく。

「そもそも社長が個人でお楽しみになられるものにWEBの人間が係わるいわれはありません。三沢課長の業務が終わるのを待たれるべきでしょう」

今やWEB事業部全体が彼の一拳手一投足を息を潜めて見つめている。この若き係長が我が社のトップにいる人に向かつて、正論ではあるが歯に衣着せぬ物言いをする姿を。

「僕はWEBの人に頼んでるんじゃないんだよ。美春ちゃんに頼んでるの。僕たち仲良しだからね」

仲良じじゃない！ しかもそんな屁理屈……子供か！

「彼女はWEBの人間であり、WEBの業務が滞ることを見過しますことはできません。勤務時間中は業務を優先させていただきます」係長はあくまで正論を振りかざし一步も退こうとしない。しかも声音がますます冷たくなつていく。が、社長も子供のようだ我を張る。

「僕は今すぐ写真を見たいんだ」

「そんなことは私の知ったことではありません」

冬の落雷の音を聞いたような気がした。背中がゾクリとし、総

毛立つた。

さすがの社長も呆気に取られているではないか。マズイ。何とかしないと。

「あ、私、パソコンちょっと見てみますね？」
「越智さんは黙つていなさい」

「越智さんは黙つていなさい」

ひいー。ギロッとしてらみつたかねの顔、超弩級に「ワカナルー！」

「君は僕の部下だ。僕の言うことに従つてもらひ」
そう吐き捨てるとノートブックを取り上げ、社長の腕を取つて強引に連れ去つて行つた。

嵐が過ぎ去った後のWEB事業部は、しばし沈黙が支配していたかと思うと一転、蜂の巣を突付いたような騒ぎになつた。

「係長、どうしてちやつたの？」

「朝から超機嫌が悪かつたけど、やり過ぎじゃねえ?」

「よくあわじまで社長にたてつけるよな」

私は同僚たちの声を聞きながら頭を抱えていた。そもそも私が騒ぎの発端であるだけにやり切れない。だが係長をこんな行動に駆り立てているのは、恐らく暗礁に乗り上げてしまつた彼の不倫なのだ。

苦しい恋が彼を鬼にしている。若手ナンバーワンの出世頭、でき

る男でいい男な彼が、恋に狂っている。

彼をそこまで追い詰めている女。あの女は一体何者だ。ひょこと
してあれが世に言つ。

魔性の女？

ブルツと体が震えて鳥肌が立つた。

.....係長。別れちゃえればいいなんて思つてしまひでごめんなさい。

別れるのナシ！ 別離も破局もナシナシ！ ナシってことだ！

魔性の女と添い遂げる方向で……あれ、添い遂げたら魔性ではな

いのか？

あるむつ、魔性でも口乳でも何でもいい、係長をなことかしてえ
！

第十六話　社長ＶＳ係長（後書き）

美春の妄想が止まりません……作者の手を離れて勝手に動いてます。そのせいか、ずいぶん長くなってしまって。分割しようかとも思いましたが、ちょうど半分くらいで切れるところがなくて一気に載せてしました。

第十七話 決戦は金曜日

「美春ちゃん、仕事はもういいからお茶にじみや。ほり、今日は手焼き煎餅を買つてきたんだ」

「ありがとうございます。でも今、この作業を置いとくわけには……」

「いいからいいから。今日は社長室でゆっくり話がしたいなー。最近いつも邪魔に入るしね」

「邪魔をしているのはあなたの方です、社長」

「おや、瀬尾くん今日もいたのかい。またそんな仏頂面して、それじゃ女子子にモテないぞ」

「社長がお帰りになれば元に戻りますから」「安心を。まあどうぞ」

「じゃあ美春ちゃん、行こうか」

「越智さんはここにいなさい」

「瀬尾くんの言つことなんか聞かなくていいんだよ。社長がおいでと言つてるんだからね」

「直属の上司がここで仕事をしろと言つてるんだ。社長の気まぐれに付き合つ必要はない」

「」の一週間余りというものの係長は不機嫌か良くなじつて無愛想、お陰で職場に暗雲が垂れ込めているのだが、雷を呼ぶのは決まって社長が私に会いにくる時だ。

彼の来訪は係長に負の刺激を与えるらしく、一人のバトルは我々にとってありがたくない恒例行事と化してしまった。こういう時によく使う比喩でハブとマングースの戦いというのがあるが、まさにそれだ。実際に見たことはないんだが。さしづめ係長がハブで、社長がマングースといったところか。

週に一、三回のペースで私の邪魔をしに来る社長を、係長は今

ところ十割の確率で追い払っているが、その際の一人の舌戦は間に挟まれる私にこの上もなく居心地の悪い思いをさせている。せめて係長がもう少し柔らかい言い方をしてくれば心臓にも悪くないと思うのだが、社長に対して全く容赦しないものだから、私だけでなくWEB事業部全体に緊張感が付き纏まつっているのだ。

このまま社長にたてついていたら、近い将来良くて左遷、悪くて解雇が待っているのではないか？

社長が手焼き煎餅を置いていったので、職場の雰囲気を和らげるためにお茶を淹れることにした。WEB事業部ではお茶汲みの仕事はないが、私の立場を少しでも向上させるのに利用させてもらひ。あの一人のバトルの原因は私にあり、同僚に対しても居た堪れない気持ちでいるからなのであつた。

社長を連行していつた係長が戻ってきたので、デスクにお茶を持つていつた。

「どうぞ」

私を一瞥した係長は素つ氣なく礼を言ひ。

「ありがとう」

この場を借りてそれとなく注意を喚起してみよう。

「あの、社長のこといつもありがとうございます。でもあの、大丈夫ですか……？」

そう言つた途端、顔を上げた係長から切れ味鋭い視線が私に向かつて放たれた。

「何が」

「ワソイ！」

「いえ……何でもないです……」

「ならない」

あえなく撃沈した私を藤田さんがよしよしと慰める。

「ポチ、ナイスファイト」

係長の負の波動は、ランチの誘いにやつてくる瀬尾ファンに対しても向けられている。

異動当初のように毎日誰かしらが訪れることはなくなっていたが、彼が全く誘いに応じないにもかかわらず、めげずに足を運ぶ姿はむしろ健気だ。気晴らしに彼女らとランチに行けばいいものを、頑なに毎回断る彼はしかしどこか奇異に見える。

彼女らに對しては精一杯譲歩しても無関心といった態度で、諦めきれずに食い下がろうとする者には冷ややかな言葉でもつて拒絶する。

今日もまた哀れな瀬尾ファン一名が部屋の入り口で断られているのを見ていたら、一人と目が合つてしまい、美しく描かれた眉がピクリと上がるのを認めてすぐさま視線を外した。

断られていい氣味だとは露ほども思っていないが、何がしかの誤解をして不快を感じさせたかもしがれず、係長から誘いを断られ続けている不満も合わせて、その心情を推し量ることは難しくなかつた。私は言わば無責任な傍観者に過ぎないが、彼女らにしてみれば事情は異なるだろ？

瀬尾係長と同じ部署にいる女。近くで彼の声を聞き、彼に話しかけることのできる女。彼女らの知らない彼の姿を日々目にすることのできる女。

これは無論私一人ではなく、WEB事業部の女性社員全員が受ける視線であり、実際に所用で階下に赴いた杏子さんが廊下ですれ違つた瀬尾ファンから睨まれたというエピソードからも、彼女らの不満が危険水位にあると見て間違いはなかつた。

瀬尾係長と仲の良い佐久間主任はこの事態を解決しようと動いた一人であるが、徒労に終わったことをこつそりと私に打ち明けた。
「飲みに行こうって誘つてもあいつ、『そんな気分じゃない』つづ

つて乗つてこねえんだよ。何があつたか知らねえけど、仕事でトラブル抱えてるはずないし、あいつに限つて女絡みつてことも考えにくいんだよな。そもそも一人の女に執着する奴じやねえしな。

まあ、社長との間に挟まれてお前も辛いかもしんないけどぞ、もううちつとガマンしろ。そのうち瀬尾だつて自分で何とかするだろ。

最年少の係長はだてじやねえよ

どんなに仲が良くても、不倫相手に執着してることは秘密にしておきたいらしい。

しかしこれで、係長がどれだけ彼女に本気であるかが分かつた。彼をよく知る主任が「一人の女に執着しない」と評するほど刹那的な恋を重ねてきた彼に、漸く現れた本気の恋の相手が人妻であるとは、なんとも皮肉なことだ。

工藤課長はどう思つているんだろ？

以前PR事業部に所属していた時も一人は上司と部下の間柄だったのだから、気心は知れているはず。苦しい胸の内を課長に明かしているかもしない。仮にそうだとして打ち明けられた内容を課長が私に話すとは思えないけど、社長の出方が気になるのは彼も同じなのではないか。

奈緒子さんと三人で会つ機会があり、待ち合わせ場所へ行く際に訊いてみた。

「あの、係長は大丈夫なんでしょうか？」

「社長絡みで大丈夫かつて意味なら、心配すんな。仕事ができる社員を簡単に辞めさせたりしないよ。社長が一番嫌うことは会社の不利益になることだ」

そう言いつつも眉を顰めて軽く溜息をつく。

「でも瀬尾が今置かれてる状況つてのが、俺にもさっぱり分からないんだよなあ。あんなにイライラしたあいつ見るの、初めてなんだよ。普段はこっちがムカつくほど感情をコントロールできる奴なんだけどな。職場の雰囲気悪くしてるぞって注意したら、『氣をつけ

ます』とは言つたけど、全然俺の方を見ようともしないんだよ」「

課長に対してもそんな態度とは……

その時、一人で全てを抱え込んで出口の見えないトンネルを進んでいる係長の姿が見えたような気がした。

最初に会つた時に思つたとおり、奈緒子さんは強い女性だつた。まずは仕事と寝る所と言つて、就職活動に励んでいる。不況の折厳しい風に晒されているのは間違いないけど、生活の基盤を整えて息子さんを迎えて行ける日が一日でも早く来てほしいと願わずにはいられない。

「私ね、焦つてたんだと思つ。三十歳前になつて仕事ばかりの自分でいいのかなつて。女だもの。結婚もしたいし子供も産みたい。それはわがままなことでも何でもないと思う。そんな時に夫に出会つてこの人しかいないつてカン違いしちやつたのねえ。母親を心から大切に思つているあの人を素敵だなつて思つたのよ。夢と一緒に叶えたいと思つたから資金も出した。

ただ、あの人とは理想とする家族の有り様が違つてたんでしょうね。そんなの結婚する前にもつと良くお互ひを知るべきだつたんでしょうけど、盛り上がつてる時ほど何にも見えないものなのねえ。美春ちゃんも気をつけるのよ。あ、これは大きなお世話があ」

そう言つて笑う奈緒子さんの顔には影は認められなかつたけれど、旦那さんへの想いはきっとそう単純に表現できないものなのではないか、と感じた。

螺旋のようにならぶり合つた想いは、断ち切つたつもりでも断面から溢れ出してくる。次から次へと、一度は止まつても、忘れたと思っても、何度も溢れ出してくる。そんな気がしてならない。

そして私にそう思わせているのは他でもない、瀬尾係長なのだ。もしも二人の恋が破局に向かいつあるのなら、私は何もせずに

いればいい。「不倫をやめさせる作戦」は発動せずに終了。係長ももはや秘密を守るうとして躍起にならずに済むし、私のことだつて放つといってくれるだろう。

でも、それでいいのか自分、という心の声が聞こえていたことも事実だ。あれだけ人望があり感情を制御することに長けていふと言われる人が苦しんでいる姿を見て、私はなぜ平氣でいられるのだろう？

ここ二週間余りの間に彼が笑った顔を見せたのはたつた一度だけ。対メディアマネージメント部の竹内係長が結婚が決まつたと知らせにきた時だけだ。工藤課長、瀬尾係長と共に以前PR事業部で働いていたという彼の慶事に、かつての同僚として、後輩として、不機嫌な顔で応じることはできなかつたのだろう。

あの歓迎会で見せた笑顔。どこまでも柔らかく優しい笑顔を見たいと思つた。彼にもつと笑つてほしいと思つた。

そして彼を笑顔にできるのは、あの女だけなのだ。

どんな人なんだろう。あの係長がそこまで惚れ込む女性。……見たい。知りたい。

好奇心がムクムクともたげてくるのが分かる。いけない。私の悪い癖 思い立つたら即行動 これで何度も失敗したか分からぬのに。

でも知りたい。そして言つてやりたい。「さつさと係長を幸せにしてあげてよ」と。

あのキス現場に居合わせた私に、偶然にも彼の部下になつてしまつた私に、巡ってきた役回り。他の誰でもない、私にだけができるこどだ。

今、ある決意を胸に秘め私は壁に掛かるホワイトボードに手を遣つた。

決行の日は金曜日とした。この日は係長が外回りで帰社は午後三時以降になることが分かつていただからだ。念には念を入れるに限る。段取りはすでに決めてあつた。

まず午後一時まで集中的に仕事を片付ける。昼休みの時間をずらすためだ。お腹が空いて死ぬかと思ったが計画のために必死で耐えた。時刻が一時になり速攻で弁当を平らげ、化粧室に入る。この時点でほとんどの社員は休憩が終わっている。

そして、家から用意してきたダサいサロペットを履いてパークーを羽織り、髪を左右に二つに分け三つ編みにする。長靴でも履いていたらまるで農場の娘だ。更に黒縁眼鏡をかけて顔の印象を変え、化粧室を出た。

すでに午後の業務が始まつたフロアを一人進み、誰にも見られずにエレベーターホールに着くと、脇にある階段 普段私が利用する非常階段とは反対側に位置する を五階まで下りた。

あの女が勤めるオフィス機器リース会社。曇りガラスのドアの前に立つ。いよいよだ。

衝撃のディープキス目撃事件から半年。あの女に再び相まみえることになろうとは予想もしていなかつた。彼女は私を覚えているだろうか？

息を一つ吸つて扉を押した。すぐ左手に受付があり一人の美しい女性が座つている。

「いらっしゃいませ」

にこやかに微笑む受付嬢たち。が、どちらもあの女ではない。ひょつとしてまだ休憩中なのだろうか。それならそれで彼女についての情報収集をするチャンスだ。早くも変装が役に立つとは、自分の良さに背筋がゾクゾクする快感を覚えた。

私がここで演じるのは、人探しをする田舎娘だ。そのために都会

人が抱きがちなイメージのベタな格好をした。

「あんのお、ちょっとお尋ねすいまス」

「こには思い切り訛る。なま」

「受付の方は他にいらっしゃいませんか？」

「はい？」

怪訝そうな面持ちで訊き返す長い巻き髪の受付嬢。

「はい、実は……」

半年ほど前に、このビルを出た所でとある若い女性に大変世話になつた。初めての東京で右も左も分からずしかも財布を紛失した私を、交番まで案内してくれ、あろうことか五千円も貸してくれた。その女性は名前を名乗らなかつたのでその後お礼もお金を返すこともできなかつた。ただこのビルの五階で働いていたと言つていたので、今日、半年ぶりに東京に来ることができ、何が何でもあの時のお礼をしたいのだが

美談に人は弱い。受付嬢たちは田舎娘の力になろうと、人物特定に協力し始めた。

「その人は受付の者に間違いないのですか？」

「はい、お二人とお同じ制服を着てました」

顔を見合わせる二人。

「今受付にいるのは私たち一人だけですけど……」

「でも半年前つていつたら、もしかして本田さんかな……そういうタイプじゃないけど」

「二十歳くらいの若い方で斯た。明るい茶髪の」

そして恐らくは魔性の女であり、かなりの確率の高さで巨乳の持ち主。しかし未確認情報であるため口にすることは避けた。

「じゃあ、本田さんですよ、きっと。彼女なら七月で退職しました

けど

退職？ 不倫相手と同じビルで働く方が会うのに都合がいいだろうに。それとも簡単に会えなくなつたことが二人の関係が悪くなつた原因なのか？

「どこに行つたらお会いできるか、ご存知ありませんか？」

「寿退社だつたんですよ。今は専業主婦してるはずです。私たちプライベートで仲良かつたわけではないので、連絡先まではちょっと……」

寿退社？ 嘘でしょ？

私の驚愕を目当ての女性に会つことが叶わなかつた失望と受け取つたのか、受付嬢たちは申し訳なさそうに言つた。

「すみません、お役に立てなくて」

エレベーターホールでしばし立ち止まつた。考える時間が必要だつたのだ。

やはりあれは不倫だつた。ただ、私が思つていたのと違つ。

係長の恋の相手である受付嬢A子は七月に結婚退職している。といつことは私があのキスを目撃した四月の時点では現在の夫と婚約中だつた可能性が高い。

……ちょっと待つてよ。あの女、婚約者がありながら係長とも付き合つていたつていうの？

思つてもみなかつた状況にすっかり腹を立てた私は、心の中で女を罵倒し始めた。

人妻の身で他の男と付き合う感覚も理解できぬけれど、こつちはもつと理解できない。結婚した後も係長と関係を続けるのなら、最初から結婚なんかしなきやいいじやないよ！

係長も係長だよ。今こんなに苦しむくらいだつたら、何で結婚をやめさせなかつたのよ！ 祭壇の前で新郎と共に立つ彼女を、他の男のためにウエディングドレスを着た彼女を、奪つて逃げるぐら

の「としてみなさいよっ！」

想像の翼を広げて、係長が手に手を取つて女とチャペルから逃げ出すシーンを脳裏に描いた。

係員の制止を振りきつて開かれるドア。参列者が一斉に振り向く、新郎新婦は目を丸くする。ざわめきの中を祭壇に向かい、新婦の前に立つ係長。

おいで。

見つめ合う二人。互いの目の中に搖るぎない愛情を確認し、どちらともなく伸びる手と手。その一つが重なりあつた時、彼らの未来が決まる。その場から駆け出す一人。後に残るのは新郎の叫び声。

そして、チャペルを飛び出した瞬間から一人の前には新しい世界が広がり

……似合つ。似合い過ぎるよ、係長。

妄想にどつぶり浸かりながらエレベーターのボタンを押した。さて、これからどうすればいい？ 女にたどり着く線はもうない。あの会社には連絡先ぐらいは残つているだろうが、個人情報を身元の怪しい女に渡すとは思えない。

あの女 旧姓本田某は今どこにいるのか。

係長の苦しみも知らずに。WEB事業部の緊張感も知らずに。社長と係長の間に挟まれて身の置所のない私の思いも知らずに。

エレベーターの箱が昇つてくる。もう昼休みもお終いだ。変装までして探偵の真似事をした私の努力は実を結ばなかつたのだ。鏡の扉に徒労感を肩に乗せた田舎娘が映つている。存外似合つその姿をしげしげと眺めていると、チンという音と共に扉が開いた。

二十二年の人生でこの時ほど自分の行動を悔いたことはない。

いつも階段を使う私が、どうして、よつによつて、この時使わなかつたのか。

エレベーターの中には、大きく目を見開いた瀬尾係長が立っていた。

第十七話 決戦は金曜日（後書き）

今回のサブタイトルは、作者の遊び心です。でも若い方は「存じないかもしませんね（苦笑）。

第十八話　連行　1（前書き）

長い話なので一つに分割しました。

逃げろー！

頭の中で警報が鳴り響き、本能に従つた私は一八〇度回転して走りだそうとしたところを捕えられた。腕を掴まれエレベーターの中に引き摺り込まれるかと思いきや、瀬尾係長は私を押してホールに出る。

そして一言も発すことなく脇にある階段に向かい、六階との間の踊り場に上がり壁際まで私を引っ張つていつたところで、やっと腕から手を離した。

せんや怒り狂つているだらうといふ予想を裏切り、至近距離で見る彼は口の端に笑みさえ浮かべて、まるでこの状況を楽しんでいるかのようだった。

「五階で何をしていたの？」

「……落し物を届けに」

「その格好は何？」

「……コスプレです」

佐久間主任言うところの「だてじゃない最年少の係長」がこんな言い訳を信じるとも思えないが、嘘がバレなければ良いのだ。それより彼にいろいろと考へる時間を与えないためにも、この場から直ちに脱出しなければ。

「か、係長は随分早いお戻りですねっ」

「商談が思つたより早く終わつた」

「さつすが係長、やっぱりできる男は違つなあ。私も係長を見習つて仕事のスピードアップを図りたいと思います。それでは失礼します！」

「ちょっと待つて」

動こうとした先を長い腕で遮られた。そのまま壁に掌をつけて更

に近づく彼から私は半歩後退する。しかし壁に背中が触れ、逃げ場を失つたことを知つた。

彼は私の心中を探るよつた目で見ていたが、やがてフツと笑みをこぼした。

「携帯」

「はい?」

「ちょっと携帯貸して」

電話をかける用事でもあるのか? なら自分のを使ってよ とは怖くて言えなかつたので、言われるがままに渡した。

「これ預かつておくから

「はあ?」

「返してほしかつたら、今夜仕事の後付き合つて」

彼女と会えないもんだから、代わりに私をいたぶるつもりか! 嫌だ。ハつ当たり攻撃を受けるのはお断りだ。それに五階で何をやつていたのか責め立てられるに決まつてゐる。

「嫌です」

怒りが炸裂するかと身構えたが、彼は悪戯を思つた少年のように「ヤツと笑つた。

「そうか、じゃあ、君は毎休みにコスプレをして楽しむ趣味があると、噂をばらまいてやろう

「ええつ

「君が自分でそう言つたんだから、無責任な噂じゃないよな

「いや、えと、それは」

「それと君の携帯にかけてきた相手に、『彼女なら今シャワーを浴びていれる』と言つてやつてもいいな

「ちゅちゅちゅちゅちゅ

泡を食つ私を係長が見下ろしている。黒い笑みを浮かべたその顔は、勝つたな、と言つてゐるのが明白だ。

なんと不敵な。なんと狡猾な。「だてじやない最年少係長」の本

領発揮か。

「今日は報告書を上げるのに三十分ほど余計に時間がかかるかもしないが、ちゃんと待つていいよ」

完全に上から目線、命令口調で「ざりますよ。そりやまあ上司だけど。

「返事は？」

「……分かりました」

渋々了承すると、彼はフフンと鼻を鳴らした。

「タイムカードは押しておくんだよ。残業はつけないから」

最後に上司として釘を刺しておぐいとも忘れなかつた。

変装を解いて部署に戻ると空氣が変わつていて気がづいた。

杏子さんの後ろを通つた時にそつと訊いてみる。

「何がありました？」

「係長の『機嫌が戻つたみたいよ。よっぽど商談がうまくいったのかしらね』

見ればご本人は佐久間主任と何やら話しているが至つて友好的な雰囲気、それどころか相好を崩してさえいるではないか。

なんというあからさまな男だ。これほどまでに態度がコロッソと変わるのは、そんなに私をいたぶるのが樂しみなのか。嗜虐的性癖の持ち主、早い話がうか。

しかし、周りを見渡すと同僚はすべからくホツとした表情で彼に眼差しを送つてゐる。

違う。違うんだよ、みんな！ 係長はねえ、今夜いたぶる相手ができて喜んでいるだけなんだ。どうせまたすぐ不機嫌に戻るんだよう。私が何をやつていたかを知つたら。

私をビビらせ脅しつけていた係長はもはや王子様でも何でもなかつた。あれが彼本来の姿だとすれば、とんでもないワルだ。不倫の恋が破局に向かいつつある今、私を手懐ける必要もなくなり、王子

様の仮面をかなぐり捨ててもいいと思つてゐるんだろう。

逃げたい。とつとと逃げてしまいたい。できるものなら。

午後六時。昼休憩までに馬車馬のように働いたお陰か、残業もなくタイムカードを押した。このあとのことを考えるとむしろ残業がある方が良かつたぐらいだ。

杏子さんに飲みに誘われたが先約があると断つた。そういえばここでしばらく飲んでいない。係長なんか放つといで飲みに行きたい。手持ち無沙汰なので机の上や引き出しを片付ける。デートだ飲み会だと三々五々散つて行く同僚たちを横目に自分の浅はかな行動を悔いた。五階に行かなかつたら、いや、あの時エレベーターボタンを押さなかつたら、係長と遭遇することはなかつたのに。

ふと顔を上げると彼と目が合つた。顎をしゃくつて、行けと促される。

何様のつもりだ。だてじやない瀬尾様か。

残つていた数名に挨拶し、のろのろと部屋を出た。

エレベーターホールで待つていると軽やかな足音と共にその人はやつてきた。すでに目が笑つている。どうやつて私をいたぶるか、あれこれ思い描いているに違ひない。これから待ち受けの苦難を想像してげんなりした。

「お待たせ。行こうか」

上がつてきたエレベーターに乗り込む。係長が操作盤の前に立つたので、私は奥まで進んで距離を置いた。二人きりでいる箱の中は圧迫感を伴つた空氣に包まれているようで息が詰まる。うつむいて床に視線を落としたら、動き出した箱がすぐに止まり、振動が身体に伝わつた。

扉が開いた途端に耳障りな黄色い声が響く。

「瀬尾さん！ 今帰りなんですかあ？」

そういうえばランチのお誘いに来たことがある女子のようだ。バッチリとメイクを施したその顔は、これから遊びに繰り出すわよと言わんばかりだ。甘ったるい声で話しかける彼女に、係長は適当に相槌を打つた。

再びエレベーターが動き出したがすぐに八階で止まり扉が開く。ガヤガヤと現れたのは若い男女数名からなるグループだった。

「あー、瀬尾さんだ」

「ホントだ、瀬尾さん、お久しぶりです」

PR事業部の社員、しかも瀬尾シンパのようだ。彼らが乗り込んでくるや否や九階の女子は押しやられ文句をブツブツ言っている。係長を中心にして彼らの間で会話に花が咲き始めた。私は箱の角に少しづつ移動して自分の気配を殺す。眼鏡を掛けた魔法使いくん所有の、姿が消えるマントがあつたらどんなにいいことか。

「どうですか。WEBは

「うん、まあ何とか。そっちは？」内海課長は相変わらず？

「はいもづ、全然変わりませんよ、困ったことに。瀬尾さんがいなから上手くあしらう人が誰もいなくって……」

「ははは、そうか」

王子様モード全開の彼はかつての同僚たちと実に楽しそうに会話を続ける。私の存在など忘れてしまったかのようだ。別に構わない、忘れてもらつても。

ビルの外に出ると十一月上旬の風が頬をなぶつた。少し冷たい。駅の方向に向かう、PR事業部瀬尾シンパ及び九階女子一名の集団から少し離れとぼとぼと歩く。

お腹が空いた。この空っぽの胃袋をどうすればいいのだ。私を責めるならとつとと責めて解放してほしい。私は御飯が食べたいんだ。「瀬尾さん、俺たちこれから飲みに行くんですけど、一緒に行きませんか？」

「あ、賛成！ 行きましょうよ、瀬尾さん」

係長は口々に誘う彼らから離れて道に体を乗り出すと、通りかかった空車のタクシーを手を挙げて止めた。その動き一つ一つがいちいちサマになつていて。認めるのは悔しいが。

「悪い。今日は先約があるんだ」

「そつか。金曜日ですもんね。デートですか？」

「まあね。……じゃあ、行こうか」

後半の台詞が一体誰に向かつて言われたのか、分かつた者はいかつた。係長の視線の先が彼らを飛び越えて更に後ろに届いていふと知るまで。

一斉に向けられた集団の視線に串刺しにされ、凍りついて足が動かない。

「ほら、乗つて」

再度促されて、漸く呪縛が解けた体が動き出した。軽く会釈をし、集団の外側を回つてタクシーに歩み寄る。皆の視線が痛い。

(誰？ この子)

(今までいたつけ？)

声に出さずとも聞こえてくる。

係長は私を先に乗せると、「それじゃ」と別れの言葉を残してタクシーに乗り込んだ。

「なんてことしてくれたんですか、係長。誤解しましたよ、あれ、どうするんですか」

タクシーのドアが閉まるや否や私は係長を非難した。心に怒りと不安と怖れの嵐が吹き荒れていたのだ。

「中田黒にお願いします」

「私、殺されますよ、係長のファンに。背中から刺されるかも……どうしてくれるんですか」

車が緩やかに滑り出し道端にいる彼の後輩たちが視界から消えても、心中で荒れ狂う暴風は治まりそうになかった。

数日前に瀬尾ファン女子から投げつけられた鋭い視線を思い出して、身がすくんだ。係長と同じ部署にいるというだけですでに妬まれているのに、彼と「デート」をしたなどと誤解されたらどれほどの悪感情を向けられることか。

私は彼の不用意な行動を心底呪つた。私の心がこんなにも大騒ぎをしているというのに、その原因を作った本人はシートに背中を預けのほんとこちらを見ている。

くつろいでる場合か！

「責任とつてあげてもいいよ」

責任？ どうとつてくれるんだ。私をすんなりと敵認定から外させ、彼女らに不満を抱かせなくする方法なんてあるのか？

私は急ぎ考えを巡らした。あるとすれば一つだけだが、これまでの彼の行動を鑑みて実行に移すとは考えにくい。即ち、これから毎日彼女らとランチに行く。

あれだけ頑なに毎回誘いを断つっていたのだ。理由は分からぬが、断固たる意志でもってそうしていたに違いない。それを今更覆すなどあり得ようか。

「本当にですか。本当に責任とつてくれるんですか？」

「もちろんだよ」

彼は嬉しそうに手を細めた。

なぜだ。ファンとのランチはやはり嬉しいものなのか？　ならばなぜ、毎回断っていたのだ。……怪しい。この表情の裏には何がある。一体何を企んでいるのか、瀬尾係長。

「だてじゃない最年少係長」との頭脳戦。望むところだ。

彼の真意が測りかねるものである以上、ファンについてはやはり自分の身は自分で守るべし、と決意したところでハタと気づいた。そうだ携帯。

「携帯つ。携帯返してください、ホラホラホラ

「ああそうだったね」

上着の内ポケットから取り出されたそれをむしり取った。

「まさか履歴を見るなんてことしてませんよね？」

「僕がまさかそんなことをするわけないじゃないか」わざとらしい笑みに引っかかるものを感じる。

「見なくていいの？」

「何を？……ああ携帯か。もつ兄にはパソコンメールで連絡してあるし……

「……いいです、もう」

何だか疲れた。それよりもお腹が空いた。係長と食事なんて遠慮したいが、空腹を抱えていては頭も回らない。彼の追及をかわし、頭脳戦に勝つためにも、まずは食事だ。

タクシーは何やら見覚えのある場所で止まった。そういうば中田黒って言つてたっけ？

「じつちだよ」

数メートル先のこれまた見覚えのある建物に入る。ちょっと、あの、じつは。

エレベーターで上がった先は三階。冷や汗が出てきた。このまま行くと私が中田黒で唯一知っている店に到着することになるんだけど……

「……」「？」

三週間余り前に工藤課長と来た創作和風ダイニング。何で、ここ

？ 食事をする場所は星の数ほどあるというのに！

「ひょっとして前にも誰かと来たことがあるのかな？」

私の様子を不審に思ったようだ。でもまさか課長と来ましたとは言えない。

「いえ」

「この店、ある人に教えてあげたことがあるんだ、ゆっくり話ができるってね。……まあ、いいや」

何がいいのかよく分からなかつたが、この話題が打ち切られたことに安堵した。

私たちを出迎えたのはまたしてもあのウエイトレスだった。課長の連れとして来た私を值踏みするような目で見た女。彼女は係長の姿を見るなり瞳を輝かせ、後ろに控える私に目を遣ると表情を曇らせた。……気づいたか。

三人の間で視線が交錯し係長が私に向かつてフフンと笑つた。やつぱりね、といった表情で。先程あつさりと引き下がつたのはこういうことだったのか。

彼女が再び值踏みする視線を送つてよこしたので、一体いかほどですかね私は、と嫌味の一つも言つてやりたくなつた。ひと月と間を置かぬうちに全く違つタイプの二人のオトコマエと食事をしにくる女は、彼女にとつても嫌味な客なんだろう。だからどうした。それでも密は密だ。

案内された個室に入ると私は阿呆のように口を開けてポカンとし

た。

何だこの部屋は。

前回課長と食事をした部屋が、自然の素材を生かしたシンプルで明るいこれぞ和テイストな趣だったのに対し、ここは赤と黒を基調に装飾されたモダンで妖しい雰囲気。

黒光りする長方形のテーブルと左手の壁に備え付けられた深紅のソファ。そしてテーブルの上には一人分の箸やらグラスやらがセッティングされていた 隣合わせで。

「な、な、な、な、な……」

口をパクパクしている私をソファに押し込んで座らせると、係長も横にやってきた。

ち、近いっ！ 奥はもう壁、これでは逃げたくても逃げられない。飲み物を注文してウエイトレスが下がったところで、彼はソファに寄りかかって体を半分こちらに向けた。

「ここ、カップル専用個室。こういうのは初めて？」
初めてに決まつてんでしょうが！ 」いつ、分かつて面白がつてる。性格悪いっ！

飲み物と前菜が運ばれてきた。前回とは違つ内容だ。それだけでも良かつた。

「君は飲まないの？」

見れば係長が手にしているグラスにはにじり酒が。う、そそられる。しかし、ここは黙つて烏龍茶を手に取る。

「もしかして警戒してる？」

してゐに決まつてんでしょう！ これから私をいびろうとしている相手と一緒に酒なんか飲めるか！

「はい乾杯」

何に対する乾杯なのかツツコミたかったが、それよりも食べる方が先だ。

「……………いただきます」

あつとう間に前菜を平らげ、ふと横を見ると係長が微笑んでこちらを見ている。

「何ですか」

「いや、美味そうに食べてるなあと」

「美味しいですよ、係長は違うんですか」

なにげなく言つたつもりだったが、彼は戸惑つた様子で曖昧に答えた。

「うん、そうだな。うん……美味しいかもしない」「かもしねい？ どういう意味だ。

次に運ばれてきたお造りをつつきながら、五階でのことをビリ言ひ訳したらしいかと考えた。どう言つたところで嘘にしか聞こえないだろうし、それならばいつそのこと真実を言つてしまおうか。あなたの不倫相手に一言文句を言つてやりたくて探偵の真似事をしていたんです、と。

一旦そう考えると、それが一番良い方法のような気がしてきた。一人で思い悩んでいる係長に発破をかけてやりたくなったのかもしれない。

思い立つたら即行動だ。たとえ何度失敗しようとも。

「あの係長」

今日のことなんですけど。

「インターハイ」

「へ？」

「インターハイで四位に入賞した子が今同じ職場にいるって、自慢したんだ。高校で陸上やつてた友達に」

不意打ちの話題に心を覆っていた殻がポロッと取れた。彼があんまり嬉しそうに話すものだから、不覚にも私まで嬉しくなってしまった。

「そいつも四百メートルやつてたんだ。四百の苦しさは走った奴にしか分からない、が口癖だったな。次上京したら会わせろよって言

われた。そいつ今、神戸にいるんだけどね」

柔らかな声は懐かしさと暖かさで溢れ、友人への、ひいては彼と共に過ごした時代への思いまでが、私自身の思い出への感慨と重なるようにして想像できた。

「陸上部ではどんな練習してたの？」

「何度もビデオに撮つて比較研究しました。脚の上げ方、運び方、腕の振り方、いろいろ試してみて、でも考えながら走ると余計わけ分からなくなっちゃうんですよ。結局私が一番気持ちのいい走り方に落ち着いて」

「越智さんらしいな。でもどうして陸上続けなかつたの？ 大学とか実業団チームとかで」

「陸上部の顧問の先生からは続けた方がいいって言われたんですけど、私は一応の成果が出たことで満足しちゃつたんですね。全く新しいことをやりたくなつたというか」

「どうしてそれがWebデザイナーだったの？」

「顧問の先生が反対しようにもできなかつたんですよ。どんな職業かイメージできなくて」

その瞬間、彼の笑顔が弾けた。

それは、私がずっと見たいと思っていた笑顔だった。

うまくいかない恋が彼の顔を暗くさせていたと思っていたけど。彼を笑わせることができるのはあの女だけだと思っていたけど。

今、彼を笑顔にしているのはこの私。彼が笑顔を向けているのはこの私だ。

この笑顔をもっと見たい。そう思った。

陸上部の話が出尽くしてしまつと、次は私の田舎を話題にして会話が続いた。生活習慣、天候、食べ物、東京で失敗したエピソード。

田舎の話は退屈ではないのかと訊いたら、

「いや、すこしく面白いよ。頭の中に映像が浮かんでくるみたいだ」
その言葉はお世辞ではないようで、時折内容を確認し、茶々を入れ、声を上げて笑った。彼にもうと笑ってほしくて、私も調子に乗つて話し続けた。

そしてデザートが出てくる頃には私の心はすっかり解れて、今なら何のわだかまりもなく穏やかな気持ちで、幸せな恋をしてくださること言えると思った。

「係長にずっと言つたかったことがあるんです」

そう告げると少し戸惑つたようだが、表情から彼の心もまた私と同様凪いでいることが窺えた。イライラして不機嫌な彼はもうどこにもいない。今の彼なら、私の言葉も正面から受け止めてくれるだろう。

彼はこくりと体を向けると和らいだ瞳で私を見た。

「実は僕もなんだ」

恐らく彼女のことを黙つていてほしいと言つのだろ。齧すとか手懐けるとかそんな方法ではなくて、私を信用して自分の恋について語る準備ができたのだ。

私は彼を安心させてやるつもりだ。決して誰にも話しません、とも、どうしてもこれだけは言つておきたい。

係長と私は息を吸い込むと、それぞれが互いに「言つたかったこと」を口にした。

第十九話 対決

「不倫はやめなさい」

「不倫はやめてください」

私の気持ちが彼の心に真っ直ぐ届くことを願つて、一人の間に引かれていた最後のカーテンをさつと開けた時に聞こえてきたのは、自分が音にしたものと語尾は違えど同じ言葉だった。

そして、これに対する一人の反応もまたそつくり同じときていた。その一、目を瞬かせる。

その二、八行の音で不可解さを表す。

「は？」

「へ？」

その三、主語を明確にする。

「誰が？」

「誰がですか？」

カッフル専用個室とかいう不届き千万な部屋で、カッフルでもない瀬尾係長と私が見つめ合つている。

内装ばかりか照明まで妖しい光で演出されたこの部屋は、通常は甘い空気が満ち満ちて数え切れないほどのハートがふわふわと浮かんでいるのだろうが、現在甘味ゼロの空気の中で踊っているのは疑問符のみだ。

「誰が？ 不倫？ 誰と？」

「口火を切つたのは係長だつた。」

「ちょっと待つて。君は僕に向かつて不倫をやめろと言つてているのか？」

「この部屋に他に誰がいる」とジッパリやつになつたが、そんな

場合じゃない」と思い直した。私に不倫をやめろとは何の冗談だ。

「係長じゃ。私が不倫してるって言つんで　あ！」

「何だ」

「そうか、そうだったのか。自分がそこまで見損なわれていたとは。矢も盾もたまらなくなり、私は係長に悔しさをぶつけた。

「ひどいですよ、係長。あんな噂信じてたんですか」

「噂？」

「知ってるんですよ、PR事業部で私が社長の愛人じゃないかつて言われてるの。でも係長は、私が社長のことウザがってるの知って追いかけてくれるんだとばかり……心の底では愛人だつて思つてたんですか！　ひどい！」

あんまりだ。そんな風に思われてたなんて。ショックというより、屈辱だ。

ワナワナと震える私に、しかし係長は冷静に応じた。

「ちょっと落ち着いて。違うよ。確かにPRではそういう噂があるよ。でも異動してきてすぐにそんのはデマだと分かった。WEBではそれが常識になつてたし、第一君を見てればすぐに分かることだ。僕が言つてるのは社長じゃなくて」

彼はそこで一囁言葉を切ると、苦々しげに吐き出した。

「工藤課長だよ」

「……今、何と言いましたか？」

たつぱり五秒間まじまじと係長を見てから、念のために訊き直した。

「工藤課長と聞こましたか？　聞き間違いでなければ

「言つたよ」

どうから出でくるの、課長が。

「あの……何を根拠にそんな」

突拍子もないことを言われて呆然とする私の問いかけに、係長は忌々しそうに答えた。

「僕の歓迎会の日、本当は課長にお持ち帰りされたんだる。金子チヤンは妊娠中だし、彼女に似てる君に課長が手を出してもおかしくない。あとはなし崩しに愛人関係。あの人にかかつたら、ウブな君なんてイチコロだらうしな」

よ……よくもまあ、そんなことをズケズケと……言つて恥ずかしくないのか、この男。

「それは邪推というものです」

「証拠ならある」「証拠ならある

彼はおもむろに携帯を取り出すと、田も眩む速さで操作してとある画像を私に見せた。それは疑いようもなく、課長と私が例の渋谷のメルヘンチックなビジネスホテルに入る瞬間を捉えた写真だった。何だつてこんな写真が。いやまさか。

「あの……まさか……跡をつけたんですか？」

「君たち二人の様子がおかしいことは気づいていたからね。面白いものを見せてもらつたよ。すんでのところで課長が君をナンパから救つたり、スクランブル交差点で腕を組んだりとかね」
寺の鐘がごーんと頭の中で突かれたような気がした。

道徳から外れた行為をしておきながら、自慢げな顔をする係長が苛立たしい。

「何だつてそんなことをしたんですか……ああっ！」

「大きな声を出すなよ」

「分かりましたよ、弱みを握ろうとしたんでしょ。私を手懲けることができないもんだから」

「はあ？」

彼の恋がうまくいくことを心から願つたといつのに、自分がどんなにお人好しであつたかを思い知られ、私の心は悔しさで真っ黒になつた。ずっと飲み込んでいた思いが喉元にせり上がり、気づいたら叫んでいた。

「人の氣も知らないで、よくもそんなこと……もおおおお、すつごくムカつく。そこまでして彼女を守りたいんですか！ どんだけ魔性に魅入られてるんですか！ そんなにいいモノなんですか、巨…」

…

「きょ？」

「いけない。怒りに我を忘れ、あやつへお下品なことを口走るとこりだつた。危ない危ない。

「魔性とか意味がよく分からないんだけど、なんで君を手懐けなきやならないんだ。それに彼女って誰のことだよ」「

この期に及んでしらばつくれようとしてる… もう我慢できない、言つてやる！ 全てはあそこから始まつたんだから。

「だからあの！ 非常階段の！ ディープキスの！ 旧姓本田さん！ ですよ」

「うつ

係長はさつと顔を赤らめ、口を手で押された。ケケケ、ざまあみる。

「どうして君はそんなことまで……今日五階にいたのはそのためか」「名答だ、だてじやない瀬尾くん。

「それにしてもなんで僕と彼女が不倫をしなきやならないんだ。一体どうしたらそんな考えができるのか教えてもらいたいね」

そこで私はことの次第を語り始めた。

係長があのキス現場を目撃した私を是が非でも口止めしようとした企んでいる、それは秘密の恋、つまり不倫であるからに他ならない。その他の女性関係は本物の恋を隠すための隠れ蓑みので、更に私の口封じをしようとした弱みを握るか懐柔するかを考えた

身振り手振りを交えて私が苦労して構築した推理をぶち抜けた。推理小説最大のヤマ場、探偵が犯人を追い詰める場面だ。完璧なままで論理的な思考を見事な滑舌で披露した。

よし。これでいい。これでさつぱりした。

黙つて聞いていた係長は、プッと吹き出したかと思うと肩を震わせ次第にグラグラ笑い始めた。今夜一番の大爆笑だったと言つてもいい。

「こんなに笑つてくれて私も話した甲斐があるわけないだろつ！」「（）……ごめんででも、可笑しくてぶわははは」

謝るなら笑うな。

「よく……そんな……カン違い……ぶぶつ」

いつまで笑うつもりだ。

「それで魔性つて……け、傑作……くくくく」

だから笑うなって！

つい先刻まで彼にもつと笑つてほしいなどと思つていたことも忘れ、私は心中でひたすら「笑うな！」を繰り返した。

目尻の涙を拭つて漸く落ち着いた彼は、私の推理をこき下ろした。「今時そんな設定昼メロにだつてないよ。大体隠れ蓑つてなんだよ。そんなことしてたら体が幾つあつても足りないじゃないか。まあよく考えついたよなあ」

今、私の顔には屈辱の一文字が貼りついている。当然だ。自信満々で述べた推理を全否定されたのだ。大笑いされたのだ。これが屈辱でなくて何だというのだ。

悔しくてふくれつ面をした私を、係長は優しげな笑みを顔に浮かべて眺めていたが、やがて静かに唇を動かした。

「誰にも話さないつて誓える？」

その声にはまるで魔力のように私を引き込む力があつた。

「僕が不倫をしているなんて君に思われたままでいるのは嫌だ。だから本当のことを話す。その代わり誰にも言つくなよ。僕たちだけの秘密だ」

秘密。彼がその言葉を舌に乗せた瞬間、微かな戦慄が体を走った。

最後のカーテンを開けたと思っていたその場所には、彼だけしか存在を知らない箱が置いてあり、私は今、そのふたに手を掛けようとしている。彼の目の前で箱を開けようとしている。その中身が何であれ、私は　全てを受け入れるだろう。

体内でうるめく好奇心を満足させてやることと引き換えに。

喉の渇きを覚え冷水で湿らせると、私は彼に向かいコクリとうなずいた。

* * * * *

あの日彼女に呼び止められたのは、ほんの偶然からだった。

担当するクライアントの製品がテレビ番組で取り上げられることになり、その打ち合わせのためにテレビ局に向かうところだった。下りのエレベーターに乗つてしまつと段取りを頭の中で整理するのに夢中で、五階から乗ってきたやけに目立つ茶髪ののことなど気にもとめようとしなかった。

「あの……」

声をかけられて振り向く。受付嬢らしき制服を着たその女は、年の頃二十歳そこそこでわりと可愛い顔をしていたが、するがしこそうな口元から漏れた言葉は聞き捨てならないものだった。

「前に、一緒にいましたよね、山下新菜と」

山下新菜。人気急上昇中の若手女優。当時僕が担当していたR食品とCM契約を交わしていた人物だ。ちょうどこの頃俳優の水原丈との不倫疑惑が持ち上がり、連日マスコミを賑わせていた。

「今夜、会つてもらえませんか。写真があるんです」

「……いいよ」

山下新菜とは新製品キャンペーンのイベントで出会った。僕に言わせれば顔と体がいいだけの大して演技力もない大根女優だが、これも仕事だ。完璧な営業スマイルでそつなく対応した。おだてもし。その女優のご所望とやらでマネージャー付きの食事にも付き合つた。一人きりで酒も飲んだ。

イベントは何度か行われる予定だったから、ご機嫌を損ねるわけにはいかないだろう？

だから誘われるままにホテルに行つて関係を持つたことも仕事の一環だ。女優とヤツたなんて喜びはこれっぽっちもなかつた。向こううだつて交際中の俳優の気を引きたくて僕をわざと誘つただけなんだから。

五階の受付嬢 本田沙織とはその夜のうちに関係を持った。彼女の目的が金ではなく僕だということが分かつた以上、こんな楽な仕事はない。彼女を手懐けて黙らせておけばいい。ホテルに入るところを撮られた写真を消去させるのも造作ないことだつた。

「実は前にエレベーターで見かけた時からいいなと思つてたんだ。これつて運命かな」

女つて奴は純愛だの運命の恋だのが大好きときてるから、彼女にもそう錯覚させてやつたんだ。

マスコミが僕のことを嗅ぎつけなければそれでいい。PRマンがマスコミの餌食になつたりしたら笑い話にもならない。山下新菜の不倫騒動が一段落するまでは彼女に夢を見ていもらおう。

実際、目を開けて夢を見ているんじゃないかという女だった。

社内恋愛禁止の会社だから、同じビルに恋人がいることも善い顔をされないだろう、だから僕たちのことは絶対秘密だ。よく考えればおかしいと気づくだろう嘘を彼女は頭から信じた。秘密の恋というシチュエーションに酔つた。非常階段での逢引に心ときめかせた。おめでたい女だつたよ。

彼女と会う時は抜かりなく防犯カメラの死角に入り込んだ。社外で付き合つた女とはやたらと尊を立てられる僕だが、あんな馬鹿女と一緒にいるところを見られるのは御免だつたからね。

だから誰も来ないはずの非常階段に突然人が現れたことは誤算だつた。どうやら八階に逃げ込んだらしいと気づいて正直まずいなと思った。ウチの社員だ。逃げ足の早い女で姿は見えなかつたが、八階の社員なら当然僕の顔を知つてゐるだろ。ゴシップのネタを提供してやつたようなものだ。

「ねえ、ゴールデンウイークなんだけど」

こんな時に何を言つてるんだ、この女は。

「うちの両親に会つてくれないかなあ」

何だと？

「一緒に田舎に帰つて会つてほしいの」

こいつはどこまでカン違ひ女なんだ。まあ、カン違ひさせたのは僕だけだ。

「ちゃんと休み取れるかどうか分からぬけど。考えておくよ」早くこの女から解放されたい。すでに策は考へてあるが、早めに動いたほうが良さそうだな

翌週、実に自然な形で彼女をある男に引き合わせた。僕が営業部にいた頃に契約を取つた某ＩＴ企業の若き社長だ。

現在三十四歳の彼の好み　　若くて可愛い女の子。でもそんな女は彼の周りには腐るほどいることは分かつていてから、別の切り口で勝負するしかないだろ？　彼ら一人は出身地が同じ町だったんだ。いわゆる同郷のよしみつてヤツ？

すぐに打ち解けた二人は僕のことなどお構いなしに内輪ネタで盛り上がつた。ほどよく時間が過ぎたところで急用ができたと言つて先に帰る。種は蒔いたから、あとは勝手に育つてくれるだろ。彼が駄目なら別の男を用意すればいい。

彼女が僕に求めていたのは自分を一段高く見せるためのブランド

バッグと同じようなものだつたから、更に高みを求められるよう、豪奢なダイヤのネックレスを紹介してやつたというわけ。何しろ社長だからな。

予想どおり一人は交際を始め、いつの間にか彼女は僕から離れて行つた。作戦終了。

非常階段の噂はさっぱり聞こえてこなかつた。僕だと分からなかつたのか、僕を知らないのか、噂好きの女ではないのか、いずれにせよこちらにとつては好都合だ。

ところが思いもかけない方向から揺さぶりが来た。

IT社長と婚約寸前までいっていた女性がいたことを僕は知らなかつた。それは、一期上の先輩である白川有希さんだつた。

本田沙織とIT社長の突然の婚約に白川さんはひどいショックを受けた。僕はPR事業部一課、彼女は三課の社員で、共に仕事をしたことはなかつたがもちろん顔は見知つていたし、悪い印象を持つたことはなかつた。彼女に対して慚愧さんきの念に堪えなくなつた僕は、少しでも早く失恋の痛手から立ち直つてもらおうと決心した。

そこで白羽の矢を立てたのが、対メディアマネージメント部の竹内係長だ。彼がPR事業部にいた頃から白川さんを好きだつたことを知つていたし、誰の目から見ても真面目で穏やかな性格のこの先輩を僕も尊敬していたからだ。

僕はさりげなく二人を引っ張り出し会う機会を重ねさせ、奥手の係長を叱咤激励して時にはアドバイスを与えた。彼も次第に自信を持つて口説くようになり、彼の誠実さに少しずつ白川さんも惹かれていつた。つい最近係長がプロポーズして彼女が受け入れたことを知つた時は、心から安堵したものだ。

竹内係長は例のIT社長のことをひどく怒つていた。お蔭で昔から好きだつた白川さんが手に入るかもしれないのに、彼女の心を傷つけたのは許せないと言つていた。そういう感情は伝染するのか、

職場全体が彼に対する嫌悪感を持っていた。

そして結婚相手が五階で働いていた受付嬢だと知った時には、全く接点のないように見える二人がどうやって知り合ったのか噂で持ちきりとなつた。まさかこの僕が紹介したなどとは口が裂けても言えない。

IT社長の足がウチの会社から遠のくことは予想できた。白川さんへの気まずさだけでも充分な理由だが、僕に対しても平常心ではいられないだろう。「自分が奪つた女の元恋人」だからな。

だからIT社長の線からバレる心配はない。本田沙織もすでに退職した。

僕と彼女のことを見る人物は誰もいない。
たつた一人を除いては

第十九話 対決（後書き）

非常階段のキスの真相でした。瀬尾ってこんな奴だったんですね、はい。

お気に入り登録500件、一日のユニークアクセスが3,000人を超えました。この場を借りて皆さまにお礼申し上げます。この先もお付き合いいただけると嬉しいです。

第一十話 破局

私は頭を抱えていた。ひどい悪夢を見ているようだった。道ならぬ恋ではあっても、彼女を純粋に愛する係長の姿をまず基本に思い描いていたのに、この告白はショック以外の何ものでもなかつた。

「つまり係長あなたは」

「何かめまいもしてきたぞ。

「やり手ババアよろしく女性に相手を見繕つたと」

汚い手を使って自分に近づいてきた女を遠ざけるために。その結果失恋させてしまった先輩への責任をとるために。

あの竹内係長の婚約には背後で瀬尾係長がうごめいていたなんて……善意からではなく、罪の意識から一人をくつつけようとしただなんて！

私の呆れ顔など頼着もせずに、係長は心外だという顔をした。

「やり手ババア……男女の出会いをプロデュースしたと言つてほしい」

「言い方を変えればいいってもんじゃないでしょー！」

信じられない……私の常識の範疇では収まらない、この男。策士だ。腹黒だ。しかも「同郷のよしみ」を利用するところ、課長といい係長といい、何か間違ってる！

それでもつて山下新菜つて……あの隠れ巨乳……！　あああ、なんてこつた！

「でもどうやって私だつて分かつたんですか？　顔は見なかつたでしょ？」

「ああ、あれね」

と言つたその顔ときたら。……随分楽しそうだな、おい。

「君、七月に階段ダッシュしたでしょ」

すでに忘却を決め込んでいた過去の失敗を目の前に突き出され、

私は瞬時に固まつた。

「社内通達が出たんだよねえ。『非常階段では走らない』ようにしま
しょう』って。小学校かつてツツコミ入れたくなつたけど。なぜそ
んな通達が出ることになったのか、役付きは皆知ってるんだよ、越
智美春さん」

「い、今更ながら、自分がやつたことが悔やまれる。

「それで君が日常的にあの非常階段を使つていることを知つた。君
ならあの逃げ足の速さも納得できる。僕を知らないんだろうから噂
も流れようがない。そういうこと」

まるで出来の悪い生徒に噛んで噛めるかのような言い方が気に障
つたが、係長はつと真面目な顔つきになると、これこそが最も重要
だと言わんばかりに迫つた。

「白川さんと竹内係長は今、すゞくまくいつてる。今更あの話を
蒸し返したくないんだ。分かるよね？」

分かりますよ。分かりますとも。ええ、誰にも言ひませんとも。
係長の思惑どおりに動かされたとはいへ一人が今幸せであるなら
ば、その幸せの根幹を掘り起こすことなどできるわけがない。

「さて、僕の話はこれでお終い。僕が不倫をしていないことはよく
分かつてくれたと思うけど」

「ハイハイハイ、よく分かりましたよ、よ

く

「でも君はそうじやないね？ 僕は、上藤課長とは別れるべきだ」

また、ここに戻るのか……

「だから課長とは付き合つてませんて」

「じゃあ、あの写真はどう説明するの？」

彼にとつては動かぬ証拠といつわけか。……いやでも、ちょっと
待て。

「その前に人の跡をつけて写真を撮つた説明は？」

「僕も同じことをされたからねえ。結構簡単にできるもんなんだな

「そういうことを言ってんじやないんです！」

」の男、自分のやつたことを恥じ入る気持ちはないのか。何の权限があつてそんなことをするのかと言つてゐるんだ。

「じゃあ、変装して五階をコソコソ嗅ぎ回つたことをビリ説明する？ やつてる」とは結局君も同じじやないか

全然違うわ！ 私があんなことしたのは、もとまと言えば係長のためなんだからね！

「同じじやありません！ 私、あの人に言つてやりたかつたんです。さつさと離婚して係長と幸せになりなさいよつて。できないならスッパリ別れろつて。いつまでもダラダラ中途半端な関係続けるなつて。

だつて係長、ずっと機嫌悪いしムツツリしてゐし、WEBの皆だつてすごく気を遣つてゐんですよ？ 社長にもキツイ言い方して、どれだけ私がハラハラしたか分かつてゐるですか？ 分かつてないでしょ！」

私の切々たる訴えを聞くと、彼は田に見えてシュンとなつた。
「自覚はしてたんだけどね……どうにもムシャクシャして。悪かつた。その……君がそんな風に想つてくれていたとは知らなかつた。ありがと」

「あれ、でも不倫で悩んでたんじゃないんなら、どうしてあんなに機嫌悪かつたんですか？」

仕事上のトラブル？ それとも中間管理職ならではの悩みか。ひょつとして課長からひそかにプレッシャーかけられていたとか。：

…あり得る。

じつと窺つと、彼は田を逸らした。心なしか顔が赤い。

「それはまあ……置いといで」

そして咳払いを一つすると再び真面目な表情に戻つた。

「越智さん。君が僕のためにいろいろ考えててくれたよつて、僕も君のことを考えたんだ。僕は君を責めているんじゃない。悪いのは全部課長だよ。君が男慣れしていないことにつけこんだんだ。僕は課

長の昔の行状をよく知ってる。あの人の手練手管にかかるから、オチない女性はいなかつたからね」

係長ここまで言わせる課長って、ある意味スゴいな。さすがエ

口ハリ。

「君だつて若い女の子なんだし、恋愛したい、彼氏が欲しいって気持ちも分かる。でも課長は駄目だ。ただの気まぐれでちょっとつまみ食いしてゐみたいなもんだよ」

私はつまみ食いされてるのか。ひどい言われようだな、それも。「僕は他人の恋愛沙汰には元々興味はない。それが不倫であつても僕が口を出す」とじゃないと思ってる。でも今回のこととは他人事じやないんだ。課長は上司で君は部下で、奥さんは同期だつた金子チヤンだよ? もうすぐ子供も生まれるつていうのに、彼女が悲しい思いをするのを黙つて見過ごすわけにはいかないよ」

それは課長が不倫していると信じていた時に私も思つたことなので、自然と受け入れられた。係長は係長なりに心配していたんだな。「だからね、課長とは別れなさい。君が拒めばそれで済むはずだ。課長だつてもう気が済んだだろ」

係長の言葉は説得力に溢れ、文句のつけようがなかつた。それだけにここまで確信している彼にどうやって潔白を証明すれば良いのか思案に余る。

でも信じてもらうしかない。誠意を込めて話せば、彼だつてきっと分かつてくれる。

「越智さん。僕は

「係長」
「係長」

私は真つ直ぐ彼を見つめた。

「係長が言いたいことはよく分かりました。でも違うんです。私は課長と不倫なんかしていません」

真剣に訴える様をどう捉えたのか、彼は探るような目でこちらを見た。

「課長とホテルに行つたことは本当です。でもそれは大事な話が
つたからで、決して不倫関係だからじゃありません」

「どんな話」

「それは……」

正直なところ、打ち明けてしまったかった。彼がそれで納得して
くれるのなら。でも課長の昔の恋や余所の家庭のこと、課長の奥さ
んでもえ知らないようなことを私が勝手に彼に話すなんてできない。
腐つても弁護士の妹だぞ！」

「課長には話せても僕には話せない？」

口をつぐんでしまった私に、心情を込めた声音で彼は更に迫つた。
「僕は話したよね？ 僕にとつては都合の悪いことも。できれば君
には知つてほしくなかつたようなことも。それで僕に対する君の見
方が変わることになつても、誤解されたままでいるよりはずつとマ
シだ。なのに君は何も話してくれないの？」

そうだ。係長は本来私が知らなくていいことまでさらけ出していく
れた。自分は決して不倫をしていないと私に納得させるために。勝
手に誤解した私に釈明する義理も理由もそもそもないので。私も彼
に誤解されたままでいるのは嫌だ。

でも、それでもやつぱり、私の口から言つべきことじやない。

「あの……課長に訊いてもらえますか？」

それが最も道理に適つてゐると思った。課長は係長のことを信頼
しているし、自分の不倫疑惑を解くためならきっと話してくれるだ
ろう。

しかし彼は諦めてはくれなかつた。

「君の口から聞きたいんだ」

「ごめんなさい。……課長に訊いてください」

うつむいて声を落とした。これ以上はもう堂々巡りだといふこと
が分かつていた。

係長は息を一つ吐くとソファに寄り掛かり、苛立たしげに言った。

「課長に下駄を預けようつてわけ？ 彼ならつまご言い訳を考えてくれるとしても？」

その冷たく意地悪な言い方に耳を疑つた。ついさっき私の田舎の話を声を上げて笑つて聞いてくれた人だとは思えないほど、彼の態度は豹変していた。

「僕が動くことでおおごとなつて、一人が離婚すればいい、なんて思つてる？」「

膝の上でぎゅっと握つた拳が震える。誤解していると分かつてはいても、容赦ない責めは私の胸をえぐつた。

「それとも課長のことは最初から遊び半分か。ちょっと大人の世界を覗いてみたかっただけか。保険も掛けてあることだしな」吐き捨てるように言われて腹が立つたが、最後の言葉に聞き捨てならないものを感じ、怒りを抑えて尋ねた。

「保険つて何ですか？」

「田舎で見合いしたんだろ？」「

見合い？ あの時社長が言つたこと、真に受けてるの？

「してませんよ！」「

「どうかな。向こうでは着々と話が進んでるんじゃないの？ それなら安心して火遊びもできるよな」

「お見合いなんかしてません」

悔しくて声が震える。もつと反論したいのに、叫び出したいのに、言葉が出でこない。

「じゃあどうして田舎に帰つたんだよ。言つてみろよ」

彼の口調が少しずつ乱暴になつていぐ。もつ退けなことこれまで來ているんだろ？。

でも言いたくない。言つたら、彼はきっと私のこと可哀相だつて思つよくなる。先刻みたいにはもう、笑つてくれなくなる。

「言えよ。そんなことも言えないのか。俺には言いたくないのかよ」
彼はなぜ、ここまでするのだろう。思いつめた子供のよつた顔をして。

言つてしまつたら、彼だつてきっと後悔するに決まつてこゐるの。引きついた顔で微笑むようになるのに。

「嘘でもいいから言つてみたらどうなんだよ。俺の不倫話を作り上げたその頭なら、嘘の一つか二つ言えるだらうが！」

「…………両親のお墓参りです」

「これで満足ですか、係長？」

自分でもよつやつと聞き取れるぐらゝのか細い声だつた。こんな情けない声しか出でこないなんて。彼にはちゃんと聞こえたんだろうか。

ああでも、心配する必要はなかつたみたい。目を丸くして青ざめた顔をしている。ちやんと聞こえたんだ。

私は声が震えないように精一杯抑えて、次に続く言葉を搾り出した。

「…………九年前に父が自然災害で、五年前に母が病氣で亡くなりました」

「…………越智さん」

係長、不味いことを言つたつて顔をしている。でももう遅いよ。「一人は同じ命田なんです。係長はそんなのただの偶然だつて思うんでしようけど、私はそれを二人が強い絆で結ばれていたからだつて思つてます。そう思いたいんです」

「越智さん、ごめん」

後悔の念が顔に出来る。でも残念だね。今更謝られても、もう取り消せないよ。

「そういう私の気持ちなんか、係長には分からぬでしょ。人の気持ちを好きなように操るつとする人には分かるわけありませんよ。……まあ、私にはどっちだつていいくことですねけどね」

「越智さん」

声の成分が憐れみに変わっている。やつぱり私のこと可哀相だつて思つてるんだ。

どうしよう。視界がぼやけてきた。係長の姿が涙の膜の向こうで揺れてる。でも涙を零したくない。この人に涙を見せたくない。私はバッグを掴むと、テーブルの下に潜り込んで向かい側に出、部屋を飛び出した。

「越智さん！」

彼がどんな表情でいるのかは分からなかつたが、もうどうでもよかつた。

あのウエイトレスが意地悪な笑みを浮かべてゐるのが目にに入ったが、これまたどうでもよかつた。駅に向かつて走る私を通り過ぎる人が振り返つて見ても、ことりんどうでもよかつた。

ただ早く家に帰つたかった。

二十一玉川駅からとほとほと家へ向かう頃には気持ちは落ち着いていた。夜風が少し冷たかつたが、こんな最悪の気分の時にはむしろちょうどいいのかもしれない。

マナーモードにしていた携帯が着信を知らせてゐる。今は電話に出る気分ではないので放つておく。どうせ兄だらう。もうすぐ家に着くからいいや。

できれば思考停止しておきたかったが、月曜日からのことを考えるとそもそも言つていられない。そうだ、私にはやらなければならぬことがある。

するとまたもや携帯が震える。が、これまた放つておく。考える方が先なのだ。それに今電話に出たら、相手に思い切りハツ当たりしそうだった。

それでもしつこくホールが続く。いい加減止まれ、携帯。一体誰だ、しつこい。

バッグから携帯を出すと発信人は【瀬尾達也】となつてゐる。なんじゃコリヤ！

あああ、あの男、勝手に自分の番号登録しやがつた！ そんなこと（履歴を見ること）はしていないと言つていたが、こんなことはしていたのか。許せん！ どこまで人をバカにすれば気が済むんだ。ふと気づくと【瀬尾達也】からの着信はすでに十一件。ストーカーかお前は。電車の中では興奮しすぎて気づかなかつたのだな。さつさと削除してやろうかと思つたが、向こうは私の番号を把握しているわけだし、こうして電話がかかってくる以上それは意味がない。しかしあの男の名前が私の携帯にあるのは許せない気がした。そうだ、名前を変えてやる。あの男に相応しい黒くて陰湿な名前がいい。

すぐに思いついた。ハブってのはどうだ。社長とのバトルであくまで比喩として彼に使つたハブであつたが、こんなに相応しい呼び名は他にあるまい。

あの男は毒蛇だ。突然襲いかかつて噛みつき、毒を吐くえる。名を体で表す模範例だ。

「は、ぶ」と入力して「波布」と変換する。沖縄のハブは漢字で書くと波布であることを実は最近知つた。最新の知識を活用できて嬉しいぞ。

そういうするうち波布からまたもやメール。当然出てやらない。いつそのこと着信拒否にしてやればすつきりするだろうか。いや、今は波布のことは放つておこう。それより先にやることがある。私はある人に電話をかけた。すでに十時はとつぐに回つていたが鉄は熱いうちに打つ方がいい。

「もしもし、こんな時間にすみません。今大丈夫ですか」

奥さんとイチャイチャしていたとしたら続きは後にしてください、という意味が言外に含まれていたのだが、理解してくれただろうか。「私に一生恩に着るつて言いましたよね？ その言葉を証明してほしいんですが」

家に着くなり風呂に直行し、湯船に浸かって少し泣いた。これぐらいなんてことない。少し泣いて、それでまた顔を上げればいい。でも涙が止まらなかつた。悔しくて堪らなかつた。思い出す度に怒りが蘇つた。

彼に信じてもらえたことが。眞実を言えなかつたことが。ひどい言葉を投げつけられたことが。そして何よりも、彼が私を可哀相だと思つてゐることが。もしもこの先彼が私に笑顔を見せてくれることがあつたとしても、それはあの明るくて優しい笑顔ではなく、憐れみのこもつたそれに違ひないから。

風呂から上がって冷たいお茶を飲んでいたら、キッチンにやつてきた兄に顔を覗き込まれた。

「目が赤い。どうした？」

ギョッとしてコップを落としそうになつた。田代といな、もう。

「なんも。シャンプー入つただげだ」

兄は「ふーん」と言つただけでそれ以上追及しなかつたが、別の問い合わせを投げかけた。

「今夜は誰と一緒につたんだ？」

へ……返答しづらいことを……

「男？」

「性別で言つたら、男だべな」

「会社のヤツか」

もうやめてくれ。思い出したくないんだから。

「そいつのこと好きなのか？」

変態なりに私を心配しているようだ。専門学校時代は「男女交際禁止!」って喚いていたぐらいだからな。

「……そうゆんでねえがら、あんちゃん心配すな」

しかし兄は予想外の言葉を繰り出した。

「好きならその男と付き合つてもいいんだぞ？」

「はあ？」

何なの、いきなり。

「お前だつてもう一十二歳なんだし、好きな男の一人や一人いたつておかしくないよ」

真剣な顔で真つ当なことを述べる兄を見るのはいつたい何年ぶりだ？ おかしい。この兄がこんな理解のある台詞を吐くはずがない。何か企んでるだろ、おい。

そう思つたら案の定。

「一度『妹の恋路を邪魔する兄』つていうの、やつてみたかつたんだよなあ」

心の中で一歩よりめいたが、目の前で妄想に漫る兄に冷たく水を差すことにした。

「最終的には『妹の恋を暖かく見守る兄』となるのがパターンだけどね」

ところが兄は不気味に笑つて、

「『不実な男に騙されて泣く妹をそつと抱きしめる兄』つていうのも王道だぞ」

……再び妄想に突入したようだ。もう変態は放つておこう。
疲れ切つた私は自室へと向かつた。

第一十話 破局（後書き）

忘れておられるかもしれない方のために。美春の階段ダッシュは第四話に出てきます。

第一十一話 女の戦い 1（前書き）

恐らく予想されていたネタかと思つのですが、またまた長くなってしまい、分割します。申し訳ありません。

第一十一話 女の戦い 1

「ポチ、おはよー！」

ＪＲ恵比寿駅の改札口を出ると、鈴の音が鳴つたような軽やかな声が耳に届いた。

「あ、小林さん、おはよー！」
「あります」

「今日ちょっと遅いね、珍しい」

「電車逃がしちゃって」

私の嘘には気づくことなく、小林さんは人懐っこい笑顔を向けた。一期上の先輩である小林亜矢さんは、私の田の高さの身長に少しぽっちゃりした体型のおつとりした女性だ。わずかにウェーブのかかったショートカットがすゞく似合つていて、見る度に可愛いなあと思つ。

おやつ仲間でもある彼女とはじょつちゅうスイーツを分け合つているが、「ダイエットしなきゃー」と言つて甘い物を頬張る仕草が大好きだ。色白の彼女はまた肌がきめ細かくて柔らかく、時々「ほつぺ触らせてください」と言つてはムギュッさせてもりつている。杏子さんの次に仲の良い女性の先輩もある。

「今日のおやつ何にします?」

「生クリーム系」

「私はみたらし団子」

そんな会話を交わしながらビルのエントランスホールに足を踏み入れるや否や、「あ、あれじゃない?」と甲高い声と共にパラパラと三人の女が寄ってきた。

「ＷＥＢの越智つてアンタ?」

「いきなり呼び捨て・アンタ呼ばわりかよ。

「そうんですけど」

「ちょっと来て」

通勤時間真っ最中、ホールにはたくさんの人目があるにもかかわらず、三人の女は私をエレベーターへと引っ張つて行く。小林さんは「先に行ってください」と言つ私の声は聞こえないかのように、腕を絡ませて離れない。心なしか震えているようだ。

いづれは来るかと思つていたが予想外の早さだ。土日を挟んだだけでのこのリアクション。瀬尾ファン、恐るべし。

三人はいづれも目元を強調した濃いメークと艶やかグロスが目を引く、容姿には自信あるわよ系な女たち。係長の周りにいる女性は美人が多いらしいが、彼女らもその範疇に入るだろう。自信があるからこそ彼に近づくのだとも言える。

箱の中で一人が誰かに携帯で連絡をとつた。

「今から行くから」

他にもいるの？……これはいよいよ集団で吊るし上げか。なんというベタな発想なんだ。となると次に来るのは何だ。

『バカ』と書かれた紙を背中に貼る。古典的すぎる。バケツで水を引っかける。この時期には寒そうだ。

弁当を足で踏み潰す。絶対に許さない。

連れて行かれたのは予想どおり女性用化粧室。ベタな展開にワクワクしてきたぞ。これはやはり「バケツに水」の線か？ ただ、PR事業部のある八階ではなく九階なのが意外だった。この女どもはどこ所属なのかな？

内部では更に三人の女たちが待ち構えていた。一人には見覚えがある。あの日、九階からエレベーターに乗ってきた女子だ。

六人の女たちは小林さんと私を半円形に取り囲んだが、集団の力で一人を威圧しようとする心根が透けて見え、恐れを抱くことはなかった。むしろ私にはこの状況を楽しむ余裕さえあつたが、一方で腕に絡む小林さんの体からは緊張感が伝わってきた。

「金曜の晩、瀬尾さんと一緒にいたわよね」

例の女が口火を切ると、猛々しい口撃が次々と襲いかかってきた。

「アンタ、瀬尾さんとデートしたの？」

「してませんけど」

「瀬尾さんはそう言つたんですね」

「聞き間違いじゃないですか」

「私はちゃんと聞いたわよ！」

「記憶にないですね」

「ふざけないでよ！」

「ふざけてませんけど」

実は大いにふざけているのだが、正直に言つ必要もないだろ。それにしてもこの居丈高な態度は何だ。社内の女が係長とデートしたってことがそんなに気に入らないんだろうか。あんたらそれじや係長に嫌われることはあっても、絶対に好かれないと信じるかどうかは別としてとりあえず言つてやるか。

「あれはデートでも何でもないですよ」

「当たり前でしょ！」

へ？

「瀬尾さんがアンタみたいないと好きで、デートするわけないじゃん

「どうせ社長に頼んで瀬尾さん引っ張り出したんですよ」

「向井の時と同じだよ」

「最っ低。社長に気に入られてるからって」

話が思つてもみなかつた方向に進み面食らつた。どうして向井に社長の名前が出てくるのかさっぱり分からぬ。

しかし向井というのが、去年PR事業部において社長のお気に入りとなつたことから少なからぬ騒動を巻き起こした人物の名前であることを思い出した。確か瀬尾係長が指導役になつたが、その後できちゃつた結婚で退職した女性社員だ。

「向井は瀬尾さん狙つて、社長に頼んで連れ回してたんだから。瀬尾さんはすごく嫌がつてたのに社長命令だから仕方なく一緒にいた

んだよ」

「じゃなかつたら瀬尾さんが社内の女と付き合つわけないんだから
「アンタ、瀬尾さんに迷惑かけんのやめなさいよー。」

「……なるほど」

社長のお気に入りである私が係長とデートした。係長は本来社内の女性とは付き合わない。私が社長に頼んでデートを強要した。三段論法だな。

私があの日聞いた話では、社長の方が係長を引っ張り回したってことだつたけど、人によつてはそういう見方もあるのか。

「何がなるほどよー！」

「アンタ、ふざけるのもいい加減にしなさいよー。」

「社長に色目使つてるくせにー！」

「カラダ使つて正社員になつたんじょー！」

「愛人ならおとなしく囮われてなさいよー！」

瀬尾ファンによる罵詈雑言の波状攻撃を浴びて、私の戦闘モードにもスイッチが入つた。これほど無礼千万なことを言われて黙つているつもりはさらさらない。反撃開始のために息を吸い込んだ。が、これは突然横から邪魔が入り不発に終わる。

「失礼なこと言わないでよー！」

私の前に一步進み出た小林さんが　先刻まで震えていたはずなのに　頭から怒氣を発していた。

「ポチはそんな子じやない！　そんなことしてないわよー！」

小林さんは足を踏ん張り両方の拳をぎゅっと握り締め、六人の女から私をかばい、声を限りに叫んだ。私は信じられない思いで彼女を見つめ、感動のあまりぼうつとした。

いつもおやつを二二二二と頬張つている彼女が、おとなしい彼女が。私のために、こんな大声を出してくれている。

ところが女たちは攻撃の矛先を今度は小林さんに向けた。

「デブは引つ込んでよ！」

「あんた関係ないじゃない。瀬尾さんと同じ部署にいるからって、調子に乗ってんじゃないわよ！」

体温が急激に下がるのを感じた。指先が冷たい。体内の血液循环が急に止まつたかのようだ。しかし心には雪嵐が吹き荒れ始めて、それまで辛うじて残つていた自制心を追いやろうとしていた。

「瀬尾さんだつて部下じゃなければ、あんたみたいなのに話しかけることだつてないんだからね！」

「少しさは鏡でも見て、身の程を知りなさいよ…」

次から次へと口汚く罵られ、さすがに小林さんも責やめた。嫉妬に狂つた女が見せる醜さを集約しているかのような発言の連発に、私はどうとうキレた。

お前ら。私を怒らせたな。本気で怒らせたな。

小林さんの肩に手を置いて今度は私が前に出る。腕組みをして仁王立ちになり、この女どもを罵るためにもう一度大きく息を吸い込んだその時。

「一体何をやつてるんだ！」

ガクッ。またしても不発かよ。

飛び込んできたのは騒ぎの原因　瀬尾係長。なんであんたが来んのよ。

彼は私の姿を認めるときを大きく見開いた。私は目を合わせないように視線を逸らす。

週末は波布からひつきりなしに電話がかかってきたが、私は一度も応じることなくついに電源を切つた。今朝遅い電車に乗つたのは、職場に一番乗りで来たところを彼に待ち構えていられては堪つたものではないからだ。彼の話など聞きたくもなかつたし、一人っきりになるのも嫌だつた。

「私たち、先輩としてこの人に注意してたんですね。瀬尾さんに迷惑かけるなつてえ」

「瀬尾さんからもはつきり言つてやつてくださいよ。社長に頼んだつて無駄だつてえ」

甘つたるい口調で語尾を伸ばして話す彼女らは、まるで別人だ。突然の係長の登場にもうろたえることなく、素早く切り替えるその技は一体どこで習得したのだろうか。

係長はと言えばいつもの余裕が失われているのか、困惑を露そうともしない。

「何を言つているのか分からない」

「だつて無理やりデートさせられたんでしょう？ 向井の時みたいに」

「違う、それは僕が「

「相乗り！」

バカ正直に答えようとする係長を大声で遮つた。遅れてやつてきた人物の姿を後方に認めて胸を撫で下ろす。

「タクシーを相乗りしただけです。 ね、課長？」

「おう」

「遅い！ 主役登場とばかりに優雅に現れるな。

「俺が瀬尾に頼んだんだよ。ポチを送つてやつてくれつてな」

課長が昔の仕事仲間に最近偶然会う機会があり、ひょんなことからその人が私の実家の近所に住んでいたことが判明、課長の仲介で何年かぶりに会うことになった。私は東京の地理に疎いので、心配になつた課長が同じ方向に行くという係長に私を送つてもらうよう依頼した

あの夜、私が電話で課長と相談して作った筋書きだ。あの時は万が一誤解された場合にはフォローしてほしいと頼んだのだが、まさか私が社長に頼んでデートを強要したと考える輩がいるとは予

想だにしなかつた。課長を巻き込んで良かつた。でかした、自分。

「というわけで、あの夜ポチが会っていたのは黒田健一さんつて人。瀬尾は送つてやつただけだ。お前ら納得したか？」

黒田健一さんは実在の人物で、兄と同様東京の大学に進学して以来ずっとこちらに住んでいる人だ。兄も世話になつたそうで、今でも時折連絡をとり合う間柄である。もちろん課長とは面識はない。課長が断言したことで、瀬尾ファン女子たちは納得したのか矛を収めた。

「さあ、もうすぐ始業時間だぞ、解散しろ」

この言葉を合図に女たちは引き上げ、馬鹿げた言い争いも終わるはずだった。しかし私は先程ぶちまけようとして叶わなかつた怒りを声に滲ませて、彼女たちの足を止めた。

「ちょっと待つてよ」

このままじや終わらせない。火を点けた責任はとつてもらひ。

「何か言つことあるでしょ」

女たちは互いに目を見合せた。

「謝つてよ、小林さんに」

「君たち小林さんに何をした」

私の一步も譲らない強い態度に感じるものがあつたのか、係長が女たちに詰め寄つた。が、さすがに彼の前で先程の悪態を繰り返すこととは憚られるのだろう、互いに返答を押しつけあう素振りを見せる。

一度にわたつて不発に終わつたが、私はここで暴發することに決めた。

「さつさと謝れ！ この化粧お化け！」

こんな罵声を浴びるのは恐らく初めてなのだろう、女たちは口に見えて色をなした。

「けつ」

「ひど……」

「何ですつてえ」

第一戦の始まりだつた。

「化粧お化けだから化粧お化けって言つたんだよつ。あんたらの場合、恥の上塗りもしてるからすごい厚みになつてんじやないの？一度定規当てて測つてみな！ この塗り壁が！」

「よくも言つたわね！」

ついに本格的な衝突が始まつたここ、九階女子化粧室。本来いてはならない存在であるはずの男性一名は勢いに圧倒され、瀬尾ファン六名対私の睨み合いを前になす術もなく立ちつくしている。

私は腹の底から響いてくるよつた声を出して、更に苛烈な毒舌を浴びせかけた。

「ああ言つたよ。そんだけ塗りたくつてりや、冬が来ても寒くないだろ！ 化粧品の新しい使い方だな。『防寒は顔から』つてPRして売り込め！ あんたらのビフォーアフターの写真があつたら説得力も倍増するだろ！」

女たちは怒りでワナワナと震えていたが、攻撃の糸口を見つけたらしい一人が反撃に出た。

「先輩社員に向かつてその口の利き方は何よー」

「ほおー、言うに事欠いて先輩社員ときたか。

わざとらしくフフンと鼻で笑つてやつた。もちろん、女たちの怒りが増幅されるのを計算してのことである。そして一気に突き落としてやれば彼女らの自尊心にも加速度的にひびが入るというものだ。私も大概悪辣だ。だから何だ。今の私を止められる者は誰もいない。

「先輩つていうのはねえ、自分は全然関係ないのに、怖くて震えながらも傍を離れようとはしないで、いざとなつたら後輩かばつて、大声出して弁護してくれる小林さんみたいな人のことを言つんだよ！ 集団で一人を吊るし上げるような発想しかできない低脳ぞろい

が、先輩ヅラすんな！ 分かつたが、このすつといじりつこー！」

息もつかせぬ糾弾に女どもは責ざめた。

どうだ、反論できるならしてみろってんだ。ナメてかかるからこうことになるのだ。私を誰だと思っている。だてじやない変態弁護士の妹だぞ。

私の勢いに力を得たのか、今度は小林さんが声を上げる。

「ポチ、私のことはいいから。そりゃ他人から言われれば腹立つけど、ある意味本当のことだし。でもポチは違う。あんたたち、ポチに謝つてよ。あんな侮辱許せない」

田頃おとなしい彼女が声を荒げる様子に、課長も尋常でないものを感じたようだ。

「お前ら何を言つたんだ」

口を開こうとしない女たちに代わって小林さんが答える。

「社長に色々使つてるとか、カラダ使つて正社員になつたとか、おとなしく囲われてるとも言つたよね」

「な……」

係長の顔が引きつるのが目に入つたが、私は再び視線を逸らした。

「ほら、早く謝つてよ」

それでも口をつぐむ女どもに、とうとう小林さんがキレた。

「とつとと謝れ！ この厚塗りお化け！」

少し盗用されたようだ。今度著作権を取つておいたら良い小遣い稼ぎになるかもしね。それにしても小林さんのキャラがすっかり変わつてしまつていてるんだが、本人は気づいているのだろうか。

そこに辺りを払う威厳に満ちた声が響いた。

「君たち、謝りなさい」

現れたのは川嶋真一郎常務取締役人事部長。正社員契約の時に挨拶を交わしたので私も知っている。

某国内電機メーカーでずっと人事畑を歩んできたが、半田社長の

社長就任と同時に引き抜かれ、以来人事権を一手に握つて現在我が社では最も影響力のある取締役の一人だ。

また、社長の大学時代の友人であり、彼を操縦できる数少ない人物の一人でもある。工藤課長はこの人に口説かれて転職を決意したとかで、信頼度から言えば社長よりも上なのだそうだ。

そんな川嶋常務の登場はこの場の空気を一変させた。形勢不利となっていた瀬尾ファン六名ばかりか、怒涛の勢いで押しまくつていた小林さんと私、工藤課長や瀬尾係長までもが背筋を伸ばして彼の発言を受け止める。

「根拠のない言いがかりをつけただけでなく、侮辱したとあれば謝罪して当然だ。君たち、この一人に謝りなさい」

やはり常務クラスの人の言葉は重みが違う。年齢を重ねた人だけが持つ重厚さとでも言おうか、他者を静かに圧倒し従わせる強さがそこにはあった。

川嶋常務の介入で事態はやっと收拾に向かつた。私と小林さんに謝罪すると、女たちは逃げるように去つて行った。

気がつけば常務の後ろにも部課長クラスと思われる方々が顔を覗かせている。いつの間にやらえらい騒ぎになつてしまつたようだ。

私はまだ少し興奮しているらしい小林さんに向き直り、声をかけた。

「小林さん、ありがとうございました。あんな風に言ってくれてすごく嬉しかった。それと、どうもすみませんでした。巻き込んでしまつて……」

彼女にとつてはとばつちり以外の何物でもなかつたはずだ。あんな侮蔑を受ける理由などどこを探したつてない。

しかし彼女はいつもの人懐っこい笑顔を見せて言った。

「もう平気。それよりもこんな修羅場に立ち会つたのって生まれて初めてなの。ねえポチ、このことブログネタにしてもいい？ もちろん実名は出さないから」

ブ、ブログネタ…… その場で脱力した。

化粧室を出ると待ち構えていた杏子さんと藤田さんが駆け寄ってきた。二人だけではない。WEB事業部の全員がこの場に勢ぞろいして、私たちを出迎えてくれた。

「お前ら大丈夫か」

「心配したよ、もうー」

「女つておつかねえよなあ」

その傍らにはいつぞや毎休みの定食屋で一緒になったPR事業部の片岡さんが、安堵した表情で立っていた。エントランスホールで連行される私を目撃し、会議中の瀬尾係長と工藤課長のもとに赴き、その足でWEB事業部に知らせてくれたのだそうだ。

「十階の会議室まで行つたはいいものの、さすがに会議に割り込むことはできないし、すごく焦つたの。早めに会議が終わってくれて良かった」

「どうもありがとうございました」

心から礼を言って頭を下げた。

後々聞いた話だが、私を吊るし上げた連中は九階の総務部・経理部を中心とした若手社員だという。

「PRの女子は、もちろん瀬尾さんファンって多いけど、どちらかと言つと先輩とか上司として慕つている面が大きいの。一緒にチムじやなくてもアドバイスくれたり、仕事の面白さを教えてくれたつていうかね。」

同じフロアで接してる時間も長かったから話すチャンスもそれなりにあつたけど、あの子たちは一緒に仕事してるわけじゃないし、フロアも違うじゃない? なかなか会えないぶん変に盛り上がりで、前から鼻につくところであつたのよ」

十階に戻ると同僚たちは部署へと向かつたが、工藤課長は私と瀬尾係長を打ち合わせ用の小部屋へ連れて行つた。奥に課長が、机を挟んで左に私、右に係長が並んで座る。金曜の夜を思い出して心がざわめいたが、係長を視界の中に入れなによつにすることで平静さを保つた。

「しかし大変な目に遭つたなあ、ポチ。お前も負けでなかつたけどな。負けるどころか相当やり返してたつていつか……すつといじりっこいなんて台詞も久々に聞いたぞ」

苦笑いしながら私の戦いぶりを振り返る。が、一転して渋い顔つきになり声のトーンを落とした。

「今日は部長が出張でいないから、代わりに俺が話をするが、本来俺はプライベートに口を出すのは本意ではない。だが社内であんな騒ぎになつたら話は別だ」

課長の表情は、全くこんなくだらないことで説教させやがつて……と言つていいようで、こうして意見すること自体が彼の気質にそぐわないのだろうと推察された。

「瀬尾、お前もつと自分の立場をわきまえろ。皆の見ている前でかつさらうようなマネをしたら、誤解されたつて仕方がないだろ。ポチが機転利かせて俺にフォロー頼んでこなかつたら、どうなつてたと思つ」「ひ」

「……それは確かに軽率だつたかもしだせんが、仰るとおりプライベートなことです。他人からどう見られようと、自分の行動にはきちんと責任をとるつもりでいました。ただ、向井のことを持ち出されると予想していませんでした」

彼の言葉は明瞭でよどみがなかつた。あの日タクシーの中でも「責任をとる」と言つていたのを思い出したが、今となつてはもうどうでもいいことだ。

「向井なー。あれは俺も詳しくは知らんけど、お前は被害者だつたって聞いてる。でも今回の被害者はポチだぞ。吊るし上げた連中はお前のファンだし、もともと、お前がポチに相乗りしてけつて言つ

たんだろ?」

係長がこちらを向く気配がし、右半身に視線を感じた。しかし私は前方を見続ける。この空間には彼など存在しないかのよひ。

あの夜課長には、たまたま帰りが一緒になつて雑談をしていたら、方向が同じだから係長がタクシーの相乗りを勧めた、と嘘をついた。彼と私の間で起きたことなど誰にも話したくはなかつたし、これからも話すことはないだろう。

「お前が原因で誤解されたんじや、ポチだつて…………違うのか?」係長と私の表情に何か気づくところがあつたのか、課長が心持ち眉を上げた。こういう時、勘の良い上司を持つと困る。

あの日のことは言いたくない。もう早くここから脱出したい。

「……だんじやな……すよ」

「え?」

喉がカラカラで干からびた声しか出てこなかつた。睡を飲み込んでもう一度口を開く。

「冗談じゃないって言つたんです。係長との仲を誤解されるぐらいいだつたら、社長の愛人だつて言われる方がずつとマシです!」立ち上がりて課長を凝視した。恐らく私は今、みつともない顔をしているだらう。

「もう行つていいですか、課長?」

「あ……ああ」

呆気にとられる課長を尻目に身を翻し、部屋を出た。

結局最後まで係長と田を合わせるとはなかつた。

第一十一話 千客万来

田の前のテーブルにはお馴染みの玉子スープや海老のチリソース煮、青椒肉絲から名前知らない一品まで、色とりどりの料理が盛られた皿が並べられている。

ここ、恵比寿にある高級中華料理店。私一人では絶対に入ることのない店のランチバイキングに、できれば一緒に来たくはなかつた御方と今、共にいる。

H & amp ; G ミュニケーションズ社長、半田暁氏と。

「さあさあ、美春ちゃん、たんとおあがり」

言わねなくても食べている。バイキングに来たら元を取るのが鉄則だ。……ここは社長の奢りだけぞ。

しかし私は口と手を動かしながら、田の前にいるオッサンに心中で文句を言った。

いつもして一緒に昼食を摂っているのも元をたどれば女子化粧室での騒動が原因で、あの騒動の一因となつたのは自分のとつた行動であるというのに、全く自覚もなくへラへラしているのは一体どういふ了見なんだ。

九階女子化粧室事件（と勝手に命名）の起きた日の翌日、事の次第を聞いた松永部長から朝イチで呼び出しを受けた。

「お前さんの名前が会議で出る度に恥ずかしい思いをするのは俺なんだ。もうちつとおとなしくしてくれんもんかね」

部長があまりにもウンザリした顔をするものだから、私は自己弁護を試みた。

「今回私は巻き込まれただけですよ……？」

「その割にはタンカを切る声が威勢良かつた、あれはケンカ慣れしている、普通六人の女に取り囮まされた男だつてホールドアップだ、

と今朝の会議で散々当てこすりを言われたんだ。俺も工藤も瀬尾も穴があつたら飛び込んでいたぞ。特に瀬尾なんか頭を抱えてこつちが見ていて氣の毒になるほどだった

…… 知るか、そんなもん。

続けて私を呼び出したのは川嶋常務。騒ぎを起こした瀬尾ファン女子六名から事情を詳しく聞いた上で口頭注意したことだつた。彼らの話では、瀬尾係長はランチだけは月に数回は一緒に行ってくれていたのが、WEB事業部に異動になって以来全く応じてくれなくなつた。自分たちでさえ仕事の後に食事や飲みに行くことなど一度もなかつたのに、私が一人きりでデートしたと聞いてすぐに社長と結びつけて考えたそうだ。

「しかし君は元気だねえ。君の声が廊下まで聞こえてきた時は、どつちがどつちをシメているんだと思ったよ。まあこれに懲りて彼らも一度と君には近づかないだろう。瀬尾くんは瀬尾くんできちんと彼女らの対処をするだろうし、それは期待していくもいいと思うよ」

常務は親しみを込めた口調で更に続けた。

「社長がいつも迷惑をかけていてすまないね」

「それが分かつていてるのなら、常務のお力で何とかしてくださいませんか」

彼はクスクス笑うと長年の友人でもある社長をこう評した。

「社長の愛情表現はちょっと変わってるんだ。でも悪気はないんだ力になるからね」

「悪気があつたらどうしてるわ。

「もし何か困つたことが起きたら僕のところに来なさい。いつでも力になるからね」

「

そしてその日の午後、「悪気はない」社長がお茶を誘いにきたの
だった。

私はあのくだらない騒動を早く忘れるためにも仕事に打ち込みた
かった。実際、その日は残業がすでに確定するほど作業が詰まつて
いて、相手をする時間など一分一秒たりとも惜しかった。社長の能
天気な誘い文句とは裏腹に、私の態度が段々ライラックしてきたとし
ても致し方あるまい。

それと察した係長が助け船を出しにきたが、先週までの勢いはも
はや彼ではない。

「あれあれ、瀬尾くん、追っかけがいるなんて人気者は羨ましい
ねえ」と嫌味を言わると、あっさりと土俵際に追い込まれ寄り切
りでマンガースの勝ちとなつたのであった。

「うるさい」

「え？ 何なにー、美春ちゃん？」

「つるさいって言つたんです！ 人の頭の上でゴチャゴチャと！
仕事中なんだから静かにしてください！」

私はマンガースに怒鳴りつけた。一度キレた人間に怖いものなど
ない。そう、実はマンガースにとつて天敵はハブではなく人間なの
だ。

「社長！」

「は、はい」

「明日のお昼ヒマですかつ」

「はいっ、ヒマですっ」

「じゃあランチに一緒に行きますから、今日はもう帰つてください
つ。私は忙しいんですね！」

「わ、分かつたつ。明日ランチねっ」

私の剣幕に恐れをなしたのかじりじりと後ずさつて行く社長に、
もう一言付け加えるのも忘れなかつた。

「豪華ランチですよ！ もちろん社長の奢りですからね！」

さて、高級中華バイキングを堪能した私はかねてよりの疑問を口に出した。向井里佳子という元社員のことだ。なぜ社長ともあろう人が、一人の新入社員を肩入れするようなマネをしたのか？

社長は初め居心地悪そうに黙っているだけだったが、あの騒動の遠因が彼の向井さんへの偏愛にあつたことを挙げて詰め寄ると、渋々と口を開いた。

「僕にも失敗はあるんだよー、美春ちゃん」

「えこ^{ひいき}贔屓^{ひいき}したことか失敗だつたとは分かっているんですね」

「じゃなくて人選に失敗したの」

人選？ 何の？

社長は悪戯を見つけられた子供のように視線をあちこちに泳がせたが、やがて諦めてボソッとつぶやいた。

「息子のお嫁さんになつてもらいなかつたんだー」

スプーンを口に運びかけていた手が止まり、杏仁豆腐が落っこちた。が、口をあんぐりと開けたまま、私は穴のあくほど社長を見つめた。

「僕の息子つてば、僕に似ないで女の子が苦手なんだよー。ちゃんとまともに恋愛したこともないの。親としてはやつぱり心配でしょ？ だから代わりに僕が相手を見つけてあげようと思つたんだよねー。それで、ゆくゆくは結婚もしてほしいなーって。でね、向井くんならいいんじゃないかなと思つたんだー」

「……いいと思つた決め手は何だつたんですか？」

「ん？ 顔！ 顔が僕の好みだつた！ あと気が強いところ

「アホですかあなたは！ 結婚するのは息子さんでしょっ！」

私からアホ呼ばわりされても気にならないのか、社長は夢見る乙女のような顔をして後を続けた。

「だつてさ、僕、娘いないから憧れだつたんだよねー、一緒に買物

とかデーターとか。どうせなら理想の義理の娘が欲しいと思ったの「私は頭を抱えた。ここにも一人、自分の理想を無理やり現実化しようとする愚か者がいたとは……」

「結局向井くんは人選ミスだつたし、焦つてやり方も失敗したけど、今度こそ間違いなく大本命だからねー、美春ちゃん」

「へ……？」

「だからあ、君だよー。君が息子のお嫁さん候補っ」

「……」

「君は将来の義理の娘つ」

「……」

「なんなら明日からお義父さんつて呼んでくれてもいいよー」「あなたが舅になるという時点ですでに嫌です。

「というわけで、間違つても彼氏なんか作らないでね。まあ『社長の愛人』を彼女にしようつて奴もいないと思つけどねッ。そつだ、今度一緒に歌舞伎でも見に行かない?」

ピキッとこめかみが鳴った気がする。一度殴つておいた方がいいかもしけない、このオッサン。

疲れた。せっかく美味しい料理を頂いたといつのに、くたくたに疲れた。それなのにこのオッサンは、なぜこんなにもツヤツヤとした顔をしているんだ?

「社長つて本当にお若いですねー。女子高生も真っ青になるぐらいピチピチしちゃって、とても結婚適齢期の息子さんがいるように見えませんよ」

「この嫌味、甘んじて受け取ってくれ。

「あ、僕の長男ね、十七歳、高校一年生。陸上部だからきっと話が合つよー。君のことインターハイで四位だつたつて話したら、『マジ、ヤバい、俺、ちょー、リスクトー!』だつてさ~」

「……」

似合わぬ若者言葉を恥ずかしげもなく使うこのオッサン。一度と

は言わず、二度、三度と殴つてやりたい。高校生だと？ 何が嫁候補だつ！ バカにして！

超低気圧を背負つて昼食から戻つた私を恐れて、しばらく近づく者は誰もいなかつた。

しかし冷静さを取り戻すとみずみずしい脳細胞が活発に動き始め、誰も話しかける者がいないのを幸い脳内探偵活動に没頭した。

嫁候補などというヨタ話を私は信じていない。高校生の息子に何が嫁だ。だがさすがにやり手社長と言われるだけあって一筋縄ではいかぬ相手、口を割らせるのは容易ではない。眞実を暴くのは後日に譲るとして、今推理したいのは向井さんが退職することになつたいきさつなのだ。

周囲と摩擦を繰り返すにもかかわらず社長のお氣に入りであるため職場でその扱いに困り果てていたという彼女の、あまりに都合の良いタイミングでの結婚退職。それを歓迎しながらも無責任であると片岡さんは憤慨していたが、その裏に、ある人物の思惑が動いていたとしたら？

ある人物 言わずと知れた瀬尾係長だ。

五階の受付嬢本田さんやPR事業部の先輩である白川さんに結婚相手を見繕つたように、向井さんにも同じことをしたとは考えられないだろうか。この場合順序としては向井さんが先になるわけだが、結婚という、誰に対しても角の立つことのない理由で退職に追い込み丸く収めた。これなら社長だっていくらお氣に入りであろうがどうにもできない。

向井さんの結婚相手は取引先の会社の社員だという。これは彼女の指導役であつた係長が担当していた会社とみて十中八九間違いない。入社半年にも満たない新入社員である彼女が単独で担当を受け持つはずがないからだ。

あの腹黒男ならやる。職場に平和をもたらすために、彼女に気のありそうな男性をうまいことあてがい結婚に持ち込ませる。ただ彼女が妊娠したことも係長の計算どおりだとしたら

それは確かに妊娠したとしたら結婚を決意させる充分な理由になるだろうし、相手の男性が望めば退職の方向に話を持つていくのも難しくはない。入社半年ではまだまだ仕事の面白さもわかつていなかつただろうし、愛着も持ち得なかつたかもしれない。

でも、

普通そこまでやるか？

疑問に答えられる人物はたつた一人。しかし私は彼にそれを確かめることはできない。

あの騒動以来、私は瀬尾係長と必要最小限の会話しか交わさず、しかも決して目を合わせようとはしなかつた。その理由を、係長の軽率な行動が原因で彼のファンによって吊るし上げられ、侮辱までされたことを激怒しているからだと、同僚たちは信じていた。私にとってはその方が都合が良かつた。

一方瀬尾係長は傍目からも分かるほど落ち込んでいた。できる男であるが故に業務には決して支障を来さないが、深海にも匹敵するほどの深い深い溜息を何度もついている。これについては、これまで周囲から絶大な信頼を寄せられ良好な人間関係を築き上げてきた彼が、初めて経験する取りこぼしに精神的再建をなかなか果たすことができないのだと、同僚たちはみなしていた。

課長と係長の前で「社長の愛人の方がマシ」発言をした後も、波布からは毎晩電話がかかってきたが私は無視を決め込んだ。彼が謝罪をしたがっていることは明らかだつたけれど、受け入れることも話を聞くことも御免だつた。メールも読みもせずに削除した。

あんな騒動があつた直後では社内外で一人で会うことなど論外だ

つたから、彼にしてみれば電話しか手段はなかつたのだろうが、それでも私は拒否し続けた。

「何も知らないでごめん」「ひどいことを言ひますまなかつた」「ご両親がいないなんて思つてもみなくて」

そんな言葉を伝えれば、罪悪感が払拭されときつと彼は満足するのだろう。そしてより一層優しく接してあげなくては、と使命感に燃えるのだ。それが私をどんなに惨めにさせるかも知らずに。

どうせあと数日もたてば諦めるだろう。彼は将来を嘱望されたエリートだ。私のようないつでも取り換えるきくWebデザイナー一人に頭を悩ますことなどバカらしいこと、計算して答えを出すに決まつていて。

しかし週末になつても波布は携帯の着信音を鳴らした。放つておくと数時間後に再びかけてくる。その繰り返しにまたもや電源を切つてしまつた。

これでもう彼だつてかけてこなくなるだずだ。そう確信しながらも胸の中にはモヤモヤしたものが居座つているのを認めないわけにはいかなかつた。

そんな気分ではないというのに日曜日には無理やり兄に連れ出され、近隣のショッピングセンターへと出かけた。妄想に片足を突っ込んだ兄がやがて好みのショッピングを見つけ、私の意思などお構いなく何着かの服と共に試着室に押し込む。着替えながら耳を澄ますと、兄と店員とのやり取りが聞こえた。

「こちらのフレアスカートはいかがですか？ 先程のトップスにも合わせやすいですよ」

「うん、それもいいね。妹に似合いそうだ」

この上まだ着せる気が、いい加減にしる。どうせなら私の好みの服を買わせてくれ。タンスには兄の選んだ服が肥やしになつているのだから。

結局兄が選んだコーディネートはベージュのニットワンピース、茶色のロングブーツ、革紐と天然石を施したシルバーのネックレスの組み合わせ。

店員が微笑んで「お優しいお兄様です」と「などと書つたのを片頬に受けてひきつり笑いを返す。店を出る頃には何着にも及ぶ試着でぐつたり疲れていたので甘いモノを所望すると、耳を疑う言葉が兄の口から飛び出した。

「これ、金曜日に着て行けよ」

「金曜日?」

「合コン。お前のところの女性社員と俺の弁護士仲間。やりたいって言つてたろ?」「なにいい?

明けて月曜朝、弁護士軍団との突然の合コン開催のお知らせはEB事業部のお姉サマ方を狂喜乱舞させた。

師走に入ると忙しくなるし、新年まで先送りするのも申し訳ない、今週なら都合がつく者が七名集まつたが、そちらは何人来ていただいても構いません、場所は恵比寿で結構です との兄の言葉を、あの、皆さん、聞いていらっしゃいますか?

「ポチ! 良くやつた」

「祝合コン開催Wheeto弁護士!」

お祭り騒ぎの女性陣に比べて、男性諸氏は一様に面白くなぞうな顔つきだ。

「やだねー、弁護士つていうだけで興奮して」

「ホントホント」

部長や課長、秦野主任は既婚者の余裕からか、「お前らしつかりゲットして、お持ち帰りしろ」などと女性陣に発破をかけている。お願いだから、お下劣な言い方はやめてほしい。お持ち帰りされる兄……いや、それはないだろ。私も付き添いで参加することだし。

そう。この合コンにおける私の役割は幹事で付き添い。合コンメンバーではないのだ。もちろん兄による厳命である。

「妹がいつも世話になつてている先輩方への兄からの感謝の気持ちとして開く合コンだぞ。お前は端っこでチビチビ飲んでなさい」

それはないだろ、と文句を言つたら、「家長の命令だ」と久々に家長風を吹かせ私の抗議を抑えつけた。

ひつして異様にテンションの高い独身女性陣と、彼女らを冷たい目で見る独身男性陣という図式が出来上がつたある日、私は課長に呼ばれた。

打ち合わせ用の小部屋で今回は課長と一入りである。私に椅子を勧めると彼はやけに優しげな目をして深みのある声を出した。

「なあポチ……俺はお前の味方だ。そりや男だからあいつの気持ちも分からなくはない。でもやつぱりお前の気持ちが最優先なんだよ。お前にだつて心の準備つてもんがあるもんなあ

何の話をしてるんだ、一体。

「このことを知つてるのは今は俺一人だけど、こんな状態が続けば他の奴らもいすれは気づくぞ。だからな、そろそろ許してやってくれないか?」

「このこと? こんな状態?

「あいつもすごい反省してるみたいだし……お前だつて分かるだろ? あいつの落ち込みようつときたら……今週に入つてますますひどくなつてる

「あのう、あいつといつのは、係長のことでしょうか?」

「他に誰がいるんだ

俺は何もかも分かつて、だから安心してぶつかつてこい みたいなアニキ的表情で私を見つめる課長。まさか係長はあの時のこと全て話したのだろうか。課長と私との不倫疑惑から、両親のことで。

「か……係長は、何を言つたんですか？」

「じつくん。唾を飲み込む音が妙に大きく聞こえる。

「分かつてゐる。お前は何も悪くない。俺じゃなくたつて誰だつてそう思つだらう。あいつも言つたよ、『悪いのは全部僕なんです。彼女に對してあんなことをしてしまつた自分が恥ずかしい』つて」

やはり彼は課長に全てを話したのだ。私を追い詰め両親の死について無理やり言わせたことを。バカ。係長の大バカ野郎。

「お前が男慣れしていないことにつけこんだんだ。悪いのは全部あいつだよ」

……男慣れ？ ちょっと待て。似たような台詞をどこかで聞かなかつたか？

「あいつも二十代後半になつて今までとは違つタイプに興味を持つたんだろう。真っさらなお前だつたら自分の好みに仕立て上げられるとかな。まあそれも一種男の夢というか……いやだからと言つてあいつのやつたことが正当化されるわけじゃない。大切なのはお前の気持ちだから。でもそろそろ許してやつてくれないか？」

あと一步で怒髪天を衝くところだつたが忍耐を総動員して抑え、敢えて質問を放つた。

「……何を許せと？」

「え？ だから……あいつ、お前を押し倒したんだろ？」

「アホかあああ！」

なんだつてそういう口ひき發想しかできないんだ！

課長を一睨みすると私は何も言わず化粧室へ直行した。鏡の中の自分に目を遣ると、怒つたような泣いたような、いろんな感情がごちゃ混ぜになつた顔をしていた。

私つてこんな顔だつたつけ？ 二十一歳にもなつて情緒不安定か。

……原因是分かつてゐる。波布からのメールが鳴り続けるからだ。

心が、搖らぎ始めていた。

第一十一話 千客万来（後書き）

今回、いろいろと放り込んだためにまた長くなりましたが、最後は課長のカン違いで締めさせていただきました。

さて次回、瀬尾は美春の怒りを解くことができるのでしょうか……

第一二三話 摺れる

「初めまして。越智悠人と申します。いつも妹が大変お世話をなっています。普段なかなか接することのない職種の方とのお話を楽しみにしておりました。どうぞ宜しくお願ひします」

変態王子の如才ない挨拶と共に、WEB事業部女性陣と弁護士軍団との合コンは始まった。

恵比寿にある某ダイニングバー。幹事となつた私は合コンキングの石津さんの知恵を借りてこの店を予約した。が、合コン自体には参加できないので食べるか飲むかしかできない。兄の言つけどおり、おとなしく端っこで梅サワーを飲んでいた。

様子を窺うと、お姉サマ方はすでにうつとりした表情で弁護士軍団とのお喋りに興じている。兄が集めてきた面子はそろいもそろつていい男ばかりだったのだ。こりや、腕によりをかけて選んできたな。

いざ合コンへ出陣、という段になつて私はお姉サマ方に申し入れた。職場での私の言動をチクってくれるな、特に先日の女子トイレでの一件は他言無用です、と。

そんなことを知らうものなら、あの兄はまた余計な妄想を働かせて面倒くさくなるに決まっている。私だって一社会人として立派にやつしていることを、ぐうの音も出ないほど兄にアピールせねば。それでお姉サマ方が沈黙を守つてくれるのなら、喜んで一人酒を楽しむさ。

とはいゝ、実際はちつとも楽しんでいなかつた。考えたくないのに考えてしまうから　瀬尾係長のことを。

波布は諦めることなく毎晩私に電話をかけてきた。その度に電源

を切ったが、どうして彼がここまでするのか理解できない。何度も拒絶しても、拒絶し続けても、『メールをやめない彼に私はそろそろ罪悪感を抱き始めていた。これではまるでこっちが悪者のようではないか。

着信拒否にすれば良かったのかもしれない。そうすれば彼だつてとっくに諦めていただろうし、私もこんな気持ちを抱かずに済んだ。しかし今更それをすることは私が負けを認めるような気がして退くにも退けなかつた。

いつまで彼はドアを叩き続けるつもりなのか。私は開けるつもりなんてないのに。ドアを開けて彼が謝罪して、それで彼の気は済むかもしれないが、もう以前と同じではあり得ない。

彼の網膜に映る私の姿は「両親を亡くした可哀相な女の子」なのだ。気を遣い不自然な優しさで味付けされた笑顔を見せ、薄皮で包んだような言葉を選ぶ。彼との間には再び幾重にもカーテンが引かれてしまった。それらが開けられることはもうない。

ふと目の前の人影に気づいて顔を上げると、兄の大学時代の先輩である溝口弁護士が立っていた。彼は兄より一歳年上だが司法試験突破に五年かかっているので、弁護士としての経験はまだ浅い。

「一人で退屈じゃない？」

そう言って、向かいに腰を掛ける。

「大丈夫です。溝口さんはちょっと休憩？」

「あはは。そうだね、僕、元々合コンって苦手で……」

苦笑いしたその顔に掛けた眼鏡が知的な印象を与えている。これは手塚さん辺りの好みか。

「もしかして兄に無理やり連れて来られました？」

「半強制だつたね」

「すみません、本当に」

「それはもういいんだけどね。『弁護士だつて営業しろ』がお兄さ

んの口癖だから。」ついこの機会に名刺配りまくつて仕事を増やす努力しきつて」

確かにそれは兄の持論だ。いずれは弁護士が淘汰される時代がやつてくるから、生き残るために営業活動が必要だつて。しかし先輩に対してエラソーだな、おい。

「実際、越智くん個人で顧客数相当持つてるって言つからね。それで事務所のボスが独立引き止めてパートナーにしたつて。不思議なんだよなあ、なんでそんなにたくさん顧客持つてんのか」

そんな逸話があったとは知らなんだ。田舎出身の兄には知己も人脈もなかつただろうに、どうやって多くの顧客を獲得したのだろうか？

そういえば、営業に必要なのは粘り強さでも交渉能力でもなくルックスだ、とうそぶいたこともあつたが。

それにしてもなぜ突然の合コン開催となつたのだろう。

先輩方との合コンを持ち掛けたのは係長の歓迎会の翌日、秋田行きの新幹線に乗るために家を出ようとする直前だったのだが、「してもいいけど、美春、制服着て『お兄ちゃんお願い』つて子犬みたいな目で訴えてごらん?」

と言わされて話を速攻で打ち切つた覚えがある。それから今の今まで合コンの「の字も出てこなかつたのに、突然なにゆえ?

溝口弁護士に疑問をぶつけてみた。

「兄は前から私の職場の人との合コンの話をしていましたか? こういう合コンがあつたら来るか、みたいに誘つたり」

「いや全く。突然来週の金曜日空けといつてメールが来てさ。営業活動に協力してやるからって」

急に胸にざわめきを感じた。何がある。

「あの、兄がメールを寄越したのはいつですか?」

「先週の月曜の朝。出勤して一番に来たメールだつたからよく覚えてる」

先週の月曜日。瀬尾ファンとの騒ぎがあった日。 といつよりも。

瀬尾係長と会った日の後、だ。

兄的には妹と会社の「男」が会った日、なんだけど。 そういうえば、風呂上りに泣いて赤くなつた目を見られた。いやまさか。まさかね。考え込む私に溝口さんはクスクス笑つて続けた。

「越智くんつて美春ちゃんのこと可愛くて仕方がないって感じだよね」

答えに詰まつて笑つて誤魔化した。変質的いや偏執的（？）に可愛がられても嬉しくないのだよ。

「だつて今日のメンバー全員、妹には手え出すな、メルアド交換も厳禁だつて釘刺されたんだよ。僕たち苦笑いするしかなかつたよ」「あああ。また恥ずかしいことを……」

「あ、ヤバい、お兄さんこつち睨んでる。僕もう向こうに行くな」私が兄の方を見遣ると、隣りに座る杏子さんと完璧な王子様スマイルで歓談していた。

合コンはつつがなく終わつた。帰宅する者、有志による一二次会に参加する者、それぞれの方向へ別れていく。

兄と私はタクシー乗り場へ向かいながら酔いを覚まし、夜の恵比寿の喧騒をやり過ごしていた。すると前方から酔っ払つたサラリーマンの集団がやつてくるのが見える。兄は私と場所を入れ替わつて、彼らと通り過ぎる際に私を遠ざけた。

考えてみれば兄と出歩くと、私に車道側を歩かせることはないし、上りのエスカレーターに乗る時は私を必ず先に乗せる。それはもはや自然で当たり前の所作だ。

なぜなら、兄にとつて私を守ることは基本中の基本だから。

そんな兄ならば妹の様子を不審に思つて、あの夜一緒にいた男について探り出そうとはしないだろうか？

それが合コン開催の理由かと推理したのだけれど。

そんな心配ご無用だよ。瀬尾係長とはきっともう一度と、一人で話することもなければ、目を合わせる」とすらないんだから。いずれ諦めて電話だってかけてこなくなる。これ以上歩み寄るのはバカらしいと、幕を引く時がきっと来る。

いくら叩いたって開かないドアの前で、いつまでも待つていろのはずはないから

だからね。私は傷つかないから。ドアのこちら側にいれば大丈夫だから。彼がどんな目で私を見るか、知らずに済むから。心配しなくていいんだよ。

自宅へと向かうタクシーの中で、私は兄に寄りかかって眠りに落ちた。兄の隣なら、傷つくことなく安心して眠れることは分かつていた。

「プラコン」

「はい？」

今、耳を疑う単語が杏子さんの口から飛び出したよつな気がする。「プラコンと言ったの。ポチ、あんたが」「なんですか？」

週明けの月曜朝、合コンに参加したお姉サマ方に取り囲まれて、私はあらぬ疑いをかけられることを知った。

「分からぬでもないけどさ。あれだけ完璧なお兄さんと一緒にいたら」

「あんなお兄さんを見た後じゃ、周りにいる男はみんなカスに見えるわ」

彼女たちは喧嘩を売るつもりなのか、しっかりと周りを見渡した。

見渡された男性陣が慄然としてこちらを見る。

しかし彼らは朝から元気がない。妙に陰鬱といふか。売られた喧嘩を買う兆しが一向に見えてこないぞ。

反対に女性陣は熱を帯びた口調で次第にテンションを上げていく。「ショッちゅう食事に連れて行つてくれるつていう」

「雨の日は車で送り迎え」

「休日『ティー』で服とか買つてくれるし」

「それでもつてモデル並みの容姿」

「そんなに甘やかされてたら、普通の恋愛じや絶対満足できない」

「あんたに彼氏ができるない理由つてそれだわ」

彼女らが知るはずもないことをまくし立てるのを聞き、すぐヒビンと来た。あの合コンか。兄よ、一体全體何をやらかしてくれたんだ。

「あの、兄とは一体どういう話をしてたんですか？」

「あんたが職場できちんとやってるかつて訊かれてさ。でもあんたから何もチクるなつて言われてたから、妹さんはとっても眞面目で品行方正、清純かつおとなしいつてヨイショしたのよ」

しきだら、ソリヤー！

「そしたら『何しる田舎者で世間知らずなものですから、兄として心配で。僕の田が届く範囲ではできるだけのことをしてやつてゐつもりなんですが』って言つて、普段あんたに何をしてあげているかとつらつらと並べられて。つまりさつとき詮つたようなこと」

出た！ 十八番『理想の兄』の演技！

「そんなに可愛がられているんじや、妹さんに好きな人ができたら大変ですねつて言つたら、『妹はあれで僕の面倒を見ているつもりのようで、僕が結婚するまでは傍にいるからつて言つんですよ。昔からお兄ちゃん子なんですよね。お恥ずかしい話ですが』って本当に恥ずかしそうに言つのよ」

「大ウソだ！ そんなことを言つた覚えはない！ それは兄の『理

想の妹」像だから！

「それでね、『でも僕にしても、妹がちゃんと好きな人を見つけて幸せになるまでは結婚なんてできませんし。やっぱり妹のことを大切にしてくれて、絶対に泣かせたりしない人がいいんですが』なんて言うのよお。あんた、どれだけお兄さんに愛されてんのよー。羨ましいつたらー！」

よくもそんな歯の浮いた台詞が……弁護士廃業して役者になれ変態の演技は地でいけるぞ。

「なるほど。ポチはブラコンか。そんな立派なお兄さんじゃ、ポチを好きになる男も大変だなあ」

「ふ……部長！」

いつの間にか役付き上司たちが部屋について、話に耳を傾けていたようだ。

「ブラコンじゃありませんからー。ええ全くー。ミリたりともー。しかし私の主張をまともに受け取った人は誰一人としていない。兄よ。よくもやつてくれたな。私を心配するあまり合コンを開いたのかと思いきや、ブラコン疑惑を職場に広めてどうするんだ！」

直ちにパソコンからメールで文句をつけたら、折り返し返信が来た。

『妹の恋路を邪魔したいって言つただろ？』

アホかあ！ そもそも恋路なんかないわ！

ふと視線を感じて顔を上げると、係長がえも言われぬ悲しい目をしてこちらを見ていた。わずか一秒にも満たぬ短い時間に交錯した視線をしかし私はつとはずした。

週末に何度もかかつてきた電話を、やはり私は無視していた。もう一週間にもなるというのに、なぜ彼は諦めないのだろう。

根比べでもしているつもりなのだろうか。いつか私が折れて謝罪

を受け入れることを信じて。

もうやめて。お願ひだから。もう電話をかけてこないで。揺れている自分がいることは分かつていた。ドアのノブに手をかけて、ためらつている自分。

声を聞きたい。でも聞いちやいけない。

声を聞いたら、またあの笑顔を求めたくなってしまうから。もう前と同じ笑顔ではないのに

「ポチ、ちょっとといいか」

その日の業務終了後、珍しく真面目な顔をした佐久間主任に呼び止められた。休憩室で自販機から温かい缶コーヒーを買ってよこした彼は、私の向かいに座ると渋い顔で口を開く。

「金曜の夜な、飲み会やったの。女子は今ロン、男子は慰め会つな。……瀬尾の」

係長の名前に緊張を伴つて反応する私を見て、恐らくわざとなのだろう、場の雰囲気を解そうとせんざいな調子で語りかける。

「んな顔すんな。あいつさあ、すげー落ち込んでんの。あの騒動にお前を巻き込んだこと、すげー反省してんだよ。でもお前ずっと瀬尾のこと無視してつから余計落ち込んでてさあ。そんで俺たち慰め会やつたんだけど、暗えー奴と酒飲むもんじゃねえ。いくら飲んでもあいつ酔わないし、溜息しかつかないし、こつちは全員気分が沈んじまつて悪酔いするし……昨日までずっと氣分悪かったんだぞ」

男性陣が朝から元気がなかつた理由がそれで分かつたが、主任の話がどこに向かおうとしているのかを予想して不穏な影が心をよぎつた。

「あいつ、お前に謝りたいのに謝る機会も」「えてもうえないって言ってんだよ。目も合わせてくれないのは辛いって。なあ、お前が怒る気持ちは分かるけど、もう一週間もたつんだしそろそろ許してや

れよ

やほりそうこ「」とか。私が電話に出ないもんだから第三者を介入させてくれとはね。どうあっても自分は悪者になりたくないというわけか。

「せめてあいつに謝罪させてやつてくれねえか？ きちんと誠心誠意謝るからさ。な、ポチ？」

「係長が頼んだんですか、主任に仲介してくれって」

「いやあいつは何も言つてねえけど」

「でも係長がそんなことを言えば、一人は仲良しなんだし、主任自ら動こうって気になるでしょ？ 結局同じじひとですよ」

「そんな嫌味な言い方すんなよ」

佐久間主任はあくまで穏やかに私をなだめようとしたが、それが分かつっていても、いや分かつているからこそ、反発しようとする気持ちを抑えることはできなかつた。

係長が叩き続けたドアの前で、今やノブから手を離そうとしている自分がいた。

「謝つてどうするんですか？ 謝れば係長の『』が済むから？ 罪悪感から逃れたくて謝るんですか？」

「そうじゃない」

手を離して一步後退する自分が見える。

「私、別に係長のこと怒つてませんから、許すも許さないもないです」

「怒ってるだらうが。田も合わさない、口クに会話もしない」

ドアに背を向ける自分。

「怒ってるんじゃないんです。嫌いなんです」

「は？」

「係長が嫌いなんです」

もうこれで終わりだ。

「嫌いってお前、そんなこと言ひなよ。仲直りしろよ、な？」

「主任が言つてるのは」

ここまで言つたら私つて最低の人間だな。……それでもいいや。最低でも何でも。

「ヘビを嫌いな人間に向かつて好きになれ、と言つてると同じことを」とです」

「ポチ！」

主任の目は私を通り越して後方を見ていた。振り向くと入り口に石津さんに連れられて来たのだろう、瀬尾係長が立っていた。傷ついた少年のような顔をして。

誰もが身じろぎ一つしない僅かな時間を沈黙が支配する。その張りつめた空氣を破つて最初に動いたのは係長だった。彼は踵を返すと大股で私たちの前から去つて行つた。

「言い過ぎだぞ、ポチ」

「分かつてます」

でももつと言つてしまつた。もつ取り戻せない。もつどうしようもない。

彼は私のことを嫌うだろう。彼にとつて私は忌避すべき存在になつたのだ。

これでもう一度ドアは叩かれない。私が揺れることもなくなる。

彼が私を可哀相だと思うことはもう、ない。

その日を境に波布からの「ホールはぴたりとやんだ」。

第一二三話 摺れる（後書き）

更に距離を広げてじりうかねーとの声が聞こえてきました……

でも次回は事態の改善、お約束します！

第一十四話 鍋と一緒に

十一月の第一日曜日。

工藤課長の自宅に招待された私は、田園都市線鷺沼駅に降り立つ。黒いリブ編みのセーターを着た課長が車で迎えにきていた。スレッズ姿よりかなり若く見える。

本日のお招きは課長の奥さんによるものだ。奈緒子さんの件で世話になつたからという理由で、昼食に招待してくれたのだ。まさか課長が全て打ち明けるとは思つていなかつた私は、心底仰天した。

「『何か隠してるでしょ』って詰め寄られてな……洗いざらいぶちまけた。したら今度女と外泊する時は事前に許可を取れって言われた……参つたよもつ」

さすが課長の奥さんだ。しつかりと田那の首根っこを捕まえてるわ。

課長の自宅は元は奥さんの実家だったが、一人の結婚を機に一世帯住宅に建て替えて一階部分に奥さんの「両親が、二階に課長夫妻が住んでいる。

課長が実はマスオさんだったとは。プロプロ。奥さんに頭が上がらないのもうなずける。

玄関口では大きなお腹を抱えた奥さんが出迎えてくれた。

「いらっしゃい、美春ちゃん。あ、美春ちゃんって呼んでいいですか？」

何てことのないやり取りで場が和むのも、小さな命を宿したみどりさんから出る幸せオーラのお陰だらう。聞けば出産予定日は三週間後とのこと。クリスマスに生まれたりしてね、なんて楽しそうに言つている。

「ウチの両親、今インフルエンザに罹つていてね。うつしちゃいけないからつて私に会おうともしないのよ。だから」「挨拶は遠慮しま

すつて

そりや妊婦さんには最大限に気を遣うだらうなあ。『両親にひとつも初孫なのだし、新しい家族の誕生には万難を排したいところだろう。

「食事に呼んどいて何なんだけど、お鍋でごめんね。この体だとおもてなし料理を作るのも大変で」

「私、お鍋大好きです。一番好きな食べ物なんですよ。課長からお鍋だつて聞いてたから、ほら、きりたんぽ持つてきました」

「うわ、嬉しい」

「良かつたな。ポチはよく食うから、材料が足りるかどうか実は心配だつたんだ」

キッチンには材料があらかた切られて大皿に並べられており、その横には手作りのお惣菜　じやがいもの明太子マヨネーズ和えやらかぼちゃの煮つけやらが皿に盛り付けてあり、食欲がそそられた。持参したきりたんぽを適当な大きさに切つていると玄関のチャイムが鳴り、冷蔵庫からビールを出していた課長が応対しに出て行く。

「宅急便かな」

「お歳暮じゃないですか」

時刻は十一時半。すでに空腹を覚え始めてかなりの時間がたつていた。早く食べたいがために率先してキッチンから皿を運ぶ。鍋、鍋、鍋……ムフフ。

思いもかけない声が聞こえたのはその時だった。

「越智さん……」

リビングの入り口で目を丸くして立つ瀬尾係長を、私はポカンと見つめた。なんで係長がここにいるの？

まさかと思いダイニングテーブルを見ると、四人分の食器がセッティングされている。

……そういうことか。謀つたな、工藤夫妻。

「私、帰りま」

「美春ちゃん」

辞去を表明しようとした　早い話が逃げ出そうとした　私を、
いつの間にか横に来ていたみどりさんが遮った。

「大人の対応。できるわよね？　瀬尾くんも」

そう言って入り口で身動きできないままいる係長に微笑む。

「瀬尾くん、お鍋で良かった？　今更嫌だつて言われても困るけど。
あ、美春ちゃんはね、お鍋が一番好きな食べ物なんですって」

私が好きなのは気の置けない人と食べる鍋だ。係長と一緒に、
味が分からぬかもしね。

彼は息を一つ吐くとみどりさんの前にやつてきた。ネルチエック
シャツに細身の黒いデニムと、初めて見るスース以外の服に身を包
んだ彼は、半ばパニックになつてている私とは対照的にリラックスし
て見えた。うつむく私の視界で小型の紙袋が差し出される。

「これ、ロールケーキ。金子ちゃん、好きだつたよね？」

「自由が丘の？　ありがとう。後でみんなで食べようね」

「何だお前。ケーキなんかより酒持つてこいよ。気が利かねえな」

「金子ちゃんに恨まれると、後が怖いですからね」

三人の会話を横で聞きながらどういう態度をとるべきなのか分か
らず、私は運んできた皿を黙つてテーブルに置いた。そんな私を見
て、みどりさんはやけに明るい声で言った。

「じゃあ始めましょうか。みんな座つて」

ここでもわざとなのか私と係長は隣同士だ。彼が右で私が左で。
この近さは気になるが、向かいに座るみどりさんと課長を見ていろ
ば、彼の顔を見なくて済むのはありがたい。だつて本当にどういう
顔をしたらしいのか分からなかつたから。

あの休憩室での一件から一週間がたつていた。

あの時のこととは佐久間主任と石津さんが口をつぐんでしまつたの

で他の同僚たちの知るところとはなつていなかつたが、決して皆無ではない係長と私との業務上の短い会話の中に孕んだ緊張感を皆も感じており、一人が近づく度に交わされる冷ややかなやり取りが注目の的となつてゐることは私にも分かつてゐた。

杏子さんと藤田さんも私の頑なな態度を時にはなだめ時には非難したが、最近ではもはや諦めたのか何も言わなくなつてしまつた。こうして二人の気持ちは決して交差することなく時が流れ行くんだろう、それも私が自分で選んだことなのだから、と心中で言い聞かせていたのだつた。

鍋の具に火が通り、テーブルに大きなお腹がつかえてしまうみどりさんのために、私は小皿に具をよそつた。そうすると流れで係長や課長にも、ということになつてしまつ。

「…………どうぞ」

「ありがとう」「

視線をはずして係長にも具を盛つた皿を渡す。

車で来たという彼は一杯だけと言つてビールのグラスを取つた。こういう場での慣例としてとりあえず乾杯はしたが、ぎこちない雰囲気はさすがに否定できなかつた。

しかしその空氣もみどりさんのまさかの発言で一変する。

「美春ちゃん、女子トイレで大立ち回りしたんですつて？」

……この人は空氣を読めないのであるか？ それともわざとやつているのだろうか？ この面子でそれを話題にするとは。

「あの……大立ち回りはしていませんが。できればその話題はやめていただきたく……」

「えーっ、なんで？ 実はその話を聞くのをとっても楽しみにしていたのよお」

天然な妻を持つた責任を問うべく課長をギロツと睨んだ。よくも余計なことを喋つてくれたな。

しかし彼は慌てて無実を訴える。

「俺じゃないぞ。相沢だ」

「杏ちゃんがねえ、あんなに興奮したのは私の父が乗り込んだ時以来だって、それは楽しそうに言つもんだから」

「杏子さん、実は楽しんでいたのか。今度お皿斬らせてやる。

「金子チヤン、できれば僕もその話題は……あの時のことと思い出す度に胃が痛くなるといつか……」

そのあまりに弱々しい発言につい隣にいる係長をまじまじと見てしまつた。私の視線を感じたのか、彼もこちらを見る。近距離で目が合つて慌てて前を向き、白菜を急いで口に入れだ。熱つ。

係長の様子を見て、みどりさんは弄る相手を変えることにしたようだ。

「情けなーい。あの完璧瀬尾くんのそんな姿を見よつとは思つてもみなかつたわよ。へへへ、ザマア!!ロ」

「嬉しそうだなあ、みどり」

「だつてね美春ちゃん、聞いてよ。私と瀬尾くん、新入社員研修で同じグループだつたんだけど、瀬尾くんは何やらせても完璧にこなすのよ。私は失敗ばかりでね。PR事業部の研修で同じことやっても瀬尾くんにはできるのに私にはできなくて、この人がね」と課長をあざで指し、

「『やつぱりお嬢ちゃんには無理だつたか』って言つたのよお」

「うわ、課長、最低」

「でしよう? 私、悔しくて悔しくて『次は絶対失敗しませんから!』ってこの人に怒鳴つちゃつたの」

おとなしい深窓のお嬢様なのかと思つていた彼女の意外なエピソードに、私は興味をそられた。

「あれには僕もびっくりした。当時のPRのエースに向かつて新入社員が怒鳴りつけたんだからね」

係長は当時を懐かしむような色を声に滲ませる。一方私は違う視

点から食いついた。

「課長つてその頃からみどりさんのこと、囁つけてたんですねか。 イ

ヤラシイ」

「イヤラシイって何だ」

「せっかくWEB事業部で平和に暮らしていたのに、三年後にこの人が課長になつて異動してきて、正直お先真つ暗つて思つたの」

「お前、んな」と思つてたのか

「そりよお」

場の空気が笑いで弾けた。私は順に視線を水平に動かして、またしても係長と目が合つてしまつた。慌てて再び顔を前に向けて豆腐を口に入れる。うつ、熱い。

みどりさんが次に変えた話題はまたもや私絡みだった。

「美春ちゃんは社長のお気に入りなんですか？」

杏子さん、どれだけWEBの内情を喋つてるんだろう。みどりさんの田ときたら好奇心満々じゃないか。

「一緒にお昼ご飯も食べるんでしょ? すじいわねー、あの社長とどんな話するの?」

「あ、それは俺も興味ある」

どんな話つて……思い出した。嫁候補で、島子は高校生で……バカにしやがつて。

「あのオッサン……」

憎々しげなつぶやきにみどりさんが喜色を浮かべて食いついた。

「えつ、何なに?」

期待に満ちた一つの田を前にしては、諦めて全てを語るしかなかつた。

「……ところわけなんですよ。バカにしてるでしょ? 高校生の息子ですよ? よっぽどその場で張り倒そうかと思いましたよ」

課長もみどりさんも呆気にとられている。係長の表情は見えないがきつと同じに違いない。

「それ……本気なのかしらね」

「本気なわけないでしちゃうが！ 絶対他に理由があるんですよ、その向井つて人のこと」

「瀬尾、お前関係者だろ。何も聞いてないのか」

「いや、僕は何も……初耳です、全く」

嫁候補のお供をさせられていたとなれば、いい気分はしないだろう、係長だって。

「ねえ、じゃあ美春ちゃんのこととは？」

「それだつて口から出任せに決まつてます。だいたい何なんですか、『社長の愛人』を彼女にする奴はいないだなんて、全く腹の立つ。社外の人にはそんな噂なんか関係ないってんですよ」

思い出し怒りのためつい興奮してしまつたが、みどりさんは同調することなくサラリと尋ねた。

「美春ちゃん、彼氏いるの？」

「この人はまだどうしてド直球で攻めてくるのだ。

「いなだら、それは」

「なんで課長が断言するんですか！」

「そうよ、あなたは黙つて。……で、彼氏いるの？」

そんなに真剣な表情で訊かなくてもいいのではないかと思つたが、口には出さず、質問に答えるのみにとどめた。

「……いなですよ、残念ながら」

半分ふて腐れて言うと、みどりさんは一ヶ口り笑い、視線を私の隣に移した。

「ですつてよ、瀬尾くん」

「ぐふつ」

いきなり話を振られた係長は喉を詰まらせた。慌ててビールで流し込んでいる。深呼吸をして漸く落ち着いた頃合いを見て、課長が悪戯つ子のような笑みを浮かべた。

「Jの間の合コンはどうだった、弁護士軍団との。お前だけに可愛いい格好して行つたじゃないか。彼氏になりそうな奴はいなかつたのか」

「私は一人で飲んでただけですよ。ウチの兄が『俺がお前の先輩方のために選んだ優良物件だからな』って言つて、メルアドの交換すらさせてもらえなかつたんですから」

私のブラコン疑惑を広めるための合コンの場にいたことすら腹が立つ。

「お兄さん、すごく素敵なお人なんですってね。杏ちゃんが言つてた兄のことまで喋つていたのか。そのうち弁当のおかずの内容まで知られるんじゃないだろつか。タコさんワインナーの足が四本しかないこととか。

戦々恐々としていると、スパイの元締めに向かつて夫が異論を唱えた。

「俺はすぐ一切れ者だつて印象を持つたけどな」

「工藤さんは会つたことがあるんですか」

これまでほとんど口を挟まなかつた係長が徐々に尋ねた。

「ああ、ちょっと知人が世話になつてな」

「知人じやなくて元カノ」

妻の顔に戻つたみどりさんがチクリと訂正した。

「……お前やつぱり怒つてるだろ」

「怒つてないもーん」

「ホ、ホラホラホラ、皆さん手が止まつてますよつ。食べましようねツ、ハイ！」

夫婦喧嘩は未然に防げ。再び具を小皿によそい、ついでに新たに具を鍋に足して蓋をした。

さつきからずつと係長がじちらを見ているような気がする。何か感づいたのかもしない。だからと言つて何が変わるわけでもないのは分かっている。私はもう彼に嫌われているのだから。

それでも見られていると思つと居心地が悪くてたまらなかつた。

「」の状況を変えたくて、みどりちゃんに話題を振ることとした。そ
ういえばずっと私のことばかり訊かれていたのだ。

「お腹の赤ちゃん、性別は分かつてゐるんですか？」

「うん、でも訊いてないの。楽しみにしておこうと思つて」

「女の子だといいな。それで課長が『娘は絶対に嫁にやらん』とか
言つたの。ぎやーっ、可笑しいっ！」

「ちゃんと門限作つて外泊禁止にしてください。それで初めて朝帰

りした時に、僕、工藤さんの顔見にきます」

「てめつ。嫌味かそれは」

ひとしきり笑い声が起こり、それぞれの顔を見合させて 再び
係長と田が合つた。まずい。またもや慌てて視線を逸らして次の話
題を振る。

「名前はもう考えました？」

「候補は幾つかあるんだけど、あとは顔を見て決めようつて言つて
るの。 ねえ、美春ちゃんの名前のいわれは？」

私の名前はどうでもいいんだけどな、今。

「あー……私、三月生まれなんですけど」

「三月何日？」

勢い込んでみどりさんが田にちを確認する。 いきなり話の腰を折
られた私は引き気味に彼女を見た。

「……三月四日なんですけど、私の田舎はその頃つて雪が深くてま
だまだ冬なんですよ。だから春が来るのが待ち遠しいんです。で、
私が生まれたのは春が来たのと同じぐらい待ち遠しくて嬉しいこと
だつたからつて……それで『美春』」

「ふうーん、いい話ねえ。ね、瀬尾くん」

「……そうだね」

「私もそういう物語性のある名前にしようかなあ。女の子だったら、

私、お花が好きだから花に因んだ名前とか。あ、美春ちゃんはどの花が好き?」

「……なんで私に訊くんだろうか。

「……ひまわりです」

「ひまわり! 美春ちゃんらしいなあ。何か、いつもお田様を向いてる感じが。ね、そう思わない、瀬尾くん」

「……そうだね」

みどりさんがさつきからやけに係長に振つていることが私を困惑させている。きっと彼と私を仲直りさせたいと考えて居るのだろう。が、ここではお互い「大人の対応」をしているだけなのだ。彼も困つて「そうだね」としか言えないではないか。彼にとつてもありがた迷惑でしかないのに、天然も度を過ぎると凶器になるぞ。

このままでは凶器一直線な天然妻を何とかしようと夫を見ると、今にも吹き出しそうな顔をしている。

「何が可笑しいんですか、課長?」

「いや……『情報というのは活用して初めて意味がある』と言つたのはどここの誰だつたかなと思つてや」

「それ、何か笑える話なんですか?」

ついにこらえ切れなくなつた課長がぶははは、と笑い始めた。つられてみどりさんもお腹を抱えてケタケタ笑い出す。なんなの? 隣を見ると係長は口を左手の甲で押させて右側を向いている。少し顔が赤いようだがその表情は私には見えない。

きつと三人にしか分からない昔の話なのだろう。む。私だけ除外された気分だ。

その後、食事は進み話は盛り上がり、しかし私と係長は何度か目を合わせるも直接会話することなく時間は過ぎていった。

隣同士にいながらとてつもなく遠い一人の距離は縮まることに

なかつたが、間にびつしりと生えていた茨が刈り払われたよつな、でこぼこだつた道が平らになつたような、そんな錯覚を覚えたことを私は驚きと共に受け止めた。

そしてそれは、同じテーブルに集う人々を自然と仲良くさせてしまつ、鍋の不思議な力のせいかもしけなかつた。

お茶を淹れるわね、と言つてみどりさんが立ち上がる。

「私やりましょうか」

「いいのいいの、ちょっと動きたいし」

重たそうなお腹を抱えてキッチンに向かうみどりさんをなにげなく目で追つていると、微かにバチッという音が耳に届いた。瞬時に動きの止まつた彼女の足元がみるみるつむに濡れてゆく。

まるで時が止まつたかのように、この場にある全てのものが静止した。

第一十四話 鍋と一緒に元（後書き）

やつぱり鍋はいいですね……今の季節には逆行しますが。
さて、瀬尾くんが情報を活用できるのは一体いつになるでしょうか。

第一十五話 和解

「みどりさん」

驚きの色に染まる空気の中で、一番最初に動いたのは私だつた。

「あ……え、嘘、これ……破水？ なんで？ まだ三週間も」

軽くパニックになつてゐる彼女のもとへ駆け寄り、優しく声をかける。

「もうすぐ赤ちゃんに会えますね、みどりさん」

「え、あ……もうすぐ……」

みどりさんは言葉を反芻する瞬きを繰り返した。

「楽しそうな声が聞こえてきて、赤ちゃんも待ち切れなくなつたんですよ、きっと」

「生まれるんだ……今から」

「服、濡れちゃいましたね。着替えましょうね？」

「課長、何ボケツと突つ立つてんですか、着替えとタオル！」

夫の方には厳しく声を飛ばす。とりあえずやることができた課長は、脱兎の如く駆け出してすぐに戻ってきた。

もう一人、呆然としたままでいる人物に向かつて私は声をかける。「係長は外に出てください。妊婦の着替えを見る趣味がないのなら」「あつえつ」

「ふふふ」

慌ててリビングから出て行く係長の姿に、みどりさんが吹き出した。うろたえる完璧瀬尾くんは彼女にとつてツボらしい。すでに落ち着いた様子を見て私も安心した。

課長に着替えを手伝わせ、私は掃除道具の場所を訊いて濡れた床拭いた。みどりさんはしきりに恐縮したが、困つた時はお互い様です、と返した。

みどりさんは着替えが終わると羊水がこれ以上漏れ出るのを防ぐ

ために横になり、課長がリビングの外で待っていた係長を中心に呼び入れる。こちらも少しばら落ち着いたようだ。

「貴文さん、病院に電話して。破水したから今から行くつて」「するけど、でも大丈夫なのか。破水しちまつて、その、子供はしじるもじるの課長なんてらしくないなあ。」JJIは少しかつかつてやる。

「血の膜被つたまんま頭がニユーッと出てきたら怖いですよね。そこで課長の方に顔向けて皿をパチッと開けたら『ハロー、パパ』なんて言つけやつたりして」

「うつ」

エグい想像をしてしまったのだるつ。男性一人が口を押さえて青い顔をしている。

「やめる、ポチ。さつき食つたもん吐く」

「吐くなんてもつたいないことしないでください」

みどりさんはゲラゲラ笑つているので、男性限定で急所を突いたようだ。

病院に連絡をとると、すでに入院準備のできていたバッグを手に課長が訊いた。

「お前らはどうする?」

これはもう考えていたので即答する。

「私はここを片付けてから、病院に伺います」

「でも、美春ちゃん」

みどりさんがまたもや恐縮するのでスパッと言い返した。

「困った時はお互い様つてさつき言いましたよね?」

彼女には一刻も早く病院へ行つてもらいたいのだ。無駄な論争をしている場合ではない。

しかしそこに口を挟んだ人がいた。

「僕も手伝う」

ギヨツとして声の持ち主を見た。冗談じゃない。係長との家に

「一人きりになんてなりたくないぞ。

「いえ、一人で大丈夫ですから」

きつぱりと断つたが彼は聞き入れようとなかった。

「一人でやれば早く終わるよ」

「正論だな。じゃあ、二人に任せせるから」

課長が勝手に話をまとめて移動を始めたので、私の反論は口の中に消えた。

そして心の水面には波が立ち始めて、再び皿が戻ってくるかどうか心もとなかった。

初冬の風が吹き抜ける中、車に乗り込む一人を見送る。私でさえ新しい命の誕生にワクワクしているのだから、親となる一人の思いは如何ばかりか、と胸中を察した。

みどりさんは陣痛がまだ本格化していないからか、表情には余裕がある。病院に着いてからが大変そうだ。

一方、課長はやはり相当緊張しているようだ。係長と私がビールにほとんど手を付けなかつたので、ホスト役である彼がアルコールを率先して摂取するわけにもいかず素面ではあるものの、運転大丈夫かと心配になってくる。

「美春ちゃん、ありがとう」

「みどりさん、頑張つてくださいね」

「悪いな、ポチ」

「大丈夫です、課長が生まれ変わつた後も恩に着せますから。それより事故起こさないでくださいよ」

「もし事故起こしたら去勢しましょうか」

にこつと微笑んで怖いことを言つみどりさんに、全員が引きつり笑いを返した。やはり母は強い。

車が走り去るのを見送ると、くしゃみが出た。さすがにコートな

しでは寒かつた。

「……入ろうか」

係長と二人っきりになる気まずさに考えが及んで、いつそのことこのまま逃げ出したい衝動に駆られた。

しかし片付けを始めてしまえば多少は気が楽になる。皿やコップをキッチンに運び、残り物はラップに包んだり、タッパーに入れる。その間なるべく彼が視界に入らないように頭や視線を動かした。

「鍋は少し残つてるので、どうしたらいいかな」

「小鍋に移し変えておけば、課長が今夜食べるんじゃないですか」

「えっ、今夜も鍋？」

「御飯を入れればおじやになりますよ」

普通に会話しているようだが、実際は作業をしながらなので目を合わせていない。このまま何とか乗り切りたいと切実に願った。

私は洗い物を始め、係長は布巾を手に持ち隣に立つた。意識すまいとは思つても緊張して、体ばかりか心まで硬くなってしまう。

「君があんまり落ち着いているんでびっくりした。僕なんかオロオロするばかりだったのに」「他人ことだからです」

素つ気ない言い方に彼が怯んだのを見て、さすがに気がとがめた。

「……高校生の時に近所でベイビーラッシュがあつたんです。里帰り出産も含めて六人。先に破水した人もいたし、自宅で産んだ人もいました。私、手伝いに行つてずっと妊婦さんの手を握つていたんです。いきむ時に掴まる物が何もなくて、すごい力で手を握られて……骨が折れるかと思いました」

「それはすごい体験だね」

「もしWEBデザイナーになつていなかつたら助産婦さんになつたと思います」

「……君がWEBデザイナーで良かつた」

「……」

「うう返答して良いか分からず、押し黙つた。もうこれ以上会話をするのが怖い。早く終わらせて病院へ向かおう。それともこのまま帰つてしまおうか。

頭の中でぐるぐると考えを巡らせていくと、係長が皿拭く手を止めて言つた。

「越智さん、少し話を聞いてくれないかな」

心臓がビクンと飛び跳ね、心が右往左往する。

「君に謝りたい」

「係長、手が止まつてます」

話を聞きたくないという意思表示はしかし無視された。

「謝れば僕の気が済むからつて言わわれても仕方ないと思つ。でも謝らないと先に進めないとだ」

彼も緊張しているのか、耳に届く声はいつもより硬質だった。私は早く会話を打ち切りたくて、早口で謝罪を拒絶した。

「もういいです。あの人たちに言わたしたことなんか屁とも思つていし、あんなことで私は傷ついたりしません」

「僕が謝りたいのは、あの夜のことだよ」

スポンジを握つた私の手も止まる。うつむいたまま動けなかつた。あの夜彼が私に投げつけた言葉、追い詰めて言わせた言葉、彼の歪んだ顔、全てが思い起こされた。

でも自分でも意外なことに、それらはまるで映画でも見ているみたいに作りごとのように思えた。彼が信じてくれなかつたことも、ひどい言葉で傷つけられたことも、ずっと昔の思い出みたいに胸の中で風化していた。

彼がしたことを私はとつぐに許していたのだと思つ。どんなに無視されても諦めずに何度も電話をかけてきた彼を、謝罪の言葉など聞かずとも許していた。

それを受け入れようとしたのは、私のわがままだ。自分が惨めな思いをしたくなかったばかりに、可哀相と思われたくないプライドにかけて、彼の謝罪したいという気持ちを否定して、拒絶した。あまつさえ彼を傷つけた。

謝罪される資格なんて私にはない。

「本当にもういいんです。もうあの時のことは……」

その先をどう続けるべきか迷った。忘れたというのも、何とも思っていないというのも、正しくないような気がした。あの夜見た、感情を剥き出しにした彼の姿はこの先もきっと忘れられないと思う。

これまで抱いていた印象を全て覆した、彼が築き上げてきたイメージを粉々に打ち砕いてしまった、負の塊のようだったあの姿もまた、彼という人間の一部だ。むしろ忘れてはいけないのでないかとさえ思うのだ。

言葉に詰まつたことをじうじう受け取つたのか、彼は苦渋に満ちた声を上げた。

「本当にひどいことをしたと思っている」

「係長、私」

最後まで言わせずに彼は懺悔を始め、私はそれを受け入れまいとした。

「課長とのことを疑つた」

「それはお互い様です」

「君を信じようとしたなかつた」

「それは仕方のないことです」

「君を傷つけた」

「傷ついていません」

「君を泣かせた」

な

！

「泣いてなんかいませんよ！ 私、泣かなかつたですよ！」

絶対に涙は見せていない。それで謝罪されるなど、とんでもない。何がなんでも否定したくて、顔を上げ彼を正面から見た。

「あの場ではね。でも君のことだから、家に帰つてから一人で泣いたんだろう？ ベッドの中とか、風呂の中とかで」

「み、見破られている……どうして？」

私の動揺を見て確信を得たのか、彼の目に力がこもつた。そして中心に細い鋼の糸が一本ピンと張られたような強さを持つ声に、哀切と悔悟の情を滲ませて彼は言った。

「君はきっと一人で、声を押し殺して泣いたんだろうって思った。あの場で、僕の目の前で泣くよりもずっと辛いことを君にさせてしまったと思った。だからどうしても、どうしても謝りたかったんだ」それがずっと電話をかけ続けた理由だというのか。

唚然としていると、彼は目元を緩ませ少し声を和らげた。

「やつとこっちを見ててくれたね」

ハツとして慌ててシンクに向きを変えた。視界に入つたスポンジや泡のついた皿に、焦点がぼやけたまま意味もなく視線を固定させる。

いろんな感情が交錯して胸の中で諍いを起こしていた。その中で最も新しく、強く、恐れを伴う感情に私は突き動かされた。

「彼に私の気持ちを知つてほしい。

ずっと抱えていた思いをぶつけようと決心し、それでもやはり怖くてうつむいたまま私は口を開いた。

「係長が、私のことを可哀相と思つてるから、目を合わせたくないなかつたんです」

「可哀相？」

「両親のいない可哀相な子だつて、憐れみのこもつた目で見るから。そんな子には優しくしてあげなきゃいけないって思つてるから」

「それは違う」

間髪を容れずに、彼は打ち消した。

「君を可哀相だなんて思つたことは一度もない。憐れむなんて冗談じゃない。『優しくしてあげる』？ そんな偉そうなことを言う奴がいたら、君より先に僕の方から反論する。『越智美春にはそんなもの必要ない』って」

ほどばしる思いを懸命に抑えるかのよつた激しさと深みが拮抗するその声が、私の心を震わせた。

そして今度はゆつくりと、だが一語一語に力のこもつた言葉が音になつて伝わる。

「君は、ちつとも可哀相なんかじゃない」

ちつとも可哀相なんかじゃない

その時初めて知つた。本当はずつと誰かにそう言つてもらいたかつたのだということを。自分でそう思つてゐるだけでは足りなくて、誰かの強い言葉が、私を認めてくれる言葉がずつと欲しかつたのだと。

フーッと大きく息を一つ吐き、意を決して顔を上げ、彼を見た。彼の目を。

そこには私がずつと恐れていた憐れみなどはなく、ただ意志の強さが現れていた。

「ごめんね、越智さん。本当にごめん」

謝罪の言葉を口にすると、彼は私に頭を下げた。目の前の光景が信じられずに息を飲み込む。

五歳も年下の部下に向かつて頭を下げる彼。肩書きや年齢など氣にも留めず、ただ真摯な謝罪の気持ちをぶつけてくる彼を見て、私はもう充分だと思った。

「お願いです。顔を上げてください」

再び元の高さに戻った瞳はまだ不安に揺れていたので、かけるべき言葉を探したが、結局見つからなかつた。

だから代わりに笑つた。すると彼が全身で安堵するのが分かつた。

そして、彼もまた頬を緩ませた。

あの夜からひと月ぶりに見る笑顔 私がずっと見たかった笑顔
だつた。

第一十五話 和解（後書き）

ようやくここまできました。

次回は舞台を病院に移して話が続きます。

工藤夫妻に生まれるのは男の子でしょうか、女の子でしょうか？

第一十六話 位置について

病院に着くと、額に汗を浮かべ苦悶するみどりさんが、ストレッチャーに乗せられて分娩室に向かうといふだった。

「え？ もう？」

犬並みに早いんじゃないか？

「着いた時にはもう子宮口が四センチ開いてたんだよ」

工藤課長は痛みに耐える妻の腰をさすりながら呆れて言つた。

「笑いすぎて腹が張つてゐるにも気づかなかつたって、どういう天然だ」

陣痛の波の間で一息ついた彼女が「だあつてえ」と不満げに言つも、またもや波が襲つてきて「いたーーーいつ」と叫ぶ。

「頑張れ、金子ちゃん」

瀬尾係長の励ましに彼女は口を一文字に引き結んでうなづくと、なずき、二人は分娩室の扉に向ひに消えた。

「ここまで来たら赤ちゃんが生まれるまで待とうといふことで意見が一致したので、私は兄に電話をかけにいき、その後は家族用の待合室に向かつた。

みどりさん以外には分娩前後の妊婦さんはいないようで、廊下にも待合室にも家族らしい姿は見当たらず、病棟を行き来するのは病院関係者ばかりだ。時折遠くから新生児が泣く声が聞こえるだけで、待合室は静寂に包まれていた。

自販機で缶の紅茶を買いソファに並んで腰を掛ける。今から私は気の進まない宿題を片付けなければならない。

体を半分係長の方に向け、おずおずと口を開いた。
「係長、私も謝つていですか？ その……ひどいことを言いまし
た」

彼はじつと窺うようにこちらを見た。

「あのベビーハタヤツ？」

「はい……」

「確かにあれは少し……かなり効いたかもな」

罪悪感と自己嫌悪で胸が痛い。人を傷つけるのは簡単だが自分にも跳ね返ってくる。私は自身の言葉により痛みを受けているのだ。いつそ最低の人間になってしまえと思つてみても、なりきることなんできやしない。これも自業自得だ。

「その……係長はきっと謝ればそれで終わりかもしれないけど、私はこれからずっと可哀相だつて思われるのかつて、そういう目でしか見られないのなら嫌われた方がマシだつて思つたんです。あの、本当にすみませんでした」

言い終わると同時に頭を下げた。数秒後にそろそろと顔を上げる
と彼は缶を弄びながら何やら考えているようだつたが、やがて思い
切つたように顔をこちらに向けた。私は何を言われても受け入れよ
うと首筋を伸ばす。

「君は激しい人だな」

「はい」

「負けず嫌いだし」

「はい」

「それに頑固だ」

「はい」

「プライドも高い」

「はい」

「口は悪いし」

「……はい」

「自分や仲間が攻撃されれば倍にして返す」

「……」

「常に白か黒かで、曖昧を許さない」

「……」

「それから」

「あのー」

際限なく続くかと思われ、つい言葉を遮ってしまった。

「どこまで欠点をあげつらうのでしょうか？」

実は根に持つタイプか？ ベビといつのは言い得て妙だったかも。係長は片頬を上げてニヤリと笑うと、意味ありげな視線を送ってきた。

「褒めてるんだけど」

「はあ？」

「君の長所だろ？」

違うだろ。絶対嫌味で言つてるな。

「……じゃあ次のボーナスの査定に加えてください」
むくれて言つたら、彼はククッと笑つた。しかしそくに笑いを収めるとなじやかな表情に戻り、つぶやきを口から漏らす。

「『嫌われた方がマシ』……か」

さつき私が口にした台詞だ。

彼は力をたたえた目で真つ直ぐこちらを見ると、この先一度と忘れることのできないであろう言葉を静かに紡ぎ出した。

「君を嫌いになんかならない。君が何をしても。何があつても。嫌いにはなれないよ、絶対に」

彼の目の奥に見つけた確信に満ちた光が、これまでのいざいざも、行き違つた思いも、全て消し去つてくれる気がした。

もういいんだ。私は安心していいんだ。この人は私という人間を欠点も含めて認めてくれて、信頼してくれて、心を開いてくれる。口先だけで誤魔化さず、嘘はつかずに、私に相対してくれる。私は安心して彼を信じていいのだと、その時悟つた。

互いにマイナスの部分を知り、許し合つて認め合つたら、これら向かう先はプラス方向だと自然に思えた。

絶対に嫌いにはならない それがどんなに力強い意味を持つているか、彼は分かっているのかな。私にとつてそれは、最後まで味方でいるということだから。

わだかまりがなくなつて、心が暖かくなつて、目が合えば笑つて
私たちはこれから、きっと新しい関係を築いていけるだらう。

というより、スタート地点に戻つたのかな。

そう、きっと私たちは今、スタートラインに立つたところだ。新しくスタートをやり直すために。

「お父さんはどうして亡くなつたの？」 差し支えなければ話しきれないかな

その声音には氣負いもてらいも感じられなかつたから、私もごく自然に語り始めた。

父の仕事。事故が起つた経緯。私や家族の悲しみ。母と共に過ごした時間。母の発病。そして死。

考えてみたら不思議な光景だつた。新しい命が生まれようとするその傍らで、私たちは死について語り合つていたのだから。

「強いご両親だつたんだね」

「強い？」

「毎日毎日、ただひたすら同じ仕事を繰り返すというのは、強い意志を持つてなくちゃできないよ」

私が子供の頃からずっと誇りにしてきた両親の姿を、彼ならではの表現で褒めてくれたことが嬉しかつた。

「ありがとうございます」

「君が強いのも道理だな」

さつき欠點を並べられたばかりなので、初めてお褒めの言葉をもらつたような気になり、心が弾んだ。

「私つて強いですか？」

「強いじゃないか、ケンカに」

……そういう意味かよ。

「瀬尾、ポチ」

私たちを呼ぶ声が聞こえて立ち上がった。興奮を押し隠そうとして失敗している課長が待合室の入り口に立っていた。

「生まれた。……女の子だ」

もたらされた吉報に体が熱を帯びる。

「おめでとう」「わい」

「おめでとう」「わい」

「ありがとう」

「みどりさんは？」

「大丈夫。母子ともに健康」

それだけでもう後は言葉が続かなくなる。何も言わなくても、彼がたつた今手に入れたものがすでにどれほど大きな存在となつているかが、痛いほどに伝わってきた。

小さなベッドが並ぶ新生児室をガラス越しに三人で覗き込む。私たちによく見えるように、この世界に到着したばかりのお姫さまが一番近いベッドに連れてこられた。

「可愛いい」

「うん」

「小さいい」

「うん」

「可愛い」

「うん」

「小さいい」

「他に言つことねーのか」

「みどりさんに似て可愛いい」

「ポチ、悪意はないよな?」

父親になつたばかりの課長は早くもだらしのない顔で娘に視線を送つてゐる。係長に田線でそのことを伝えたら、彼はすぐに理解して吹き出しそうになるのをじらふた。それもすぐに課長の氣づくところとなり、横目で軽く睨む。

「何だよ、瀬尾」

「工藤さん、明日その顔で出勤すると、みんなに弄られて大変なことになりますよ」

「どんな顔だ」

「若い女子に溺れてるおじさんの顔」

うん、確かにこれ以上若い女子はいないな、生後一田田だもの。からかわれた課長はしかめ面を作ると、意味ありげな視線を係長に寄越した。

「……お前もじきにそうなるんじゃないの」

「僕はまだおじさんじゃありませんよ」

「何だ、この会話は。若い女子つて……ええつ!?

「係長、もうすぐ子供が生まれる予定でもあるんですか? それともまたか女子高生と付き合つてるんですか!?」

これは大スクープか。情報料にしたらいくら取れるか

と胸算用を始めたところで係長が呆れた声を出した。

「なんでそうなるんだ」

「だつて若い女子つて」

「若すぎるだろ!」

「違うんですか? なんだ、口止め料としてケーキ奢つてもりおつと思つたのに」

「別に口止めなんかしなくとも、ケーキぐらい奢つてあげるよ」

「本当ですか? 後からあの話はナシって言つたら、ストライキ起¹しますよ?」

「言わないって」

見返りを要求せずに奢ってくれると、腹黒なのにいいところあるな。しかも嬉しそうにしゃって、人に奢るのが好きなのか？ 太つ腹だな。そんなにいいお給料もらってるんだろうか。

「やっぱり溺れそうだな」

私たちのやり取りを黙つて見ていた課長が小さくつぶやいた。

みどりさんは無事に出産を終えたが、出血の処置がもうしばらくなかりそうとのことで、直接祝いの言葉を述べるのは諦めるしかなかつた。

「じゃあ、僕たちはそろそろ失礼しようつか
「はい」

「悪かつたな、長時間つきあわせて。まあ、お前らにとつても悪いことばかりじゃなかつたみたいだけど？」

和解したことを暗に指摘され、一人で顔を見合せると自然に笑みがこぼれた。

外に出ると凍てつく空に光る星が私たちを迎えた。冬の星座の定番、オリオン座を見上げて、真っ白な息を吐く。

「お腹空いたなー」

「僕もだ。何が食べたい？」

「ラーメン」

「了解」

まるでずつと前から仲良しだったみたいに言葉のキヤッチボールを交わして、私たちは車に乗り込んだ。

太つ腹な係長がラーメンを奢ってくれ、ケーキは時間的都合もあつて後日必ず、と約束して帰宅の途に着く。最寄り駅まででいいと言つ私の意見を押しのけ、係長は自宅まで送つてくれた。

「また電話してもいいかな。……もう無視しないよね？」

別れ際に言われて、ひどく恐縮する。

「すっ、すみません。もうしません」

彼は笑つて許してくれたが、胸にチクチクと突き刺す痛みを感じた。

さすがにあれだけ無視されたら、へ口むよな、普通。でもそれだけ強い謝罪の意志を持つて毎日電話をかけてきたのだ。私に頭を下げることも厭わないほどの強い意志で。

心の中で何かが生まれたような気がした。

上司としての信頼、尊敬。瀬尾達也という人間に対する興味。スタート地点に戻つた私たちがこれから進んでゆく道に思いを馳せた。きっと期待を裏切らない楽しいものになるだろう。

「送つてくれてありがとうございました。おやすみなさい」

「おやすみ。また明日」

寒いからいいと言つても、わざわざ車外に出て見送つてくれた係長の姿が、閉まる扉が狭めてゆく外の景色と共に消えた。

最後まで絶やさなかつた笑顔も一緒に。

部屋に着くと早速彼からメールが届いた。

『今日君と僕を呼んでくれたこと、課長にお礼しようと思つんだけど、昼飯奢るんでいいかな？ それともワインか何かがいいと思う？』

ちょっと考えてから返事を打つ。

『『父親の心得』についての本』

すぐさま返信が来た。

『君には敵わない。了解』

長かつた一日が終わろうとしていた。でもこれは「ゴールじゃない」。

明日新しいスタートを切るために 今。

位置について。

第一一十六話 位置について（後書き）

これで第一章大いなるカン違い編（とはゞこにも銘打つておりませんが）完結です。ここまで読んでくださった皆さま、本当にどうもありがとうございました。

一十六話もかけてようやくスタートラインに立つた一人。いよいよ恋愛モードに突入でしょうか……？

第一章（とはどこにも記載されませんが）はカン違い小技繰り出し編となる予定です。美春のカン違いはまだまだ続く！

第一十七話 新しい関係（前書き）

お待たせしました。第2章スタートです。

第一一十七話 新しい関係

一日中人けのなかつた部屋はそれでなくても寒い十一月の夜、更に冷え冷えとした空気を伴つて私を迎えた。すぐに風呂を沸かしにいく。こんな日は冷えた体をゆっくり温めたい。今日の入浴剤は何にしよう。炭酸風呂がいいかな。

師走に入つて会社全体が忙しく残業があることも珍しくない。今日は日中にかなりの作業をこなしたつもりだったが、それでも一時間の残業は免れなかつた。

忙しいのは兄も同じで連日帰宅が遅く、今用家で食事をしたのは数えるほどだ。せめて週末ぐらいはちゃんと料理したものを食べさせないとなあ。

リビングに行き暖房をつけたちょうどそのとき、携帯が鳴つた。ある人の顔がすぐに浮かんで、発信者の表示も見ずに通話ボタンを押す。

「はい」

もしもし、瀬尾だけど、今大丈夫？

やつぱり。自然に笑みがこぼれた。

みどりさんが出産し私たちが和解したあの日、また電話してもいいかと尋ねた係長はその言葉どおり、電話やメールを寄越すようになつた。しかも頻繁に。

某社に提出したデザイン良かつたよとか、今日鼻声みたいだつたけど風邪引いてないかとか、特になんてことはないが私を思いやつてくれる内容が多い。

PR事業部の片岡さんが言つていた、後輩や部下に対しても配慮を怠らないというのはこいつさりげない気配りを指しているんだろ。加えて私に対してはあの時のこと未だに悪かったと思つて

いるらしく、余計に気を遣つてゐるよう見えた。

「今日のカンフランス、どうでしたか？」

お疲れ様ですと挨拶を返したあとに問いかけた。午後に行われたWEBメディア向けのカンフランスのために、係長を筆頭に数名の社員が出払つて直帰となつていた。

質疑応答がすごく盛り上がり、予定時間をだいぶオーバーしたよ。PR事業部のときに世話になつた記者に向こうで会つて、軽く飲んで帰つてきた。君のほうは？

電話の向こうから聞こえてくる声は明るくて楽しげだ。今日の仕事が手応えのあるものだつたんだろうな。

「T社案件、向こうの要望と仲々噛み合わなくて、山本さんにアドバイスしてもらいました。結局残業になつちゃつたんですけど、上がりが山本さんと一緒になつて、ふたりで御飯食べて帰つてしまつた」

山本さんは私と同じく中途入社のWEBデザイナーだが、グラフィックデザイナーから転身した人で、その色彩感覚たるや私など足許にも及ばない。だからデザインに煮詰まるとき折彼に助言を求めている。

ただし彼がパソコンの技術面に弱いことは確かなので、私も補助に回ることもあつてギブアンドテイクの関係と言つてもいいだろう。三十歳という年齢相応の落ち着きを見せるかと思うとデザインについて熱く語る面白い人だ。あれで工口でなければ言つことないんだが……

山本さんと？ 大丈夫だつたの？

係長の不安げな声が受話器から漏れた。大丈夫？ …… ああ、そ
うか。

「私の財布の心配だつたら無用ですよお、奢つてもらつましたから。へへへ。いい人ですよねー、山本さん。工口のが玉に瑕ですけど

……

「でね、お好み焼き食べたんですけど、すりおろした山芋が多めに入つてもう、トロットロに柔らかいんですよ」

「マコネーズが自家製でこれまた美味しいと、大ぶりに削った鰯節をふわっと載せたときに踊る様子がまた食欲をそそるんですね。係長、話聞いてます？」

臨場感溢れる話にお好み焼きの映像が頭にチラついているのだろうか？きっとその知り合いで記者とはあまり美味しい物を食べてこなかつたに違いない。

君こそ人の話をちゃんと聞いているのか？

さつき聞いた明るい声は別人だつたんじゃないかと思われるほどの低くて暗い声がした。

まさか飲んでないよな？

「ビールを少々……」

雲行きが怪しくなってきたぞ。

飲んだのか！？君が酔っ払つてどうなるか、ビデオを見せたのはつい一週間前だぞ！

まずい、忘れてた。というより、箱に仕舞つて鍵をかけて忘却といつ名の海中に沈めておいた。

これだから直帰なんてするもんじゃないんだ、全く

苛立ち紛れの声が耳に響く。私はまた失敗したこと悟つた。

忘年会の日は杏子さんの家に泊まるという条件の下、各方面から飲酒の許可が出た。

そもそもれつきとした成人女性がなんで酒を飲むのに許可がいるのか納得しかねるのだが、兄はもとより杏子さんや藤田さん、係長までもが当初一様に反対したところを見ると、こと飲酒に関して私はどこどん信用がないらしい。

一度醜態を見せると信用回復に時間がかかるのは世の常だが、酒

の席で周りが飲んでいるにもかかわらずお預けを食らうなどもつての外だ。しかも年に一度の忘年会だ。年忘れだ。今年起きた様々を忘れてパートと騒ぐのに酒は不可欠だ。

そう主張して杏子さん宅に泊まるのと引き換えに各人の首を縊に振らせたのだった。

忘年会当日は出張のため迎えにくることを断念していた兄は、しかしそれだけでは足りないと思ったのか、更に合コンでメルアド交換した私の先輩社員たちに一斉メールを送つてよこした。

『年に一度の忘年会、妹も日頃の憂さを晴らしたいしあうが、ハメを外し過ぎないよう、注意していただけだと大変助かります』

憧れの弁護士王子様にこんなふうに頼まれたら、嫌とは言えないお姉さま方である。かくして私は一次会二次会と最初から最後まで彼女らに囲まれて好きなだけ酒を飲み、カラオケではZARDを熱唱した。

ここ数週間の係長との冷え切った関係がもたらしていた緊張感から解放されたのだ。多少酔っぱらいはしたが実に久しぶりの良い酒だった。

が、衝撃は週明けの月曜日にやつてきた。冷ややかな目で係長が携帯を差し出し、とある映像を私に見せたのだ。再生されたビデオには小林さんの前に腕を巻きつけてハグをする私の姿が映っていた。

『小林さん、しうきでしうー。ほっぺにチューしていいー?』

『やめろー、ポチー』

呂律が回らないながらもしっかりと聞こえるその声は間違いなく私のもの。周りが大爆笑する中、一人赤面した私は係長だけでなく同僚みんなを逆恨みした。

何だつてこんな恥ずかしいビデオを撮るんだよつづ！

即刻削除を要求した私に係長はこともなげに言った。

『これはね、君を弄ってるんじゃなくて教育的指導だよ。『酒は飲んでも飲まれるな』の良い見本、いや悪い見本か』

嘘だ。これはあのときの仕返しに決まっている。根に持つタイプだからな。

私は数日前に見た彼の表情を思い出した。

係長と私の関係が修復されたことを同僚たちは皆喜んだ。あれほど頑なに和解を拒絶していた私の突然の変心を彼らは訝しみ、理由をしきりと訊きたがった。彼らにも長いこと緊張状態を強いていたことだし、お詫びも兼ねて『冗談』を提供することにした。

「だって係長つてば子供みたいに泣いて謝るんですもん。あんなに泣かれたら私だつて鬼じゃありませんからね、『もう怒つてないから泣かないのよ』って頭を撫でてあげたんですよ。そしたら『ホントだね？ ホントに怒つてないね？』ってひつくひつくしながら言うもんだから、私もつい情にほだされて」

「 つて言つてますけど、係長？」

ぎょっとして振り返ると私を見下ろす一つの目と視線がぶつかつた。

「 実に面白い冗談だな」

目はちつとも笑つていらないのに片頬だけが動くのを見て、背筋を冷たいものが流れたのだった

……そもそも君にとつていい人の基準つて何だ。奢ってくれたらみんなそうなのか？ そうやって食べ物に釣られて男にホイホイついて行くから無防備だつていうんだ

係長の永遠に続くかと思われる説教にウンザリした私は反論の一つもしてやらねばという気になった。

「 男つて言つたって山本さんですよ？ 何があるわけないじゃないですか。向こうはもう三十歳の大人なんだから、そもそも私みたいな子供眼中にありませんよ」

そんなこと分からぬだろ。それに僕の誘いは断るくせにどうし

て山本さんは食事にいくんだ

ひょっとして拗ねているのだろうか。だとしたら理由をはつきり

言つべきか。

「だつて係長は特別だから
え？」

ちょうどそこに玄関のほうで兄の帰宅した気配がした。風呂が沸いた頃合いを見計らつて帰ってきたか。やるな、兄。

それ、どういう意味？

「あ、すみません、もう切れますね。おやすみなさい」「かなり疲れた様子の兄はリビングに入つてくると、私が手に収めた携帯を見て尋ねた。

「電話してたのか。……男？」

「性別で言つたら男だな。でもそゆんでねえがり。先にお風呂入る？」

「うん、入りたいな。美春、お兄ちゃんの背中
却下」

朝食用の米を研ぎながら係長の拗ねた口調を思い出しつい笑みがこぼれた。

係長つてば案外可愛いところがあるんだな。異動してきた頃に抱いていたイメージがどんどん崩れてくるんだけど。

彼は電話やメールで気遣うだけでなく、時々食事にも誘ってくれる。私に詫びたいという気持ちがそうさせていけるのである。餌を与えるべきと思われていてるのが微妙なところではあるが、この時期はお互いに残業で時間が合つほうが珍しく、まだ一度も実現していない。

しかしそうでなくとも断わるつもりでいる。何しろ彼は特別な人なのだから。問題は彼がそれをどうも自覚していないらしいことだ。

そこに風呂を上がった兄から、入つていいぞ、と声がかかった。

「あー、気持ち良かつた。なあ美春、お兄ちゃんがお前の背中

」

「却下…」

翌日もまた多くの業務にＷＥＢ事業部は追われた。明日が祝日であるためその分今日にシワ寄せが来るのは当然として、明後日のクリスマスイブには絶対に残業をしたくない心理がみんなのやる気を倍加させていよう的な気がする。たとえ恋人がいなくても、予定などなくとも、クリスマスイブに残業つて……嫌だ。

私はよし、と気合を入れて髪をバレッタで留め直し集中した。あんまり集中しすぎて空腹を感じたときにはすでに十一時半を過ぎていた。周りを見渡すと残っている同僚はもはや誰もいない。なんてこつた!

弁当を手に休憩室へ行くと、同じ弁当組の倉田さんと大森さんはすでに食べ終わったらしくお喋りに興じていた。

「あー、やつと来たか」

「声ぐらいかけてつてくださいよ」

恨みがましく口に出すと、大森さんがカラカラと笑って言つた。
「かけたよ、ちゃんと。でもあんた、完璧に『入つて』たんだもん」
いつたん気持ちが入つてしまつと集中しすぎて周りの音が聞こえなくなるのはいつものことだが、昼休憩の時間には適用外としたい。ふたりとおかげ交換するのを楽しみにしていたのに。

飲み物を自販機で買って倉田さんの隣りに座ると、からかい混じりの声が飛んできた。

「ポチはクリスマス独りで何すんの？」

私が独りだという前提での質問に憮然としたが、今更見栄を張つたところで仕方あるまい。

「予定なんか何もないですよ、どうせ」
「拗ねないのー」

「ハハハ」

氣を取り直して弁当箱の蓋を開けた。今田のおかずは田曜日を作り置きしておいた筑前煮をメインに卵焼き、インゲンのベーコン巻き、ひじきとちりめんじやこを添えてある。箸でレンコンをつまもうとしたそのとき、大森さんが声を上げた。

「あれっ、係長」

彼女の視線を追つて後ろを振り向くと、瀬尾係長が「コンビニ袋を持つて入つてくるところだつた。

「一緒にいいかな？」

「どうぞ。珍しいですね、係長がお弁当なんて」

「遅くに出たらいだいもいっぽいでね。待つてる時間がもつたいたくて弁当にした」

係長は確か今朝からずっと会議だつたつけ。

私の向かいに座ると、照焼きハンバーグ弁当のプラスチックの蓋を開ける。が、手をつけずに私の弁当をジイッと見て片方の口角を上げた。嫌な予感がする。

「それ美味そうだな。僕のと交換しよう

「はあ？」

「こちらのア承も待たずに勝手に私の弁当を取り上げて食べ始めた。返してくださいよ！ 私のお弁当はコンビニ弁当なんかとじゃ引き合いませんよっ

「もう遅い」

左腕で弁当箱を離してかつ食べりつている。ムカー。これが上司のやることか？

倉田さんと大森さんは笑いながら、

「係長、すっかりWEBの空気に毒されまますねー」

「朱に交わつてもはや赤黒くなつてゐる」

ふたりとも、笑つてゐる場合じゃないでしょ？が！ 私のお弁当つー

休憩時間が終わつた先輩ふたりが引き上げていつた。やがて弁当箱を空にした係長は「ごちそうさま、美味しかったよ」と満悦の様子だ。私はブスツとしたまま照焼きハンバーグ弁当を全て平らげ「どうもお粗末さまでした、ふん！」と嫌味つたらしく言つてやつた。

毒されるとか赤黒いとか、そういうところばかりWEBの色に染まらなくていいのに。

ブツブツ心の中で文句を言つていたせいが、係長が微笑みながら「弁当のお礼に」と言つた内容をちゃんと聞いていなかつた。

「……今何で言つました？」

「クリスマス、一緒に食事に行こい」

目尻を下げて甘い言葉を吐き出す彼に、私は不可解な目を向けた。そんなに手作り弁当がツボにハマつたのだろうか。彼を狙う女性たちにこの情報を売つてやろうか。

「何が食べたい？ イタリアンでもフレンチでも君の好きな物にしよう。クリスマスにこだわらないんなら和食でも中華でもいいよ。そうだ、きちんとした服装しておいで。たまにはそんなのもいいだろ？」

「ちょ、ちょ、ちょっと待つてください」

「クリスマスティナー計画」を次々と一人で決定していく勢いの係長にやつと待つたをかけた。

「係長、あのときのことならもうついいんですよ？ 私本当に気にしてませんから」

「え？ 何ソレ？」

反応が鈍い。この人、無自覚なのか？ 諂びとして私に食事を奢れ」という脳内指令が意識の表層下にまで行き届いていると見える。

「だからー、未だに私に悪いと思ってるでしょ？ それで食事に誘つてくれるんなら、そんな気を遣わなくていいって言つてるん

です」

「そんなんじゃないよ」「み」

「じついう否定の仕方はたいがいは肯定だと相場が決まっている。
「それに私はWEBで一番年下だから面倒見てやらなきゃって思つて
るでしょ？ でもいくら部下や後輩思いだからって、クリスマスステ
イナーはやり過ぎですよ。もし誰かに見られたらどう言い訳するん
ですか？」

「……誰にも言い訳しなくていいんじゃないかな」

やはり自覚がないのだ、この人は。困ったもんだな。

そこで私は彼の周りを取り巻く状況について分析してみせた。
あれから瀬尾ファンたちがランチのお誘いにWEB事業部に来る
ことはピタリと止んだが、それは私に対する気まずさからであるこ
とは推測できる。

仕事帰りはもちろんのこと、毎にも誘えず所属フロアも違うとな
れば、彼女らと係長との接触時間などほとんどないと言つてもいい。
総務や経理とのやり取りは基本的に社内メールで行つから、就業中
に遭遇する可能性も低い。

そんな状況でまたもやこの私が彼と噂にならうものなら、彼女ら
の不満は爆発し何がしかの騒ぎになるかもしれない。

私は別にシメられようが吊るし上げられようが痛くも痒くもない
が、係長にとってはダメージとなることは避けられない。若手ナン
バーワンの出世頭で上司からの覚えもめでたい彼が、業務とは関係
のないことではび騒ぎになつて、ライバルから足を引っ張られたり
上層部から睨まれたりするかもしれないのだ。

彼女らが起こした行動は勇み足で係長のあざかり知らぬことだつ
たとはいえ、一度も続けばさすがにそうも言つていられなくなる。

そういう彼の立場をファンならば理解すべきだが、一方で熱く思
うあまりに馬鹿な行動を起こすのもまたファンというものだ。

だから誤解を生むような行為は私たちはすべきではない。

「係長のファンを無駄に刺激するなと言いたいんです、私は。もしあんな騒ぎが起きたらどうするんですか。係長の華麗なる経験に傷がつきますよ？」

これで少しばかり自分の立場を自覚したか？

しかし彼はポカンとしたまま反応が薄い。仕方ないなー、もう。「デート現場を撮られた芸能人だつてファン心理を考慮して、ただの友人ですってコメント出すじゃないですか。ファンあつての職業ですからね、大切にしなきゃいけないんです。係長だつて同じですよ。今はキャーキャー言つてるだけでも、ゆくゆくは係長を支えてくれるスタッフになるかもしれないですから、蔑ろにしちゃいけないんですよ。はい、分かりましたか？」

ファンの取り扱いについてのレクチャー料が欲しいぐらいだ。まあ、ここまで噛み砕いて教えてやれば人気者の宿命つてもんを少しは理解してくれただろう。

彼は小さく息を吐くと、ゆるゆると口を開いた。

「……それが僕が特別だつていう意味？」

「他に何があるって言うんですか。もう、本当に何も分かつてないんだから、係長は」

やれやれ、エリートのくせに女の感情の機微にまでは頭が回らないと見える。完璧瀬尾くんの弱点か。

「……分かつてないのはどっちだよ」

「はい？」

「いや……何でもない」

昼休みが時間切れとなつた係長は休憩室を後にした。背中から哀愁を漂わせて。

私の弁当を食べて補充したエネルギーはどうしたのだ。

憮然として、私はひとり休憩室に残つた。

第一十七話 新しい関係（後書き）

相変わらずカン違いしまくっている美春、「特別」と言われて舞い上がった瀬尾係長、そして疲れてストレスが溜まると変態度の上がる兄と共に、第2章が始まりました。

笑える胸キュンラブストーリー（笑）を目指して作者は頑張るつもりでいます。最後までおつきあいいただければ嬉しいです。

第一二十八話 素顔を見せて 1（前書き）

また長くなりました。前半部です。

……目立つ。目立つよ、この人。

柔らかな照明がさほど広くない空間に暖かみのある光を照らす。ログハウス調に施された内装のあちらこちらの壁に美しい山の写真が飾られたカフェの一角。

香ばしい挽きたてのコーヒーの香りもいつもなら楽しめるのに、メニューに顔を半分隠して周りを窺う状況ではそれどころではない。私がこんなに困惑しているというのに、目の前に微笑みながら座る瀬尾係長は、周囲から 特に女性たちから 浴びる視線など全くお構いなしだ。

兄と一緒にいれば見られるのには慣れているし、しょせん兄であるという事実が見られることには無頓着にさせるのだが、この人は兄ではない。当たり前だけど。

係長と社外で会うのはこれで三度目、最初は個室レストラン、次

は課長の自宅で、不特定多数の目を気にすることはなかつた。

予想以上だ、この周囲の反応。格好良すぎるんだよ、係長は！ ケーキに釣られた私が浅はかには違いないが、休日でしかも近所であることについて油断してしまった。

クリスマスも終わり、新年を数日後に控えた日曜日の午後。

世間は正月の準備一色に染まり、我が家でも簡素ではあるがお飾りやおせち料理を用意するため、買出しに来ていた。その間兄は部屋を掃除中。引っ越ししてまだ三ヶ月と少し、大して汚れてないんだから文句を言わずにやれっての。

スーパーの入り口にて買い物かごに手を伸ばしたちょうどその時、携帯の着信音が鳴った。兄からの買い物の指示だろうと予想し、発

信者を確かめずに電話に出る。

「あんちゃん、何？」

もしもし、瀬尾だけど。……あれ、今、外？

係長？　どうやら人のやわめきや店内放送が筒抜けになつていてるようだ。

「近所のスーパーです。どうしたんですか？」

今、一ノ子玉川に来てるんだけど、会えないかなと思つて。お茶でもどう？　もちろんケーキ付き。齧るつて約束、延ばし延ばしになつてただろ？

時計を見ると一時半。早めの昼食だったのですでに小腹が空いていた。

「二つ食べてもいいですか？」

好きなだけ食べなさい

よしあつ。この三か月の間にチョックしておいた店を思い浮かべてんまりする。

場所を打ち合わせ通話を切り、小走りで目的地へ向かった。

注文を終えてしまつとメニューを持つて行かれ、途端に所在なくなる。そんな私を余裕の笑みで眺める係長が口を開いた。

「さつきから何キヨロキヨロしてるの？」

「あー……会社の人はいないだろうな、と思つて」

私の返事に何度も大きく瞬きすると、ブツと吹き出す。

「またそんなこと気にしてる」

そんなことって……こつたい誰のために心を碎いてると思つてんのさつ！

「それにこんな所で会うわけないよ」

至つて呑気な面持ちで偶然を過小評価する彼に、実例を挙げて忠告を与えることにした。

「思わぬ場所で思わぬ人には会いつ確率つて結構高いんですよ？　前

の会社にエツフェル塔で元カレに遭遇したって人がいたんですから

「へえ。お互に連れは別のパートナーで？」

「そうそう。素知らぬフリして通り過ぎようとしたら、相手の女性に写真撮ってくれつて頼まれて」

「本当に？ で、どうしたの？」

「断るわけにもいかないじゃないですか。それでデジカメ構えて『はい、チーズ』……ってどうでもいいんですよ、その話は」

どうしてもつと自覚してくれないのか。一人涼しい顔しちゃつて。

今日の係長は細身のグレーのネックセーターにジーンズ、髪の毛は前に下ろしたラフな格好。課長宅で見た私服もそうだったが、何を着ても似合うんだな。さすがは王子様。

一方の私は前開きの黒のパーカーにジーンズ、どこから見ても普段着だ。

ケーキセットが二つ運ばれてきた。一つとも私が食べるつもりで選んだベーケドチーズケーキと白イチゴのタルト。係長はコーヒーで私はミルクティー。二つのケーキを前にして、周囲の視線への気後れも会社の人々に遭遇する懸念も吹き飛んだ。

チーズケーキを口に頬張るとコクのあるほのかな甘味が口に広がる。

「美味しいー

「それは良かつた」

「コーヒーを一口すすつた係長は、「君がいろいろと気にしてくれるのは嬉しいんだけどね」と前置きすると少し真面目な顔になつて話を続けた。

「心配するようなことは何も起きないよ。例の彼女たちは一度と君に手は出さないし、騒ぎも起こさない。WEBにも来ることもない。僕がちゃんと話はつけた」

そういえばあの騒動の後で川嶋常務に呼び出された時、そんなこ

とを耳にした覚えがある。

「あんな騒ぎを起こされて黙つていられるほど僕だってお人好しじゃない。僕は僕のやり方で始末をつけよつと思つた」

声は柔らかいが冷たさと鋭さを言葉の端々から漂わせている。不穏な影が胸をよぎり、恐る恐る訊いた。

「……何をしたんですか？」

係長は不敵に笑うと『瀬尾ファン始末記』を語り始めた。

女子化粧室での事件の翌日のこと。

九階の小会議室に私を吊るし上げた六人を呼び出した係長は、それぞれに椅子を勧めた。ただ淡々と書類に判を押す一連の作業のようだ。

「弁解したいことがあるなら、一応聞いておくよ」

口調は穏やかながら内容は糾弾以外の何物でもない。一瞬怯んだ六人だったが、ボス格の女がおずおずと口を開いた。

「早とちりしてあんなことをしてしまったのは申し訳ないと思つてます。でも瀬尾さん、最近WEBの人たちとばかりお昼に行つてし、私たちだつてずっと我慢してたんですよ」

他の女たちも次々と主張する。

「瀬尾さんが社内の女の子とデートするわけないんだから、あの子と二人でいたら何か理由があると思っちゃうじゃないですか。あの子社長のお気に入りだつていうし」

「だいたい向井はやり方が汚かつたですよ。あんなの瀬尾さんだって可哀相」

「WEBのあの子だつて今回は違つても、いつそう」「」とするか分かんないでしょ？ 一日中瀬尾さんと一緒にいるんだし、バカな夢見るぐらいならむしろ釘刺しといて良かつたですよ、瀬尾さんのためにも

口々に自己弁護する彼女らの言い分を一通り聞くと、係長は静かに言葉を吐き出した。

「言いたいことはそれで全部かな？　じゃあ僕の番だね。

僕が社内の女の子とは付き合わないっていつたい誰が決めたんだ？　確かにこれまで社内恋愛をしたことはないが、僕の口からそんなことを言った覚えは一度もない。僕は付き合いたいと思った女性と付き合つよ。

……ああ、でもそんな期待した顔をするなよ。たとえ社内の女性が君たちだけになつたとしても、そんな可能性は万に一つもないから。『バカな夢見るぐらいなら釘刺しといった方が良い』だろ？　僕もね、『やり方が汚い』女の子は嫌いなんだよ。例えば集団で一人をシメるとかね。

そうそう、今度のことは社長もすげく胸を痛めていてね。知つてのとおり彼が最も嫌うのは会社の不利益になることだ。あの騒ぎで社内の空気が浮き足立つて、業務に支障が出たらどうするだろ？　君たちと『WEBのあの子』、それから僕の二者を秤にかけて処分を下すかもしれないね。

僕はそれなりに会社に対して貢献をしている自負があるけど、君たちはどうなの？

え？　『WEBのあの子』？　彼女は社長のお気に入りだよ？　でも君らはそうじやない。危険な火遊びをするんなら、自分に火の粉が降りかかるてくるリスクも負うべきだよな？

火の後始末は自分たちでしろよ。何をすべきなのか、よく考える。考へても分からぬような奴はこの会社にとつて不利益でしかないからな

係長が彼女たちに放つたあまりの毒舌に、ケーキを口に運ぶ手が止まつたまましばし呆然とする。そんな私を見て彼はニッコリ笑つたかと思うと、空いていたフォークを手に取り私の食べかけのチー

ズケー キからひとかけすくつて口に入れた。

「ふーん、結構美味いね。ケーキなんて普段食べないんだけど、これあんまり甘くないんだな」

「はい、甘さは控えめでレモンの香りが程良くて……じゃなくて係長、そんなことしたら駄目ですよ」

「一口ぐらいいいだろ」

ボケるなっ！

「ケー キじやなくてつ！ 係長がそんなひどいこと言つたって広まつて、嫌われたらどうするんですか。人気急落ですよ。せっかく後輩みんなから慕われてるのに」

イメージダウンだ。好感度も下がる。ファン離れが起きるぞ。しかし彼は私の心配など無用とばかりに、決然と言い切った。

「全ての人間にいい顔なんてできない。僕のことを信頼してくれる奴はそれでもついてきてくれるさ。僕のイメージを勝手に作り上げて、思つてたのと違つたからつて、それは僕の責任じやない」

あの日私に謝罪した時と同じ、何があのいつと揺らがない強固で盤石な意志。彼の目にそれを認めてこれ以上の口出しは無益であると思われた。私が何をどう言つたところで覆ることなどないのだろう。とはいえる、女というものに対する注意を怠るべきでないことは、教えてあげないと。

「でも気をつけた方がいいですよ。女を敵に回すと怖いですから。もし係長のことを嫌いな人が部下になつたらどうします？」

少々不安を煽りつつ発した質問に、彼は毅然として答えた。

「どうもしない。嫌われる上司はどこにだつているよ」

「お茶に雑巾絞つて入れられても？」

さすがにこのベタな嫌がらせの方法には恐れを抱いたのか、少し眉根を寄せて考え込む素振りを見せる。

「……それは困るな。そんな部下がいたら、お茶汲みは禁止にしよ

う

真面目な顔で軽口を叩く彼に「ツ」と吹き出すと、彼も笑顔になつた。

第一十八話 素顔を見せて 2

会社ではない場所なら、普段話せないようなことでも口が滑らかになるらしい。

係長と佐久間主任が初めて顔を合わせた時には互いに虫が好かないと思っていたこととか、PR事業部に異動して工藤課長の部下になつた時にいきなり「俺より田立つな」と言われたとか、上司たちの昔のエピソードを彼は披露してくれた。

ぎゅっと固く結んでいた紐をすっかり解いてしまったような表情を見て、ふと思つた。

今ならあのことも話してくれるかもしれない。

私は顔を少し係長に近づけると「訊きたいことがあるんですけど」と言って、ずっと胸にしまつたままでいたある疑問をぶつけてみた。

「向井里佳子といつ元社員の結婚退職には、係長が絡んでいるんじゃないんですか」

彼は突然の質問に驚き、ついで困つたように笑つた。それはつまり肯定か。

「参つたな……話すのは構わないんだけど」

困惑する理由が分からず首をかしげると、彼はおずおずと口を開いた。

「その話をしたらまた君に嫌われるんじゃないかと思つて」

ついさつき「嫌われる上司はどこにでもいる」なんて迷いなく口にした自信は消え失せたかのように、不安を顔に浮かべてこちらを見る。

私はあの夜自分が口走つた言葉を思い出した。

『人の気持ちを好きなように操るうとする人には、私の気持ちなん

か分からない』

彼もまた私の言葉で傷ついたのだろうか。今更取り消すことなどできないうが安心させてやることはできるかもしない。

『嫌いになつたりしませんよ。係長と同じです。何があつても嫌いになりますん』

彼を真っ直ぐ見つめはつきりと告げると、瞳が大きく動いた。

一度信頼すると決めた以上、どこまで行つても信頼する。それが私のやり方だから彼にも信じてほしい。

『一度約束したら必ず守ります。最後まで私は係長の味方ですから』

「越智さん……それって

半信半疑といった眼差しを向ける彼を見て、もう一言付け加えることにした。

これなら納得してくれるだろう。だつて私は。

「弁護士の妹ですかね」

彼が目の前でガクツと崩れた。何だどうした。しかしそくに引きつった笑みと共に顔を上げて小さくつぶやく。

「……それは心強いな」

そうだろうそうだろう。さあさあ、私を信頼して全部話しなさい。心強い味方を手に入れた係長は、覚悟と諦めがないまぜになつたような表情で口を開いた。

思つたとおり向井さんの結婚をお膳立てしたのは係長だった。

担当するクライアントに新入社員だと紹介した時から彼女に目をつけた男性がいて、飲みに誘うなどして協力したのだそうだ。自分の推理が正しかつたことが証明され、溜飲が下がつた。

係長の不倫疑惑において思い切りこきおろされた屈辱を忘れてはいなかつたから、リベンジを果たしてやつた気分だ。ウヒヒ。やるな、私。

「なんか随分嬉しそうだな」

不可解な目を向けられ慌てて顔に張り付いていた二マーマを消し去り、残っていたもう一つの疑問を口に出す。

「でも係長は向井さんの妊娠まで企んだんですか」

少々非難を込めた言い方だつたせいか、彼は慌てて否定した。

「まさか。そこまで鬼畜じやないよ。結婚してくれさえすればよかつたんだ。退職するかどうかは本人次第で」

「でもそれだけじゃ、職場の問題解決にはならないんじやないですか」

「社長の興味は間違いなく失せただろうね」

「どうしてですか？ 結婚してようがいまいがお氣に入りはお氣に入りでしょ？」

まさか本当に息子の嫁候補だつたなんていうんじやあるまいな。

「他の男のものになつた女をお気に入りのままにしておくと思つ？ 未婚女性の方がいいに決まつてるじゃないか」

薄笑いを浮かべる係長を見て、そういうもののなのだろうかと自問した。どうもすつきりしない。

「じゃあ向井さんの妊娠は本当に偶然だつたんですか？」

「んー、偶然というか……相手の男性が意図的にやつちやつたというか……」

当時三十一歳で結婚願望の強かつたその男性は、なかなか色よい返事をもらえないことに業を煮やし、酒に酔わせてお持ち帰りをしてしまつたのだといつ。

一夜明けて呆然とする彼女を大人の余裕で優しく口説き、体の関係を持つたことで情がわいた彼女も彼を受け入れる。……彼が避妊をしなかつたと知るのは妊娠が分かつてからだつたが。

「それに係長はどう関わつたんですか」

「その彼に頼み込まれて三人で飲む機会をセッティングしただけだ

よ

「本当にそれだけ？」

「……彼女の飲むペースが速まるより多少協力したけど」

「それは充分鬼畜の手下ですよー！」

「場所をわきまえ小声ではあつたがとがめると、バツの悪そうな田でこちらを見た。

「やっぱり嫌いになつた……？」

まるでお仕置きを言い渡される子供みたいな表情が可笑しい。私は笑いながら、

「なりませんよ。約束したでしょ？ でも次に策を練ることがあつたら私も一枚噛ませてください。鬼畜じやないやり方で協力しますから」

彼は少し目を見張つたが一瞬後には輝くような笑顔を見せた。周囲の視線が集まるのも田に入らないかのようだつた。

「頼りにしてるよ」

「年末年始は田舎に帰るの？ 伯母さんがいるんだつたよね？」

思いついたように係長が尋ねた。

「いえ、こっちにいます。伯母さん家は従兄弟一家も帰省するし、手狭な家なので。係長は実家に帰るんですか？」

「いや、実家には帰らないよ。越智さん、こっちにいるんなら一月一日、課長の家に年始の挨拶に行かない？ 飲みにこいつて誘われてるんだ」

課長の家……正月休みまで上司の顔を見るのか。微妙だな。一月

一日は毎年箱根駅伝をテレビ観戦するんだが。

「上司の顔じゃなくて、真由ちゃんの顔を見に行くなって思えば？」

考えていたことを読まれて思わず両手で顔を挟むと、係長はニヤニヤしながら言った。

「越智さんつて分かりやすい顔してるからね
「失礼なつ」

工藤夫妻に生まれた赤ちゃんは真由と名付けられ、すくすくと育つている。

生まれた当初、職場では変わらずクールに振舞つていた課長だったが、家庭では娘に『デレデレ』であることがみどりさんを通して杏子さんから暴露されて以来、子煩惱ぶりを隠そうともしなくなつた。三十三歳で一児の父である秦野主任と「ウチの子自慢合戦」を繰り広げ、携帯に保存してある画像を見せ合つては、「お、その帽子可愛いな」だの「この哺乳瓶使いやすそうだな」だのとやつている。

WEB事業部の独身男性たちから『牙を抜かれた工口狼』の称号を賜り、「オスとしてはもはやライバルではない」と佐久間主任から一刀両断されても気にならないようだ。人間、変われば変わるもんだな。

そんな娘への溺愛ぶりを見て、からかつてやるのもいいかもしない。

「一月一日ね。……一月一日？ あれ、その日つて。
「金子チャンともあれ以来だろ？ 行こうよ」

熱心に誘つ係長の一コ二コと笑う顔を見て返事をした。

「分かりました。みどりさんと真由ちゃんに会いに行くんですよ？」

係長と別れ、私はスーパーに戻つて買い物を始めた。正月用の食品を物色しながら、先程見た様々な彼の表情を脳裏に再生する。

ファンの人たちに辛辣な言葉を吐いたかと思えば、再び私に嫌われることを心配して子供のような顔を見せる。どちらも彼の素顔の一つだ。そしてあの夜私を傷つけ感情をぶつけたのもまた、普段物腰の柔らかい彼とは落差が激しすぎたが、内面の一つなのだろう。

彼はあとどれほどの表情を隠し持つているのだろうか。王子様の仮面の下に。

それをもつと見たいと思う自分がいる。

ちょっとぐらりい意地悪でもいい。拗ねてもいいし、愚痴を言ったつて構わない。策を巡らしているならそれでもいい。彼と一緒に知恵を絞るのは楽しそうだ。

彼と約束したから。何があつても嫌いにならないと。最後まで味方だと。

そしてそれは彼も同じだ。私を絶対に嫌いにならないと言つてくれたから。

心の中に未来を予測する鮮やかな心象風景が広がる。

私たちが進んでいる方向には幾つかの道があつて、更に枝分かれしてとんでもない場所に行つたり元の道に合流したりするとして、支点に着くたび彼と私はどの道を取るかで本音で意見を交わす。選んだ道が遠回りだつたり、高低差が激しかつたりして互いに文句を言い合つかもしれないけど、道端に咲く可憐な花を見つけたり、変わつた角度から見る山のいつもと違う美しさを発見したりして、この道も悪くはないねと失敗だつたことを忘れてしまうだろう。

道の初めは何でもないふうを装つて仮面をかぶつていっても、疲れてきたり、休憩で気の緩んだ瞬間に彼の地が出てくる。それが頻繁になり時間が長くなつて、彼自身がそのことに気づかなくても、きっと私は笑つて受け入れるに違ひない。

道すがら、彼はいつもあの笑顔を見せては、私を安心させてくれるだろう。

それだけは間違いようのない未来だと、確信している。

第一十八話 素顔を見せて 2（後書き）

第1章では明らかにしていなかつた瀬尾ファンのその後と、向井さんについての美春の推理（？）顛末記、でした。

第一十九話 納める日

十一月一十九日。

仕事納めのこの日、業務を早めに切り上げた石津さん、小林さん、そして私のWEB事業部若手三人組は、会社が入っているビルに最も近いコンビニで買い物をしていた。業務終了後に簡単ではあるが納会が行われるので、飲み物やつまみを買いにきたのだ。

おでんの匂いに気を取られつつも買い物の算段をする私と小林さんから離れ、石津さんはひとり雑誌コーナーで何やら物色している。どうせグラビアアイドルの水着写真でも見ているのだろう。

荷物持ちとして連れてきただけなので口の先輩は放つておくことにし、女二人で次々と品物を買い物かごに放り込む。役付き上司たちのポケットマネーが軍資金の出だしだるため、酒を買うのも気分が良い。

会計が終わり、グラビアに田を輝かせている石津さんを呼ぶ。そこに私の携帯がメールの受信を知らせた。兄からである。
『早く上がれることになった。仕事が終わる頃、そつちに迎えに行く。着いたら連絡する』

「げつ」

こちらの都合などお構いなしの一方的な内容に、思わず拒絶反応が声となつて口から漏れた。小林さんが聞きどがめて、どうしたのか尋ねる。

「兄が迎えにくるって」

思いつきり嫌そうに言つた私とは対照的に、小林さんは田を輝かせた。

「えつ、本当?」

そんな彼女に何か違和感を覚える。小林さんは弁護士軍団との合

コンに参加はしたが、テンションの高い他のお姉サマ方とは違つて傍観者というか、常に一步引いて眺めているようなイメージがあったのだ。おとなしい彼女ならではの举措と納得していたのだが、この反応はどういうことなのだろう。

その疑問は部署に戻つてすぐに氷解した。両手に重いコンビニ袋を下げる部屋に到着するやいなや、小林さんは同僚たちに向かつて声を上げた。

「皆さん、大ニユース！ 悠人さまがポチを迎えてくるんだそうですね！」

悠人さまー？ 何じゃそりや！

キヤーッと悲鳴が上がったWEB事業部は一時騒然とし、呆れた工藤課長が「お前らちょっと落ち着け」と冷静さを呼びかけるも、お姉サマ方の興奮はなかなか静まらなかつた。

それを見て小林さんが「ブロゲネタ、ブロゲネタ」とほくそ笑んでいるのを横目に捉え、私は壁に寄り掛かつて衝撃と脱力をやり過ごしたのだった。

悠人さま。あの兄がさま付けで呼ばれている。

その事実は困惑以外の何物でもなかつたが、一方で私はとある決心をしていた。

兄が変態であることを決して知られてはならない。

身内の恥を晒あわらしてはならん。この秘密は墓場まで持つていくのだ。そう心中で決意を固め、買ってきた酒やつまみを部屋の一角に置くと、近くにいた瀬尾係長が声をかけてきた。

「すごい騒さわぎだな」

他人ごとのような言いぐせ、ムツとして言い返した。

「係長のせいじゃないですか」

「なんで僕？」

「歓迎会で兄のこと暴露したでしょうが」

「そりだつたつけ」

もう忘れてんのか！ 根に持つタイプのくせに血ひりの所業に関しては都合良く健忘症になるなんて……

間もなく始まる納会の準備にて、紙皿につまみを分けていたと係長がポツリとつぶやいた。

「僕も会つてみたいな」

「誰です？」

「君のお兄さん」

真意を測りかねて返答に詰まった。のぼせているお姉サマ方とは違い、係長は至つて冷静に兄を観察しそうな気がする。その何もかも見透かすような目で。

もしかしたら彼には兄の変態性を見破られてしまつかもしれない。それはまずい。

私は彼の興味を逸らさうと、身内を卑下する作戦に出た。

「別に係長が会つほどの者じゃありませんよ」

「何、謙遜してるの。弁護士先生だろ」

「まだまだ半人前なんです。それに弁護士だったら他にもたくさんいるじゃないですか」

「別に弁護士に用があるわけじゃない」

「じゃあ、なんで会いたいんですか？」

「それは――」

「ポチー！」

杏子さんから呼ばれて視線を向けると、隅にいるお姉サマ方と共におりでおいでと手を振っている。犬が幼児のような扱いに内心ブツブツ文句を言いながら赴いた。

そして、兄から到着したとのメールをもらつたら、先に彼女たちが下に降りていく段取りを無理やりつけさせられた。

やがて納会がゆるゆると始まった。さつき「ソンビリーで買つてきた缶ビールをクワーフと飲む。……タダ酒は美味しい。

同僚たちも皆顔を緩めてビールやチューハイを取り、WEB事業部は一年間の仕事が終わつた解放感に溢れた。

そこに半田社長が突然乱入し、場の空気を乱す。

「みんな、お疲れ様ー。差し入れだよつ。ほら、美春ちゃん飲んで飲んでー」

仕事納めの日にまで来るとは。

思えば今年、さんざん仕事の邪魔をされたウザい社長だが、解放感のなせる業なのかおおらかな気持ちで彼を迎えた。差し入れのビールを飲んで社長という厄を落とすのもいいかも知れない。

ビール缶に手を出すと、社長が探るような眼差しを向けているのに気づいた。内心で彼を危呼ばわりしたのがバレたか、とドキリとする。

しかし彼の口から出た言葉は私の意表をついた。

「美春ちゃん、クリスマスは楽しかったかい？」

「なんでクリスマス？」

眉をひそめると、更に彼は意図不明な言葉を重ねた。

「だって女の子にとつて、クリスマスは大きなイベントでしょー？」

「恋する女の子にとつてはそうかもしれませんね」

あくまで範囲限定だよ。それ以外にとつちや体ばかりか心まで寒くなる冬の一日に過ぎないんだよ。終わったとたんつきものが落ちたみたいに世間からは忘れ去られて、次にやってくる正月といつイベントにとつて代わられるんだよ。

少々意地悪くクリスマスといつものを中心で定義していると、

社長は不思議そうな目で私を見る。

「美春ちゃんは恋する女の子じゃないのかい？」

ビールを噴き出したそつになり何とか口の中で抑え、間接的に否定する。

「……だつたら何か問題でも？」

ところが社長は可笑しさを堪え切れないといつた表情で応じた。「いやいや、全然問題なんかないんだよー。そうかそうか、そうなのかー」

何が「そう」なのだ。何が可笑しいのだ。私に彼氏がないことがそんなに笑えるとでも言うのか。彼氏を作るな、なんて言つたくせに！

社長はすつと私から離れると、部長や課長がいる輪に近づいていった。意味不明な言動に首をひねつてみると、ずっと隣にいて会話を聞いていた藤田さんが苦笑して口を開く。

「ポチは恋してないの？」

「……何ですか、突然」

彼のほうから恋の話など珍しい。

「好きな人いないの？」

重ねて訊かれ、私はおどけて答えた。

「私は藤田さんが好きって、前にも言つたじゃないですかあ」

しかし彼はわずかに微笑んだだけで、私の軽口を流した。

「そういうんじゃないよ。ポチが本当に好きな人」

眼鏡の奥から深く優しく注がれる眼差しが、心の奥底に仕舞つていた記憶を引っ張り上げ、唇の間から外に連れ出した。

「前にはいましたけど……」

「今はもう好きじゃないの？」

ありためてそう問われれば、そんなことはない、という気持ちが前に出る。昔の想いの有効期限は分からぬけど、変わらずに私の

中で生き続けているのだから。

「好きですよ。ずっと好きだったから。すくなく好きだったから……」

今でもそうだと……

言つてこるうちに尻すぼみになつてしまつた。自信のなさが表れているようで、これでは彼だつて得心しないだらう。

ところが藤田さんはもつと深く切り込んできた。

「俺はたまたま十年続いてるけど、皆がみんなそんな恋愛するわけじゃないよ。情性になつてるだけなら、それは好きつてこうのと違うと思うな」

情性と言われ少し傷つく。ずっと変わらない「好き」の気持ちは純愛ではないのか。たとえ相手がそばにいなくても。

それとも藤田さんの言つとおり、ただの情性なんだらうか。五年間も私の中で変化をしないままの恋心は。

ずっと触れないように閉じ込めていた感情に向き合はされ戸惑つ私に、藤田さんは優しく手を細めた。

「年も新しくなることだし、リセツするのもいいかもしれないよ？」

にっこり笑つて視線を動かした先では、社長が今年最後のバトルを係長に仕掛けていた。

「あれあれ、瀬尾くん。何かスッキリしない顔だねえ」「そんなことはありません。老眼が進みましたか、社長」「今年やり残したことがたくさんあるんじゃないかい？」「いいえ、充実した一年でしたよ、お陰さまで」「また、やせ我慢しちゃってー。できないことを認めるのも、できる男の条件だよ

「いつたい何をおっしゃつておられたのやら。いよいよ本格的に老化が始まりましたか。引き際を見極めるのもできる男の条件だと思いますが」

……今日はバトル納めか。あの一人、来年も舌戦を続けるのだろうか。

納会が終わり、兄の到着を待つ私と先輩女性社員がグダグダと時間をつけす横で、なぜか佐久間主任を始めとする数人の独身男性たちも便乗して残っている。

藤田さんの話では「コワいもの見たさ」に近い心情らしい。兄の完璧な王子様ぶりに、後で自分と比べてショックを受けるかもしれないが、やはり一度は目にしておきたい……のだとか。

なぜこいつも過大評価を受けることになったのか、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。中身はただの変態なのに。

まるで珍獣扱いされている兄からようやくメールが届き、お姉さま方は嬉々として、男性たちは期待と不安を混ぜ合わせたような顔をして移動した。

部屋に残ったのは係長と私の二人だけで、いきなり訪れた静寂に私たちの舌もしばらく動かすにいたが、それも彼が先に沈黙を破つた。

「一月一日、電車で行くことになるけど構わない？ 課長と飲むつて約束だから、車はさすがに無理だな」

「はいもちろん」

「二子玉川の駅のホームで待ち合わせしよう」

「はい。あ、そうだ、お菓子の手土産は私が用意しますから、心配なく」

「そう？ ジャあ僕はワインでも持つて行こうかな」

幾ばくかの時間がたち私たちも移動を始めた。エレベーターに乗ると、係長がさりげなく問いかける。

「さつき、藤田と何話してたの？ 深刻な話？」

「……見てたんですか？」

「ちょっと気になつて」

「係長つて本当に心配性ですね」

彼はそれには答えず、曖昧な笑顔を向ける。

何と言ふべきか迷つたが、とりあえず彼の心配を取り除いてやうと思つた。

「大したことじやないんです。リセゾートしたらつて言われて」「何を？」

「……いろいろです。仕事のこととか」

つい嘘が口をついて出た。

「そうか」

彼はそれ以上追求せずに視線を階数表示に向けた。

一階に到着しドアが開くと、ざわめきが耳に飛び込んできた。エントランスホールの端ではお姉サマ方に取り囲まれて、にこやかに応対する我が兄が立つている。その輪から少し離れてまじまじと皆を観察をする小林さん、更に離れた場所に男性の同僚たちが呆けた顔で視線を送つていた。

係長と私は佐久間主任の隣に立つた。

「何かすげー威圧感。顔つきは穏やかなのに、触つたら切れそう」

主任が兄をそう評するのを聞いて、人によつて与える印象を変えれる兄の得意技が出たか、と内心独りごちた。

そつと係長を見上げると、表情を消して兄を凝視している。変態であることを見破られたらどうしようかと焦つた。

兄がこちらに気づき、お姉サマ方に「失礼します」と断つて輪か

ら抜け出した。

「美春」

流れるような歩みで近づき私たちの前で立ち止まる。通り過ぎる人が振り返らずにいられない印象的な笑顔で。

私は兄と上司二人の間に立ち、三人をそれぞれ紹介した。すかさず名刺交換をする男性たち。

「瀬尾係長さんと佐久間主任さん……ですか。妹がいつもお世話になつております」

「いえ、こちらこそ」

兄と係長、会釈をした一人が顔を上げて正面から互いを見た。

背後で小林さんが「王子様一人そろい踏み！」と小声で言つているのが聞こえたが、この場の注目を集めていることは間違いかつた。

身長はほぼ同じ、見目麗しく、流麗な立ち居振る舞いも互角。この一人が正面を切つて魅力的な微笑みを相手に向けている。しかしそれが作りものの笑顔であることを知つてはいる私の頭をよぎつた言葉は。

キツネとタヌキの化かし合い。

一人が一瞬睨み合つたと思ったのは気のせい。

「三人とも歳が同じなんですよ。話が合つかもしれないですね」

咄嗟に発したどうでも良い情報は、係長によつて「そうか」の一言で片付けられてしまい、この後をどうすりやいいんだと焦つたところに兄が「じゃあ失礼しようか、美春」と辞去を促した。なんだかホッとしたのも氣のせいか。

「良いお年を」

四人が同様の言葉を口にし、兄と私は出口に向かう。他の同僚たちにも同じく挨拶を残して、一步先に行く兄の後ろについた。

センサーが兄の姿を捉えて自動ドアが開いた瞬間、誰に向かつて言っているのか背後から主任の声がかすかに聞こえた。

「お前、受けて立つの？」

それに対する答えながらどうか分からぬが、突然往来から飛び込んできたクラクションの音と重なつて辛うじて聞き取れた声は、係長のものだつた。

「当然だろ」

第一十九話 納める日（後書き）

兄V.S係長、第1ラウンド。一人が感じたことは果たして?

お気に入り登録が1,000件を超えました。こんなに多くの方がお気に入りにしてくださっていることに大きな喜びを覚えるとともに、身の引き締まる思いがします。皆さま本当にありがとうございます。

第三十話 新年の抱負

新年を九時間後に控えた大晦日の午後、私はとある洋菓子店にいた。年越しそばを食べた後空腹になると見込んで、スイーツを買ないきたのだ。

甘い香りが充満する店内は私と同じ発想をする人が多いのか、陳列ケースをのぞき込んで選択に悩む客がそこかしこにいて、微笑みを誘われる。

私はケースの向こうにいる店員に声をかけ数点のケーキを選び、この店が新年は一日から営業することを確認すると、ある物を注文し要望を伝えた。

レジには清算中の母子がいて、カウンターに並んでいた袋入りのクッキーを手にねだる五歳ぐらいの男の子から、母親が袋を取り上げてしている。それを見てつい一日前の光景を思い出し眉をしかめた。

瀬尾係長との今年最後の毒舌戦を終えた半田社長が、相変わらず意味不明な含み笑いを顔に貼り付けたまま退出すると、解放感に溢れていたはずの納会の場を妙な脱力感が襲つた。同僚たちはこれを飲んで忘れることにしたらしく、次々とビール缶を開ける軽快な音が聞こえてきた。

私も右へ倣えとばかりに缶に手を出そうとしたら、杏子さんが鷹のような目付きで尋ねる。

「あんたそれ、何本田？」

まるで狙われたうなぎのような心境になつたが、嘘をつくことでのとか逃げあおせようと画策した。

「まだ一本田ですよ」

兄に会えることで他のお姉サマ方と共にテンションを上げていた杏子さんが、カウントしていたはずはない。そう確信したから、疑

惑の目を向けられても構わず再び缶に手を伸ばした。

すると今度は背中に冷たーい視線を感じる。何だよ誰だよと、視線の出でこむを見ると……係長だった。『飲むな』と美しい顔に淵みを利かせて私を睨みつけていた。が、無視して缶を手に取った。納会だよ？ 仕事納めだよ？ タダ酒だよ？ 飲まずにいられますかつて。

プルトップをプシュッと開けて一口飲んだとこりで背後に寒気を感じた。肩口から腕がニコツと降りてきて右手に収まっていたビール缶を取り上げる。

「ちょっ、泥棒！」

慌てて叫んで振り向いたら、係長が右手にビール缶、左手に携帯を持ってヒラヒラさせていた。

「『教育的指導』見る？」

恥ずかしい映像を見た日の記憶が瞬時に蘇った。まだ消去していなかつたのか、この上司は！

「はい、ポチの負けー」

杏子さんが勝ち誇ったように笑う。私はブーブー文句をたれながらおつまみに手を出したのだった。

三月中旬からこの会社で働き始めてはや九ヶ月。

社長のことさえなれば、ただ楽しくて居心地の良い職場だったのが、今では一体感を伴った空気に絶えず支配されて、自分がこの場にいることを誇らしく思えるまでになつた。

その原因は間違いない瀬尾係長だ。

異動してわずか三ヶ月の間に八面六臂の活躍を見せ、WEB事業部になくてはならない存在になつた。

企画書の書き方を全員に見直させその結果競合プレゼンの勝率が上がったり、受注システムを作り替えて顧客にとってより明確で分かりやすい料金体系を作り上げたり、契約した顧客からのニーズス

リリースを掲載・配信するWebPRサイトを立ち上げたりと、『できる男』の面目躍如たる仕事ぶりだ。

そんな彼を上司である工藤課長も実にうまく使い、さすがにかつてPR事業部で師匠・弟子の間柄だっただけあって、息の合った連携プレイが随所で見られるのだ。

WEB事業部が瀬尾係長を中心にして一つにまとまっている。そして私もその一員であることがこの上もなく嬉しい。

同僚たちの輪の中心にいる彼をチラと見る。談笑するその表情は明るく朗らかだ。

不機嫌さや苛立ちを見せたり、私とのことがあって落ち込んだりと負の感情を表に出すこともあったが、良い意味で期待を裏切つて皆の好意を逆に集めた。人間臭い方がより身近に感じられるのは自然なことだ。

彼がビールを口にしているのが入垣の間から見えた。……あれはさつき私から取り上げた缶じゃないか？

融通がきかなくて口づるさいところだけはいただけない。

私は自分が飲むはずだったビール缶の行く末を名残り惜しく見守つたのだった。

クッキーを欲しがる子供を適当にあしらひ母親を横田に、会計を済ませ出口に向かう。洋菓子店を出ると寒風に身が縮こまった。真冬の切り裂くような空気が肌に痛い。

家路を急ぎながら、私は係長のことを考えていた。

瀬尾係長はこれから何を手指すのだろう。どこに行き着くのだろう。

仕事ができるというのも一種の才能だとすれば、彼の実力は疑いよつもなく他から抜きんでているものだ。もつと上を、そう、一番を手指せるほどだ。

彼自身はあまり意識していないように見える。関心が薄いのかもしれない。良い業績を上げていたら昇進が付いてきたというのが一番近いような気がする。

でも彼はきっと一番になれる人だ。
確信に近い思いが私を支配した。

お墓参りで帰郷した折に訪ねた母校で、陸上部顧問の根津先生が口にした言葉を思い起こした。

才能のある人間が開花するのを傍で見て、その成功に寄与できたことは幸せだった

懐かしい熱が蘇る。高校時代に、一番を目指した熱。先生や部員の皆と一緒に、一つの目標に向かって熱くなっていた日々。もうあんな熱を感じることはないだろうと思つていたけれど、今、係長を見るたびに心の中に沸き立つ想いはあれど同質のものだ。

彼を応援したい。

その想いは自然に、そして当然のように私の中で生まれ出た。

根津先生と試行錯誤しながら自分の走りを見つけていったように。部員の皆が全員で私を支えてくれたように。

今度は私が応援する側につきたい。彼が一番になるのをこの目で見たい。

もう一度あの熱を感じてみたい

生まれたばかりの新鮮な願いを胸に秘めて帰宅すると、待ち構えていた変態の兄がケーキの箱を分捕つた。

「ちょうど甘い物が欲しかったんだよ。持つべきものはお兄ちゃん

思いの妹だな

せつかく気分良く帰ってきたのに……何個か買つておいてよかつた。

兄妹だけあつて私に勝るとも劣らない甘い物好きの兄である。係長とカフェで会つた日曜日、帰宅すると即座に匂いをクンクンと嗅がれ「ケーキ食べてきただろ」と図星を指された。

全部取られないうちに自分の分を確保して冷蔵庫に入れてから、おせち料理を重箱に詰め始めた。これが終われば年越しそばの支度をして……新年までの残り数時間は無為に過ごそう。

我が家は年越しそばを夕食に食べる派である。天ぷらを添えてボリュームを出すが、夜中までにはいつも空腹を感じてしまうので今日はスイーツを購入したわけだ。

兄と二人で向き合つて年越しそばを吃るのは六度目。思えば今年は今の会社に派遣され、正社員になって、転居もして……出会いの年だった。嫌なこともあつたけど、それ以上に良いことがたくさんあつた。

感慨に耽つていたら、兄がニヤニヤしながら声をかけてきた。

「お前、少し前まで上司とケンカしてたんだって？」

ブフツと口に含んでいたつむを吐き出し、汚いなー、とどがめられる。

「な、なして……？」

「ネタ元をバラすわけないだろ」

お姉さま方の一人か。誰だよ、全く！

「上司とケンカなんて、やるな、美春。さすが俺の妹」

「別にケンカじゃないし」

「痴話ゲンカか」

「だからそゆんでねえって！」

兄は愉快そうに目を細めると、とある質問を投げかけた。

「対人関係で心理的に優位に立つにはどうしたらいいか知ってるか？」

「よりもくの情報を持て」

「正解」

こんなことは何度となく兄から聞かされた。しかしそれを妹にも実践するとは。職場の先輩から情報収集なんかして、全く、油断も隙もない。

内心で憤慨している私をよそに、兄は講演で持論を展開する講師のような口調で続けた。

「だから立場が弱い方がより多くの情報を握るべきなんだよ。上司と部下の関係でも、男女関係でも、それは同じ」

「でも手に入れた情報をどう使つかは自由だべ？」

「普通は自分の利益を追求するために、ここぞという時の切り札に使うもんだけだな」

やはり兄は発想が弁護士なのだな、と思つた。他人より優位に駒を進めることが重要なのだ。常にアドバンテージを取り、相手の陣地を奪う。逆綱引きと表現しても良いか。

でも私は昔からただ真っ直ぐ走るだけの人間で、気づいたら相手の陣地深くに入り込んでいる。

ちゃんと目的地を見つけることもあれば、迷つて回り道をしたり、結局すこすごと元きた道を引き返したりするけれど、太陽が昇つて沈むまでは大体の方角が分かるから、いつも空を仰ぎ見ていれば自分がいる位置を不安に思つことなんかない。

「でもお前は、そういうんじゃないんだよな。明かしてもいい情報なら惜しげもなくばら撒く。自分のためだけじゃなく」

「兄も分かっているのだ、それは。」

「それが『越智美春』だから。それでいいんだけど……お兄ちゃん

としては複雑な気分になることもある

何が複雑なのだろう。しかし兄がすぐに放つた問いに思考は遮られた。

「で、ケンカした上司って、あのいい男の方？瀬尾係長だつけてそこまで分かっているのなら誤魔化しても無駄だと思い、諦めて白状した。

「だからケンカじやないけど……うん、まあ」

口の端に意味ありげな笑みを見せ、兄は言った。

「楽しみだな、あいつとの勝負」

あいつ呼ばわり……いやそれよりも、何を勝負するつもりだ。い

い男合戦か。WEB事業部女性社員による人気投票か。

兄はチラと私に目線を動かすと、ニヤリと笑った。

「まあしばらくはあいつ、土俵にも上がれなさそうだけどな

何の話をしているのか、変態の思考回路は常人と違つてついていけん。

「どっちにしても、情報収集は怠るんじゃないぞ」

もちろん抜かりはない。でもそれを兄に言つ氣にはならなかつた。手に入れた情報をどう使つかも。

年が変わる瞬間がやつてきた。兄と共にカウントダウンをしてシャンパンを開ける。二人で迎える新年もこれで六度目だ。

毎年私たちは年が明けると新年の抱負を述べることにしていて、昨年は兄が「事務所でパートナーとしての確固たる地位を築く」と「愛する妹の健康を心配するあまり口うるさく退職を言い続ける」、私が「何と言われようとも絶対に会社を辞めない」だった。結局前の会社は辞めることになつたが、お陰で現在の職場を手に入れた。人生つてどう転ぶか分からない。

今年もまた抱負を兄に訊かれ、少し躊躇したが答えた。

「『身近で頑張っている人を応援する』ってどこだなあ」

係長を応援したいといつ気持ちも、抱負と並んでこだわった。すると兄は声を震わせた。

「そんなことを言われたら、お兄ちゃん感激してむせび泣くじゃな
いか」

「まあいいや。正月だし、そのままカバン違いをせむけいへ。

兄の抱負は「妹の健康と安全と幸せのために粉骨碎身する」だそ
うだ。勝手に言つてゐる。

そういひあるつか、携帯にじどしへしメールが来て、兄は返信に追
われた。私も新しい抱負ができる気分も一新、当人にあけおめメー
ルを送ることにした。

『あけましておめでとうござります。昨年はいろいろありましたが、
今年一年また頑張りますのでよろしくお願ひします』

打ち終わつて改めて読んだら、私らしくないので入力し直した。
『あけましておめでとうござります。昨年はいろいろ苦労されたよ
うですので、今年は女運が上昇すると良いですね。でも非常階段は
ナシですよ。今年もよろしくお願ひします』

送信ボタンを押してから、彼が年末年始は実家には帰らないと言
つたのを思い出した。

年越しを一人で過いでいるのだろうか？……それは寂しそぎ
る。

いやいや、彼のことだ。一緒に過いで女性など両手の指の数ほど
いるはずだ。

手の中の携帯が鳴つた。係長からあることを確認し、自室に移
動しながら通話ボタンを押す。

「はい」

あけましておめでとう

「あけましておめでとうござります」

メールありがとう。今どう？

「自宅です」

今日は……じゃない、昨日か、何してたの？

「お正月の準備と……あとはダラダラ。それと……新年の抱負を考えました」

隠しておけずについ言つてしまつた。

へえ。どんなの？

少し笑いを含んだ、それでいて興味深そうな声だった。

「もつたいないから今は言いません。……でも係長にも少し関係あることですよ？」

少しどこか全部彼に関係することなんだが、本人には黙つておこう。

秘密めかした言い方に刺激を受けたのか、係長もいたずらっぽい声を出す。

……僕にも新年の抱負があるんだけど、大いに君に関係あるんだ
私に関係ある？ 何だろう。

期待に胸がワクワクしたが、ふと不愉快な光景が瞼の裏をかすめ、
正月早々心が真っ黒になった。

「お断りします」

え！？

なぜ驚く。そんなもん、断るに決まってるだろ？が。

「何と言われようと絶対に嫌です」

ここは頑として突っぱねてやる。

……嫌、なの……？

まるで一瞬にして花がしおれたかのように生氣のなくなつた声で
確認する彼に、にべもなく返事をする。

「当たり前です」

……話だけでも聞いてくれないかな

話をすれば自分のペースに持ち込んで翻意させられると思つてい
るのか。その手には乗らん。

「」期待には添えられません

今すぐでなくともいいんだ。僕は待つつもりだから

厳しくはねつけてやつたのに、引き下がらない。諦めが悪いぞ。

「無駄です。他を当たつてください」

……他なんてないんだよ、僕には

そんな悲しげな声を出したってダメだからー

「知りませんよ、そんなこと

越智さん……

だからそんなに切なく名前を呼ぶな。ほだされてしまいそうにな
るじゃないか。

流れされかかった心をむんずとつかみ引き戻して、私は高らかに宣
言した。

「係長が何とおっしゃつたと、私は今年もお酒を飲みますからー」

……酒?

「飲酒をやめさせようたつて、そひはいきませんからねつ
はつきりと「今年も飲酒継続宣言」を叩きつけてやつたのに、な
ぜか受話器の向こうからはホツとした声が聞こえてきた。
そりが……

そこに突然聞き慣れない声が飛び込んできた。

達兄、誰? オンナー?

まだ大人になりきっていないような若い男性の声。続けてくぐも
つた声で、うるさい、あっち行つてろ、と聞こえる。

「ごめん。今、親戚の家にいるんだ

親戚。何だ、そつか。係長、一人じやなかつたんだ。

「良かつた」

……マズい。最後の一言だけつい声に出てしまつた。何とか誤魔化

せ。

「……ですね、紅組が勝つて」

勝つたのは白組だよ

大晦日ならではのネタを使って我ながらうまいこと感心したのだが、まさか係長が紅白を見ていたとは。ここは潔く撤退することにした。

「それじゃ、あさって、あ、もう明日ですね」

越智さん

「はい？」

彼は少しの空白を置くと、弾んだ声を出した。
僕は新年の抱負をきっと現実にしてみせるよ
はあ？ 飲酒はやめないと言つてるだらうが！

「係長、しつこいですよ」

うんざつした声で言つたら、彼はクスクス笑つた。
うん。しつこく行くことにしたから、覚悟しておいてね。今年もよ
ろしく

「……よろしくお願ひします」

通話を終えて撫然とする。

……しつこくて融通がきかなくて口うるをこというだけはいただけ
ない。

第三十話 新年の抱負（後書き）

美春を振り向かせる」と、酒をやめたせると、どうが難しい
でしょうか（笑）
そして、美春が手に入れた情報とは……？

第三十一話 笑顔が見たいから

待ち合わせ場所に現れた私が手に提げた袋をのぞいて、瀬尾係長が目を丸くした。

「ホールケーキ買ったの？ 正月なんだし和菓子にするかと……」

課長宅を訪問するに当たりこちらで用意すると書いておいた手土産に、いちゃもんをつける。

下りのホーム。折よく到着した電車が起こした風になぶられた髪を押さえ、私は言い返した。

「係長つてベタですよね」

「君ほどじやないけどね」

「どうせほとんど私が食べるんだから、私の好きなモノを持つてい方がいいじやないですか」

扉が開いて降りてきた乗客に場所を空けながら、係長が苦笑してつぶやいた。

「それって手土産つて言つのかな」

凍りつくような冷たい空氣の中に真冬の太陽の光が煌めく、寒さと暖かさが同居するような新年一日の午後。

課長の自宅へ向かう道を係長と並んで歩く。駅前はすでに営業を始めた店がちらほらあって、中途半端な活気に溢れていた。

前回は課長が車で迎えにきてくれたため、街の様子を観察する暇もなかつた。物珍しげにキョロキョロしていると、係長が口を開いた。

「今日はお兄さん、何してるの？」

その問いの裏に単純でないものを感じ、つい口元が緩む。

「大学時代の友達と会つて言つてましたけど……係長も気になるんですか？」

「僕『も』つて？」

「ウチの兄、係長に対抗意識燃やしてるんですよ。勝負とか何とか」
彼は黙つたまま前方を見つめ、私は喋り続けた。

「オトコママ工同士つてライバル意識が強いんですねかね。両雄並び立たず、ですか？」

「さあな」

「もしWEB事業部で人気投票をやるんなら、私の清き一票は係長のものですから、ケーキ付きで。あ、この手は小林さんにも使えるかも」

「それのどいが『清き』一票なんだ」

「杏子さんにはどの手でいきますか？　みどりさんの知らない課長情報かな」

「それなら僕はいくらでも知ってる」

「じゃあこれで三票獲得ですよ」

「君は選挙対策委員長か」

「だつて係長に勝つてほしいですから」

「……本当に？」

「そこだけ妙に感情のこもった声を出し、こちらをじっと見る。妹が兄の応援をしないのは奇妙に感じられるのだらう。」

「本当ですよ」

職場での妹の言動をこつそり探るような変態兄をこれ以上調子に乗らせないためにも、係長には勝つてもらわないと。それに私は彼の応援をすると決めたのだし。

力強い返答を受けて係長は安心したように笑つた。ライバルの妹が自分の側についたことがやはり嬉しいのだな。

正月特有の静けさが包む住宅街に差し掛かると、門や玄関に飾られた様々な松飾りやしめ縄に目がいく。

「雪のないお正月って変だと思つてたけど、慣れればそうでもないですね」

「田舎に帰りたくはない？ 友達に会つたりしたいんじゃない？」
係長はこうして時々、さりげなく優しい言葉をかける。私を思いやつてくれていることを感じて、嬉しくなる。

「そうでもないですよ。時々電話で話してるから」

「もしかして」

彼は顔を前方に向けたまま、変わらず自然な口調で続けた。

「会いたくない人がいる？ 好きだった人とか」

足が止まり、顔が固まった。いつもならパツと思い浮かぶ切り返しも、なぜか出てこない。突然急所を突いた係長を恨みがましく思つた。

振り返つて優しく微笑む彼に、私は唇を尖らせる。

「ずるいですよ、係長は」

「そうかな」

「ずるいです」

優しいうつて思つたばかりなのに。……係長のバカ。

玄関で私たち二人を迎えたのは、みどりさんの朗らかな声だった。

「いらっしゃーい、おそろいで」

「おそろい？ どういう意味だ？」

「おう、来たか」

みどりさんに続いて奥から課長も現れたので、四人で新年のあいさつを交わす。

彼女はやや寝不足気味の顔ではあるが元気そうだ。新米ママとして頑張つているに違いない。実の両親が近くにいるのだから、子育てに関してこれ以上強い味方はいないだろう。

みどりさんにケーキの箱を託して冷蔵庫に入れるように頼むと、私はリビングに向かつた。その一角では工藤家の姫様、真由ちゃん

んが小さな布団の中で目を開けている。今は授乳が終わつたばかりでご機嫌らしく、彼女の小さな手が私の人差し指をぎゅっと握つた。

「まーゆーちゃん」

可愛いなあー。

「えー？ まだ？」

突然みどりさんが大きな声を上げた。振り返ると課長、係長と共に固まつてリビングの入り口に立つている。

「……何がまだなんですか？」

三人は互いに目を見合せたが、苦笑した課長が私の問いに答えた。

「瀬尾がまだ初詣に行つてないって」

それがそんなに驚くようなことか？ それとも東京の人には必ず元旦に初詣に行くものなのだろうか？

私は昨日兄に連れ出されて行つてきたが、あまりの人出の多さに疲れきつてしまつた。できれば二が日は避けることをお勧めするよ。

「あ、お茶淹れるねー」

みどりさんがそそくさとキッチンへ向かつたので、初詣について私の見解を述べるタイミングを逃してしまつた。……まあいいや。真由ちゃんを抱っこさせてもらおうつと。

小さな身体を抱き上げソファに移動した。赤ん坊特有の甘い匂いが鼻と心をくすぐる。

思えばあの日みどりさんが産氣づかなかつたら、係長と私は和解には至らなかつたかもしれない。この無垢な存在の前では、争いごとをする自分たちの愚かさをあらためて思い知らされる。

チヨイチヨイと指の腹で優しく頬をつつく。可愛いーー。頬ずりしたいがわざかでも化粧をしていたことを思い出してやめた。隣に係長がやってきて小さな顔をのぞき込んだ。彼もまた同じ感

慨を抱いたのかもしれない。私は赤ん坊の視界に彼が入るように身体の向きを変えた。

「ほーら真由ちゃん、パパの弟子のおじさんですよお

「おじさんって言つな」

「何の弟子かは大人になつたら教えてあげるねー」
ギヨツとした男性一人が慌てて口を差し挟む。

「おいボチ」

「ちよつと」

「あれあれー、二人とも今何を想像したのかなー、ねー真由ちゃん

ん」

お茶を淹れて持つててくれたみどりさんが吹き出した。

「完璧瀬尾くんも美春ちゃんの前じや形なしね

「うん、参るよ、ホント」

「その割には嬉しそうだぞ」

「工藤さんー」

そこでふと楽しい悪戯を思いついた。係長にさつきの仕返しをしてやろう。

「はい、係長も真由ちゃん抱っこして」

「え、僕？　い、いいよ」

あたふたする彼に命令口調で迫る。

「ダメです。師匠の娘ですよ。ホラホラホラ」

半ば無理やり彼女を渡した。おつかなびっくり赤ん坊を抱える係

長。

「うわ、似合わねーなー、瀬尾と赤ん坊」

「工藤さんには言われたくありませんよ」

師匠と弟子が心温まる会話を交わす間に私は携帯を持ち出し、「係長！」と呼んで彼が視線をこちらに向けたところで写真を撮った。

「越智さん、何、写真撮つてんの？」

私は画面を三人に向け、水戸黄門の印籠のように携帯を掲げた。

「突然『あなたの子よ』と赤ん坊を渡され目を白黒させる男の図」

「なつ……」「

「わ、笑えるつ、美春ちゃん、それ」

「瀬尾、身に覚えあるだろ」

しばらくの間、笑いの渦の真ん中で、係長は苦虫を噛み潰していった。

ようやく真由ちゃんから解放された係長は、ホッとしたのか舌の動きが滑らかになり、ブツブツと文句を言い始めた。

「冗談じやないよ、全く。最近はすっかりおとなしくなったんだからね

ここでも私は彼をやり込める手を緩めない。

「そうですね、WEBに来てからは前日と同じスースだったことってないですよね」

「えつ」

「それで朝、後輩にネクタイ買いに行かせたりとか

「なつ」

「来る者拒まずで付き合つてたら、デートをダブルブッキングしちゃつて代わりに後輩に行かせたりとか

「ちよつ」

「今カノ元カノの誕生日を取り違えて覚えて、慌てて後輩に花束買に行かせたりとか

「…………」

マシンガンの「ごとに繰り出す過去の女つたらしエピソードに、

本人は手も足も出ない模様。ムフフ。してやつたり。

これが私なりの、手に入れた情報の使い方である。

「まあまあ、美春ちゃん、あんまり瀬尾くんいじめないであげてよ
口を手で押さえ赤くなつてそっぽを向く係長のために、みどりさん
が弁護に回る。

「昔はともかく、今はちゃんと落ち着いた恋愛したいと思つてゐるの
よね、瀬尾くんも」

「それはまあ」

「外見だけ見て言い寄つてくるような女の子じゃなくて、瀬尾くん
が自分から好きになつた女の子と付き合いたいのよね」

「うん」

「でね、そういう女の子って案外近くにいるものなのよ、美春ちゃ
ん」

「へーえ」

みどりさんつて同期だつただけあつて、係長のことよく分かつて
るんだな。

「じゃあ、去年の夏にアパレルD社のマーケティング課とPホテル
の広報部の女性二人から言い寄られたのに付き合わなかつたのつて、
好きな人がいたからなんですか？」

ダメ押しの暴露にもはや為す術もなくなつたのか、ポカンとした
顔で彼が尋ねる。

「あの……さつきから君は何だつてそんな情報を」

実を言ひつとあの女子化粧室での騒動以来、片岡さんを始めとする
数名のPR事業部社員と交流を持つており、そこからネタが上がつ
てくるのだが、もちろんネタ元をバラしたりはしないぞ。

「クライアントの人ですか？ それともPR事業部の人？ だつた
らWEBに異動してきてあんまり会えなくなつちゃつたんじゃない
ですか？」 うつ、氣の毒だなー、係長」

三人は顔を見合わせ、そろつて溜息をついた。

「瀬尾、前途多難だな、お前……」

前途多難な恋。なかなか会えないとそうなつてしまふのか。でも、

会えない時間が愛を育てる、なんて言葉もあることだし。係長、頑張つて！

私はひそかに彼にエールを送った。

酒宴が始まり、お歳暮で贈られたという岡山産の酒が振舞われた。みどりさんお手製の酒の肴と共にいただく。

係長が見ていない隙を狙つてグラスを傾け芳醇な香りと味を楽しむも、さりげなく酒瓶は手の届かない位置に置かれてしまった。恨めしげに見ていたら、そういえば、と課長が思い出したように口を開いた。

「竹内と白川の結婚式、六月に決まつたって聞いたか？」

係長が暗躍して仲を取り持つた一人だ。私は素知らぬふりで話に耳を傾けた。

「六月にしたいようなことは聞いてましたけど……決まつたんですか、良かった」

「お前が縁結びしてやつたんだろ。絶対スピーチ頼んでくるぞ」

「それは勘弁してくださいよ」

苦笑いする係長の内心を私は推し量つた。事情が事情だけに祝福のスピーチをするのは複雑な心境だろう、いくら腹黒といえども。課長は隣に座るみどりさんに向かい、更に話を続けた。

「常務の奥さんが仕切るらしいぞ」

「えつ、本当？」

「常務の奥さんって？」

口を挟むと、みどりさんが少し高揚した調子で語り始める。

「川嶋常務の奥さんってね、ウエディングプランナーなの。VIPの結婚式なんかも手がけるすごい人なのよ」

ウエディングプランナーで、政界や財界人ばかりかスポーツ選手や芸能人の結婚披露宴もプロデュースし、合間に講演もこなして全国を飛び回っている人なのだそうだ。

常務の口利きで転職することになつた縁もあって、課長夫妻の結婚式を手かけたのもこの川嶋夫人なのだといふ。

「自分で会社を興して大きくして、それでいてちゃんと家庭も持つてゐる。確かに美春ちゃんと同じぐらいのお嬢さんがいるのよ。ある意味、女性の憧れかもね」

確かにそれはすごいことだと思う。キャリアアップを図る女性にとって、出産や育児は時として歩みを遅らせる要因になるだろうから。夫の協力だって欠かせないだろう。

「川嶋常務は今でも奥さんにベタ惚れでさ、机に写真なんか飾つてあるんだよ。年上女房なんだけど、美人なんだ、これが」

あの女子化粧室で威儀を漂わせていた常務が、私生活では奥さんにベタ惚れで仕事も応援して 男の人って分からないものだなあ、と思った。

みどりさんが結婚式のアルバムを見てくれた。

Aラインのボリュームのあるスカートが特徴的なウエディングドレスが、彼女の可愛さを引き立たせている。隣に立つ課長もオトコマエ全開だ。

結婚披露宴は美しい庭園を持つ邸宅を貸切にしたハウスウエディング形式で行われ、二次会を行わない代わりに多くの人を招いたのだとか。

正装したWEB事業部の面々があちらこちらに写っていた。日付を見ると一昨年の五月十八日とある。約一年半前か。

「いい季節で、お天気も良かつたのよね。庭園の花がそれはもう見事で」

「竹内も俺達の式を見て気に入つて、常務に話を持つていったんだと。でもまさか奥さん自ら仕切ってくれるとは思つてなかつたらしい」

私は係長が写つてゐる写真を見つけ、声を上げた。

「係長が写つてますよ、ほら、新郎よりも目立っちゃつて」
しかし彼はかすかに頬を動かしただけで、顔には何の感情も現れていなかつた。むしろ、意図して表情を消しているように見えた。
そういうえばさつきからずつと黙つたままだ。心配になつてじつと窺うと、氣づいた彼は「どれ」と言ってアルバムをのぞき込んだ。
「あのとき工藤さんに脅されたんだよな。『今日の主役は俺だぞ』つて。大人げないというか、呆れてものが言えなかつたよ」
「そのあと『普通、主役は花嫁の方です』って言い返したじゃねえか」

いつもの彼に戻つたが、どうも気になる。竹内係長の結婚式の話題は、彼にとつてやはり複雑な感慨を呼び起こすものなのかもしれない。

彼に笑顔になつてもらおう。冷蔵庫の中で出番を待つているものは、きっと彼に笑顔をもたらしてくれる。

そう考えた私は、キッチンに向かうみぢりさんに続いて立ち上がつた。

この夜みぢりさんはすきやきを用意してくれた。準備を手伝う傍ら持参したケーキをそつと見せる。

「美春ちゃん、これつて
ニカーと笑つてうなずいた。

タイミングを見ながら課長もこつそり巻き込み、家中を見せるところ名田で係長をリビングから連れ出し、全ての用意が整つた後

一人を呼び戻した。明かりを消して暗くなつた部屋の入口に立つ係長の戸惑つている姿が、廊下から入る光の中に浮かんでいる。

「え？ 何？」

「ハッピバースデイトゥーユー、ハッピバースデイトゥーユー」
みどりさんと私が歌いながら、驚いている彼を奥に導く。テーブルの上には二十八本のロウソクに火を灯したバースディケーキ。
歌い終わつて拍手と共に祝いの言葉を述べる。

「おめでとう」

「おめでとうございます」

ずっと果然としたまままでいた係長は、よつやく「ありがとうございます」と口に出した。

「はにかむなよ、大の男が氣色悪い。ホレ、さつさとロウソク吹き消せ」

からかい混じりに課長に促され、恥ずかしがりながらもふう一つ大きく息を吐いた。一度吹いて全ての火が消えると、再び拍手。課長が照明を点けたので照れてる係長の顔が良くなえた。

「これ、もしかして越智さんが持つてきたケーキ？」

「はい。だつて誕生日にはケーキとロウソクでしょ？ 私の方がベタだつて言つたの係長ですよ？」

おどけて言つたら、眩しそうな笑みを見せる。

「ありがとう。でも何で知つてたの？」

「情報屋はネタ元バラしませんよお」

もちろんこれもPR事業部の人から聞いたのだ。と言つても係長の誕生日を知つているのはほんの一部の人たちだけというから、私がこの情報を得たのはラッキーだつたと言えよう。

彼に一本のフォークをはい、と渡した。

「主役が最初にどうぞ。係長仕様に甘さ控えめですから」

ホールのケーキから直接フォークですくつて口に入れた彼は、満

面の笑顔を見せた。

「美味しい」

みどりさんと私がまた拍手すると、再びすくつて口に入れると

「美味しい」

そしてまた笑顔になつて私を見た。

「オチた」

課長の小さなつぶやきに係長がすぐに応じる。

「とつぐにオチてます」

何が落ちたの？ ケーキ？

「係長、ケーキこぼしたんですか？」

子供じゃあるまいし、こぼすな。そう思つたのだが、三人とも声を上げて笑い出した。

何だ何だ。完璧瀬尾くんがケーキをこぼしたことがそんなに笑いの琴線に触れたのか。ウチの変態は皿まで舐める勢いで食べるから、今更可笑しくもなんともないけど。

且論みとは違つたが、用意したケーキが笑いをもたらしたことには変わりはないから、まあ良しとするか。

そつと心の中でつぶやく。

ねえ、あんちゃん。私はやつぱり、手に入れた情報をこんなふうに使つてしまつよ。

だつて、係長を応援するつて決めたから。

彼が笑つてくれると嬉しいから。

彼の笑顔が、見たいから。

第三十一話 笑顔が見たいから（後書き）

第三十一話 息子登場

「やあみんな、あけましておめでとぉー」

新年早々語尾を伸ばしたお馴染みの声がWEB事業部に響いた。後ろに松永部長以下のWEB事業部管理職の面々を従えて部屋に入ってきた半田社長に、あけましておめでと「いざこます」と挨拶を返し頭を下げる我々。

ドラマで見た医学部教授の回診をながらの登場である。

「お、美春ちゃん、おいでおいでー」

早速指をクイクイと動かして私を呼ぶ。犬じやないつーの。「年末年始は会えなくてつまらなかつたよお。やつぱり会社に来るのが一番だなー。美春ちゃんに会えるからー」「あんたは何しに会社に来るんだ、オッサン。

「でね、年始祝いをしたいんだけど、今日美春ちゃんをランチに招待しても構わないよねえ、松永部長?」「構いませんが」

「工藤課長?」

「問題ないですね」

「瀬尾係長?」

「……そうですね」

「はいっ、異議ありっ」

手を挙げて反対をひとり表明する。なぜ私の意見を最初に訊かないのだ?

「私はお弁当を持つてきつてありますので、お断りせ」

「あー、お弁当ね」

全て言い終わらないうちに社長が私を遮り、同僚たちを見回して声を上げた。

「ひとり暮らしの独身男性は手を挙げてー」

手を挙げた数名の中から一番近くにいた斎藤さんを選び、肩にポンと手を乗せる。

「君、喜びなさい。今日のお昼は美春ちゃんの手作り弁当だよー。滅多に味わえないよー。希少価値高いよー」

私の弁当が本日収まる胃袋を勝手に指定すると、今度は係長に向かつて口を開いた。

「あれあれ、瀬尾くん、そんな羨ましそうな顔してー。美春ちゃんのお弁当、食べてみたかったー？」

湿度の高い口調で係長を挑発したものの、純度の高い爽やかさでもつて応じられる。

「いえ別に。越智さんの弁当なら食べたことがありますから」

「この発言に「えええーっ」とぞわめく同僚たち。私は頭を抱えた。事実だが言葉が足りなさすぎる！」

「口、コンビニ弁当と交換したんですね。倉田さん、大森さん？」

無用の誤解を防ぐために、その場にいた証人に話を振った。

「うん、係長、ポチのお弁当分捕つちやつたのよね」

「そうそう、そうだった」

先輩一人の証言により場が静かに收まる。やれやれと息をつく間もなくオッサンが能天気な声を発した。

「ふうーん、まあいいや。じゃあ美春ちゃん、十一時に迎えにくるからねー。楽しみに待つてねー」

そう言つてスキップでもしかねない陽気さで、足取りも軽く部屋を後にした。

……新年早々、社長が引っかき回してくれたお陰で脱力するWEB

事業部。

「お前さんもつぐづぐ大変だなあ、ポチ」

同情の目で部長が私を見る。

「そう思つんなら部長の力で何とかしてください」

同情するなら金を……じゃなくて社長排斥運動でもしてくれ。

しかし部長からは残念な答えが返ってきただけだった。

「俺には瀬尾みたいな度胸はないよ。……思ったんだが社長、ポチにかこつけて実は瀬尾と張り合いたいだけなんじゃないか？」

それは穿った見方であるかもしね。何かと係長を挑発する態度から見ても、その可能性は高い。

「でもどうして係長と？」

「いい男への嫉妬だ」

「なるほど」

面白くなさそうな表情で自分の席に向かう係長を見ながら、うんうんとうなづく同僚たちであつた。

予告どおり十一時に迎えにきた社長とともに呼びつけたタクシーに乗り込む。しかし五分もたたないうちに到着し内心すっごけた。そんな近距離でタクシー使うな！

すでに予約がしてあるらしいその店は、高層ビルの展望レストラン街にある日本料理店だった。高級感漂う店構えに少し気後れしたが、ピシッと背筋を伸ばして腹に入れる。

私の意見などお構いなく連れてきたからには豪華ランチを食べてやる。そこそこ遠慮はしないからね！

社長が名前を告げると店員が心得たと言わんばかりに微笑んで先導する。東京のパノラマが一望できる窓際のテーブルの一つに案内されると、そこには先客がいた。

立ち上がり、「こんにちは」と微笑む、まだ十代と思しき若者。思いがけない第三者の登場に戸惑いながらも挨拶を返す。

「社長は一コ二コしながら彼の正体を明かした。

「美春ちゃん、紹介するね。これ、僕の長男の光^{ひかる}」

驚きのあまりポカンとしている私に、社長の息子はあらためて名乗つた。

「初めまして。半田光です。いつも父がお世話をなっています」

「……初めまして」

「さり、美春ちゃん、座つて座つて。お腹すいたでしょー？」

席に着き、社長と店員が注文のやり取りを交わす間、隣同士に座った父子をしげしげと眺めた。言われてみれば、目もどが似ている。笑つた口もども。

突如として思い出す、息子の嫁候補の話。

あの話は冗談にしろ、これが件の息子なのか、高校生の。今はまだ冬休み中なのだな。しかしながら私と会わせようとしたのだな。

注文をとり終えた店員が去ると、半田ジユニアが人懐っこい笑みを浮かべた。

「親父ね、家で美春ちゃんの話ばっかするんですよ。美春ちゃん足すつじく速いんだぞー、インターハイ四位だぞー、可愛いんだぞーつて。もうウザいぐらい」

自宅でもウザがられてるのか。

「だから俺、美春ちゃんにびうしても会つてみたくなつて、親父に会わせてよつて頼んだんです。あ、ゴメン、親父が美春ちゃん美春ちゃんつて呼ぶもんだから、つこ俺も…… 美春ちゃんつて呼んでもいいですか？」

親しげだが押し付けがましくない話し方に好感を持ち、了承した。「俺も陸上部なんですよ。だからすつじい尊敬します、美春ちゃんのこと」

「いえそんな」

照れるじゃないか、少年。

「光……くんは種目は何をやつてるんですか？」

「中距離です。好きなのは千五百メートル」

「秋には都大会でイイトコまで行つたんだよねー」

嬉しそうな顔で自慢する父親に向かつて、息子は顔をしかめた。

「インハイ四位の前で都大会に出たぐらいで自慢すんなよ、恥ずかしいだろ」「

わざとぞんざいに口を利く様子が微笑ましくて、ついクスクスと笑つてしまふ。

「ほら美春ちゃんだつて笑つてんじやん」

「だつてそれぐらいしか自慢することないじゃないかー、光くんは

ー

「光くんつて呼ぶな、恥ずかしい」

「あはははは」

本氣で笑つてしまつた。あのおぢやらけ社長が、ここではひとりの普通の父親で。高校生の息子からウザがられていて。何だかすごいいいなあと思つてしまつた。

豪華に毎のしゃぶしゃぶコースを注文して上質の肉を堪能する私たちの間で、会話は更に盛り上がつた。互いに陸上部ということでの話題には事欠かない。練習方法を初めとして、身体のメンテナンスとか、試合に臨んでどう集中するかとか。

私がレース前に集中すると、完全に「入つて」しまつて周りが見えなくなると言つと、陸上部の仲間にもそういうタイプがいると教えてくれた。

そして、陸上を始めたきっかけが憧れだつたことも。

「本当は俺、ハイジャンやりたかつたんだ。子供の頃に見て、すげーカッコイイつて思つたの。でも中学の時に向いてないつて分かつて、中距離に転向したんだ」

そういう挫折は誰にでもあることだ。でもそこで陸上部を辞めたりしないで他の種目に転向したというのは、彼が柔軟な考えを持ち合わせてからだらう。陸上競技が好きで、部員の仲間も好きだ

つたんだろう。

そんなふうに想像して彼が陸上を続けてきた軌跡を思い描いた。学校生活についても楽しそうに語るのを聞いて、久しぶりに自分の高校時代を思い出した。光くんは明るくて話が面白くて、きっと学校でも人気者なんだうなと思われた。

会話が弾んでお腹もいっぱい、満ち足りた気分になつた頃、社長の携帯がブーッと震えた。

「三沢くんだよー。もう帰つてこいつで。うるさいんだから、ホント

慌てて時計を見るとすぐに休憩時間は終わつている。

「私も帰らないと」

ところが社長は私を制して立ち上がつた。

「君たちはまだデザートが残つてるでしょ。光くんにもせひちょっと付き合つたげでよ。美春ちゃんの上司にはちやんと話しておくからー。ね？」

確かにまだデザートが来ていなかつた。食べずに帰るのは惜しい。社長がそう言つのならと、ありがたく残ることにした。

社長が去り、デザートが運ばれてくると、光くんは少し真面目な顔つきになつた。

「女の子ってたいてい甘いモノ好きだよね

「うん」

「例えばデートに行つてスイーツの店に入るとするでしょ？ 彼女と一緒にスイーツ食べる男と、彼女一人に食べさせて自分はブラック飲んでる男とどっちが好き？」

恋の相談か？ 可愛いつ。

「一緒に食べたら嬉しいかも……甘いモノの話で盛り上がり楽しいですね」

「やつぱそつだよね」

破顔して抹茶アイスあん・生クリーム添えを頬張る。私も同様に口に入れて濃厚な抹茶の香りを楽しんだ。

「美春ちゃん、社長の息子だからって俺に敬語使わないでよ」
だいぶ打ち解けていたにもかかわらず、私は依然として敬語で話をしていた。年上なのは私だから、一方的にこちらだけが敬語を使うのはおかしいのだが。

「いやー、目の前に御曹司がいるのかと思いつつ、つい敬語になっちゃって」

「お、御曹司……」

「だつて生の御曹司なんて見るの初めてだから」

あまりにアンポンタンな物言いに、光くんは声を上げて笑った。

「御曹司はやめてよ。俺の父ちゃん、サラリーマン社長だし。世襲じゃないんだから、俺があの会社継ぐわけでもないよ」

言われてみれば確かにそうだ。

「それにそんな器でもないし、やる気もないもん。『たとえ社長になれる器があつたって、本人にその気がなかつたらどうしようもない』って、父ちゃんいつも言つてるよ」

しかしこの言つようには納得しかねた。十代の若者が何を言つかる。「まだ高校生なのに、自分から器を小さくしてどうすんの。それにやる気なんて人によつて出てくる時期は様々なんだから、今から未来を限定しちゃダメだよ」

年長者として未来ある若者を力づける言葉。私つていいこと言つなあ。

「走る以上は一番を目指すのが鉄則でしょ？ 走る前から諦めてたらベストタイムだつて出せないよ？」

光くんはじつとこちらを見ると、小さくつぶやいた。

「……なるほど。うん、あり得るかも」

自分の未来への可能性に気づいてくれたか。私の言葉が一人の若

者にとつて人生のターニングポイントとなつたかもしれない。十年
ぐらいたつたら彼に感謝されるぞ、きっと。

一つの明るい未来を想像して私はにっこり笑つた。

美味しい食事をいただき、社長父子の暖かな関係を知り、光くんのピュアな人柄に触れるなど、様々に実りあるランチタイムを過ごして社に戻る。仕事始めの日にこんな幸せな思いをして、なんと幸先の良いスタートを切つたことだろう。

しかしそう思つたのはほんの束の間だつた。職場に足を踏み入れた途端、待ち構えていたかのように同僚たちが好奇心丸出しで私を取り囲む。

「どうだつた？　どうだつた？」

「どうだつたとは？　しゃぶしゃぶランチのことを訊いているのか？」

「そりや美味しかつたですよ、とっても」
ひえええ、とお姉サマ方が口々に叫ぶ。

「そんなにオイシイ男だつたの？」

男？　光くんのことを言つているのか？

「で、この話受けるの？」

この話つてどの話？　いかん、全く見えていない。

ポカーンとしていると、杏子さんが詰め寄つてきた。

「この見合い話、受けるのかつて訊いてんの…」

見合い！？　何じやそりや！

「ポチ、ちょっととちょっと」

藤田さんが手招きして私を呼んだ。

「その様子じや、何も知らされてないんだろ。あのね」

と工藤課長を見つけてこいつ言つた。

「あ、工藤くーん、美春ちゃん少し遅れるけど。戻つても叱つちゃだめだよー、これ社長命令ねつ」

「はあ……承知しました。あの……越智はひとつで何をやつてるんですか？」

工藤課長との会話ではあるが、よく通る声で、部屋にいた全員に話は聞こえてこる。

「ひとりじゃないよー。お見合いで中だかーー」

「は？」

恐らくその場にいた全員が耳を疑つたに違いない。

「あとは若いふたりでつてねー。今ごろ意気投合してるとかなーーと。あれ、瀬尾くんもいたんだー。普普普普。そういうことだからね、美春ちゃんを叱らないように。分かったねー！」

私はガックリと机に手をついて身体を支えた。

あのオッサン。じうじにいつもにいつもみんなを誤解をせるような爆弾発言をしてくれるのだ。私に何の恨みがあるのだ。せっかく愛のある父親として好感度アップしたといつのに。

私は見合い疑惑を晴らすため、社長とタクシーに乗つた時点から詳細にこのランチタイムの様々を語つた。一通り聴き終わると、杏子さんがあらためて確認する。

「高校生の息子？」

「そうです。陸上の話で盛り上がつただけで、見合いで何でもないんですよ」

これでみんな納得してくれただらう。社長流の冗談だったということ。

しかし、私を見る同僚たちの田はなぜか一様に冷たい。いつたい何なのや。

一同を代表して石津さんが口を開いた。

「若いオトコと、血からしゃぶしゃぶねえ……」身分だな、お前

げつ。や、そこにはシッコリがくるとは。ヤバい。何と言えば。

言葉を探して焦っていたそのとき、私を救う天使の声が聞こえてきた。

「みんな、そろそろ越智さんを解放してやつて」

係長の魅惑のテノールが同僚たちを渋々仕事に戻らせる。

私は心中で彼に礼を述べた。口には出さないがこのキラキラした目を見てくれれば、感謝の気持ちは通じているはずだ。

彼はこちらに向き直るとふんわりと微笑んで名前を呼んだ。

「越智さん」

「はいっ、何で『やいましょ』

「今日、一時間十五分居残りね」

「へ？」

黒い笑みに変わった美しい顔で私を見下ろす。彼がこうこう顔をする時、良くないことが起きるのは経験済みだ。

「休憩時間オーバーした分はちゃんと居残って働いてもらつから

「えええっ！」

ブブブツと周囲に笑いがさざめく。

「でもだって、それは社長が」

必死の反論はしかし冒頭、だけで遮られた。

「社長には君が遅れたことは叱るなと言わただけだよ。僕が言つてるのは労働時間はきちんと守つてもらつないこと。言い訳は認めない。オーバーはオーバー」

鬼！ 融通きかねえ！

「か……課長おお」

課長に助けを求めてみたが、「俺に異論はない」と冷たく取り合おうともしてくれない。が、顔の前にかざした書類を持つ手が小刻

みに震えている。

笑っているなその顔は！ ザマアマロと書いてるだりつー。 クツ
ソー、恩を仇で返しやがつて。

周囲を見回すと同僚たちは一様に「異議ナシ」という顔をしてい
る。

「当然よね、しゃぶしゃぶだもん」

……今日は仕事始め。初田から届残り労働つて何じゃそりゃ！
幸先良いスタートを切ったはずだったのに……こんなんで一年や
つていけるのだろうか。

午後七時十五分。パソコンの電源を落とし、机周りを片付ける。
そしてただ一人残っていた係長のもとへ報告。

「係長、終わりました」

彼は私を見上げてニコッと笑うと、ねぎらひの言葉を口にした。
「はい、お疲れ様」

本当にそう思つてるんだろうか。私がちゃんと仕事するかどうか
監視のために残つてたんじゃないかと疑つてかかる。鬼め。

昼に食べたしゃぶしゃぶなどとつくに消化が終わつて、胃は新たな
食物を求めている。早く帰つて御飯を食べよ。

訴えかける胃の辺りをさすつてなだめつつ帰り支度を始めると、
背中に優しい声がかけられた。

「お腹すいただろ？ 御飯食べに行こつ」

振り向くとあの優しい笑顔が私を見つめている。

「か……係長お。後光が差して見えますうー」

鬼だなんて言つてごめんなさい。手を合わせて拝んだ。

「大げさだなあ。何が食べたい？」

「カレーライス」

「了解」

白い息を吐きながらカレー屋に向かつて並んで歩いた。

「寒くない？」

「大丈夫です」

係長が右で、私が左で。

少し右を見上げると彼の顔が見えるこの位置が、妙に心地良かつた。

第二十一話 息子登場（後書き）

第三十二話 私をテーントに連れてって！？

「で、どんな奴だったの、社長の息子」

カレーライスを注文するといきなり係長が尋ねた。その口調ときたら口述試験を行う教官のようで、針の先ほどの誤りも見逃さないという体で私の返答を待ち構えている。

「どんな奴つて……普通の高校生ですよ。私のこと尊敬します、なんて目をキラキラさせて言つんですね。真っ直ぐといつかピュアというか、可愛かつたですよ？」

昼間の光くんの様子を思い出して微笑みながら答えた。しかし係長は何が気に入らないのか、すうっと目を細めて言い放った。

「真っ直ぐでピュアで可愛い？ んなわけないだろ」

「へ？」

「思つたとおりだね。全く君は騙されやすいというか
は？」

「そんなもん、演技に決まってるじゃないか。君が安心して氣を許せるように」

言葉を失つた私が呆然としていると、係長はテーブルに身を乗り出し、少し小声になつて続けた。

「その年頃の男が考えることなんてたつた一つだよ。目の前にいる女とヤレるとヤレないと」

「なつ」

身も蓋もない言い方に身体が仰け反つた。

「か、か、か、係長！」

「こんなこと言われたぐらいで赤くなつて、だから危ないんだよ君は」

舌打ちまでして恥々しそうに唇を動かす。お腹がすいだろうとか、寒くはないかとか気遣つてくれたさつきの優しさはどうに行つ

てしまつたのか。

彼についてきたのは間違いだつたかもしれない、と不安が心をかすめた。

顔の火照りを冷ますためにお冷やを飲んでいると、注文したカレーライスが運ばれてきた。

このカレー専門店では客の好みの辛さが選べるようになつていて。私は普通の辛さのきのこカレーを、係長は五倍の辛さのロースカツカレーを注文したのだが、見るからに色と粘度が違う。食に対する飽くなき探究心がこの五倍カレーを口にしてみたないと私にさせやきかけていた。

「ちょっと一口食べてみてもいいですか？」

「どうぞ」

彼の皿からスプーンで一口すべつて口に入る。うん、美味しい……うぐう。

衝撃は五秒後にやつてきた。口から火が吹き毛穴という毛穴から汗が出始める。

「水、水、水！」

自分のコップの水を一気に飲み干し、係長のコップにも手を出した。舌を出してハアハアと浅い呼吸を繰り返し、おしほりで顔の汗を拭く。

「か……係長、いつもこんなに辛いの食べてるんですか……？」

「うん。中学のときから友達と競つて辛いのに挑戦してね。あんまり辛すぎると体に異常を来すから、試してこの辛さに落ち着いたんだけど」

そう言つて激辛カレーを口に運び始めた。背広を脱いでいるが汗をかくこともなく、至つて冷静にいつものように涼しげに。

「係長つてなんか、味覚がおかしくないですか……？」

「そう?」

甘いモノは食べないくせにー。

ふうと息を吐いて、私は自分の「普通に辛いカレー」を口に入れ始めた。

ペロッと激辛カレーを平らげ水を飲んでいた係長に、携帯電話が鳴っていると指摘された。食べることに夢中になっていると、マナードの面には気づかないことがある。バッグから取り出した携帯を操作すると、一通のメールが届いていた。送信者は　半田光。

「誰？」

「え、えーと」

さつきの係長の態度を思い出してつい言葉を濁していると、彼の眉がピクリと上がった。

「……社長の息子？」

「……はい……」

「良く知りもしない男にメアドを渡したのか君は！　しうがないな。で、何だつて？」

考えてみたら私宛てに来たメールの内容を係長に話す義務などないにもかかわらず、迫力に押されてつい声に出して読んでしまつた。

「《今田はどうもありがとう。とても楽しかった。陸上部のみんなにも美春ちゃんとのこと紹介したいんだけど、今度の日曜日練習が終わったら会ってくれない？》……陸上部の練習ですって。青春ですねー」

顔を上げた私が見たものは、田を細めて静かに怒る彼の顔だった。寒気を感じたのは錯覚ではあるまい。

「甘いな」

「へ？」

「ふたりっきりだと警戒されるとつて陸上部なんて餌を撒いたんだよ。無邪気に信じた君がのこの出かけていつてもどうせ他には

誰もいないよ」

「係長……黒いよ。

「わざかなチャンスに喰いつくのが男つもんだ。あの手この手で君を誘い出す。若さ特有の押しの強さで攻める。情にほだされた君が押し倒される。まあこのパターンだな」

「あのー、自分の高校生の頃を基準に考えてませんか？ 誰も彼もが係長と同じじゃありませんよ」

「僕が高校を卒業して十年になるんだぞ。今どきの高校生なんでもつとタチが悪いに決まってる」

彼のいびつな考え方を少しでも改めたいと、私は光くんの擁護をすることにした。

「係長、悪く考えすぎですよ。恋の相談みたいのされたんですよ、私。デートに行って一緒にスイーツ食べててくれる男と、彼女ひとりに食べさせてコーヒーだけ飲んでる男どっちが好きかつて。光くんは甘いものが大好きだから、一緒に食べたい派なんですって。ね、可愛いでしょ？」

ほのぼのとした話に彼の顔つきも変わる。光くんの純な一面に興味を持つた様子だ。

「ふうーん。で、君はなんて答えたの」

「え、一緒に食べる人の方が話が盛り上がりって嬉しいなって」

途端に暗い影が彼の顔をさつとよぎり、いつもより低い声が這うように耳に届いた。

「……悪かったね、甘いモノが苦手で」

「うわわわわ。なんか係長から黒い瘴気が出てる気がするつ。

「あつでもつ係長とだったら、スイーツふたり分食べられるからお得ですよねッ！」

慌ててフォローを入れると、スイーツが切り替わったみたいに二ゴツとした。

「そうだろ？」

……なんで私がこんな気を遣わなきゃいけないんだ。

「あの、そろそろ……」「

疲れを感じて係長に帰りを促すと、待つたをかけられた。

「メールの返事はどうするの？ 早く断りなさい」

断りなさいって……拒否権ナシですかい。でもさすがにこれだけ言われると多少は警戒すべきなのかもとこいつ気にはなっていた。だけど社長の息子だし、無下に断るもの……

迷つていろと再び返信を催促されたので、助言を求める。

「何て言つたら角が立たないですかね？」一応社長の息子さんです
し……」

「『『日曜日は用事がある』でいいだろ？』

「嘘つくんですか？」

それには何となく気が進まないでいると、彼は表情を柔らげて優しく言つた。

「嘘じやないよ。嫌味なく誘いを断る方法。何回か続けて断れば、向こうだって諦める」

でも本当に陸上部絡みの話だったら、嘘をついてまで断るのは失礼ではないか。

ためらつてみると係長は私の携帯を取り、「見本を見せてあげるから」と言つて入力を始めた。

『今度の日曜はデートです。学生は真っ直ぐ帰つてお勉強しましょう』

う

「デ、デートつてまるつきり嘘だし、もろに嫌味じやないですか！」

「いいのいいの、これで

そう言つてピッとは送信ボタンを押す。

「あつちよつ係長！」

「最初から望みなしと思わせてやつた方が彼のためだよ」

仮にも社長の息子に対して取る行動なのだろうが、これが。私は

もはやあ然とするしかなかつた。

そこへ折り返し返信が来た。

『「デートじゃ仕方ないな。でもまた誘つから絶対会つてね』
係長は私の携帯に鋭い視線を投げかけていたが、思いついたように口を開いた。

「……コイツ簡単に諦めそうもないな。またコイツからメールが来たら僕に転送して。君の代わりに返信してあげるから

「はあ？」

「君に任せておくと、押し切られてふたりっきりで会うハメになりかねない。どこのこの有名スイーツを食べにいこうなんて誘われた日には、尻尾を振つてついていくだらうからな、君は」
……否定できないのが悔しい。

「大丈夫、僕に任せなさい。君の上司として、大人の男として、青少年に誠意を込めて諭してあげるからね。もちろん、社長の息子ってことも配慮するよ。君だって言つただろ？ 僕は旦下の人間から慕われるつて。だから何も心配しなくていいんだよ」

優しくそう言われて、つい分かりましたと返事をしてしまつたものの、上手く丸め込まれたような気がしないでもない。

係長が私の分までカレーライス代を支払ってくれたので、二ヘラ一としながら「『ちそうさまです』と頭を下げる。ところが顔を上げると、ニッコリ笑つた彼の口から思ひがけない台詞が飛び出した。

「日曜日、ドライブでいいよな

「はい？」

「デートだよ。嘘つきたくないんだろ？」

意味が分からん。ちゃんと説明してくれ。

「誘いを断る口実。本当に【デートすれば嘘ついたことにならないじゃないか】

「どうだ名案だろ、と血煙げに血煙げ。順序が逆、とシシ『ノリ』をこれでいいか？」

「でもなんで係長となんですか」

「メール送ったの僕だからね、当然責任は取らせてもいいはず」「でつでもつ、なんかちょっと違うよつよつな……」

「気のせいだろ。じゃあ日曜日、君の家まで迎えにいくから」

「え、ええ？ 本当に？」

「……なぜこうなつてしまつたのか、後から尋えてみてもよく分からなかつた。

兄が日曜日に映画を観に行こうと言つて出したのは、金曜の夜のことだった。

デートもせずに真っ直ぐ家に帰つてきた兄は、映画鑑賞の連れなど困るはずもないのになぜか妹を誘う。

「スリラーはお前と観たいんだよな」

変態なりのこだわりらしい。しかし日曜日は先約があると断つた。

「誰と会つんだよ」

「……瀬尾係長」

「デート？」

「誘いを断るためのね」

眉をひそめた兄に「深く考えなくていい、大したことでねえがら」と添えて説明を回避する。話が長くなりそうで面倒だったのだ。

すると兄は得心した顔でうなずいてみせた。

「あいつ、モテそうだもんな」

……どうやら、係長が女性からの誘いを断るためのデートだとカン違いしたようだ。しかし私はあえて訂正せずに調子を合はわせた。

「そりやもう、モテモテ。言い寄られればっかり」

「……そんなにモテるのか」

なぜか顔を曇らせる。モテ度でも勝負したいのか、兄よ。

そこで私は係長がどれほどモテるのかということを、かつて集めた情報を元に教えてやつた。じつと聴いていた兄は、怪訝そうな顔で声を上げる。

「付き合うタイプは決まって美人でキャリア志向、もつて数ヶ月、幕を引くのはいつもあいつか。変態？」

変態はそっちだ。

「じゃなかつた、変人？」

味覚は変だけど。

「でなけりや、病人 心の」

「あんちゃん、何言つてんだ？」

「勝負したら面白そうだと思つたけど……病人は困るなあ」「だから病人でねえって」

係長のために否定したが、兄は何やら考え始めてそれ以上口を開こうとはしなかった。

対抗意識を燃やすあまりライバルを病人扱いするとは、変態の頭の中はどうなつているんだ。

成り行きデートをすることになつた日曜日がやつてきた。

下に着いたという連絡をもらい、自宅マンションを出て見覚えのある車に近づく。私の姿を認めた係長が、わざわざ運転席から出てきて助手席のドアを開けてくれた。

初めてこの車に乗つたときもそうだったが、これをしたら女の子が喜ぶというポイントを押さえているのはさすがだ。私にまでその特技を遺憾なく発揮してくれなくても良いのだが。

彼の車は藍色のステーションワゴン。居住性が高く、乗り心地が良い。三年ほど前に自動車ディーラーの営業をやつてている友人に頼

み込まれて買つたのだそうだ。

ちなみに兄の車はシルバーのセダンだ。こちらは勤め先の事務所にやつてきた営業マンと一週間に及ぶ交渉の末、従来の価格から大幅に値引きさせて購入したいきさつがある。

ドライブの目的地については「ベタなデートスポットだよ、君のために」としか教えてくれなかつた。そうすることで彼自身が楽しんでおいるみたいで、「成り行きと責任」だけでデートの相手を務めている割には、車内の空気は暖房とは違う暖かさで満ちていた。カーラジオから最新の洋楽が流れてくる中、今日もまた彼が尋ねる。

「お兄さんは今日何してるの？」

なぜ彼らはこうも互いを意識するのか、不思議で仕方がない。係長を病人扱いした兄は「美春がいないんじゃつまらないから、彼女と出かけてくる」と、こっちの方がよほどアブナイ発言をかまして外出した。

「兄も『デート』です」

「モテるんだろうな」

彼もまたモテ度を競いたいのか。私はややウンザリして返答した。「そりゃあもう、モテますよ、係長と同じで。でもね、たいがい違うんですよ、係長と違つて」

「どうして僕を引き合いに出すんだ」

幾分とがめて言う。私は嫌味の成分が混じつた言葉でかわした。「係長が自分を見つめ直すお手伝いをしてるだけですよ」

「遠回しに非難してるだろ」

「あつ、分かります？ 锐いですね、係長」

「……君ほどじゃないけどね」

「うかうか。私ってそんなに鋭いかな。いや、参ったなもつ。

褒められて内心有頂天になつていいたら、係長がボソッとつぶやいた。

「課長の家でも言つたけどさ」

やけに神妙な顔つきで彼は言葉を継いだ。

「今はもう違うから。本当に、誓つて、そういうんじゃないから」「一つ一つ区切つて強調するところに、つい笑いを誘われる。

「別に私に誓つてくれなくてもいいですよ」

取つ換え引つ換え女性と付き合つていたことを殊勝にも反省しているのだろうか？

「君が信じてくれることが、僕にとつては何より重要なんだ」

ハンドルを握る彼の横顔は真剣そのもの。……しかしまさか、そんなに重要だったとは思わなかつた。軽く考えていた自分を反省する。

「係長つて負けず嫌いなんですね」

「え？」

「心配しなくても大丈夫ですよ、人気投票は兄じやなくちゃんと係長に投票しますから」

そう言つた途端、車がいきなり蛇行した。

「係長！ 危ないじゃないですか！」

「う……ごめん」

高速を走つてゐるところに、なんて危ない運転をするんだ、この人は。

私はラジオのボリュームを下げ、彼を安心させてやるつもりで言葉をかけた。

「信じますよ、係長がそう言つたなら

「え？」

「係長がそつだつて言つたなら、そつなんでしょう？」

しかし彼は厳しい目でしばし前方を見つめ、苦い声を出した。

「例えば僕にとつて不利な状況証拠があつても、僕の言つことを信じる？」

状況証拠つて……何だ。

「それでも越智さんは僕を信じる？」

「冗談で返すのは許されない雰囲気がこの場を支配している。少し思いつめた横顔が救いを求めているかのように見えた。

もしかしたら、過去のどこかで誰からも信じてもらえなかつた出来事があつたのだろうか。親しい人でさえ、彼を信じてくれなかつたことが。

でも私はあの日、私たちが和解した日に、彼は信じられる人だと思つた。安心して彼を信じていいいのだと思つた。いつたん信じたらどこまでも信じる。彼を疑うことは自分の決意までも汚すことになつてしまふから、私の答えはもう決まつている。

だけど、と横顔に浮かぶ不安を見て思う。

彼が望んでいる言葉は何なのだろう。ただ信じる、と言言えればそれで満足してくれるのだろうか。それとも装飾過剰な言葉を連ねて信用していることを示せば良いのだろうか。

思いを巡らせて正しい答えなど分からぬ。私は結局、余計なものを取り去つて残つた、私自身が望む気持ちを彼に尋ねた。

「係長の言つことを信じるつて言つ私を、係長は信じてくれますか？」

じつと前方を見据える彼の口から、一呼吸分置いたあとで静かに返事が滑り出る。

「うん、信じる」

「じゃあ同じです。係長が私のこと信じてくれるから、私も信じます。私はそれだけでいいです。それだけあれば」

状況証拠だの周りの意見だのはどうでもいい。お互に信じてるつて気持ちだけあれば、それだけでいい。

彼は言葉で応じようとせぬ、何かに耐えるようにただハンドルを握る手に力を込めた。そして熱のこもったよつた声でつぶやく。

「……なんで今、運転中なんだろう」

「なんであつて、係長がどこかに連れてつてくれるのはいつたからですよ」

直近のことわざを忘れてしまつとは、重度の健忘症なのか？ 仕事に差し障りが出ないか心配だな。

再びラジオのボリュームを上げると、軽快な音が耳に飛び込んできた。

冬の陽光が差す車内から空を見上げる。

暖かい一日になりそうだつた。

第三十三話 私をデートに連れてってー！？（後書き）

第三十四話 遅れて来た眞実

ドライブの終点は横浜市にある、全体がレジヤー施設からなる人
工島だつた。

車を降り、鈍い色の海を遠くに見やつて息を大きく吸い込む。駐車場から彼方を見ると、アトラクションらしき大型遊具が目に付いた。遊園地か。確かにベタなデートスポットだが。

実を巡る組織にシバエが使った
地は足かいかないとモハモ不安
になる。

「おお二つ、
咲耶？」

ケリーのウールコートに袖を通しながら、瀬尾係長が尋ねた。顔色を読み取られたのだろうか。しかし弱みを見せたくない私は虚勢を張った。

「全然平気です。ウエルカムウエルカム。カモンベイベ、ですよ」

時刻は午前十一時を回ったところで、少し早かつたが先に腹ごしらえをすることになった。飲食店が集う建物に向かい、南国風に意匠されたレストランにて二名から注文可能といつシーフードグリルを頼む。

店にしろ料理にしろ、私が選ぶものを係長は一一口承服するだけで、決して自分の希望を口に出そうとはしなかった。仕事中は意見を戦わせたり、自分の意志を曲げないことが多い。柔和な顔と口調で手厳しくやり込められる、と石津さんがたびたびボヤいていたので、こういう場では他人の意見を全部採り入れてくれるのだろうと、私なりに解釈した。

彼が唯一希望らしきことを述べたのは、名前で呼んでほしい、ということだった。

「会社じゃない場所で『係長』なんて呼ばれたくないな
『もう『係長』が名前みたいなものじゃないですか』
そういう言ひ少し拗ねた表情をするのが可笑しかった。

海の上に突き出たこのレストランで、食事ばかりか景色も楽しんで贅沢な時間を過ごした。香草を使って料理されたエビやマグロなど海の幸を、彼も「美味しい」と言つてがつたりと食べていた。

食事の合間のお喋りはもっぱら私が担当した。子供の頃にやらかしたいたずらや最近話題のミステリー、何を話しても彼は楽しそうに聴いてくれる。すると私も嬉しくなつてますます舌が滑らかになるのだ。

私はもともとお喋りな人間だが、誰に対してもというわけではない。話好きな人の前では聞き役に徹して相づちを打つだけのこともある。でも聞き役としての係長は、まるで満点を取れるくせに故意に間違つた解答をして教師を困らせる生徒のようだ。

私に好きなように話をさせておいて、わざと核心部分で先回りしたり、変な方向に逸れると軌道修正してくれたり、そのたびに驚かされる。優しいのか意地悪なのか分からぬのだ。

私はかり話してつまらなくはないかと訊くと、彼は首を横に振つて答えた。

「話をしている君の顔を見ている方が面白いから
面白いのか……私の顔？」

レストランを後にすると早速チケット売り場に向かつた。入園料は無料で、施設の利用者がそれぞれ目的に合わせたバスを購入するようになっている。

食事代は全て払つてもらつたのでせめてチケットぐらいは自分で買つと主張したが、係長は笑つて取り合おうとしなかつた。自分から言い出したデートだから責任を感じているのだろう、きっと。

チケット売り場が入っている大きな建物は水族館だつた。確かにこれもベタなデートスポットではあるが、言つてくれればシーフードグリルは頼まなかつたのに。私はそれほど纖細な人間ではないが、魚を食べたあとに魚を見るつて……いや別に見る魚を全て食用と捉えているわけではない。

でももし絶叫マシンに乗ることになつたらどうしようと心配していたので、これでひと安心だ。水族館で心が癒やされる方がずっと嬉しい。もしかして係長は、私が苦手なのを見抜いてここに入ろうと言つてくれたのかもしれない。察することの上手い人だから。

館内に入りアザラシやホッキョクグマなど海の動物たちを順に見ていくと、やがてパノラマの大水槽から漏れるブルーのきらめきが目に飛び込んできた。無数の魚たちが泳ぐ迫力に圧倒され、思わず感嘆の声を上げる。

「美味そうな魚はいる?」

私をからかう声を聞いて、シーフードグリルを食べたのはやはり失敗だつたかとそつとつぶやいた。

魚たちを見ながらふと思つ。この一種憧憬にも似た感情はなんなのだろうと。太古の昔生命が生まれた海の記憶が細胞に刻み込まれているから などどこかで読んだことがあるけれど、逆に魚たちは陸上にいる私たちをどう見ているのだろうか。憧れたりはしないのだろうか。

更に遠くの時代にまで思いを馳せていると、係長に声をかけられ先に進もうと促された。細長いチューブのよつに周りを水槽に包まれた空間を、エスカレーターで上に昇つてゆく。

「気に入った?」

「はい、とっても」

イルカのショーガ终ると、係長がイルカ水槽を見に行こうと言つた。水族館を構成する複合施設の一つである。

トンネルの形をした水槽を下から見上げると、イルカたちが悠々と泳いでいる。優雅に踊るような動きを見せたかと思うと突然方向を変え水の中を突き進む。その变幻自在な動きに目を奪われた。

「陸の上の越智美春とどっちが速いだろうな」

「あはは」

水槽には上から太陽の光が差し込んでいて、海底から上を見上げる魚の気分にさせてくれる。

「これって魚目線ですよね」

「うん、いつか君に食べられるとも知らずにのんびりと泳ぐ魚」「ひど」

並んで水槽をのぞき込む目の前を、愛らしい目をしたイルカが横切つた。すると微笑んで彼が言つ。

「君に似てる」

以前藤田さんからは飼い犬に似ていると言われた。自分は動物顔なのかなと思い、訊き返した。

「……顔が？」

彼はイルカを田で追いかけながら楽しそうに笑う。

「自由自在なところ」

「どういう意味ですか？」

「言葉のとおりだよ。初めて会ったときも」

初めて会ったとき？ 非常階段か。会つたというより私が一方的に見て逃げ出したんだが、あれを自由自在と表現するとは、係長の言語センスって変わってるな。

彼はそれ以上先を続けようとはせず、蒼い水の中で戯れるイルカたちを楽しそうに田で追つた。

外に出ると冬の弱い太陽の光が私たちを出迎えた。例年より高い気温が海辺の寒さを和らげている。

あの大きな水槽の前で魚を見ながら考えていたことを、係長にぶつけてみた。

「大昔、生命の進化の過程で、魚に足が生えて陸の上に上がるじゃないですか」

「うん」

「どうして魚は海から出たいと思つようになつたんでしょうね」
彼は一瞬考え込んだが、すぐに田に楽しそうな色を浮かべて答えを出した。

「陸の方方が美味しいものが食べられると思つたんじゃないかな」と彼を睨んだ。

「本気で思つてないでしょ。係長が食欲優先の発想するわけないし」
彼はクスクス笑いながら言い訳を口にする。

「最近どうも君の影響を受けてるみたいなんだ。
君はどう思つの？」

「新たな種との出会いを求めてたのかなあ、なんて
「つまり性欲？」

「せつ」

要約しすぎだ！ 憤慨していると彼は更に軽口を叩いた。
「じめんじめん、足の生えた魚も純愛したかったんだよな」

「殴りますよ、係長！」

人がせっかく浪漫的な生命の進化論を考えていたというのに。茶化した係長に拳を振り上げようとしたそのとき、こちらにゆっくりと近づいてくる人影を認めた。張り詰めたその表情を田にして私の動きが止まる。

嘘だ。こんなところで。

不自然に固まる私を見て係長が不審に思つたのか、声をかける。

「どうしたの？」

適当な返事や取り繕う言葉は全て口の中で消えた。代わりにいくつもの懐かしい映像が脳裏に浮かぶ。

教室のざわめき。廊下を走る靴音。詰襟の制服。日に焼けた笑顔。

嘘だ。こんなところで会うわけないのに。五年もたつて、こんなところで、彼に。

『思わぬ場所で思わぬ人に出会う確率って結構高いんですよ。』近所のカフェで社内の人間になど会うわけがないとタカをくくる係長に、注意を促すために言つた言葉。まさか自分が

「越智」

あの頃と同じように私の名字を呼ぶ声を聞いて、やはり彼なのだ、と心が震えた。

水野くん。

「久しぶり」

「……うん」

五年ぶりに見る水野くんは、あの頃の面影はそのままに少し大人の顔つきをしていた。私は言葉が何も出てこなかつたのだが、彼は言葉を選ぶのに難儀しているようだつた。

「知り合い？」

沈黙が降りる場を救つてくれた係長にホツとして「高校の同級生です」、水野くんに対しては係長のことを「同じ会社の人」と紹介

し、一人が会釈する。

少し離れた場所に、じゅうらを見る若い女性がいて、どうやら彼の連れしかつた。

「転勤で去年の秋からここにいるんだ」

「そつか」

係長をチラと見た彼は再び口をつぐんだ。

気を利かせて場を離れた係長を視界の隅に置き、私は水野くんを前に途方に暮れた。

何を話せば良いのか分からぬ。今更確かめても仕方のないこと

を口にするのもはばかられる。

しかし彼はためらいながらも口を開いた。

「その……あれからずっと気になつて……」

言いにくいくことを口にしようとする雰囲気が、あの日私たちの間で起きた出来事に触れようとしているのだと嫌でも気づかせる。

今更何を気にするというのか。私がカン違いしなかつたかどうか、心配していたのだろうか。あの行為自体を過ちだつたと捉えているのだろうか。

たとえそうであつても五年間の距離と空白は、とある同級生と一瞬交差した時間のことなど忘れてしまつには充分であつただろう。

ところが水野くんは予想外の言葉を繰り出した。

「越智が陸上やめたの、俺のせいじゃないかつて……」

「は？」

「あれからすぐに東京に行つちまつて出席日数ギリギリで卒業しただろ？ 陸上部のある地元の企業からも誘いが来てたのに、先生も陸上やめさせたくないって言つてたのに、結局東京で専門学校行くことにしたつて聞いて。それで俺……」

陸上。そういえば水野くんは私が試合で勝つたびに喜んでくれて

いた。クラスの誰よりも、彼が言つてくれた言葉を今ではつきり憶えている。

『将来のオリンピック選手だな。俺友達も自慢できる』

でもどうして彼が気に病むのか分からぬ。

「俺が無理やりあんなことしたから……」

いつたん言葉を切つてまぶたを伏せる様子に、自責の念の大きさが見え隠れしていた。

「それで学校に来られなくなつたんだろ？　俺に会いたくなかったから。家に独りでいるのが怖くなつて、東京のお兄さんのところに行つたんだろう？」

彼が推量で述べていることはある意味正しい。彼に会つて決定的な言葉を聞くのが怖くて、独りぼっちが怖くて、私は逃げ出したのだから。

でも何か違う。彼が悩み恐れる理由はそこにはないはずなのに。

「水野くん、あの……」

彼はしかし私の言葉は待たず、五年の間ずっと胸に秘めていた苦惱を今こそ解き放ちたいと言わんばかりに、振り絞るような声を上げた。

「でもレイプとかするつもりじゃなかつた。本当にそんなつもりで越智のところに行つたんじゃないんだ」

頭を殴られたような衝撃だった。

乱暴されかけてショックを受けたために学校に来られなくなつた

水野くんが五年間もずっとそつとそつカン違いしていたと知つて、胸が痛んだ。私が陸上をやめたことを自分のせいだと思い込み、人知れ

「ず悩んでいたのかと思つたら、哀しくなつた。

なぜ私はあのとき逃げ出したんだろう。踏みとどまつていれば、彼の気持ちを確かめていれば、彼は苦しまずにするんだのに。

「乱暴されたなんて思つたことなかつたよ。陸上やめたのは新しいことをやりたかったから。水野くんのせいじゃない。水野くんは関係ないよ。自分で決めたことだから」

苦い思いから解放させてあげたい一心で訴えたが、彼は硬い表情を崩すことはなかつた。私はこちらを見守つてくれている係長の姿に一度視線を転じてから、再び水野くんを見て微笑んだ。

「仕事好きだし、今の会社も楽しい。この道を選んで本当に良かつたと思つてる」

強ばつていた顔が緩んだ。吐息混じりのつぶやきが安堵の色を見せる。

「……そつか」

そして私も気づいたのだ。五年間も宙ぶらりんになつてた想いに。時折現れては私に幻想を見せていた彼への想いに。

……もういいよね？ 閉じ込めておくのではなく、解放してあげよう。

なぜそんな気持ちになつたのか正直分からない。引き出しを開けるたびに彼への想いに浸り、何も変わることのない懐かしい愛情に安心さえ得ていたのに。

今は、あの想いをきちんと整理ボックスの中に入れて名前をつけるべきだとさえ、思う。

そう思える自分を応援してやれ、と心が後押しする。

「ひとつ訊いていい？」

「うん？」

「あのときどうしてあんなことしたの？」

なじるのではなく、ただ穏やかに問いかける。今の私の心そのままで。

「私のこと可哀相だつて思つたから? 母が亡くなつて独りでいた私に同情したの?」

こんなふうに訊いたのは、今なら受け入れられると思つたからだ。あの頃の私は、可哀相な子だと他人から同情されても仕方ないほど、小さくて弱かつた。

それを認められるようになつたのはきっと、係長が今の私のことを「可哀相なんかじゃない」と言つてくれたからだと思つ。

水野くんは困つたように手を伏せ、ためらいがちに唇を動かした。「あ……えーと……いやでも……こんなこと言つたら怒られるかも

しれない」

「大丈夫。怒らないよ、五年も前のことだから。ただ知りたいだけ」そう言つてあげると、彼は係長がいる方にチラつと手をやつた。

「そう……そうだよな、越智だつて……いるんだし。なら平氣か」「何かを納得した彼は、「実を言つと」と恥ずかしそうに口を開いた。

「越智の泣き顔見たら、ついムラムラと……」

へ?

「その前段階で抱きしめてるとせからず口にヤバかったんだけど」

何だつて?

「……あの顔見たら、普ツッとキレた」

……

つまり、单なる衝動だつたと。下半身の事情だつたと。

つい、拳を握りしめてブルブル震えた。係長がしつこいぐらいで口にした、『その年頃の男論』が嫌でも思い出される。

おい。前言撤回してもいいか。やはり怒つてしまいそうだ。

しかし怒りの発動は起こらなかつた。なぜなら。

「だからその……越智に好きな奴がいたとしたら、すげー悪いことしたってあのとき思つて……」

真っ白になつた頭の中に、このフレーズだけが何度も響いた。

スキナヤツガイタシタラ

この五年、彼に会いたくはなかつたけど、いつかどこかで会うこと想像していなかつたわけじゃない。

想像の中の水野くんは、あの頃の私を好きだつたと、今でも私を想つていると甘くささやく。何年たつても私を愛し続ける彼。私が憧れてやまない純愛を捧げてくれる彼。

それが愚かな妄想であることを分かつていながら、夢を見続けていた私。

だけど。

現実の彼は、五年もの間私に対して責任を感じていただけだった。衝動で私を抱こうとしたことに。

あやふやなまで終わつてしまつた私たちの関係ではなく、私が陸上競技をやめたことだけをずっと気にして。

これが答えなのだ。逃げ出して、ずっと田を背けてきた答え。

今はつきり見える。

私たちの想いは最初から交わつてはいなかつたのだと。

第三十四話 遅れて来た真実（後書き）

昔の想いを解放しようとする美春。これでよつやく瀬尾にも春がやつてくるのでしょうか。

しかしあまりな水野くん（笑）美春に試練ばかり「与える作者は鬼？いえ、親心です。

次回、急展開です。

第三十五話 海から出る魚

水野くんとは元気で、と言つて別れた。ぼんやりしたまま、ただ瀬尾係長の横を何処とも知れぬ方向に歩く。

「元カレ？」と訊かれて、頭が働かずにあるのままを答えた。

「……ただの片想いの相手です」

「フラれたの？」

少しばオブラーートに包んで訊かんかい！

優しいのか意地悪なのか分からぬ彼に、白廟の色を込めて事実を告げる。

「……気づくのに五年かかりましたけどね」

彼は同情も面白がりもせず、ただ淡々と確認するように訊いた。

「好きだつたんだね」

立ち止まつて正答を模索する。五年間の想いは一言では簡単に表せない。

「好きだつたんだと……思います」

ずっと同じ濃度で水野くんを想つていたわけじゃない。月日が経つにつれ彼を思い出す頻度も少なくなつていった。

それでも決して忘れることはできなかつた。忘れたくなかったのかもしれない。

彼への想いを胸に抱いたままでいれば安心だつた。進展も後退もしない恋をしていれば安全だつた。きっと藤田さんの言つたとおりだ。惰性に想い続け、変わらぬ夢を見ていればそれでよかつた。

五年前に知るはずだつた、知るべきだつた答えを今日見つけて、悲しいというよりホッとした気持ちがするのはなぜなんだろう。やつと終わつたんだなつて納得している自分、終わりを受け入れている自分を不思議に思うのも、長く親しんできた彼に対する想いの名残なのかもしれない。

「……なんでこんなことべラべラ係長に喋つてんですかね、私は」
いくら彼が聞き上手とはいえ、自分の最奥にある心情を口に出す
など、今日の私はどうかしている。フランクされたせいが、やつぱり。
頭にふわっと温かみを感じた。係長が掌を私の頭の上に乗せて優
しく微笑んでいる。そこから波動のようなものが伝わって全身に温
もりが広がつていくような気がした。

「たまには素直になるのもいいよ」

声までが温かくて、つい涙腺が緩んでしまつ。いきなり涙が一筋、
つーっと流れ、慌てて手で拭いた。

「見……見なかつたことにしてください」

係長が優しくするからだ。こんなふつに心がむき出しになつてい
るときに。

なのに彼は私の願いを聞き入れてはくれない。

「それはできないな。だつて他の奴には絶対見せないだろ?」

だ・か・ら、優しくするのか意地悪するのかどっちかにしひ、性
格悪!

再び歩を進めると「あのや」と係長が声をかける。

「さつきの話。足の生えた魚の話

「は」

「君も海から出てみれば?」

まるでちょっと散歩に、とこひべらこのさつげなさで言つ。だが
意味を測りかねた。

「……美味しいものを求めて?」

「じゃなくて。陸の上には出会いが待つてゐるんだろ?」

つまり、新しい恋をしろと言いたいのか。私に気を遣つて失恋の
特効薬を示してくれているのだろうな。すぐに次の恋ができるとは
思えないが、出会いを想像するぐらいなら。

「私にも素敵な出会いがありますかねえ。例えば」

「パツと思い浮かぶベタな出会いのシチュエーションとしては」

「満員電車で痴漢を撃退してくれた人に一目惚れ。……私、女性専用車両に乗ってるから可能性は皆無ですね」

「いや、あのね」

「本屋で同時に同じ本に手を出した人。好みが似てるからアプローチしやすい。……でも本は兄に買わせるから本屋には行かないし」「そういうんじゃなくて」

「エレベーターに一人きりで閉じ込められる。極限状態の恋。……階段使つてるからなーそいつだなあ」「だからさ」

「携帯拾つてあげたことから始まる恋つてのもありますよね。それが可能性としては」「少しば人の話聞けよ!」

「きなり大声を出されて泡を食つた。

「映画や小説じゃあるまいし、そんな出会いがそうそつあるわけないだろ。それに、もう出会つてるかもしれないって可能性は考えないの?」

「彼が少し苛立つているのを見て、眞面目に考へることにした。
「……どこで?」

「会社とか」

「同僚つてことかい。何を今更な話じや『ゼゼ』ませんかね。

「私のことそういうふうに見てる人なんていませんよ。せいぜいがペットでしょ」

「そんなことはない。君は自分を女性として過小評価しそうだ。自分に興味をもつ男がいるなんて考えてもみないんだろう」「ずっと意識から閉め出してきたことを巧みに突かれて、まじにつきながらも肯定する。

「だつて……恋愛しようなんて思つてなかつたから」

「うん。でもこれからはもっと周りに目を向けてもいいんじゃない

かな」

真剣な顔に動かされて少しばかり考へてみようとした氣になり、同僚たちの顔を一人一人思い浮かべてみた。しかしそういう対象として見ることはどうしてもできず次々と消去されていく。

脳内処理をしている間、係長はじつと心配そうに私を見守っていた。失恋した部下を慰めようと出会い系の可能性を指摘してくれたのに、何もありません、では失望するかもしない。それは申し訳ないで言い方に気をつけよう。

「もうですね……出会い系とは言えないですね」

一重否定を使って控えめな肯定をしてみたら、嬉しそうにつなぎいた。

「もうだよ。出会い系については案外身近にあるものなんだよ、私の前向きとも取れる発言に気を良くしたのだから、力説する」とで更に気を引き立てようとする。

「まだ君が気づいていないだけなんだ。実際はすぐ手の届くところに恋つてあるんじゃないかな」

「係長」

呼びかけると彼は輝くような笑顔で応えた。きっと「すぐ手の届くところにある恋」とやらない私が思い当たつたとカン違いしたのだろ。期待を裏切つて申し訳ない。

「お腹すきました」

「え?」

「すぐ手の届くところのおやつが欲しいです、恋より先に」

立ち止まり、顔を硬直させた彼の心境はおわり、出来の悪い生徒を持つた教師、あるいは自分の思つようにならない部下に頭を悩ませる上司、といったところか。

でも腹が減つては恋もできないではないか。まずは食べることが優先だ。

ややあつて彼は、溜息を一つついて微笑んだ。

「……何が食べたい？」

よかつた。いつも彼の台詞だ。

私は安心してさつきから頭の中で存在を主張してやまない甘いおやつの名を告げた。

「クレープ」

「了解。……でもその前に」

突如として薄ら寒い笑みを浮かべた彼が人差し指を向けた。その方向に目を動かす。

……私たちが立っていたのは、とある絶叫マシンの真ん前だつた。

「フラフラになつた私に係長が手を差し伸べた。一の腕をつかまれるに任せてようやく乗り物から降りる。叫びすぎでのどが痛い。あんなに高低差があり、身体がフワッと浮く感覚が気持ちの悪いシロモノに乗つたというのに、彼はケロリとして、私の具合を気にするどころかたしなめるように言つた。

「ウールカムウエルカムなんて言つから大丈夫だと思つてたよ。苦手なら苦手ってなんで正直に言わないのかな、君は」

それについては激しく後悔していますとも。苦手と察して水族館を選んでくれたのだと、係長の優しさを信じて疑わなかつたこともね。

しかし田が回つたままで何も言い返せない。足元もおぼつかず、つい彼のウールコートの腕にしがみついた。

「す……すいません、係長……目が回つて……」

きっと腹の中で笑つているに違いないと思いながらも、目をつぶり額を肩に預ける。心なしか腕がこわばったような気がしたが、私を支えるのに入れたためだろう。……じめんなさい、重くて。

「……いこよ、好きなだけそうして」

耳もとに落ちる声が甘く聞こえるのはなぜだ？ また意地悪なことを言われると思ったのに。

今日一日で係長はまたいろいろな顔を見させてくれた。会うたびに新しい発見をした気分になる。今も、こつやつて力強い腕が支えてくれるだけで安心できることもあるんだって、初めて知った。失恋したけど。……そばにいてくれたのが係長でよかったです。

帰宅した私に、待受けっていたように興味半分、心配半分といった顔で兄が尋ねた。

「どうだつた、美春？」

いろいろあつたが全てを兄に語るのは面倒だ。私は当たり障りのない返事をした。

「楽しがつたよ」

しかし一言で済まされて不満なのか、兄は更に突っ込んで訊いてくる。

「告白されたか」

何を言つてるんだ、いつたい。

「告白どじろが、フラれたよ」

「……何だつて？ フラれた？ お前がか」

驚きの声を上げて確認する兄に、もはや開き直りの境地で繰り返した。

「そうだよ、フラれたの。何か文句ある？」

兄は一瞬言葉に詰ましたが、不可解さを多少残しながらも喜色を浮かべた。

「いや、ないけど。それにしては楽しそうだな」

「だから乐しがつたつて言つたべ？」

「……よく分からんが、フラれてなによりだ。忘れる忘れる。お兄ちゃんの胸で泣くか？」

……早くも『失恋した妹を慰める兄』の態勢に入つたか。

「せんせん泣いたあとでちゅうと恥じらいながら『お兄ちゃんがいてくれればいい』なんて言つてくれたら、それだけでメシ三杯いける」

「……着替えてぐる

ああなつてしまつたら、流すに限る。妄想に浸る兄を残し、浴室に向かつた。

部屋着に着替えながら先程の兄の言動を思い返した。ひょっとして私が係長にフラれたとカン違いしたのだろうか。

しかし今更真相を話すのも気が引けるし、何よりも他のことが頭を占めていた。

『忘れるなよ。海から出る』こと

ついわざわざ別れ際に言われた言葉。マンションの扉の前、陽も落ちて薄暗がりの中、あれはただその場の慰めで口に出したのではないのだと、係長の真摯な表情が訴えていた。

海から出る……

その言葉を胸の中で反芻はんくうした。

私は今まで深い海の中、深海魚みたいに泳いでいたのかな。ときどき昔の想いに浸るだけで満足して、変わらぬ夢を見続けて安心して。

でもそこから出でていかなないと出来ることもない。

今まで考えないようにしてきたけど。田を背けてきたけど。私にもできるのかな。

海から出る」と。

海から出たら、係長は喜んでくれるかな。こんな出会いがありましたって報告したら、「やくやつた」って褒めてくれるかな

暖かかった日曜日が嘘のように翌週はぐっと厳しく冷え込んだ。風邪やインフルエンザで欠勤する同僚もチラホラいる中、私は変わらず元気で仕事に励んでいる。

この日私はカメラを手に外出していた。ホームページ制作に、クライアントから提出された画像だけでは足りなかつたので写真撮影に行つたのだ。

満足するものが撮れて帰社する途中、会社近くのコンビニに寄り、午後の休憩を兼ねて肉まんを食べることにした。この寒さの中、熱々の肉まんを頬張り肉汁がジュッと口に広がる様を想像するだけでも身体の熱量が上がりそうだ。

レジに近づき若い店員に声をかける。

「肉まん一つください」

「肉まん一つ」

ほぼ同時に声が重なり隣を見ると、スーツを着た男性と目が合つた。三十歳前ぐらいだろうか、細い黒縁の眼鏡がシャープな印象を与える。瀬尾係長ほどではないが長身で、しかもまざまざのオトコマエだ。

「コンビニ店員は恐縮して肉まんが最後の一つである血を述べた。そういうことなら、レディファーストだらう。チラと男性を見て暗に譲れと主張したら、「じゃあ、俺はあんまんでいいよ」とあっさり身を引いてくれたので、微笑んで礼を述べた。

よしよし。肉まんは次の機会にしてくれたまえ。

店を出て行儀は悪いが食べ歩きをした。熱いのでハウハウしながら口の中で具を転がす。

視線を斜め前方に動かすと、先程の男性がやはりあんまんを食べながら同じ方向に向かって歩いていた。そして私たちの距離はつかず離れず、全て食べ終わる頃には会社が入っているビルに到着し、そろつてエントランスホールに足を踏み入れる。

このビルで働いてる人だつたのか。

男性は少し驚いたようだつたが軽く会釈するとHレベーターに足を向けた。私は警備員のおじさんと一緒に会話を交わして、いつものように非常階段へと向かう。

階段を上りながらロッジニーでのやり取りを思い返し、これもまた一種の出会いかもしれないと考えた。

最後の肉まんに同時に手を出した男女。
悪くない。同じビルにいるのなら再び会う確率もゼロではないのだ。

これはぜひ係長に報告せねば。きっと喜んでくれるはずだ。比較的身近でしかも映画にでも出でそうな出会いではないか。タイトルは『肉まんが呼び寄せた出会い』（仮）『

係長、どんな顔するかな。わくわくするあまり小走りで階段を駆け上った。

「ただの偶然だよ」

業務終了後に工藤課長との話が終わるのを待つて、今日の出来事を報告した私に係長はすぐ言つた。

「すぐそこのコンビ二なら同じビルの人間とかひつのがなんか珍しくないだろ。今日みたいに寒い日は誰だつて肉まんに手を出すさ。運命の出会いでも何でもないから」

冷静に分析されてガクンと肩を落とす。すると横で話を聞いていた課長がブツと吹き出した。

係長はそれを一瞥すると噛んで含めるように言葉を重ねた。

「忘れなさい。それは出会いじゃなくて、ただの通りすがり通りすがり…… そうなのか……

まだ肩を震わせて笑っている課長を睨んで、声を上げる。

「何がそんなに可笑しいんですか！ 肉まんがいけないとでも言つんですか！」

「いや……俺もそれは通りすがりだと思つよ、ポチ」

だつたら笑うなつつのー

ところが、事態は予想もできぬほど早く私の目の前で転んだ。翌日、クライアントであるU社との初回の打ち合わせがあり、勉強も兼ねて参加させてもらえることになった。これは営業部から回ってきた案件で、WEB事業部では佐久間主任と杏子さんが担当責任者である。初回のみ営業部からも担当者が出席し、次回以降は私たちがS社側に赴くことになっていた。

営業部からクライアントが到着したと連絡があり、私たち三人は十階エレベーターホールに出迎えにいった。

「ポチ、お茶出し頼むね」

「はい。緑茶でいいですね」

「玉露淹れてよ」

「そんなのありませんよ」

杏子さんとそんな会話を交わしていると、主任がふと思いついたように口を挟んだ。

「ポチ、お前クライアントの前でボケかますんじゃねえぞ」

もう少し言葉を選んだらどうなのか。私は嫌味を込めてやり返した。

「分かってますよ、本当に主任は性格が悪い以上に口が悪いんだから

すると杏子さんが調子を合わせ、ふたりで対佐久間主任共同戦線

を張る。

「口が悪い以上にガラが悪い」

「ガラが悪い以上に見た目が悪い」

「見た目が悪い以上に」

「てめえらー！」

主任が攻撃に移ろうとしたそのとき、チンと音がしてエレベーターの扉が開いた。S社の担当者を伴った営業部員が姿を現す。

私はぽかんと口を開けた。彼もまた驚いたようだったが、すぐに表情を元に戻し注意をクライアントに向けた。

ホールで全員が簡単な自己紹介をし、打ち合わせ用の小部屋へ移動する。私はお茶出しのため、ひとり別れて給湯室に向かった。内心汗をかきながら。

昨日の肉まん男　　彼が食べたのはあんまんだったが　　と、再び出会うことにならうとは。

営業部一課、滝沢信広主任。

係長。通りすがりなんかじゃなかつたですよ。また会つちゃいましたよ。ウチの会社の人だつたんですよ。これつてやつぱり『出会い』ですか？

係長に伝える台詞が頭に思い浮かんだ。でも。

なぜかは分からぬ。昨日彼に報告したときほゞの嬉しさは感じなかつた。

そして昨日の男性が滝沢主任である事実を彼に告げるべきなのかどうか迷つた。

どうして迷うのかその理由も、私には分からなかつた。

第二十五話 海から出る魚（後編）

第三十六話 微妙な立ち位置

「昨日はどうも」

ガラス張りのホールに差し込む弱々しげな陽の光の下で、泰然として彼は言った。予期せぬ一度目の邂逅に未知なる不安を感じた私は対照的に。

打ち合わせの後に交わした雑談が盛り上がった流れで、全員でクライアントを見送った一階のエントランスホール。滝沢主任からWebデザインについて幾つか質問を受けているうちに、佐久間主任と杏子さんは先に部署に戻ると言つてエレベーターに乗り込んだ。質問に答え終わつたところで、主任が昨日の一件を持ち出してきたのだった。

「どこかで見たことあるな、とは思つたんだよ。考えてみたら運動会の後の社内ニュースレターに越智さんの写真載つてたんだよな。運動会には俺、たまたま法事と重なつて出られなかつたんだけど、でもまさか肉まんを盗られたのが越智さんだつたなんてね」

盗られたなどと人聞きの悪い。苦笑混じりに訴える主任に反論する。

「盗つたんじゃないですよ。主任が譲つてくれたんですよ」

「目で脅してたからね」

「そつ……そんなことないですよ」

口では否定したが、内心の動搖がそのまま外側にも現れて視線を泳がせてしまう。するとこれまた主任に見破られたようでクスクスと笑われた。案外気さくな人なのだな。

更に親しげな口調で明日の昼の予定を訊かれた。特にないと答えると、

「よかつたら昼飯一緒にどう? 越智さんが手がけた事例見せてほしいな。この案件気になるから仕事ぶりを知りたいというのもある

私がデザインを担当するので気になるのは当然だろ。自分が取つてきた契約ならなおさらだ。

了承して主任と明日の待ち合わせを取り決めた。

翌日の昼、各自が三々五々休憩に入ろうとする時間になり、私も待ち合わせ場所に向かうべくデスクから立ち上がったときだつた。

「越智さん」

名前を呼ばれて振り向くと、部屋の入口に滝沢主任が立つていた。なんでわざわざ来たのだろうか、と思いつつ資料を手に近づいた。

「一階のエントランスで待ち合わせじゃなかつたですか？」

「ちょっと早めに出られたから迎えにきたんだ」

ふと振り返つてみると、同僚たちが一様に不思議なものを目にするような顔をこちらに向けていた。書類をプリントアウトしていた係長も手を止めてじつと見ている。彼に黙つたままの事実があることを少し後ろめたく思いながら、主任の後に続いた。

滝沢主任が連れて行つてくれたのは、高級感溢れる天ぷらのお店だつた。御影石が外壁に使われたビルの、螺旋状の階段を地下に降りると店の入口があつて、着物を着た中年の女性店員が私たちを出迎えた。夜は高価だが、同じ味をランチとしてお値打ち価格で提供しているのだとか。

ゆつたりとした店内の奥まつた一席に腰を下ろし、天丼ランチを注文した。味噌汁、小鉢、サラダに漬物がついてくるのだ。

天丼を待つ間にこれまで手がけたホームページの説明を始める。やがて食事が始まつても主任は熱心に質問を繰り出しては、駆け出しのデザイナーにすぎない私の返答を興味深そうに聞いてくれた。お陰でこちらも話に熱が入る。気がつけば主任はとっくに食べ終わつて、仕事の話はもういからどうぞ食べて、と笑つて促された。

最後の一 口を咀嚼し終わる頃、そういうえば、と思い出したようこ
主任が口を開いた。

「さつきWEBの人、みんな変な目で見てたね。俺、誘つてまづか
つた？」

「私、普段はお弁当なんですよ。それが他部署の人と外でランチな
んて今までなかつたから」

気にしないでください、と手を振ると、主任は眼鏡の奥の目を細
めて言つた。

「もつと他の部署と交流すればいいのに。飲み会に出るとか。今度
ウチの連中と一緒に飲もうよ」

営業部の飲み会……酒に強い人ばかりでたくさん飲まれされそ
な雰囲気。杏子さんや係長から言語道断つて言われそうだ。しかし、
親切で誘つてくれているのに断るのもどうかと思い、条件付きで承
諾した。

「あの、WEBの人も一緒に来れば」

「ひとりじややつぱ気が進まない？」

「いえ、ひとりじや絶対ダメつて言われそうなので」

「WEBの連中から？」

呆れていらうだらうなと思いながらもつむぎいた。その理由が酔つ
払うと人に抱きつく癖があるからとまでは言えないが。しかし主任
は得心した顔つきで優しく笑つた。

「越智さんつてWEBで可愛がられてるんだな。でも分かる気はす
る。何て言つか……懷いたら尻尾振つてずっとそばで待つてみた
いな？」

「主任まで人のこと犬みたいに言わないでください」

抗議の声も彼には犬の鳴き声に聞こえるのか、笑つて聞き流して
いる。

「WEB事業部のペットか。……瀬尾も可愛がつてんでしょう？」

やけに親しげな呼び方を不思議に思つてゐると、主任はすぐに言い添えて疑問を解いてくれた。

「俺ね、瀬尾や佐久間と同期なんだ」

「あ、そうなんですか」

同期。その単語はいわれのない安心感を私の胸にもたらした。それならば、係長と滝沢主任は気心の知れた仲なのだ。佐久間主任やみどりさんと同じようだ。

昨日から 滝沢主任に再会したときから なぜだか胸の中に広がつていていた雲が吹き払われていくような気がして、気持ちに余裕ができた。つい舌の動きも軽やかになる。

「じゃあふたりのマル秘ネタ、いろいろ知つてるんじゃないですか？」

「今度教えてください」

「知つてどうすんの？」

「口止め料として御飯奢つてもらいます！」

堂々と恐喝を宣言した私は主任は本気で笑い出した。

「面白いなー、越智さんって。 知つてるよ、マル秘ネタ。 今度教えてあげるよ」

「やつた！」

今日のランチで最大の収穫ではないか。喜ぶ私に滝沢主任は微笑んで繰り返した。

「うん、知つてるよ。 いろいろとね」

近い未来の奢りを確信し意氣揚々と部署に戻ると「越智さん、ちよつと」と瀬尾係長に呼ばれた。

内心、またかと思った。男性と一人で会うという状況に彼が異常なぐらい反応することは経験済みだからだ。私の身を心配してのことと分かつてはいるが、ただのランチだぞ。

ところが今回はなぜか佐久間主任も一緒に、打ち合わせ用の小部屋に行くよう促された。

それぞれ腰を落ち着けると、予想どおり滝沢主任と昼食をとることになった経緯を訊かれる。私は「コンビニ」での一件を伏せて、その他はありのままを話した。

ふたりは眉をひそめて聞いていたが、腕時計に目をやつた係長が険しい顔をして立ち上がった。

「これから会議なんだ。後は佐久間に任せる」

「えつ俺？」

「監督不行届だろ」

「マジかよ」

係長が部屋を出て行くのを見届けると主任がボヤいた。

「あーおつかね。お前が絡むとこれだからな」

いつもと違う成り行きに不穏なものを感じる。いったいどうしたのだろう。

どう始めたもんかなーとつぶやき、しばしの間腕を組んで考えた後で、主任はとある質問を投げかけた。

「お前さ。自分の立ち位置が実は微妙って分かつてる?」「微妙?」

「社長のお気に入りって立場、吉とも凶とも出るんだよ」「つまり、良いこともあれば悪いこともあるってことか。……そういえばあつたぞ。」

「しゃぶしゃぶ食べられるけど、みんなに恨まれるとか?」

直近で思い当たる」といえばそれしかない。しかし主任は渋い顔で否定した。

「アホか。食いもんから少し離れるや。お前を利用しようつゝしてヤツが現れてもおかしくねえってことだよ」

そのきな臭い内容にピクンと手が震える。

「つまり、滝沢主任が私を利用しようとしているつゝ言つんですけど?」「

「お前鈍感なくせに、なんでそういうところまで頭が回るんだ?」

鈍感？ 失礼なつ！

私がムツとするのを見て見ぬふりをして、佐久間主任は行儀悪く脚を組んだ。

「滝沢は俺や瀬尾の同期なんだけど、入社した当初からずっと瀬尾のことライバル視しててさ」

瀬尾係長と滝沢主任は入社後そろつて営業部に配属された頃から、仕事のできる新入社員として注目を浴びていた。一年後に係長がP R事業部に異動し、一人はそれぞれの部門で頭角を現すようになる。当然周囲から比較されることも多く、一人が互いを意識するのは自然の流れであつたが、滝沢主任の瀬尾係長への甲乙含めた感情はその逆よりもずっと強かつた。

若手の出世頭として、異例の速さで一人は主任に昇進した。だが瀬尾係長より一年遅れたことが滝沢主任の負の感情を煽ることになる。

更に昨年の夏に係長が昇進を果たし、WEB事業部においても業績を上げているのに対し、主任は不況下の成績不振とも相まって焦りが強く見られるようになつた。

そこで目をつけたのが つまり私。社長のお気に入りである私に近づいて取り入ることで、社長の目に止まりあわよくば側近グレープの一角に入り込むことを考えたのではないか

「本気でそう考へてるとしたら激しいカン違いですね。私に取り入つたつて社長に対して影響力なんかないのに。ただ弄られてるだけなんだから」

思つてもみなかつたふたりの関係を知られ、先程胸に宿つた安心感がみるみるうちにしぼんでいった。

「外のヤツにはそれが分かんねえからな。だからお前の愛人疑惑だ

つて出てくるんだろうが

主任は脚を組み直して更に続けた。

「お前はそういう自分の立場に無自覚だから、近づいてくるヤツの真意なんか考えてみようともしねえだろ？だから後になつて傷つくこともあるんじゃねえかって、瀬尾がさ」

「係長が？」

「ずっと実力だけの世界で勝負してきたお前には、出世のために人に近づくなんて発想 자체そもそもないだろ？でも実際問題、人が集まれば派閥はできるし、少しでも自分の有利な位置に立とうとするんだよ、人間ってのはさ。中には『社長のお気に入り』って存在を疎ましく思つて排斥したり、逆に利用しようとするヤツがつているさ」

それが私の微妙な立場か。確かにそんなの考えてみたこともなかつた。「社長がウザくて嫌だ！」つてヒスつてただけだし。

「今回滝沢がお前に近づいた理由はまだ不確かだけど、わざわざＷＥＢまでお前を迎えてきたってところがさ、存在をアピールしたがてるみたいに見えんだよ」

それは確かにそうかもしない。

それともうひとつ、滝沢主任が「瀬尾も可愛がってんでしょう」と言つたことが私には気になつていた。あれは係長を意識して様子を探ろうとしたのだろうか？彼もまた『社長のお気に入り』に取り入ろうとしていると疑つて？

でもどうして係長が私を『可愛がる』なんて思うんだろう。彼のようにもともと実力があつて昇進を重ねてきた人には、他人に取り入る必要なんかないのに。

佐久間主任に疑問をぶつけると、あっさりと答えが返つてきた。

「向井の件があるからな」

以前社長のお気に入りだった人の名前を、苦々しさを込めて舌に

乗せる。

「瀬尾の方から、社長のお気に入りである向井に近づいたって見えたヤツだつているんだよ」

「ええつ！？ 嘘！」

「人によつて見方はそれぞれだろ」

「それはそうですけど……そういうえば係長のファンの人たちは、向井さんが係長を狙つて社長に仲介頼んだつて信じました」だから私をシメようとしたのだ、第二の向井さんが現れたとカン違いして。

「掛けの眼鏡で色も形も変わつて見えるぞ。眞実は関係者にしか分かんねえよ」

つまり、社長と係長。

でも係長は、向井さんの問題を片付けるために結婚を画策したことを認めた。彼女が結婚すれば社長の興味は失せただろうからつて。『社長のお気に入り』に擦り寄るつもりなら、そんなことはしなかつたはずだ。

「その瀬尾のファンにしたつて、あの騒動のあと、あいつスッパリ手え切つただろ。自分のファンよりお前、つまり『社長のお気に入り』を選んだつて見方もできる。そういう目で見るヤツは、当然こう考えるだらうな」

苦々しさに酸味を加えた声音で主任は言葉を継いだ。

「『瀬尾達也がいよいよ本氣で出世競争に乗り出した』ってな

ゴックンと唾を飲み込んだ。あまりに大きくなつた話に、不意に背筋がゾクッとする。

「私……私、『お気に入り』なんかやめたいです……」

意氣地のないことに弱音を吐いた。周囲の目にに対する恐怖感が重く胸にのしかかる。

佐久間主任は私の顔を見て困つたように笑つた。

「んな情けねえ顔すんな。それとそういう顔、瀬尾の前で見せんなよ」

「心配かけるから?」

「いや、むしろお前のためとこいつが……分かんなきゃいいわ。逆におもしれーかもな」

意味不明なことをつぶやくと、彼は背筋を伸ばして座り直した。
「ここからはオフレコな。お前、瀬尾は出世のためにお前を利用してると思うか?」

「思じませんよ!」

「即答するな。少しは考えろ」

いつたい何を言っているのか。係長と仲の良い主任の言葉とは思えない。

「考えるまでもないでしょ? それとも疑えって言つんですか?」

「『疑つ』んじゃねえ。田を開けてよく見ろつつてんだよ
彼が何を言いたいのかさっぱり分からぬ。」

「同じように滝沢のこともな。お前に関わろうとする色眼鏡で見られる可能性もあるつてことを踏まえて、周りの人間よく見てみる。周囲にどう思われてもいいからお前の傍にいたいってヤツがいたら、それがどうしてなのかを」

深い深い溜息をついた。一度に多くのことを聞かされて、頭が飽和状態になっていた。それでも主任に向かって賞賛の言葉をかける。「それにしても佐久間主任はエロいことばっかり考えてるんじゃないですね。お見それしました」
少しは謙遜するかと思ったが、彼はフンと鼻を鳴らして胸を反らした。

「ようやく俺様の真価が分かつたか。これからはもつと敬え。佐久間様と呼べ」

「さくまざまやくせままたくまた……私には無理です」

「早口言葉じゃねえ！ 」のスカポンタンン！」

佐久間主任から教えられた私の『微妙な立ち位置』は心に暗い影を落とし、日が経つにつれじわじわと深く侵食していった。一度は吹き飛わたと思った雲が、次第に厚く色を濃くしていく。なるべく考えまいとしても意識がそちらに向かうのを止められなかつた。社長に連れ出された休憩室で、彼に指摘されて初めて顔にまで出でいるのだと知つた。

「浮かない顔をしてるねえ、美春ちゃん。いつもの君ひじくないなー」

そもそも元凶は自分であることも直観せずに何を呑氣な。このオッサンが私をあからさまに『お気に入り』などとしなかつたら、こつこつして思い悩むこともなかつたのだ。

つい恨みごどが口をついて出た。

「どうして私なんですか？」

「うん？」

「どうして私だつたんですか。リレーで勝つただけなのに」ふたりの他には誰もいない休憩室にやるせない声が響いた。社長はしぶしぶいつと私を見つめると、やがて破顔して言つた。

「だつて美春ちゃんてば可愛いからつ。僕と息子の好みど真ん中だつたんだよー」

息子……まだそれを言つたか。オッサンに話したのが間違いだつた。私が大きな溜息をつく傍らで、社長は「あ、光がまた会いたいって言つてたよー」とこちらの気も知らずに一コ二コして言つた。

すつきりしない気持ちを抱えたまま日々は過ぎてゆき、一月も間もなく終わりを迎えていた。

滝沢主任からは飲み会の誘いが一度あつたが応じなかつた。彼がただ親切心と好意で私と交流を持とうとしているのか、それとも裏に意図するところがあるのか、佐久間主任には口を開けてよく見ろと言われたけれど、彼の真意を知るのは怖いような気がした。

一方係長からもたびたび食事に誘われたが、こちらも断つていた。出世のために社長のお気に入りを可愛がっているなどと、彼が悪く言われることは我慢がならなかつたのだ。

私は彼を応援している。彼に一番になつてほしいと思っている。でもそれは私が『社長のお気に入り』である結果であつてはならないし、周囲にそう思われるのも嫌だ。

そういう心持ちは係長以外の人に対しても波及し、ついには藤田さんや杏子さんの誘いさえ断るようになつた。自らシャツジャーを下ろしてしまつ愚かさを自覚しても、周りの人を好きだと思えば思うほど、距離を置くことしかできなかつた。

気分がクサクサしている。取り入るとか利用するとか色眼鏡で見るとか、私の気質にそぐわないことで頭を悩ますのはストレス以外の何物でもない。

こういう時は走りたい。走つて汗を流して嫌なことを忘れるのだ。そうだ、酒を飲むよりずっと健康的ではないか。

そう思つていたら光くんから抜群のタイミングでメールが来た。水曜日に織田フィールドで陸上部の練習があるからよかつたら来てという誘いに、仕事帰りでよければ行くと返事した。

係長には光くんからのメールは転送するように言っていたが、結局一度もしていなかつた。挨拶程度の内容を転送する意味などなかつたし、年下の男の子一人のことでおたおたしていたら越智美春がすたる。

お誘いの目的は走ることで場所は陸上トラック、心配げ無用である。

得意の集中力を発揮して精力的に仕事をこなした水曜日。終業時間になるやいなや帰り支度を終えた私に杏子さんが声をかけてきた。

「ポチ、御飯でも食べに行こうよ」

申し訳ないと心の中で手を合わせながら断る。

「すいません、用事があるんです」

「……最近ノリが悪くない?」

痛いところを突かれ、慌てて彼女の脇をすり抜ける。

「お疲れさまでした!」

「ポチ、ちょっと!」

引き止めようとする声を背中に受けながらも小走りで部屋を離れ、エレベーターに向かつた。すると今度は「越智さん」と係長の声が耳に届く。

「早いね今日は。どこかに行く予定?」

彼の視線が手に提げたスポーツバッグに落とされるのを見て、ギクッとしてつい「え、えーと、その」としどろもどろになってしまった。案の定、訝しげに見ている。

マズイ。バレたら叱られる。まるで悪をした子供のように嘘を探した。

「あ……兄と！ 約束が

「ふうーん」

真偽のほどを窺う目に冷や汗がたらりと流れ。しかし係長はすぐには表情を和らげ優しい眼差しで私を見下ろした。

「まあいいや。あのさ、金曜日、食事に行かない?」

条件反射で心が踊つたが、引っ掴んで無理やり抑えつける。

「ダメです、金欠なので」

「……給料日は一日前だったよ? でもいいよ、奢る」

さすが係長、私が弱いキーワードを提示して搔きぶりをかけてきた。

「いつも奢つてもらつてばっかりだからダメです」

「何遠慮してんの？ らしくない」

「ダメなものはダメですよ」

「う。ダメだ、彼が周囲から汚い目で見られるのは、そんなのは嫌だ。」

「越智さん？」

「あ、遅れちゃうんで、行きますね。お疲れ様でした」

踵を返して逃げ出すようにその場を去った。
心をどんよりと覆っていた雲から、雨が降り出していた。

第三十六話 微妙な立ち位置（後書き）

第二十七話 ペットの権利

現役男子高校生はさすがに速かつた。本格的に陸上競技をやっている人間特有の熱が伝わってきて、並走する私の身体にも火が灯る。冷たい空気につらされた肌がそこだけシンとして痛かつたけれど、吐き出す息と同じぐらいに心も温められていった。

代々木公園内の陸上競技場、通称織田フィールドに着いたときは光くんたち陸上部の練習は終わりに近づいていて、こちらが入念な準備運動を終えてトラックの周回を始めると、これがラストと言って付き合ってくれた。八百メートルと四百メートルを一本ずつ走つたが、彼らについていくのが精いっぱいでいた。

でも気分が向上したことは間違いない。やっぱり走つてよかったです。

「やつぱ美春ちゃん、はえーわ」

田の前にやつてきた光くんがハアハアと息を切らしながら笑う。浅い呼吸音と唇の間からのぞく白い歯が、高校時代に男子部員と一緒に走つた記憶をフラッシュバックさせた。

私は少し口を尖らせて彼に文句を言つ。

「光くんずるいよ。男子校なんて一言も言わなかつたじゃない

陸上部員たちに紹介されてすぐに抱いた違和感。それが、男子部員しかいないからだと気づくのにそう時間はかからなかつた。

「陸上部には女子はいないんですか？」

途端にどつと起こつた爆笑の意味も分からずにひとり取り残されていると、顧問の先生が低音を震わせながら告げた。

「ウチは男子校です」

「男子校！？ うそつ！」

集中する視線をまともに受け止められずにつつむいてしまつたら、「てんねーん」「カワイー」「やべえ」とからかわれたのだつた……

私からの苦情を聞いても光くんはクスクスと笑っている。

「『めんねー。男子校って言つたら来てくれないかも、と思つてさ。美春ちゃんつて男慣れしてない感じだし』

年下の子にまでそんなことを言われたのが心外で、反論しようとを開きかけたところで彼に向調する者が現れた。

「ほんとそんな感じー。美春ちゃんメッチャ可愛い。すげータイプ」「へ……？」

よく見ればまだまだ幼さの残る顔だちだ。そんな彼から可愛いなどと言われまじつ正在すると、他の部員たちが一斉に非難の声を浴びせた。

「お前抜け駆けすんなよ」

「やつだよ、また早いモン勝ちとか思つてんだり」「るつせーな、わりーかよ」

熱くなりかけた応酬を止めたのは顧問の先生だった。

「お前ら色氣を出すのは十年早い！ やつさと着替えに行け！」

部員たちを追い立てるに苦笑いをしながら近づいてきた。

「どうもすみません、普段女子と接点がないもんで浮かれてるんですよ、しかも元インハイ四位でこんなに可愛いお嬢さんと一緒に走つたもんだから」

「いえ、あの……」

可愛いお嬢さんなどと氣恥ずかしいことを言われ言葉に詰まる。すると光くんが横やりを入れてきた。

「先生こそ浮かれて色氣出してんじゃねーよ。ほんと油断も隙もないんだから。ほら美春ちゃんも着替えに行こ」

これが男子校のノリなのだろつか？ すっかりペースを乱されたまま、光くんに守られるようにして更衣室に向かった。

着替えが終わって外に出ると、待ち構えていた陸上部員たちに取

り囲まれた。

「美春ちゃん、メアド交換しよー。」

「俺も！」

「俺も交換したい！」

なんなの、これは。

彼らの勢いに圧倒され呆然としていたら、慌てた光くんが間に割つて入った。

「お前らはダメ！ 離れる！」

「じゃあ僕と交換しましようか、美春さん」

「え……えっ？」

大人の落ち着きでもつて迫つてくる先生をも、光くんは断固として拒絶する。

「何言つてんだよ、先生。オッサンはもつとダメ！」

「三十一歳独身男性の婚活に協力しろ」

「美春ちゃんはダメなの！ ほらもつお前ら帰れよー。」

「なんで光だけ？ ずるいじyan！」

彼らはひとしきり不平を並べていたが、光くんの強い態度を崩すことはできなかつた。ようやく全員を追い払つたところで、ひと息ついた彼がホツとしたようにつぶやく。

「あつぶねー……メアドなんか交換させたら、俺、殺される……」

「……誰に？」

奇妙に思つて尋ねると彼は目に見えてギクッとしたが、すぐさま眩しいぐらいに爽やかな笑顔で応えた。

「父ちゃんだよ。美春ちゃんは父ちゃんの会社の大切な社員で、お気に入りだからね。何かあつたら大変だもん」

そうだつた。すつかり忘れていたが光くんは社長の息子だつた。

彼が意図せずに口にした『お気に入り』という言葉が、走つていた間は忘れていたことを思い出させる。

「腹減つたなあ。美春ちゃん、何か食べに行こ」

「こちらの気がふさいでいるのを知つてか知らずか光くんが誘つてくれたが、遅くなるとご両親が心配するから帰つた方がいいとそこは未成年を気遣う。しかし彼はかすかに悲しみの色をにじませて微笑んだ。

「ウチに帰つてもメシないんだ」

練習の後はいつも外食なのだろうか。それにしても彼が身にまと
う空気が重い。

「一年前に俺の両親離婚したの。母ちゃん若い男作つて家を出でつ
て……それ以来父ちゃんとふたりきり」

あまりの衝撃に舌の動きが止まり、足がすくんだ。あのおぢやら
け社長の笑顔の裏にはそんな哀しみが潜んでいたのか。

光くんは口を引き結び視線を横に流した。これまでに見た朗らか
に笑う姿との落差に、彼が心に抱える深い寂しさを見たような気が
した。

私は二ヶ口り笑い陽気な声を出した。

「分かつた。御飯食べにいこう。お姉さんが奢つてあげる」

「ホント？」

「お給料出たばかりだよ？ 任せなさい。十代の男の子はもりも
り食べないとね！」

「やつた！ ……美春ちゃん、ありがと」

少し恥ずかしそうに手を伏せた彼の背中をバンバンと叩いて歩み
を促した。

私たちが入つたのは原宿駅からそう遠くないファミリーレストラ
ンで、「半田光御用達の店」という彼の言葉が決め手になった。
色鮮やかな写真がふんだんに使われたメニューを一通り吟味して、
私はビーフシチューにサラダ、パンと飲み物のセットを選んだ。一
方光くんは一種類のフライが付いたロースステーキにサラダ、ライ
スと飲み物のセットを頼んだのだが、さすがに若いだけあって食べ

る量も速さも違う。ライスをお代わりして見事に平らげたのには目を丸くしたが、いつそ見ていて気持ちが良かつた。

空腹が満たされると、先日の『デート』の相手について根掘り葉掘り訊かれた。しかし父親である社長の耳に入ることを恐れ、人物像ははぐらかす。

「え、じゃあ彼氏じゃないの？」

「いやいや、とんでもない」

「でも好きなんでしょう？」

「す、好き？……いや、そういう感情は……信頼はしているけど横を向いてフフッと笑う光くんの顔は、含み笑いをする社長にそつくりだ。

「何が可笑しいの？」

「だつてその人は美春ちゃんのこと好きなのに、報われてないなって思つて」

「違う違う。本当にそういうんじゃないの？」
そう。それに係長にはきっと、好きな人がいる。

はつきりと聞いたわけじゃないけど、異動してくる前に、その人のために言い寄ってきた女性は断つたような話だった。それに今はもう次々と相手を取り替えるような恋愛はしないと、誓つてひとりだけだと、真剣に訴えていた。あれはきっと本気で好きな人がいるからなんだろう。

元受付嬢の本田さんと付き合っていたことを周囲にはひた隠しにしてたのだが、噂が広まつて彼女が本命だつて誤解されるのが嫌だつたからじやないかと思う。そのうち竹内係長と白川さんのふたりをくっつけようとして、何がなんでも秘密にしなければならなくなつたんだろう。

どんな人なのかな、係長の好きな人。彼が腹黒だつてこと、知つてゐるのかな。

ところん他人に冷たくできる一方で子供のような表情を見せたり、

太つ腹に御飯を奢ってくれるくせにお酒を飲むことには口うるさかつたり、優しいかと思えば意地悪を言つたり、私が知つてゐるよりもっと多くの素顔を彼女は見ているのだろうか。誰も知らない彼の素顔を彼女だけは知つてゐるのだろうか。

すぐ近くで姿を見ているような気になつてゐたけど、本当はまだまだずっと離れた後ろを私は歩いてゐるかもしない。そして今また更に距離を置こうとしているのだ。

私だけ置いてきぼりにされているような寂しさで胸が疼いた。^{うず}

グラスに残つていた氷をストローでかき回しながら、光くんがふいに優しげな口調で言つた。

「美春ちゃん、また走りたくなつたら俺いつでも付き合つよ。だから元気だしてね」

「え？ 元気つて？」

「父ちゃんが、美春ちゃん最近元氣ないんだよーって心配してたからさ。そんなん、走ればもとに戻るよつて言つてやつたの」

……そうだったのか。社長は社長なりに気にしてくれていたんだな。それに走れば元氣を取り戻せると、単純だけど私の本質をちゃんと見抜いている光くんにも驚いた。

「……ありがとう」

社長父子の思いやりを受け取つて、感動がジワジと胸に広がる。すると光くんはニツコリ笑つてデザートのメニューに手を伸ばした。

「やーてど。パフェにしようかな、あんみつにしようかな？」

「……まだ食べるの？」

気持ちに潤いができたのか、翌朝は爽快な気分で出勤した。オフィスの机を拭く手もリズミカルに動く。そこへいつもより早く杏子さんが来て、「コーヒー飲むの付き合え」と休憩室に連れていかれ

た。

熱いコーヒーに息を吹きかけながら杏子さんが尋ねる。

「昨日はどうに行つたの？」

社長の息子と走っていたと言つてもこゝものだらうかと思案していると、彼女は「まあそれはいいんだけど」と言つて後を続けた。
「係長と何かあつた？ 実は昨日廊下で話してゐるの聞いちやつてさ」
逃げ出すように去つたところを見られていたのか。それならば心配するのも無理はないと思つたが、彼女が気になつたのは別のことだつたようだ。

「あんたが食べ物に釣られないのは変だなと思つて」

そこかい。

「しかも奢りなのに」

そんなに変か。……返す返すも惜しいことをしたと自分でも思つてゐるが。

「また係長と何かあつたの？ ……あんた最近元気なかつたし」
声音にいつにもない優しさがあふれている。気づいていたのだと知つて、ついポロッと心情がこぼれ出てしまった。

「……私が社長のお気に入りであつてもなくとも、杏子さんは変わりませんよね？」

「何それ。当たり前でしょ、何を今更。……まさか係長は違つて言いたいの？」

杏子さんが眉を曇らせたのを見て、慌てて否定する。

「いえ、係長だって同じだと思つてますよ。でもそうじゃない人もいるのかもしれないって……」

「そんぐじぐじ考えて周りをシャットアウト？ あんたらしくない」

「でも係長が私と仲良くするのには社長にへつらつていろいろ見られるのは嫌です。係長だけじゃないけど」
小さく溜息をついて彼女は私の頭を撫でた。

「忠犬だねえ。でも誰もペットにそんなこと望んじゃいないよ。一緒にいたいからペットなんじやん」

……犬扱い。喜んでいいのかそれは？

「ひどい飼い主がいたら噛みつけばいいんだよ。それはペットの権利だから」

空に立ち込める雲を吹き払うかのよつた、鮮やかな笑顔で杏子さんは言った。やまない雨はないよつて、私の悩みも明日には消えていふような気持ちにさせてくれる笑顔だった。

翌日の金曜日、PR事業部の片岡麻里子さんから社内メールで飲みに誘われた。女性ばかり数名で行くのだといつ。急な話ではあったが逆に他意のなさも感じられて了承した。

ペットの権利なるものを教えられて、揺れていた心がストンと収まつたよつに感じていた。真意を推し量つていてだけでは何も生まれない。とにかく動いてみると。

しかし飲み会のことは誰にも言わなかつた。係長には金欠だからと嘘をついて誘いを断つたのに、そのことが耳に入れば何を言われるか分かつたものではない。

その係長は昨日一田面白くなさそうな顔をしていたが、都合の良いことに昨日今日と彼と業務上接触することはなかつた。

午後四時になつて工藤課長と瀬尾係長を始めとする数名が九階会議室に向かつた。春に予定された中堅企業向けのWebPRセミナー運営会議が今日から始まつたのだ。このセミナーは営業部と合団で企画されたので、会議には当然、営業部からも担当者が出席する。議論が白熱しているのか終了予定時刻を過ぎても誰も戻つては来ず、やがて終業時間となつた。帰り際に佐久間主任が寄ってきてボソッと声を出す。

「今日の会議、滝沢も出でんだよ

「え？」

「あのふたり、やり合つてなきやいいけどな」

やり合つ。良い意味でのライバルなら仕事にも良い影響が出るのはすだけだ、あのふたりの場合はどうなるんだろう。

新たに生まれた不安を抱えて職場を後にした。

片岡さんたちと向かつた居酒屋は私が初めて行く店で、PR事業部では定番のひとつなのだと教えられた。部署「J」とテリトリーがあるのだなあ。

今夜集まつた片岡さんと長野遙さんにもうひとりの女性社員とはすでになじみがある。係長に関する情報をこつそり教えてくれていたのは彼女たちなのだ。いずれも入社して数年が経ち、仕事にも慣れて波に乗ってきた様子が話し方からうかがえる。

四人で乾杯をしてしばらくすると、「あれ、来てたの」という声とともに一人の若い男性が近づいてきた。やはりPR事業部の社員だという。互いの紹介が終わると、隣のテーブルが空いていたのでくつつけて同席することになった。

「ラッキーだなあ、有名人の越智さんと飲めるんだから

男性の一人、沼田さんの台詞を聞きとがめた。

「何ですか、有名人って」

「去年の女子トイレのケンカ。フロアが違うからPRである場にいた奴なんてあまりいなくてさ、片岡さんと、あと誰でしたっけ？ 越智さんが何て言つて怒鳴りつけたかPRでメールが回つたの

「はああ？」

思わずすつとんきょうな声を上げてしまった。後から思い返すと相当キツいことを言つた自覚があるだけに、文章にされた恥ずかしさはこの上もない。

「『めんねえ。あんまり気持ちいいこと言つてたからつー、みんな

にも教えてあげたくて……」

「どうせあまり悪いとは思つていないのであろう片岡さんが、笑いながら謝った。するともう一人の男性である宮下さんがかぶせるよう言葉をつなぐ。

「だつてあれは確かにひどかつたでしょ。瀬尾さんはアイドルかつつの。俺、うちに瀬尾さんの写真貼つて総務に配布するエコヤR企画書出そうかと本気でいましたよ」

係長の写真付きうちわを想像して、ブツと吹き出してしまった。「夏ぐらいから追っかけがひどくなつてたもんね。瀬尾さんに彼女いないつて聞きつけてから」

「そろそろ、アプローチかけてきた人ふたりとも断るなんて前例がないから」

やはり人気者はこうやって酒の肴にされてしまうのだなと思いながら、話に興じる彼らを眺めた。

思いきつて動いてみたら案外なんてことない。彼らが裏を考えることなく付き合える人たちだということは、交流を持ち始めたときから分かっていたことなのに。色眼鏡で見ていたのは私の方だったのだな。もしもそれが間違いで、彼らに思惑があつたとしても、私には歯みつく権利がある。

そう思えばずっと気持ちも楽になるのだった。

「あ、噂をすれば」

長野さんがつぶやいた一言を受け、全員がその視線の先を追つた。店の入口で瀬尾係長が空席を探しているのか店内を見回している。その横には滝沢主任。

よりによつて今一番会いたくないふたりがなんと一緒にいるの!? 私はとつさに身をかがめて陰に隠れた。向かいに座る片岡さんが不審げに尋ねる。

「どうしたの、越智さん」

「いえつ、なんでも……」

離れた席に行つてほしいうつ願いもむなしく、見知った顔に気づいた滝沢主任がこちひりしゃつしてきた。一步遅れて係長も後に続く。

「あれ、越智さん?」

主任が私を見つけて驚きの声を上げた。すると即座に係長が反応して眉間にしわを寄せる。焦りを押し隠して微笑みながら会釀するど、主任は冗談ぽく私をとがめた。

「PRの連中と飲んでるの? なんだよ、こいつの誘いには乗つてこないのになあ」

気まずさとバツの悪さで舌が動かない。ところが意外にも係長が口を挟んで救つてくれた。

「滝沢。ふたりで話すつて言つんなら別の席で

「いいじやん。せつかくだからこちひりおつり。あひおひおひ。い

いよね?」

半ば強引に同席を求められたにもかかわらず、片岡さんたちは歓迎の意でふたりを迎えた。こうなると係長も避けず、沼田さん宮下さんが譲つた席に 私の隣と斜め向かいだ 主任とともに着いた。

視線をまともに呑わせられずもチラチラと係長の様子を探れば、表面上は普段と変わらず穏やかだが目は笑っていない。彼が不機嫌であるらしげことが見て取れた。

「珍しい組み合わせじゃないですか? おふたり」

「今度営業とWEB合同でセミナーることになつてさ、その会議にふたりとも出ててその流れで。瀬尾と飲むの久しぶりだし、な?」

「ああ」

係長は言葉少なに注文したビールを飲んだ。この様子だと誘つたのは主任のようだ。

「でもここの店に来て、やっぱり縁があるんだなつて思つたよ

主任の意味ありげな発言に皆が興味深そうな目を向ける。

「何ですか、それ」

その問い合わせに対する答えは、彼の隣りに座る私に向かって発せられた。

「俺たち縁があるよね、越智さん」

グラスを口に運びかけていた私が瞬間的に視線を合わせたのは係長だった。時間にすればわずか一秒ほどの間に、彼の目の奥が揺らいだのを見て私の心もざわつき始める。

次いで田をやつた主任の顔には微笑みが浮かんでいたが、不透明な水の底で何かがうごめいているような、得体の知れない不安が胸の中で触手を伸ばそうとしていた。

「実はさ」と私たちが出会つたいきさつを主任が語り始める。再び係長を田で追うと、彼もこちらを見ていた。表情を消して、ただその田には驚きの色を浮かべて。

彼の体内で何かが動き始めたのは、おそらくこのときだった。

第三十八話 負けないで

「俺たち縁があるよね、越智さん」

滝沢主任が突然放つた言葉の槍は、私の言語中枢に命中し機能を麻痺させた。彼が私たちの『縁』について語るのをただ黙つて聞く傍ら、つい言いそびれていた事実を主任の口から瀬尾係長の耳に入れるこの気まずさに唇を噛みしめる。

「で、次の日にクライアントを連れてつたら、俺の肉まんを盗つた女の子がいるんだもんなあ。すごい驚いてさ。それが越智さんだったの」

「主任に肉まん譲らせるなんて、さすが越智さんだよね」

皆の笑い声に合わせて私もぎこちない微笑みを返す。ただの思いつきに過ぎなかつた『肉まんの縁』が現実のものになつてしまつた焦りと、その相手が滝沢主任であることへの困惑が、受け入れがたく思つてゐる自分を自覚させていた。

そして私の意識は、無表情のままテーブルに視線を落としている係長にずっと向けられていたが、主任が『ふたりの縁』の話を更に広げたことで否応なしに引き戻された。

「そういえば越智さんは秋田出身なんだって？」

「はい」

「俺、子供の頃秋田に住んでたの。親父が転勤族でさ。本物のかまくらが作れるほど雪がたくさん降る場所に住んだのつて秋田以外になくてさ。結構いい思い出なんだよね」

「そなんですか」

「小学校の遠足できりたんぽ鍋食べるんだよな。野外で鍋作つて食べるのつてこっちの人から見ると可笑しいだろつけど、子供はみんな喜んで食べてたよな」

意外な人物から聞く私の故郷の話。本来なら率先して身振り手振りさえ交えてお国自慢をするのに、相槌を打つにとどめた。係長の前で、私と主任のふたりだけに通じる故郷の話題を自ら披露することはなぜかためらわれたのだ。

「もしかしたら子供の頃どこかですれ違つてたかもしれないね。やっぱり俺たち縁があるよね」

再び『縁がある』と口にする彼。でも何か奇妙な印象を受ける。たとえ一時的にせよ故郷を同じくするというだけで、目に見えぬつながりに心安さを感じるものだ。それが『縁』だと言つのなら、私たちの間には確かに存在するのかもしない。

でも、本当に彼はそれを信じているのだろうか。なんだか、係長に聞かせたいがために『縁』を強調しているような気がしてならないのだ。でも何のために？

係長が社長のお気に入りである私を『可愛がつて』いると信じて、自分の方が私と深い関わりがあるのだと見せつけようとしているのだろうか？

チラッと係長を盗み見ると、無機質な表情でグラスを傾けている。心情をうかがい知る術が何もない、全身を『無』といつ色で塗り固めたような。そうすることで彼の内部でたぎるものをおさえているような。外観が、先程から胸に居座る不安を更に大きくしていた。

「瀬尾は？ ずっと東京？」

主任から突然話を振られて、これまで彫像のようだつた係長の表情が動いた。

「ああ、僕は東京生まれ東京育ちだよ」

おそらく主任の質問の意図を正確に理解した彼が、わざと挑発的に返した答え。案の定主任はそこに含まれた刺に反応した。

「何それ嫌味？まあ、瀬尾には似合つてゐるけどさ。でも田舎を知らないってのも可哀相だよな。子供の頃の貴重な体験つて大人になつてもずっと残るもんだろ」「

彼の言い分はおそらく正しいのだろう。でも係長のことを可哀相だとみなした彼に、私は反発と悔しさを感じていた。

可哀相だなんてどうして分かるの。それは彼が言つべき言葉じやない。

しかし係長本人は何でもないことのように受け流している。私はやり場のくなつた感情を紛らわすために、機械的に梅サワーのグラスを口に運び、やはり機械的に喉に流し込んだ。

「越智さん、次何飲む？」

空になつたグラスを見て、気を利かせた主任が尋ねた。

「あ、えーと」

反射的に返事をしようとしたが、低くて鋭い声がそれを遮る。

「もうやめとけ。だいぶ飲んでるだろ」

真つ直ぐにこちらを見る係長の、反論を許さない強い瞳。しかし主任は私に肩入れしたいのか、係長の向こうを張つて重ねて訊いた。「こんなところで上司面すんなつて。越智さん、何飲む？」

「だめだ」

彼も譲ろうとしない。しかも周囲を怯ませるようなきつい口調だつた。これまでほとんど口を差し挟まなかつた反動であるかのように、強い態度でこの場を支配しようとしている。

同席しているPR事業部員たちも重くなつた空氣に気づいて、互いに視線を慌ただしく交差させた。人当たりがよく物腰の柔らかな係長をよく知つている彼らの目には、その頑なな姿は奇異に映つただろう。しかし彼は自分の言動がもたらしている周囲の変化に何の配慮もせず、再び禁止の言葉を吐き出した。

「それ以上飲むな」

感情の制御に綻びが出始めているのか、表情に余裕がなくなつて

いる。

「のままでは彼にとつて流れが良くない方向へ行く。そんな予感がした。」

工藤課長と私との関係を問い合わせて、彼が感情を爆発させたあの夜を思い出した。異動前後の評判や王子様な外見、普段の冷静沈着な仕事ぶりからは想像もできない、負の感情をむき出した。思いつめた子供のような顔を見せた彼。

でも、ここで見せてはだめ。滝沢主任の前で自分を見失つたりしないで。

「あの、私、烏龍茶を」

とにかく今は彼の言つとおりに動じつと決めた。再び破局が訪れるることを回避するために。

ところが主任の言葉は更に彼を苛立たせた。

「ほら、瀬尾がそんなふうに言つからビビッちやつたじゃん。花金だよ？ 可哀相なことすんなよ」

まるで頭の固い野暮な上司から、若い女の子を救済してやるかのように言つて回しで係長を非難する。そこで私は彼をかばうために口を挟んだ。

「いいんですよ。私あんまりお酒強くないから」

「飲み会のたびに瀬尾にうるさく言われてんの？ それじゃちつとも楽しくないんじゃない？」

「そんなことないですよ。いつも楽しいです」

係長の顔に浮かび上がる焦慮が私にまで及んで声が上ずつたが、この話題はこれで終わりだ、そう思った。

しかしもはや私の意志は覆せないと見て取ったのか、主任は違う方向から攻めてきた。

「ねえ、やっぱり今度営業部の飲み会にいりでよ。ウチの連中にも

紹介するからや」

これならば私だって断れないと踏んでいるのか、余裕さえ見せて誘う。まるで、どうだこれでもまだ口出しするつもりかと、係長に挑むように そして実際に、挑発的な台詞を主任は投げつけた。嘲りの成分が混じつた口調で。

「まさかお前の許可がいるなんて言わないよな？ 安心しろよ、酔い潰してどうにかしようなんて考えてないから

その瞬間、係長の目付きが変わり口が歪んだ。次に起る事態を予測して心臓が驚づかみされたような痛みを覚える。そして唇を開き口撃に移ろいとした彼を、一瞬で心を決めて止めた 代わりに叫び声を上げることによって。

「あああっ！」

叫ぶと同時にガタンと立ち上がる。同席者たちばかりか店中の注目を浴びたが、摄取したアルコールのお陰のかちっとも気にならない。

驚きの目で見上げる人たちと同じ高さの目線に戻ると、周囲も何ごともなかつたかのように再びざわめきにあふれた。酔っ払った女の子がちょっと大声を出した程度のものだ。

「ど、どうしたの、越智さん」

片岡さんが目を白黒させてくる。

そういえば以前にも全く同じことを彼女の前でやっていた。あのときは昼の定食屋だったが。つぐづく私は突発的な女だと思われていいことだらう。

私は彼女には返事をせずに、係長に向かつて怒涛の勢いで苦情をまくし立て始めた。

「係長！ 後で返すって言つたのに嘘つき！ 会議なんか行くから今まで忘れちやつたじゃないですか！ 今日中に返してもらわないと

と困るんですよ。今すぐ会社に戻つて取つてきてくださいっ

「な……何を？」

長野さんがびっくりしながらも興味深げに尋ねる。

「鉄道ファン垂涎の五枚組DVDボックス『日本全国ローカル線ぶらり旅』！ 勝手に持ち出したつてバレたら、兄に殺されますっ。週末に全部一挙に見るつて言つてたから、絶対に今日中に返してもらわないと。ホラ、早く行つて！」

私の迫力に圧倒されたのか、目を見開いたまま何の反応も返さない係長に、大げさに舌打ちをした。

「あああ、もう、部下から借りたものをきちんと返さないなんて、よくそれで上司が務まりますねっ。そんなんだつたら私だつて明日から係長になれますよっ。ホラ私も行きますから！ 兄に見つかる前に戻しておかないと。ホラ係長早く！ ホラホラホラ！」

喚きながら立ち上がりて係長を追い立てる。ついでに財布から何枚か札を出して乱暴にテーブルに置いた。

「とつとと行つてくださいよ！ オフィスが閉まつてたら守衛さんに言つてでも開けてもらいますからねっ！」

そう怒鳴つたときにはもう、係長がいつも落ち着きを取り戻しているのが分かつた。苦笑さえ浮かべて、わざとなのかのんびりと答える。

「分かつた分かつた。そう急かすな。じゃあみんな、そういうことなんで」

再び爽やかな笑顔に戻つた係長はプリンスカブンに怒る私をなだめながら店を出たのだった。 呆気に取られたままの滝沢主任たちを残して。

居酒屋の喧騒を後にした私たちは、まだ始まつたばかりの金曜の夜を楽しむ人々が行き交う恵比寿の街を、駅に向かって並んで歩い

た。

「明日から係長にもなれるって？」

短い沈黙を先に破つた係長に、今更ながら自分が喚いた言葉の言い訳をする。

「言葉のアヤですよもつ……揚げ足取りはナシです」
「分かつてゐるよ。……ありがとう」

爆発しようとしていた感情の余韻なのか、声が暗さを引きずつている。続けてポツリとこぼした私をとがめる言葉には、哀しみの色さえ混じっていた。

「どうして言わなかつた？　滝沢のこと」

言つべきなのか迷つて結局口をつぐんだままでいたその理由を、私はすでに見つけていた。さつき大声で叫んだ瞬間に、取るべき道は決まったから。

「だつて係長が言つたんじゃないですか、ただの偶然だつて」

彼はフツと笑つて自嘲気味に返した。

「偶然も二度続けば必然だつて言つよっ」

「誰が言つたんですか？」

立ち止まつて見上げると、彼は一度私と視線を合わせたがすぐに逸らして短く息を吐き出した。

「……さあ。分からないな」

「だつたら」

主任のことを言わなかつた理由は、たつたひとつだ。

「誰が言つたのか分からぬ言葉より、係長が言つ方を信じます」

彼の言葉を信じたかつたから。

さつとこちらを振り向くと、彼は信じられないものでも見るような目を向けた。だから私は自分でひとつうなづいて言葉を重ねる
彼に信じてほしくて。

「言いましたよね？　係長の言つこと信じるつて

係長も言いましたよね？ 係長の言つことを信じるつて言つ私を信じるつて。

彼は瞳を大きく動かすと口の中で何かをつぶやいた。聞き返そうとする前に柔らかな笑みを浮かべて「うん」とうなずく。それに安心して、私は悪戯っぽく訊いた。

「ただの偶然ですね？」

彼もまた悪戯を思いついた子供のように目を輝かせた。

「ああ、偶然だよ。偶然はどこまでいっても偶然。何度あつても偶然」

この夜一番の楽しそうな表情を見て、私も嬉しくなる。

「縁なんかないですよね？」

「そんなもの、地上のどこを探したって君と滝沢の間にはないね」調子を上げた彼が繰り出す軽口に、田を合わせてふたりで笑った。

「でもこれでまた君はしばらく噂の中心だな。居酒屋で上司を怒鳴りつけた女つて。……ごめんな」

「どうせ一度キレイですから、何度もキレイても誰も変に思わないですよ。それに係長だってこれで鉄道ファンカミングアウトなんでおいこです」

「それは楽しそうだな。電車の名前、幾つか覚えとかなきや」

「今日から鉄男ですね」

「今度写真でも撮りにいく？」

「嫌です」

冬の夜風が人通りの途切れた道を吹き抜けてゆく。冷たさを感じるのはアルコールの効果が身体に残っているからだろうか、それとも気持ちが高揚しているからなのか。そして通りには静けさが降

りて、さつきぶつけることの叶わなかつた負の感情を口にするなり
今だと告げていた。

「 あの人、嫌いです」

「 ……滝沢？ どうして？」

「 だつて係長のこと、東京しか知らないから可哀相だつて言いまし
たよ、偉そうに！ だから嫌い」

まるで子供のような物言いに呆れたのだろう、彼は一言も発する
ことなく私を見つめた。それでも構わず気持ちの赴くまま舌を動か
す。

「 あんな人に負けないでくださいよ？ もし負けたら、私係長の部
下辞めますから」

大声で叫んだ瞬間に決まつた私の心。滝沢主任が係長にとつてラ
イバルなら、私にとつてもそれは同じ。

だから負けないで。私も負けないから。

彼が右腕を伸ばして私の頭に手を載せる。その流れるような動作
は、感情的でしかも不条理な要求への回答だった。頭を撫でる手の
動きやこちらを見つめる目の色は、私の想いに共鳴するように優し
さと力強さを増している。

「 君に辞められたら大変だ。だつたら絶対負けないよ」

今や自信さえ浮かんだその顔が、私を安心させてくれた。

「 よかった。でもキレたらダメですよ？」
「 分かった」

気持ちが上向きになつて足取りも軽く歩みを進める。

一時はどうなることかと思ったが、終わりよければすべてよし。

本当はもうちょっと飲みたかったけど……これは係長には黙つてお
こう。

「越智さん」

呼ばれて振り向くと、意を決したふたつの目が私を見つめていた。とても大切なことを今から打ち明けるかのよつな、静かな熱さも孕んだ態度に目を見張る。

「実は僕もさつき、初めて滝沢のことを嫌いだと思ったんだ。あいつが子供時代を秋田で過ごしたって聞いたとき。君と同じ体験をいつもしたんだと思つたら、どうしようもなくあいつが嫌いになつた」

心の襞^{ひだ}がめくれて隠れていた想いが飛び出したよつだつた。ずっと秘められていた想いが。

でも信じられない。そんなことつてあるんだろうか。だつて彼がまさか。

あり得ないとは分かつていても身体の奥から込み上げる喜びに、私は思わず口走つた。

「嬉しい」

それを聞くと彼は瞳を輝かせ、顔をほほにほほませる。

ああ、やっぱり嘘じやないんだ。

「係長がそんなに秋田を好きになつてくれてたなんて

「…………え？」

そうかそうか、そういうことだったのか。ライバルの幼少時代に嫉妬するほど、我が故郷を気に入つてくれていたとは。

「あれですね、前に一度私が田舎の話したの、忘れられなかつたんでしょ。臨場感あふれる語りつて実は私、得意なんですよねえ。こうやつて草の根秋田ファンを増やしたら、将来観光大使になれるかも。フフフッ」

鉄道ファンならぬ秋田ファンであることをカミングアウトして照れくさいのか、彼は表情を固まらせたまま空を見上げ、そして「ああー」とうなり声を上げた。

何だ、その声。照れといふより焦れだぞ、それは。
不思議に思いながらも彼と同じ空を見上げると、移動する数点の
光が見えた。

「あれ、飛行機ですね」

「……秋田行きかな」

「新幹線の方がオススメですよ。駅弁食べられるから」

「……うん、やっぱり駅弁は欠かせないよな……」

光の点が消え去るのを見送り、私たちは再び歩き出した。いつも
の位置で。

第三十八話 負けないで（後書き）

美春、もう無自覚の純愛ですね……でもカン違いは絶賛継続中。

今回、作者の遊び心サブタイトル第2弾なんですが（また古いですね……苦笑）、読者の皆様からの瀬尾係長へのエールになってしまっているかも（笑）

第三十九話 大事なものは

きちんと食事を摂つていなかつた瀬尾係長に付き合つてくれと言
われて入つた二子玉川のうどん屋。注文が終わるやいなや、待つて
ましたとばかりに彼は先程の居酒屋での一件を口にした。

「それにもとっさによくあんな話思いついたな。何て言つたつ
け、僕が借りたつていうロードのタイトル?」

「『日本全国ローカル線ぶらり旅』です」

「そうだつたね。本当にお兄さんが持つてているの?」

「いえいえ、瞬間的に頭に浮かんだんですよ」

「すごいな。やっぱり君には敵わない。君の頭の回転の速さときた
ら、脱水中の洗濯機並だ」

彼がこんなに褒めてくれたことがかつてあつただろうか。つい頭
の後ろを搔きながら工へへ、と照れ笑いをしてしまう。

そつかー、洗濯機かー。あんなに速いかなあ。ぐふ。

心配性的過干渉な兄に叱られるのを回避するため、幼い頃よりそ
の場の思いつきで言い訳する技を磨いてきた私である。社内でも有
数のできる男、最年少係長から褒められたことで自分の努力は無駄
ではなかつたと感慨に浸つた。

こんなことでも彼の役に立つてゐる。彼が一番になるための行程
で私に頭の回転の速さが求められるのなら、もつと速くしてみせよ
う。

そう決意して笑顔を見せると、彼もまた人を惹きつけてやまない
微笑みを見せて、しかしさりげなく爆弾を投下した。

「それで、金欠のはずの君が飲み会に行けたのはどうしてなのかな
?」

笑顔のまま固まつた私は、居酒屋で係長と遭遇した場面まで記憶
を巻き戻した。

そうだ。店に入ってきた彼を見て、ヤバい逃げたい隠れたいと思つたんだつた。金欠だと嘘をついて誘いを断つた以上、今日飲み会に行くことは彼には絶対に知られたくないなかつたんだつた。

すっかり忘れていた。マズい。何か思いつけ、言い訳を。私は即座に考えを巡らしこれならバレる』とはないといふ嘘を思いついた。

「昨日臨時収入がありまして……」

「へえ、どんな？」

「肩凝りに悩む兄の肩を揉んでやつたら三千円」

「三千円！ 気前のいいお兄さんだ」

「太つ腹なんですよー」

「じゃあ、一昨日某男子高校生に夕飯を奢つてやつた金はどこから来たのかな？」

冷たい汗が背中を流れた。『某男子高校生』が光くんを指すことは言つまでもない。視線をさまよわせたが、係長はテーブルに乗り出して身を近づけ、もはやお馴染みとなつた黒い笑みで言葉によらず語りかけた。

どう言い訳するんだ？ ん？

……これが目的だったのか、家まで送ると言つたのは。全て知つた上で私を袋小路に追い込み、言い訳が破綻するのを楽しむとは。

「Jの人、Sだな。

瀬尾係長が滝沢主任に対して暴発するのを未然に防いだ私は、彼のために大きな仕事をひとつやり遂げたような満足感をもつて別れの挨拶を告げた。

JR恵比寿駅前。

雜踏の中でもひときわ目立つ彼はしかし、何かひらめいたらしく目に光を灯し薄く笑つた。

「日比谷線で一緒に帰らないか？」

「」の人がこういう顔をするときは決まって良くないことが起きる。

「」は遠慮してひとりで帰ろう。

「いえあの、JRで帰り」

全部言い終わらないうちに右手首をつかまれ引っ張られた。

「ちよつ、係長！ 何すんですか？」

「上司命令」

そのまま日比谷線恵比寿駅まで連れて行かれた。そして私に一言も口を挟ませないまま、二子玉川までの切符を買って寄越す。恵比寿から日比谷線が乗り入れる東横線自由が丘まで行き、大井町線に乗り換えて二子玉川までのルートだ。

係長の最寄り駅は大井町線の九品仏だそうだ。自由が丘の隣でのルート上にある。

「自由が丘って何か食べ物と関係の深いイメージが

「……スイーツの店が多い？」

スイーツ！ そうだったそうだった。雑誌でもよく見かける。私の瞳が輝くのを見たのだろう、彼がとある提案をした。通勤定期をこちらのルートに買い換えたらいどうかと言うのだ。

「それならいつでも好きなときに来て、スイーツの店を片っ端から攻略できるよ？」

「それはいいアイデアですね」

「よければ僕も付き合つよ。僕と一緒にならケーキ一人分食べられるだろ？」

魅力的な提案に加え親切な申し出までしてくれた彼はまるで天使のようだ。嫌な予感がしたのは思い過ごしだったのだ。

甘いものが苦手なのに付き合つてくれて、しかも自分の分を私にくれると？ 係長ってやつぱりいい人だなあ。それとも居酒屋での一件のお礼がしたいのかな。私が喜ぶことで感謝の気持ちを伝えようとしてるんだろう。

そんなふうに考えていたから、彼が最寄り駅で降りずに私を家ま

で送ると主張しても、これもお礼のつもりなのだろうとありがたく受け入れたのだった。

「嘘をつくな」らしいような嘘じやないとな

「彼からのメールは転送すると約束したのにな」

「僕との食事を断つてまさか男と飲むとはな」

「うどんを食べ終わっても未だにネチネチと嫌味を言い続ける。こちらが一言も言い返せないと思つて。礼だなんてとんでもない、恩を仇で返してやるじゃないか。

店内に視線を走らせたが、閉店時間が近いせいか客の姿はまばらだ。混んでいればそれを理由にしてさつさと切り上げられるのに。店員ももはや、閉店までどうぞ自由と言わんばかりに厨房で後片付けにいそしんでいる。

「どうしてバレたんですか……？」

観念しておずおずと訊いたら、だるそうな答えが返ってきた。

「昨日の朝の定例会議のあと、直々に社長に呼ばれてね。『瀬尾くん、僕今日ＷＥＢに行けないから、美春ちゃんにお礼を言つておいてくれるー？ タベはウチの息子が大変お世話になりましたーつて。陸上部の練習に付き合つてくれただけじゃなくて、夕飯までご馳走になつたよって、息子つてば嬉しそうに言つもんだからあ。あのふたり、とっても仲良しなつたみたいだよ？ 父子そろつてお気に入りーっと』……とまあ、こんなふうにね

社長の口調まで真似て語る彼が痛々しい。光くんと会つたことが社長に筒抜けになるのは覚悟していたが、まさか係長をメッセンジヤーボーイとして利用するとは。

「僕に嘘をついて彼に会つたことも気に食わないけど、あれほど男と一緒に飲むなど相沢さんたちからも言われていたのに、こいつそり飲み会に行くなんてどうこうつもりだよ

「不可抗力ですよ……初めはちゃんと女性だけだったんです。あのPRの男性は後から来た人たちで、あの人たち同僚だから、自然に一緒にテーブルでつてなりましてですね、そしたらもう私には手も足もない事態になつてしまつたとさ」

必死に言い訳をするも彼の容赦ない責めは続く。

「何が手も足もないだ。酒にはしつかり手を出してたじやないか。

男が来た時点でソフトドリンク頼めよ」

何が悲しくて飲み会に行つてソフトドリンクを頼まなければならんのだ。

「どつちにしても係長は、今日は会議が延びて食事どころじゃなかつたでしょ？」

「君と食事に行くんだつたら事前に充分根回しておいたよ。だらだら延びてその上滝沢に無理やり誘われてあの店に行つたら、君がいたんだからなあ。僕がどんなにムカついたか分かるか？」

それはそうかもしれないが、私だってストレスが溜まつてたのだ。
『社長のお気に入りはつらいよ』のタイトルで本を一冊書けるぐらいの。そんなときに光くんから一緒に走ろうと誘われた。走つたらやはり気持ちが良かつた。あの時間を彼と共有したことは間違いではなかつた。

私は光くんのためにも自己弁護をすべきだ。

「でもつ、飲み会に行つたことはともかく、光くんのことは別ですよ。係長が後輩から慕われるみたいに、光くんは私のこと先輩ランナーとして見てくれてます。私だって頑張ってる人は応援したいんですね、ただそれだけなんですよ」

「それでもやっぱり彼と一人で会うべきじゃない。恋も憧れも尊敬も性欲も、区別できずに取り違えるもんなんだよ、あの年頃はね」
彼はあくまで持論を覆す気はないらしい。こうなつたら情に訴えるしかないな。

「でも家に帰つてもご飯がないなんて言われて放つとけますか？」

「一年前に『両親が離婚して、光くん寂しいんですよ、きっと。お腹いっぱい飯食べて笑ってくれたらそれでいいじゃないですか』人間の基本だよ、食べて寝て笑うこと。それが満たされていたら、自分を可哀相だなんて思わない、絶対。私はただその手伝いをしただけだ。応援しただけなんだから。

ところが係長は情にほだされるどころか、目に冷たさを加えて言い放つた。

「社長夫妻が離婚したなんて話は聞いたことがないな」

「へ？」

「社長のプロフィール、休日の過」し方は『妻と「ルフ』だつたと思ふぞ」

「あ？」

「どうやら彼の方が君より少なくとも一枚はうわてらしいな

……あんのぉ、クソガキイイ。

▽サインをして二カツと笑う光くんの姿を想像してしまい、憤りを抑えきれずにはるはると肩が震えた。

「……『元気出してね』なんてどの口が言つたんだか……！」

「……確かに君は元気がなかつたね。ここ最近ずっと誘いも断つてた。……今度は何をカン違いしてるの？」

カン違いなどと心外なことを言つてこのまま引っ込むわけにもいかず、社長のお気に入りである私といふことで、周囲の人気が汚い目で見られることが嫌だったのだと打ち明けた。

「係長が仕事ができて評価されることと私と一緒にいることは関係ないのに、そうは見ない人もいるんだって思つたら、何か嫌になっちゃつたんです。滝沢主任が何を考えているのか知るのも怖い気がしたし……」

係長は頬杖をついて軽く息を吐くと、恨みがましそうな声を出し

た。

「佐久間の奴、もう少し言い方つてものを考えてくれてもいいのに……」

でも居酒屋でのやり取りから受けた印象では、滝沢主任に関しては私に取り入ろうとしているのではないような気がする。主任の態度はむしろ、私を利用して係長に挑みかかっているみたいだつた。
「やっぱり係長の方が私に取り入つて思つてるのかな。でもわざと係長を怒らせるような言い方するの、変ですよね」
主任の意図についてあれこれ推測すると、彼はきっとした口調で心配無用だと告げた。

「滝沢のことは気にするな。もともと僕らは仲がいいわけじゃないからね。それで君が利用されているんだとすればすまないと思う。だからあいつとはできるだけ関わらないようにしてほしいんだ」

真剣な目に動かされて了承はしたが、私が『社長のお気に入り』だという事実は変わらないのだ。一緒にいれば色眼鏡で見られるかもしれないということも。

それを伝えると、係長は和らいだ目でふつと笑つた。

「君はいつも僕を心配してくれるよね。不倫の恋に悩んでるとか、ファンをもつと大切にしろとか、見当はずれなこともあるけど」

見当はずれで悪かつたな。

「そう思いたい奴には勝手に思わせておけばいい。君と僕が眞実を知つていればそれで充分だよ。……だから、他人の邪推を気にするよりも、僕の気持ちの方を優先してくれないか？」

彼が真摯に語りかけるたびに心が強く打たれる。強い意志でもつて訴える姿は圧倒的ですらある。私がくよくよ考えていたことなど軽く打ち碎いてしまうような力強さに導かれて、優先してほしいといふ彼の気持ちについて考えた。

周囲の汚い目から守りたいと思いながら、私は彼の気持ちを無視

していったんだろうか。

滝沢主任と何度も偶然会おうが、偶然は偶然だと、出会いなんかではないと、縁でもないと、そう言ってくれる係長を信じたいのが私の気持ちなら、社長のお気に入りではなくただの越智美春と一緒にいたいと言つてくれるのが彼の気持ち。

和解した日、私たちは互いを認め合つた。互いを受け入れた。あのときの気持ちは本物で、今につながる大事なものだ。

私たちがスタート地点に戻つたときに手に入れた、大事なもの。

「分かりました。これからは係長の気持ちを優先します」
うなずいて返事をすると、彼はテーブルに身を乗り出してもう一度確認する。

「約束だよ？ 僕の気持ちが優先だ」

「はい、約束します」

確約を手に入れて満足そうに微笑む彼。しかし私はすぐに後悔した　目の前の微笑みが禍々しく歪むのを見て。

「じゃあ今日行くはずだった食事に行くことにしよう。……君の奢りで」

嘘だろ！

「なんで、なんで私の奢りなんですか！？」

「社長の息子にだって奢つたじやないか」

「光くんは未成年ですよ！」

『『君に嘘をついた』男には奢ったのに、『君に嘘をつかれた』男には奢れないの？』

「どういう理屈ですか、それは！」

「やっぱり嘘をつかれるつていうのは傷つくよなー、ショックだよなー。君が奢つてくれたなら僕の心も癒されるなー」

半分も本気で思つてないだろ！ 腹黒の本領發揮だな。『これに憤りたら嘘ついて誘いを断るな』ということか。

私は諦めて腹をくくつた。

「分かりましたよ、奢ります。でも、できればランチにしていただけないと大変、とっても、すこおく助かるのですが……」「

揉み手をせんばかりに下手に出たのが失敗だつたと悟つたのは、

彼の口もどが嗜虐的にカーブを描くのを見たときだった。

「ランチね、いいよ。でも一緒に行つてくださいってお願いしてみて

性格悪……！　しかし従わなければティナーを奢り……それはムリ！

「……どうか私と一緒にランチに行つてください、お願ひします…

…」

あえなく屈服したら小さなつぶやきが耳に入る。

「まあ、これぐらいの報復は許されるだろ」

それはどういう意味かと問いただそうとしたが、携帯電話がメールの受信を知らせた。兄からだ。

『今どこ？　迎えに行く』

「え、どうしよう？」

「何？」

「兄が迎えにくるって言つんですけど」

それを聞くと係長は眉をひそめて一瞬押し黙つたが、口を開いたときにはすでに瞳が生き生きと動いていた。

「僕が送るから迎えは要らないって返信して」

「……係長の名前も出すんですか？」

「そう」

いい男同士対抗意識を燃やすふたり。一抹の不安を感じながらも言わされたとおりにメールを送った。

肌を刺す冷たい空氣にブルッと震え、マフラーを口もとまで引き

上げた。そついえば今週末は冷え込むと予報が出ていたつけ。右隣を歩く係長も「寒いな」とコートの襟を立てる。自宅マンションへと向かう道はひつそりと静かで、リズムの異なる一種類の靴音が冷氣の降りたアスファルトに響いていた。

「奢りランチ、いつにしますか？」

奢り、の部分を強く発音して言つてやると、係長は苦笑しながら答えた。

「月曜日がいいな」

「早速ですか」

「善は急げ」

「確かに給料日前よりはいいですけどね」

あまり高くない店でありますよ。心中で十字を切った。

「今度またドライブでも行かない？」

突然快活な声で誘いの文句を口にする彼に驚く。

「なんですか？」

「なんでって……楽しいだろ？」

「誘う相手間違つてますよ。好きな人がいるんでしょう？」

「だから君を誘つてる」

だから私を……？ 意味を把握するのに数秒を要した。

「その手はどうでしょうねえ」

「……どの手？」

足を止めて彼は訊き返す。別に確認しなくともちゃんと分かつてるつて。

「他の女の子を誘つて嫉妬心を煽る作戦でしょ？」

専門学校にいたのだ、そういうつ女の子が。気のある男の前でわざと他の男と仲良くするの。それで彼は焦つて行動を起こすんだけどね。

「女の子のタイプによつてはそれは逆効果ですよ。あんまりお勧めしませんよ？」

彼が呆然とするのが夜目にも分かつた。女性からの率直な意見を聞いて自分の考えが浅はかだったことを思い知らされたのだらう。また彼の役に立つてしまつたな。

「…………忍耐心を試されているのかな、僕は切ない想いが凝縮されたようなつぶやき。彼女が振り向くのを我慢強く待とうとする心意気は、彼が本気であることの証だ。……でもどうしてそれを寂しく思つてしまうんだろう。

「美春」

突如耳に届いた声が意識を前方に向けさせた。数メートル先の暗がりから街灯の光の先に兄が現れる。血色マンションまではあと三メートルほどの距離。

迎えはいらないと返信したのに。コンビニでも行くつもりだったのかな。

隣に立つ係長からはピリピリと緊張感が漂ってきた。よほど兄にライバル意識を燃やしているのか。でも中身はただの変態だと知つたら張り合いかなくなるんだろうな。

「こんばんは」

一分の隙も見せずに兄が言ひ。

係長と兄。一度目の対面だった。

第四十話 あの日の黄色いTシャツ

真冬の夜。冷たく澄んだ空気は厚手のコートを身につけていても容赦なく身体を突き抜けていく。足もとから這い上がつてくる冷気は節々に入り込み居座つて、内部から身体を凍えさせる。

しかし静かな住宅街の路上、この場だけはまるで異空間のようだ。真冬の寒さは冷ややかに燃え上がる対抗心によつて打ち払われた。

「こんばんは」

「こんばんは」

にこやかなのは表面上だけ、いい男同士互いを意識し合つふたりは腹の探し合いのような視線を向け挨拶を交わした。

兄、越智悠人。上司、瀬尾達也。

キッネとタヌキ。さつき係長が食べたのはキッネうどんだったが。それはともかく。

「瀬尾係長さん、でしたね。わざわざ妹を送つてくれてありがとうございます。でも今夜一緒に存じませんでしたが」

「居酒屋で偶然一緒になりました

「それだけでわざわざ？」

「こんな遅くに女性を独りで帰すなど、とんでもありませんよ

「上司が優しい方で妹は幸せ者です」

ふたりとも白々しい台詞を大仰に言つて、まずは相手の反応を見ているのだな。次はどう仕掛けるのか。

「実は僕も法学部出身なんですよ。だから法曹界に入った先輩や友人もいるんですけどね、仕事が大変そうで。お兄さんもお忙しいんでしょうね」

仕掛けたのは係長だった。兄の職業に关心を見せつつ仕事ぶりを探っているのか。

「弁護士としての業務だけでなく、事務所のパートナーとして雑務も山のよろこびがありでしょうね。休む間もないんじゃありませんか？」

「忙しいことは否定しませんね」

確かに兄は仕事に忙殺されている。応対するのは業務時間内にやつてくる顧客ばかりではない。夜間にしか時間が取れない顧客もいる。当番弁護の日などはあちらこちらの警察署を駆けずり回つてゐるし、週末は弁護士会の会議で潰れてしまつたり、急ぎの案件が入ることもある。

忙しさに比例して変態度も上ると氣づいたのはいつのことだつたろう。

「そうこうことでしたら、毎回妹さんを迎えるのも大変でしょう。遅くなるときは責任をもつて僕が送り届けますよ」

なるほど、係長の意図はここにあつたのか。『責任感の強い男』というイメージをアピールしたいのだな。

彼の申し出を吟味しているのか、それとも自分のいい男ぶりを効果的に印象づける方法を考えているのか、兄は無言だ。ちょっと不含意に付き合つるのはアホらしい気がする。

……しかし加減寒くなつてきた。これ以上このふたりの化かし合いで付き合つるのはアホらしい気がする。

「係長、それじゃこれで」

暇を告げることで私から幕を引くつもりだったのだが、兄がぐいと前に出てそれを押し止めた。

「妹は扱いにくいでしょうね」

お得意の笑顔のままで相手を怯ませる視線を投げかけるも、係長も負けじと一步前に出て距離を縮める。

「いいえ、決してそんなことはありませんが」「昔も今も変わらず自然で元気な子なんです。天衣無縫とでも言つかな。それが妹の良さだと思っています」

係長の『責任感の強い男』に対して兄は『家族愛に満ちた男』でアピールか。いい男合戦は中身で勝負、なのだな。

「でも会社ではそういうわけにもいかないでしょう。気が利かずにつぶやく迷惑をかけていることもあるかと思います。まだまだ子供ですから、自分からは気づかないこともありますしね。でも手に余ること無理に気づく必要もないと兄としては思っているんですよ」

『さりげなく妹の欠点をフォローする男』　ひねった技でいい男ぶりを上げようとしているな、兄よ。

これを受けた対峙する係長もまた、攻勢に出てきた。

「妹さんはひとりの立派な大人の女性だと思います。今はまだでもいずれは気づくこともあるでしょう。僕の方でも気づかせてみせますし。どうぞその辺のことはご心配なく、僕にお任せください」「『上司として部下を決して子供扱いせずに教育まで請け負う男』高等な技を出してきたなあ、係長。

でもさつきからふたりとも、私が気づくとか気づかないとか、何なのだittたい。

兄と係長のいい男合戦は、なぜだか勝負の焦点となつていて私を置いてきぼりにして更に続いた。

「妹の至らなさを補うのは兄の役目ですので、お間違えのないように」「僕は僕なりのやり方で妹さんと接するつもりですけど、気遣いは無用です」

「いろいろとお忙しい方と伺つてますよ。妹のことまでは手も回らないでしう」

「以前と違つて今は時間がたつぶりあるんです。それは妹さんも承知していますよ」

「あのー」

もはや意味不明となつた会話に疲れた私は間に割つて入つた。
「寒いんですけど」

自宅に戻るとすでに風呂が沸いていたので歓声を上げた。あのふたりのお陰ですっかり身体が冷えていたのだ。女に冷えは大敵なのだぞ。

何よりもまずは風呂に入る「う」と着替えを取りに浴室に行くと、兄がすぐ後からやってきてぶっきらぼうに言った。

「お前、あいつにフランされたなんてよくも嘘ついたな

「……そんなこと言つたが？」

「デートしたって日に言つたじゃないか」

非難がましく見るので係長と水族館に行つた日のことを思い返してみた。確かに「フランされた」と言つた覚えがあるが……やはり係長にフランされたのだと誤解していたか。釈明するのが面倒くさいので放置していた。いけない、言い訳をしなくては。

「嘘なんがついてねつて。『係長にフランされた』とは言つてねえべ？

「じゃあ誰にフランされたんだ」

「高校の同級生。偶然会つて……その、一緒にご飯でも食べようかつて誘つたら……彼女がいるからつて『フランされた』」

苦しい言い訳だつたがつじつまは合つている。五年前の出来事から話す面倒くささを思えば、こんな嘘など可愛いものだ。

兄は明らかに疑つていたが、これを嘘だとする根拠はないので最後には受け入れた。しかし機嫌がよくない。係長との勝負がつかなかつたからか。

すると思つたとおり苦々しげなつぶやきが口から漏れる。

「あいつ、真っ向から勝負してきやがった」

兄もまた係長に負けず劣らずひとかたならぬライバル心を持つているようだ。

「係長は手」じわいよ？ あんちゃん、『相手にとつて不足なし』だべ？」

からかい半分で言つてやつたら痛いものでも見るような田舎をする。

「悪い予感ほど当たるもんなんだよな。なんだつてまたあんな厄介なヤツが上司になつたんだか」

自分がよほど『厄介』であるという認識のない兄は、完全休養となつた土日をずっと私と過ごして変態の健在ぶりを示した。

週明けの月曜日。

奢りランチの約束を果たすために係長と入つた中華料理店。良心的な価格設定に胸をなで下ろす私の傍らで、彼はキヨロキヨロと店内を見回して「いないな」とつぶやいた。

「誰がですか？」

「滝沢。ここ昔から営業部の連中がよく来る店なんだよ」

「係長、まだ金曜日のこと怒つてるんですか？」

やや粘着質のきらいのあることは分かつてゐるが、あの暗い感情を引きずるのは彼のためにならない。しかし返ってきた答えに私はあんぐりと口を開けた。

「いや。どうせなら君と一緒にひを見せつけてやるうと思つてさ」

「はあ？」

「それであいつが焦つて何か失敗したら楽しいだろ？」

意地の悪さを口もとに貼りつけて笑む彼に呆れた。……どんなだけ腹黒だ。

言い返そとしだが店員が注文を取りにきたのでハ宝菜定食を頼むと、爽やかな顔に戻つた係長も「同じもので」と告げた。

店内を見渡せばカウンターもテーブル席もほぼ埋まつている。この中華料理店は早い・安い・旨いで人気のある店だそうで、私たちが注文した料理を待つていてる間にも次々と客が出たり入つたりして実に回転が早い。

入り口の自動ドアが開くのはいつたいこれで何度目か、次に現れ

た客は係長の顔見知りだった。

「比嘉さん」

「よお」

ちょうど定食二つが運ばれてきたところで、同席してもらっていたかと私に断つてから係長は彼を呼んだ。

比嘉朋之営業部一課課長。年齢は三十代前半といった辺りか。あごのラインが緩やかで目つきも柔軟な、穏やかな人という印象を抱いた。係長が入社一年目に配属された営業部で、教育係を担当したのだという。

私は普段見せたことのない爽やかスマイルを顔に浮かべ、いつもより三音高い声で挨拶した。係長が不審な目で見たがそれは無視する。

メニューを開きさして時間もかけずに青椒肉絲定食を選ぶと、比嘉課長は親しみやすい笑顔を私に向けた。

「越智さんと知り合いになれるとはこの店に来て正解だつたな。あ、僕ね、あの日九階で君の怒鳴り声をしつかり聞いたちやつてるから、猫かぶらなくていいよ」

ハ宝菜を咀嚼しながらガツクリと肩を落とした。見れば係長も苦笑している。

あの話題を避けようと課長を持ち上げることにした。

「そんなにお若いのに課長さんってすごいですねえ」

「ウチの社で課長昇進の最年少記録を持つてる人だよ」

私の意図を察したのか、係長も少々大げさな言い回しを使って話をつなげる。

「ええつ、すゞーい」

「だろ?」

しかし私たちふたりの褒めそやしにも比嘉課長は冷静に応じた。

「君たちのところの工藤課長と同じだったと思うけど。まあ、工藤さんは転職組だから一概には比較できないし、それに、きっと瀬尾

が新記録作るんぢゃない？」

お返しだとばかりに目が笑っている。係長は「いえいえそれは」と謙遜するしかなく、妙に白々しい空気が漂つたところで私は話題を移した。

「滝沢主任だけがライバルじゃないんですね、係長。もつとすごい本命がいるじゃないですか、ここに」

我が社の最年少課長及び係長はきょとんとしたが、好奇心を刺激されたらしい課長の方が先に何のライバルなのかと訊いた。

「もちろん『目指せ！ H & amp; G ミュニケーションズ社長杯』のライバルですよ」

意気揚々と告げた私をそろつて五秒間まじまじと見つめると、課長はブーッと吹き出し、係長はこめかみに手を当てる。私は張り切つて先を続けた。

「私としては工藤課長と瀬尾係長を応援したいんですけど、ふたりが社長・副社長になつたら、美人の女性ばっかり採用しそうなのが難点ですね。それでミニスカートの制服なんか作つたりしたら最悪ですよねえ。やつぱり工口くない人に社長になつてもらつた方がいいですかね、比嘉課長？」

「うーん、僕も工口くないとは言えないよ」

笑いながら微妙な工口宣言をした課長に驚く。

「えつ、そうなんですか？ まさか係長の教育係をしていたときにも、営業以外のことまで教えてたとか？」

ぶはははと笑う課長とは対照的に赤くなつて頭を抱える係長。これはビンゴだったか？

「しかし『田指せ社長』とは大きく出たね。瀬尾に社長になつてもらいたいの？」

青椒肉絲を食べ始めた比嘉課長が興味深そうに尋ねた。

「はい。それでいつか自慢するんです。私、社長が係長時代にラン

チ奢つたのよーつて」

「君、瀬尾にランチ奢つたの?」

「はい」

胸を張つて答えたなら、係長が身を乗り出して会話に割つて入つた。

「今日初めて奢るんだろうが」

「細かいこといちいち気にしてると早く老けますよ」

「君が気にしなさ過ぎなんだよ。何だ、さつきから言いたい放題」

「だつて課長が猫かぶんなくていいって言つたから」

「何でもかんでも言葉どおりに受け取るな。それに君は猫じゃなく

て犬だろ」

「トイプードルみたいな?」

「秋田犬の流れを汲む犬」

「つまり雑種じやないですか!」

……ふと氣づくと比嘉課長が呆気にとられた顔で私たちを見ていた。

「……失礼しました、課長」

赤面して謝罪する係長はまるで恥じらう乙女のようでつい吹き出してしまつた。すると思いつきり睨まれたので首をすくめる。そんな私たちを見て課長が意味ありげな顔をした。

「何かキャラ変わつたねー、瀬尾。それとも越智さんだからなのかな?」

彼の流し目に「いや、えーと」と係長は目を逸らす。

そしてこのとき、私の呼吸を止める言葉が課長の口から滑り出た。

「同じ陸上部同士だから話が合つんだろうな

……いま、何て?

陸上部? 係長が?

聞き間違いではないかと思つたが、当の本人は私と田を合わせないようにするためなのか隣りに座る課長に顔を向けた。

「……よくそんなこと覚えていましたね」

「み、認めた？ 嘘お！」

「ずっと忘れてたけどね、去年の社内運動会で瀬尾が越智さんに抜かされたの見て思い出した」

「私が抜かす……？」

何のことか分からぬ。係長を見ても相変わらず視線を外したままだ。

比嘉課長は軽く目を見張ると、一度田の決定的な台詞を投げかけた。
「あれ、知らなかつた？ 瀬尾もリレーに出てたんだよ、第三走者で」

突風のような衝撃が身体を突き抜け、気づくとテーブルの縁を手がつかんでいた。

定食を食べ終わると急き立てるように私を店から出して、係長は足早に歩き始めた。遅れないように急ぎ足で彼の横に並び、早口でまくし立てる。

「陸上部だつたのつて係長のお友達ですか？ 係長もなんですか？ 本当にリレーに出てたんですか？ なんで今まで言ってくれなかつたんですか？」

彼は質問には答えず、カフェといつより喫茶店の名称が相応しい店の前で足を止めた。

「コーヒーでも飲む？」

「……はい」

ふたりとも少し落ち着く必要がありそうだ。彼にとつても私に知られることは想定外だつたのだろう。頭を整理しなければ、何から

口に出していくのが分からぬのかもしね。

係長はしばらく無言でカップの中の黒い表面を見続けた。私はスプーンで「コーヒー」をかき混ぜながら言葉を待つ。

ようやく彼が口を開いたとき、その声は面映さと懐かしさとそして甘酸っぱさで彩られていた。

「……ハイジヤンやつてたんだ。短距離やつてたのは僕の一番仲が良かつた友達で……ふたりとも関東大会まで進んだよ。それが精いつぱい。だからインハイ出るのがどんなに厳しいかってこともよく分かってる。君が全国四位だと知つて心から、本当に心から賞賛した。あのリレーで君に抜かされたとき……」

「何色ですか？」

私は彼の言葉を遮つて尋ねた。

「え？」

「係長は何色のTシャツを着ていましたか？」

「……黄色だ」

黄色。黄色いTシャツ。

脳裏にあの日の映像が蘇る。

まばゆい初夏の日差しに手をかざして仰ぎ見れば、透けるほど薄い帯状の雲が連なる青い空。心地よい微風を肌に感じてレンガ色のトラックに降り立つ。

高まつていた気持ちはその瞬間から全て一点に収束される。今、私の世界に存在するのはたつた一人、私だけだ。

コースに立つと目に映るのはこちらに近づく黒いTシャツ。やがてバトンタッチの体勢に入り足が交互に動き始めると、進むべき動線がトラックの上に見える。そして右手にバトンが収まつたとき、爆発的に放射し始める内部の熱。

すぐ手の届く距離を走る青い背中を視線が捉える。彼を抜かせば

次に見えてくるのは黄色いTシャツだ。次第に強くなる空氣の抵抗。それすらも楽しんでやがて私は風と一体になる。

田の前に迫る黄色い背中。長身の割には走りが安定しているけど、脚の上げ方がもどかしげだ。一コースアウトに並んだときにはもう、前方を走るオレンジ色のTシャツを田は追つていて

意識を現実に戻し田の前に座る彼を見つめた。

「係長だったんですか。でもそんなこと誰も言わなかつたし……」

「記憶に残るのは勝つた人間だけだよ。負けた奴はその瞬間から忘れ去られるんだ。まさか比嘉さんが覚えていたなんて、巡り合わせが悪かつたな」

恥ずかしそうに笑う彼を見ても、未だに信じられない思いでいっぱいだった。

係長は時計をチラと見て残念そうな顔をした。

「タイムアップ。……今夜時間取れる？ 君に話したいことがあるんだ」

その夜係長が連れて行つてくれた地中海レストランで、私たちは互いに一杯だけという約束で注文したワインと共に海の幸を中心とした料理を楽しんだ。周りに気兼ねなく話がしたいからという理由で個室を選んだが、今度は隣り合わせでなく向かい合わせで、彼が陸上部時代のエピソードを語るのをただ聞いていた。

暑い夏の日、練習の合間に顧問の先生の目を盗んでアイスを買いついたとか、大会で顔を合わせる他校の女生徒を好きになつた部員が告白するのを手伝つたとか、きっと誰しもがひとつやふたつ覚えのある、十代の頃の、あの頃にしか味わうことのできない、甘酸っぱい気持ち、反抗心、焦り、憧れ そんなものを彼も同じよう持つていたことを知つた。

「もつと早くに言つてくれればよかつたのに

わざと恨みがましそうな表情を作つて彼をとがめる。

「やっぱりずるいですよ、係長は。いつも私にばっかりベラベラ喋らせて。でも今日は話が聞けてよかったです」

それを聞くと彼は少し慌てた顔で訂正した。

「聞いてもらいたい話というのはそのことじゃない。僕の心情といふか　君には少し解りにくいかもしないけど」

そう言つておいてまるできつぎりのラインに立つてこるような

この一線を超えてしまつたら、もはや後戻りはできないかのよう

な　ためらいを見せる。

しかしやがてそれも振り切ると、彼は決意を込めた光を目にたたえて語り始めた。

第四十話 あの日の黄色いTシャツ（後書き）

当番弁護：刑事事件で逮捕・拘留された人が弁護士会を通じて弁護士の派遣を無料で要請できる制度。

兄V.S係長のバトル心の声バージョンはいづれ番外編として書かたいと思っています。

次回は瀬尾の口から語られる美春との出会い。全て瀬尾の独白となります。

第四十一話 真との出逢い

僕は昔からクジ運の悪い男なんだ。

商店街の福引きに当たったこともなければ、雑誌の懸賞に当選したこともない。

ただ当たらないだけならそれでいいんだが、中学校でクラスの皆が嫌がるナントカ委員とか、ドアを開けた途端むつとする臭いが鼻を突く部室の掃除とか、そういうのは逆に当たってしまうんだ、昔からね。

だから去年の社内運動会でリレー走者をクジ引きで決めるに当たり、ものすごく嫌な予感がして思つたとおり引き当りてしまつた。第三走者を。

入社一年目、営業部に配属されていの一時に訊かれたことは、学生時代に部活動は何をやつていたかといつことだった。僕は正直に陸上部だと答えた。

それを聞いた先輩社員たちから歓声が上がった理由をもちろんそのときは知るはずもなく、「これで何年間かアンカーは安泰だ」と言られて初めて、自分がリレー要員として重宝される存在であることを理解した。しかもアンカー、四百メートルのね。

そうだな、瞬発力には自信はあつたから、百メートルなら今でもかなり速く走れるだろうな。しかし四百ともなると大学時代に陸上競技から離れていた僕には、まるきり自信がなかつた。普段サッカーでもやつてる奴の方が、よっぽど速く走れるだらうと思つたよ。

結果から言つなら、若さだけで何とか乗り切つた感じだ。三位でバトンを渡された僕は、そのまま三位でゴールした。一位と一位がデッドヒートを繰り広げて場を盛り上げていたよ。

一年後、PR事業部に異動した僕は自分が陸上部出身である」と

を誰にも言わなかつた。その年のアンカーはテニス部出身の新入社員が務めた。僕もまだ一年目だったから若いという理由だけで三百を走つたが、これは仕方ない。

入社三年目、四年目共に百メートルを走り、五年目はお役御免、僕より若い連中が頑張るのを高みの見物していればよかつた。

ところが去年、僕が所属していたPR一課には新入社員は配属されず、一昨年のリーメンバーは一人が退職、一人が異動をしていて、代替メンバーと走順をクジ引きで決めることになつたんだ。やつぱり、という気持ちで神様を罵倒したよ。クジ引きの神様がいればだけだね。

そして社内運動会の日がやつてきた。競技というより体感ゲームみたいな種目に出る同僚を羨ましく見ていたよ。最終種目であるスウェーデンリレーが行われる時間になつたときは、とつとと終わらせて早く帰ろうなんて思いながら集合場所へ向かつたんだ。

全部でハチーム、八色のTシャツを着た総勢三十二名の中には女性もチラホラいた。運動部出身の女性なら第一走者を務めるぐらい、なんてこともないだろう。男が出た方が有利には違ひないが、しょせん社内運動会だし、要するにコミュニケーションを図ればそれでいいんだから。

集まつたリレー走者がトラックに降りて走順」とのスタート地点にぞろぞろと移動を始めた。第三走者の八人も同様に。

このとき観客席の雰囲気は期待でかなり盛り上がつているようだつたな。しょせんは社内運動会だけどリレーともなればワクワクして当然だ。花形競技だからね。でも走るこつちにはそんな余裕はなかつたよ。声をかけてきたPR二課の後輩も苦笑いしていたな。

「瀬尾さんも三百なんですか。キツいですよね」

「クジで当っちゃつてね。アンカーでないだけマシだけどな」

そんなやり取りを交わす僕らの横をスッと通ったのが　君だった。

そう。僕はそこで初めて君に出会ったんだ。

君は見るからに若くて初めは新入社員だと思った。でも一度も見たことがない。研修で来ていれば会っているはずなのに。PR事業部に研修に来ないなんてことがあるんだろうか。黒いTシャツはどうしてこの部署だった？

他の走者を見たら、佐久間がいる。WEBか。クリエーターなのかな。

君は緊張を解すためなのかストレッチに余念がなかつた。ショートパンツから伸びる脚は細くて筋肉がついている。アスリートの脚だと思った。そして君が履いているのが短距離用のスパイクだと気づいた。

「の子、陸上経験者だ。

僕は思わず君に声をかけた。

「君は新入社員なの？ WEBにいるんだよね」

ところが君は心ここにあらずといった感じで僕を無視した。

今なら分かるんだ。君はいつたん気持ちが入ると周りを遮断してしまうんだって。ものすごい集中力で一点に向かつて照準を絞るんだよな。

でもあのときそれを知らなかつた僕は正直面食らつた。僕を無視する女の子に出会つたことはなかつたから。

僕にとつて女性が競争相手だつたことは一度もない。子供の頃から勉強でもスポーツでも女の子に負けたことはなかつた。

思春期に入ると女性は性的対象になるかならないかのどちらかで、

友人とオトすのを競う対象ではあっても、女性自身が僕と何かを競う相手には決してならなかつた。

僕はいつでも周囲の女性を精神的にも肉体的にも凌駕して、優越感に浸つていたんだろうな。でも決してそれを表に出すようなことはしなかつたよ。

なんでかつて？ それが周りの人間とうまくやつていくための方法だつたからだよ。周りが僕に期待している肖像だつたからだ。『絵に描いたような理想の王子様』がね。実際にはそんな奴いるわけもないのにな。

そうやって顔を取り繕つているとますます多くの女性が近づいて、もはや本来の僕とはかけ離れた虚像の皮をかぶつている方が普通になつてしまつた。腹の中で実際は何を考えているかを知つたら、僕に近づく女はいなくなるだろうな。

……『ごめん、話がだいぶ逸れたね。

話しかけても無反応でてつきり君に無視されたと思つた僕は、男ばかりの中でどれだけ走れるのか見てやるよ、と少し意地悪な目で君を眺めた。願わくば僕らのチームがWEBチームより後ろの順位でありますように。でなきや、君の走りは見られないからね。

ところがクジ引きで決めた寄せ集めメンバーであるはずのPR一課は、予想外の頑張りを見せて一位で僕にバトンを渡した。一位との差はそれほどでもない。三百メートル走る間に向こうがバテれば抜けるかもな。

そんなふうに考えて走り始めたんだが、やがて後ろから近づいてくる足音にぎょっとなつた。第三走者にそんな速いヤツいたのか？ 周囲がどよめいているのが分かる。みんな、そいつの走りに驚いているのか。

バトンタッチまで残り百メートル。後ろから迫る気配が僕の右側

に並び追い抜こうとしていた。君だった。

嘘だろ？ WEBの第一走者は四位か五位ぐらいを走つていなかつたか？ 信じられない。僕は女に抜かされるのか？ この僕を負かす女がいるのか？ いくらスプリント専門ではなかつたと言つても、僕の百メートルのタイムは決して悪くはなかつたのに。

君はほんのわずか僕と並走すると、加速して先を行つた。

女に抜かされるなんて冗談じやない。そう思つた僕は力の限り懸命に脚を動かした。これは明日筋肉痛で動けないかもな。頭の隅でそんなことも考えたけど、君に負ける屈辱を思えば無理やりにでも身体に言うことを聞かせるつもりだった。

十年ぶりだつたよ、限界に挑戦する熱を感じたのは。でもどれだけ一生懸命走つても君には追いつけなかつた。距離にしたら三メートル、すぐ目の前に君の背中はあるのに決して届かない。近くで遠い君を追つて僕はあがくように走つた。

だけど、苦しさで心臓が爆発しそうになる中、そんな場合ではないのに僕の目は君の姿に惹きつけられていたんだ。

後ろから見る君の走りはとても美しくて、無駄な動きが一切なかつた。

君は風と一緒にになつていた。風のよつに自由だった。

バトンタッチ寸前でオレンジチームを追い抜いた君は、流れるような動きでアンカーにバトンを渡した。焦つたオレンジチームがもたつく間に僕もバトンタッチを終えた。

そして貪るように酸素を取り込みながら僕は君を見た。君も、走り終わつた連中も、観客も、皆WEBのアンカーがトラックを一周する姿を目で追つていた。でも僕は君を見ていた。息を弾ませそれでもまだ走り足りないよつな顔をしている君を、ずっと見ていたんだ。

君への賞賛と負けたことへの悔しさとが身体の中で渦を巻いていた。

て、あのとき、僕の目には君しか映っていなかつたんだよ。

翌週の社内ニュースレターに載つた社長とのツーショット写真の下に、君の経歴を見つけた。

○越智美春、二十二歳、秋田県出身、派遣のWEBデザイナー、二〇〇〇年インターハイ陸上女子四百メートル四位入賞。

速いのも道理だ、全国四位とはな。すごい。

それからというもの、君が気になって仕方がなかつた。

どんな練習を積んだんだろう。なぜWEBデザイナーになつたんだろう。どんなことを考えているんだろう。どんなふうに話すんだらう。

負けた悔しさはずつと身体の中に残つていたよ。だから、君という人間を知つて見返してやりたいのだ、僕の方が優位に立ちたいのだと思つていたんだ、このときはまだ。僕自身が大した人間でもないのにな。

そうこうするうちに社長が君を気に入つて直々に正社員に誘つたことを知つた。ところが君は断つたらしい。朝の会議で工藤課長に、社長の誘いを断つた女の子がいるそうですね、と訊いてみた。彼は苦笑いしながら言つたよ。

「あいつ滅茶苦茶プライド高いんだわ。社長がフライングして現場の人事に口を出したのが気に入らないとや」

実力だけで勝ち上がってきた人間ならではのプライドの高さだな、と思ったよ。でもそういう氣の強い女の子がまた、社長の好みでもあるんだよな。

思つたとおり社長は頻繁にWEB事業部に出入りするようになつた。その話は八階のPR事業部まで聞こえてきて、いろんな噂が飛び交つた。そうそう、『社長の愛人』もそのひとつだな。

社長から特別扱いを受ければ彼女だって天狗になるだろう、そしたら周囲と摩擦を起こして向井の一の舞じゃないか、でもしょせんその程度の女なのかもしれない、それなら見返してやるほどの人間じゃない

僕はそんなふうに考えて君に負けた悔しさを晴らそうとしていたんだ。でも一方で、あれこれと気を揉んでもいた。社長のお気に入りという立場を野心のあるヤツに利用されていないだろうか、そういう目的で近づいてきたと後から知つたら傷つくんだろうな、なんてね。

部署もフロアも違う僕は君と何の接点もなかつたから、君のことが気にかかるても知り合う機会すらない。負けたままでいる悔しさはもちろんのこと、君への心配も日に日に増していくが、接点がない以上どうすればいいんだ?

そして七月に入り、信じられないことが起きた。君が非常階段をダッシュで上つて警備員から厳重注意を受けたんだ。

会議に出ていた役付き社員は皆笑っていた。唯一僕だけだ、真っ青になつたのはね。本田沙織と一緒にいた現場を見たのが、よりによつて君だったなんて。

あのときは一度も噂になつていなかつたが、僕はその理由をどうにも測りかねていた。でも君なら僕のことを知らないくて当然だ。このまま僕を知らないでいてくれれば、白川さんの結婚を台無しにしたのが僕だったとバレることもないだろう。

しかしそれでは君とはずっと知り合えないままだ。どうしたらいい。

都合のいいことも考えたよ。僕を見ても分からぬ可能性もあるつて。たつた一度、数ヶ月も前に見かけた男のことなど覚えているだろうかつてね。

考えても答えは出なかつた。たつたひとつ問題にこんなに悩んだことはなかつたよ。

そしてある日、転機がやつてきた。係長に昇進した僕にWEBへの異動の話が出たんだ。PRに残ることもできただろう。しかし僕は賭けてみることにしたんだ。

異動してきた僕を君は最初興味深そうな顔で見ていたが、何か気づいた気配はなかつた。やはり僕の顔は覚えていなかつたのだろう。転校生と同じ理屈で、異動者は好奇心や興味の対象となる。僕についてのゴシップを集めて金を取ろうとする君には呆れたが、君自身がゴシップをばらまかなければそれでいいと思った。

だから万が一思い出したとしても何も言えないように、不確かな情報を口の端に上らせるべきではないという正論で口を封じようとした。その時点で五ヶ月も前のことだったから、記憶に自信はないと思わせねばよかつたんだ。

だから君が五階の会社まで乗り込んだと聞いたときはすぐ慌てたよ。それが僕のことを考えてくれた上で行動だと知つて、嬉しかつたし調子に乗つてしまつたんだな。

WEB事業部で見る君は、明るくて元氣があつて、いつも笑つていて、周囲を笑わせて、いじられて 要するに、皆から可愛がられていた。僕の心配など杞憂に過ぎなかつたんだな。

そんな君を見ていたら、見返してやるとか優位に立つとか、どうでもいいことのような気がした。そもそも僕は本当にそんなことをしたかつたんだろうか？

それよりも、くるくるとよく動く君の表情を追い、次に何をやらかしてくれるのかとワクワクし、君が笑つている理由を知ることの方が楽しそうだつた。そして僕の言葉で君が慌てたり拗ねたり喜んだり笑つたりするのは、もっと楽しいだろうと思つた。

君を見たら社長とのぐだらない噂も信じる方が阿呆らしかつた。

いつも太陽の方角を向いているひまわりのような君が、誇り高い君が、社長の誘いすらはねつけた君が、どうして後ろ暗い関係を持つことができるだろう。

そう信じたから、課長との不倫を疑つて動搖した。どうしようもなく悩んだ。最終的に君が深く傷つく前に救つてやりたいとさえ思つたんだ。

全く、思い上がりもいいとこだよな。僕のそんな押し付けがましい正義心は、君をひどく傷つけたね。

それでも君の「両親が亡くなつたことを知つて、ひとつだけ確信したことがあるんだ。

君がいつも太陽の方を向いていたと思っていたのは間違いで、本当は、きっとご両親が元気でいらした頃と同じように、ただシンプルに君が君らしく生きている姿をふたりに見せたいんだ。

そのとき初めて分かつたんだ。僕が負けたのは当然だつて。周りが望むように顔を作つて自分を見せない僕が、君に勝てるはずがなかつたんだ。そんな僕に君が心を開いてくれるわけも、大切な話を打ち明けてくれるわけもないよな。

あのとき初めて思つたんだよ。自分を見せたいって。

そして僕はもう一度走り出したんだ。

リレーで抜かされた瞬間から見続けてくる、近くで遠い君の背中を再び追いかけ始めた。それまでの「ースをどんなペースで走るべきかも分かつていなかつたけど、あのときから、たとえ長距離になつても君に追いつきたいと思つたんだ。

君に嫌われ走ることすらできなくなつて、このまま棄権しなければならないのかと落ち込んだよ。

だけど君は僕を赦してくれたね。

だからいま、本気で走っているんだ、君に追いつくために。
君に敵わないことはよく分かっているが、それでも僕は君に追い
つきたいんだ

第四十一話 真剣勝負、罰ゲーム付き

瀬尾係長が静かに怒っている。

眉間にシワを寄せ口はざめゅうと引き結び、まるでじつと怒りが通りすぎるので待っているかのようだ。

……やはりおじさん扱いしたのではないがそれらしき「コアンス」だったことは認める。こちらもかなり焦っていた手前、四捨五入すれば二十歳と三十歳という私たちの年齢差を感じているのである。彼のデリケートな心まで思いやる余裕がなかつた。反省反省。

謝るのはかえつて失礼だろうか 逡巡していると、強ばつていた顔が緩んで笑みが現れた。しかし薄ら寒さを感じさせるそれに嫌な予感を覚える。彼がこいつら笑顔を見せるときは決まってよくないことが起きるのだから。

あちらの出方を待つていると、やがて唇が動いて低い声が滑り出た。

「僕と勝負しろ」

……そもそもなぜこんなことになつたかと言えば、つい先程語り終えた係長の告白に話は遡る。

彼が聞いてほしいと言つた心情。熱を帯びた口調で語られたそれは、聞きよつては恋の告白ともとれる内容で、私を大いに慌てさせた。

正直なところかなりドキドキしてしまつた。あれは危なかつたと思う。係長に好きなひとがいると知つていなかつたら、もう少しでカン違いするところだった。

そう、彼にはずっと前から好きな女性がいることは分かつている。今ではもう誓つてひとりだけなのだと、信じてほしくと、切実に訴

えるほど本気の相手。

……ちよつと待つて。それがまさか私なんてことはないよね！？いやいや、あり得ないからそれは、どう考へても。

上司と部下とこうだけにとどまらない関係を私たち築いていると思う。彼が私のことを大切にしてくれて、時折心の一端をのぞかせてくれることも分かつている。でもそれは例えて言つなら、決して他人には明かすことのない心情を大事にしているペットの前でだけ自分を慕つて甘えてくる存在に癒されてついポロッと漏らしてしまうようなものだと思うのだ。

そして私の頭の奥でも何かが告げていた。なぜ心地よい関係を壊す必要があるのかと。一步先へ踏み出せば、知りたくもなかつた感情に向き合うことだつてあるだろ。今までもこうして私は彼のそばにいられるのだし、作りものでない笑顔を見ることだつてできるのだ。この絶妙な距離感を保つたまなんら。

それは防御本能だつたのかもしれない。私自身と、ふたりの関係を守るための。

彼が好きなのは私じゃない。あれは恋の告白ではない。そうではなくて

うろたえながらも頭を働かせて結論を導きだした。

『これまで女に負けたことのない彼が唯一負けた私に強烈なライバル心を持っており、再び勝負をしたがっている』

我ながら強引かとも思ったが、それ以外にあの話をどう解釈しろと言つのだ。

焦っていた私は後先考えずに口走った。

「係長つてすごい負けず嫌いなんですねえ。でも仕方ないですよ。現役のときほどじゃないけど、私、今だつてトレーニングしてるんですよ？」こう言つちゃなんだけど、三十前のサラリーマンに負けられないじゃないですか。気にしない気にしない。

でもそんなに勝負したいんだつたら、いつでも受けて立ちますよ？ 短距離じや係長には勝ち田はないんで、ボウリングとかビリヤードならどうですか？まあ、どうかにしても係長には負ける氣はしないんですけど、あはははは

言い終わらないうちから彼の形相が変わつていいくのを田の当たりにして、しまつたと思ったが時すでに遅し。怒りの青い炎がチロチロとその田に燃えている幻想を見たような気がして身が縮こまつた。しかし彼が勝負を挑んできたということは、あの解釈で正しかつたのだろう。やはりカン違いしなくてよかつた。ただ私が若さをひけらかしたことが気に入らなかつたに違ひない。三十歳前は微妙な年頃だものね、女も男も。

勝負はボウリング。二ゲームの合計点を競つことで話がまとつた。

「一応君は女性だし、ハンデが必要だよね。一二十ポイントでいい？ もつと要る？」

親切そうに申し出た彼の顔は優越感で余裕に溢れている。それが気に障り私は突つ張つた声を上げた。

「ハンデ？ 要りませんよ、そんなもの。勝負に男女は関係ありません」

平等の条件でねじ伏せてこそ、勝利の醍醐味が味わえるというものではないか。

私の強気を見て係長はあつさりと引き下がつた。

「そう？ 君がそれでいいんなら。それと、ただ勝負するだけじゃ面白味がないから罰ゲームを付けないか」

楽しいことを見つけたみたいに田を輝かせる。それでこちらもつとい興味を引かれた。

「罰ゲーム？」

「負けた方は勝つた方の言づ」とを何でも聞く
「何でも？」

「何でも。それだけ真剣勝負つてこと」

こんな提案をするところは相当な自信があるのか。しかしここで断つたら戦う前から負けを認めるようなものだ。

「いいですよ」

係長はニヤリと片頬を上げた。腹黒の笑みだ。まるで隕にかかるウサギのような気分になつたが、おそらくは錯覚であろう。

「じゃあ金曜日ね」

うまいこと彼のペースに乗せられたような気がしなくもないが、要は勝てば良いのだ。

何でも言つことを聞く係長。何をやつてもらおうか。……そうだ、コスプレをしてもらおう。ナースか、メイド服か。いや、白タイツの王子様つてのはどうだ。ククククク。

勝つ自信ならある。仕事柄旅行には連れて行つてくれなかつた父だが、合間に時間を見つけては私に近場レジャーの伴をさせた。すなわち、ボウリング、ダーツ、ビリヤード。バッティングセンターも。

若い頃のめり込むほど遊んだといふ父の手ほどきを受けたお陰で、かなりの腕前だと自負している。兄など、これまで一度として私が勝つことはないのだ。

係長、どうぞ派手に玉砕してくれ。そしてコスプレつてくれ。

翌日、係長にどこのコスプレをさせるか意見を広く募りつと思ひ、彼以外のWEB事業部全社員に一斉メールを送つた。

『瀬尾係長にコスプレをさせるとしたら? 女装可』、『意見募集中!』

執事、レースクイーン、全身タイツ等々の返信を肩を震わせて見

ていたら、隣の席の藤田さんがこつそりと「ポチ、これ見て」とモニターを指差す。そこに並んだ文字は係長から男性社員宛のメールだった。

『越智美春に似合つコスプレ募集中。エロいの大歓迎』

どうやら誰かが告げ口をしたらしい。係長からの報復攻撃か。だけど『エロいの大歓迎』って……何考えてんの！

とつさに思い浮かんだのはバーニガールだ。露出だけで比べるなら陸上競技のウエアと大差はないが、網タイツがあるとエロさは倍加する。絶対に嫌！

見れば男性陣からは続々と返信が集まっている。どんなコスプレを提案したのか気になり藤田さんのマウスに指を動かした。

『髪はアップで黒縁眼鏡、ブラウスのボタンを一つ開けてタイトなミニスカートに生足の女教師』

『白衣の下は黒いレースの下着のみ身につけた、聴診器片手に迫る女医』

何だこの個人的願望が詰まつた、やけに具体的なコスプレは！恥ずかしさに打ち震えているとまたもや新たな返信が。石津さんからだ。

『裸エプロン』

……『スプレーじゃないだろ！

「何をやつてるんだ、お前らふたりは」

あちこちから聞こえる男性陣のイヤラシイ笑い声を前に、工藤課長が呆れた声を出した。さすがに一児の父ともなると品格を気にするのだろう。しかしこの下卑た空氣の中、係長はひとり爽やかな笑顔を浮かべて答えた。

「越智さんとボウリングで真剣勝負することになったんですよ。それで負けた方が罰ゲームをね」

「えーっ、あたしも行きたい」

杏子さんが声を上げると、数名の同僚が次々と後に続く。
「じゃあ、皆で行こうか。ただし罰ゲームは僕と越智さん限定で」

係長との真剣勝負がにわかにWEB事業部ボウリング大会となってしまった。幹事をやることになった私のもとへ参加希望を伝えにくる同僚たち。コスプレをやらずに済むものだから皆気楽でいい。しかし私の心にはかすかな不安が影を落としていた。係長が根に持つタイプで、やられたままではいない人間であることはこれまでの経験でよく分かっている。おじさん扱いされたことへの報復としてエロい格好を命じるかもしれない。もしもそんなことになつたら……と想像して内心でのたうちまわっているとき、佐久間主任から声をかけられた。

「俺も行くわ。ウイスキーの行方が気になるしな」

どういうことかと聞けば、工藤課長と賭けをしたのだと言う。

「私と係長のボウリング勝負で？」

「いや、賭けの対象はそれじゃねえけどよ。大いに関係あるというか……瀬尾の力量が問題なんだよな……いや、問題なのはこいつの理解力か……」

訳の分からないつぶやきは、再び頭にもたげてきたエロいコスプレへの不安によって押し流された。

しかしボウリング大会の日までにはそんな不安も払拭されていた。単純なことだ。勝てば良いのだ。この私が負けるわけはない。必ず勝つて係長にコスプレをさせよう。自信を持て！

業務が終了し参加者が全員そろつたところで移動を始めた。一週間の仕事を終えた解放感とボウリング大会へのワクワク感で皆良い表情をしている。係長はと言えば憂いのない笑顔で石津さんと喋っていたが、根拠のある自信の表れなのかそれともただのハッタリな

のか、判別はできなかつた。

一階の出入口は勤め人たちを次々と陽の落ちた街へと吐き出して
いた。私たちもまた同じ波に乘ろうとしていたそのとき、ひとり流
れに逆らつて外から入つてくる人物が視界に映る。

滝沢主任。外回りから帰つてきたところらしい。

彼の姿を見るのは一週間ぶり、あの居酒屋以来だ。あの場に漂つ
ていた緊張感が再びもたらされたような気になり身体が固くなる。
係長に視線を走らせるとすでに無表情になつていた。

主任はWEB事業部の集団の中に私の存在を認めると、越智さん、
と声をかけてきた。

「ちょっといい？ S社担当と今日電話で話したんだけ？」
わざわざ呼び止めるからには重要な内容なのだろう。私は同僚た
ちから離れて彼とホールの端に移動した。ところがS社担当の話と
やらはすでに了解済みのことで、肩透かしを食らつた格好になる。
そしてさりげなさを装つた非難を、このとき初めて彼は口にした
のだった。

「瀬尾つて保護者気取りだよね。君のこと面倒見てやらなきやつて
オーラが出ててさ、誰かにアピールしたいのがバレバレじゃない？
……何を言いたいのか嫌でも分かる。そして主任自身が私にそうア
ピールしたいことも。

「そんなことないですよ」

努めて冷静に返した。係長にキレるなど言った手前、私も不用意
な言葉を口にするべきではない。

「かばうんだ。分かるけどね。爽やかで、人当たりが良くて、人気
者だし？」

実際は十分の一もそう思つていないと分かる、嘲りを含んだ口調
だつた。

「でもあんまり信用しない方がいいよ。特に君みたいな人は後で傷
つくから」

「私みたいなつてどういう意味ですか」

「いつも本音でぶつかるでしょ？ でも相手もそうだと思つてると、後になつて裏切られた気持ちになるよ」

優しいとも言える表情で忠告を送る彼に、何と返事をするべきなのか迷う。それはまさしく、佐久間主任から言われたこと全く同じだつたからだ。滝沢主任は、係長が出世への思惑があつて私に近づいていると、本気で信じ込んでいるのだろうか。

返答しないことをどう思つたのか、つと彼は小声になつて話題を変えた。

「そういうえば越智さん、瀬尾のマル秘情報知りたいって言つてたよね。それネタにしてご飯奢つてもらうって」

背筋にゾクリと寒さを感じる。口調を明るいものに変えてもその声は陰鬱な熱さを孕んでいた。深さを増すほどに暗く熱くなつていく地熱のような熱さ。

聞いてはいけない。心の中で危険信号が点滅した。

「あいつが営業部に」

「滝沢」

主任が言いかけた言葉は、横合いから聞こえた別の声によつて遮られた。

「クライアントからの大事な用件なら、こんな所で呼び止めて話すべきじゃないだろう」

視界いっぱいに係長の背中が映る。黒いトレンチコートの生地が彼の動きに合わせて波を打つた。隣にはいつの間にか杏子さんがいて、私の腕を軽く握り成り行きを見守つている。

「怖いなあ。俺だって先輩社員なんだから、新人の子にいろいろ教えてあげるのは当然でしょ？ それとも教育係つてお前の専売特許？」

？」

嘲笑を伴つた台詞が係長の背中から静かに怒りを立ち昇らせた。

杏子さんもそれに気づいたのか、指がわずかに動いて緊張感を伝え

てくる。この場に漂う危うさを感じて手に汗が吹き出していた。

そこにのほほんとした声をかけたのは、ふたりの間に入った佐久間主任だ。

「滝沢。S社案件ならもういつひたちで動いてっからよ。重要事項なら俺を通せや」

不穏になりかけた空気が流動したのを見てか、滝沢主任は退く意思を示す。

「はいはい。じゃあね、越智さん」

首を伸ばして係長の背後にいる私に声をかけると、身を翻してエレベーターへと向かった。彼が去った後の苦味が残る空気の中で、何を言われたのかと係長から問われる。私は笑顔を作つて答えた。「佐久間主任は見るからにボウリングが下手そだなって」「んだとおつ？」

「さ、行きましょ。主任のスマアにいくつGマークが出るか楽しみい」

「てめ、俺様の華麗な技に驚くなよ」

明らかな嘘に付き合ってくれる主任に感謝し、係長にも移動を促した。彼はまだ少し怒った目で何か聞いたそうに私を見る。

「真剣勝負ですよ？ 余計なことは考えないで集中してください」「そう言つたら、やつと少し笑つてくれた。

ガコーンと豪快な音を立ててピンがはじけ飛ぶ。続けて黄色い歓声。

「係長、カツコイイ！」

一いつ瞬のローンで、彼がまたしてもストライクを決めた。まさに投球に入ろうとしていた石津さんが動作を止めて驚嘆の声を上げる。

「マジ？ ターキーかよ」

すでに終盤に入った一ゲーム目、初めは私が圧倒的な強さでトップを走っていたが、久しぶりのプレーでようやくカンを取り戻した

係長が追い上げてきていた。そのまま調子に乗らせてはならない。

スペアを取り損ねた石津さんの後に立ち上がった。ボールを抱え、投球位置に。そして流れるように腕を振り上げレーン上に滑りせる。美しい軌跡を描いてマーブル模様の球が狙つた箇所にドンピシヤで当たり、ピンが全てなぎ倒された。

見たか。

「お前、可愛いない」

石津さんのむくれた声が拍手の代わりに飛んできた。

「女の子ってのはなあ、ポテツと球を落としてゅっくら、ゴロ、ゴロ転がつて、ピンがパタリパタリと倒れるぐらーの方がずっと可愛いんだぞ！」

擬態語をやたらと使って可愛い女の子を定義するのはやめてもらえないだろうか。

「しかも何だよ、ストライクばっか。ほんと、可愛いない」
好きなだけ言つてろ。口口いコスプレがかかつているのだ、負けるわけにいくか。

杏子さんと藤田さんの間に腰を下ろすと、ふたりから賛辞が寄せられた。

「すごいな、ポチ。優勝まちがいなし」

「一百いくんじゃないの。あんた、どこのプロよ」

半分呆れ顔の彼女は、あたしこのままじゃ百切る、とため息をつく。隣のレーンでは佐久間主任がストライクを決め、私は戻つてくる彼を拍手で迎えた。

「主任、予想外の健闘ですね」

「予想外じゃねえ！ お前が飛ばし過ぎなんだよ。見てろよ、瀬尾以上に追い上げてやつから」

石津さんが飲み物を買いに席を外すと、杏子さんが気遣わしげに

口を開いた。

「さつき係長、怒つてたね。……係長と滝沢主任って何かあるの？」

「さつき係長、怒つてたね。……係長と滝沢主任って何かあるの？」

どう話してもいいものか考えていると、代わりに佐久間主任が簡潔に答えてくれた。

「いわゆるライバルってやつだよ。それだけ

「ポチがそれに何の関係があるんですか？」

「本来は関係ない。社長との絡みで巻き込まれてるけどな」

「係長はそれで怒ってるんですか？」

「まあな」

杏子さんは小さく溜息をつくと、何やら納得したような表情になつた。

「ポチ気にしてたもんね、社長のお気に入りつてことで周りがどう見てるのか。そつか、滝沢主任が原因だつたんだ。それで係長はボウリングに誘つてくれたんだね」

しみじみとした口調で言つて、そこにはまつ毛つと否定する」とにした。

「それは全然関係ないですよ。私がいつでも勝負を受けて立つて言つたら、本当に挑んできただんです。係長つてば負けず嫌いなんだから」

「……は？」

「しかも負けたら何でも言つ」とを聞くつて罰ゲームまで付けて。若さへの嫉妬ですよ、あれは。でも勝つのは私ですけどね」

呆気にとられる杏子さんに向かつて、主任が疲れた表情で口を開く。

「聞き流せ。俺もそうする。……ああ、俺の琥珀色の液体が」「もしかして、係長つて」

「あ、杏子さんの番。ほら、もつガーター出しちゃダメですよ」

彼女は立ち上がりながら視線を藤田さんに流した。目線を上げて彼は苦笑を返す。

「うん……かもね」

「何が

半分まで尋ねたところで、一いつ瞬のローンで再び歓声が上がった。見ると係長がスペアを出して意気揚々と引き上げてくる。自分が焦り始めたことを自覚せずにいられなかつた。

第一ゲームの最終フレームをきつちりストライクで決めた係長が、振り返つて会心の笑みを浮かべた。私は青ざめて床に崩れ落ちる。
……こんなはずではなかつたのに。

一ゲーム合わせて合計九個のストライクと六つのスペアを決めた彼は、なんと三八六のハイスコアを叩き出したのだ。これに対し、私のスコアは二七一で終わつた。

敗戦のショックに床の上で動けなくなつている私と、ニヤニヤ笑いが止まらない係長。やっぱりハンデをつけてもらえばよかつたと思つてみても、今更それを言つことは自分のプライドにかけてできない。

「実を言つと大学時代にボウリングサークルに入つてたんだよな。掛け持ちだったけど。卒業した先輩にプロ目指してた人がいて、ときどき教えにきててくれたんだ」

それを早く言え！ やはり腹黒は腹黒か。

「だからハンデをあげようかつて言つたのに。君が要らないつて言うから」

親切はありがたく受け取つておくものだよ などと、傷に塩を塗り込む意図があるとしか思えないつぶやきを残して、係長は祝福する同僚たちの元へ向かつた。彼らが私を見て含み笑いをしている。おおかたどんなコスプレをさせるかあれこれ毒を吹き込むつもりなのだろう。

田の前に網タイツや白衣が現れ、めまいを起しそうになつた。

会計を終わらせ出口に向かうと、待つっていたのは係長一人だつた。「みんなには先に帰つてもらつた。これから罰ゲームの打ち合わせ

するからって」

仕事が早い。さすができる男。罰ゲームにまで手抜きをしないとは。

「何をすればいいんですか」

顔のほてりを感じてわざと強気に尋ねた。だが係長はすぐに気がついてニヤニヤ笑う。

「なに赤くなつてんの。Hロゴコスプレ想像した?」

「してませんっ」

完全に見破られている。ああ、どんな格好をさせられるのか。

私が動搖するのを愉しむように意地の悪い笑顔で彼は言った。

「君には何が似合つかなーといろいろ考えてみたんだけど」

身構える私を、わざと空白を置くことで生殺し状態にする。鬼畜

め。

やがてフッと優しげに笑んで彼は唇を動かした。

「あのね」

第四十一話 真剣勝負、罰ゲーム付き（後書き）

ボウリング用語では正式には「ガター」と言つそうですが、ここでは口語的表現として「ガーター」としました。

姿見の前でああでもない、こつでもないと取つ換え引つ換え服を試す。

これでいいかな。ちょっと子供っぽいかな。こっちと合わせたらどうだろ？。
気づけば間もなく係長が迎えにくる時刻だ。慌てて一番良さそうなものを手に取った。

襟周りと裾にチュールレースの付いたスクエアネックの白いTシャツにボルドーのニットカーディガンを重ね、濃いグレーのチェック柄ひざ丈フレアスカートを合わせる。アウターには前を閉じるとA型ワンピースのシルエットになるシード素材のコート。そして黒のロングブーツ。

ボウリングで勝利を収めた係長が私に命じたコスプレ。いや、果たしてこれをコスプレと言つて良いのか。

瀬尾係長が告げた罰ゲームの内容は私を大いに驚かせた。
「君が持つてる服の中で一番可愛い格好して。もちろんスカート着用」

そしてそれを見せるのは日曜日だと言つ。

「あ……綱タイツとかじゃなくていいんですか？」

口に出したそばからいらぬことを言つてしまつたと後悔した。全身がカツと熱くなる。案の定彼は吹き出して笑いを堪えるのに一苦労だ。

「君がどうしても履きたいというならそれでもいいけどね」
首をブンブンと横に振つて拒絶すると、またしても笑われた。それでつい文句が口を衝いて出る。

「でも真冬にスカートなんて寒いじゃないですか」

「ババくさい」と呟つた。雪国育ちのへせじ

「寒いものは寒いんですね」

「罰ゲームだぞ。負けたら呪つ」と聞くんだろ。これは命令

「そう言われてしまえば一言もない。ともかくエロい格好をしなくて済むことに胸をなで下ろしたのだつた。

化粧にはいつもより少し長く時間をかけ、鏡を見てむづ一度服装をチェックする。

そこへ係長からマンションのトに着いたとのメールが届いたので、部屋を出て、リビングで本を読んでいた兄に出かけてくると声をかけた。

「誰と出かけるんだ」

めつたにしないおしゃれな格好を見て訝しげな声を上げる。

「係長」

「まさかデートってんじやないだらうな」

「いや、ノースプレだから、これ

「はあ？」

まあ理解はできまい。私自身この格好に何の意味があるのか分からぬのだから。

兄には心配無用と告げて玄関に向かう。しかし背中に聞いたつぶやきはできれば聞きたくない類のものだつた。

「セーラー服が一番似合つのにな。それでおさげにしたら最強だ」

変態の頭の中で繰り広げられている妄想は考えまいと音を立ててドアを閉めた。

マンションのドントラーンスを出ると、冷たい空氣に鼻がつんとなつた。藍色のステーションワゴンから係長が出てきて、私のために助手席のドアを開けてくれる。立て襟にフルジップのニットジャケットは暗緑色の地に細いグレーのボーダー柄で、いつもの彼よりず

つと若々しい。私への対抗心かと一瞬勘ぐりそうになつた。

「お兄さんは何してるの？」

「読書です。そんなことより、今日何があるんですか？ なんで私にこんな格好させたんですか？」

「うん、可愛い『ポートだね』似合つてるよ」

「じゃなくて……！」

返ってきたのが思いもよらず褒め言葉だったの、後が続かなくなつた。そんな私に彼は優しく笑み、エンジンをかけながら今度はきちんと返答する。

「今日は君と『デート』。可愛い格好してもらいたいだろ？ 男としては

「デートつて……」

「『』の間君を誘つたら断わられたからな。罰ゲームなら絶対に断れないだろ？」

「誘うなら好きな相手にしたらどうかと言つたんです。私と『デート』なんかしたって意味ないでしょ？」

「意味があるから誘つてるんだ。でもまあそれはいいや

思わせぶりなことを言つておいて口をつぐむ。いつたいどうこうことなのだろう。漠然とした考えがもたげてきたが、まさかね、とすぐに打ち消してしまつた。

三十分ほど車を走らせて着いたのは郊外型ショッピングモールだつた。ここには兄と一度来たことがある。ファッショング専門店は言うに及ばず、スーパー・や大型スポーツ用品店、書店にシネコンまで備え、とにかく広くて一日では回り切れないのだ。

「係長、何か買い物があるんですか？」

なにげなく訊くと彼は顔をしかめて不平を唱えた。

「『係長』はやめてくれよ。会社じゃないんだから

そんなこと言われても、慣れてしまった呼び名というのは変えに

くこのだ。

「前にも言いましたけど、係長は係長なんですよ」「知るかそんなの。デートなんだから名前で呼んで。僕も美春って呼ぶから」

『美春』

心臓がビクンと跳ね上がった。

「どうしたの？」

「いえ、あの……」

動搖しているわけではない。違う。なのに言葉に詰まる。

「美春？」

何を気にしているのだろう、私は。下の名前を呼ばれただけのことだ。

「何、買つん、ですか」

いつもどおりにしていくつもりなのに、なぜ舌がうまく動かないのだろう。

「美春の好きなもの」

名前を呼ぶ彼は平然としているのに、なぜ私の方がじiggまぎするのだろう。

「好きなもの……？」

「その前に映画でも観よつか」

優しく微笑む彼にただうなずく」としかできない。これじゃいつもと勝手が違う。何だか居心地が悪くて、くすぐったくて……甘い。

感動ものと話題の映画は確かに涙なしには見られない出来栄えだった。エンドロールの暗がりの中ハンカチで目を押さえて徐々に現実に戻る。場内が明るくなつてから係長に行こうか、と声をかけられ、膝に置いていたバッグとコートを手に立ち上がった。

劇場から吐き出された客と開場を待つ客とでロビーはあふれかえっていたが、気づくと背中には彼の手が添えられて、人にぶつかることも前後に距離が離れることもなく出口に向かう。

「美春はやつぱつす」へ集中して映画を観るんだな

再び名前を呼ばれたかもはや気にはならなかつた。何度も呼ばれれば何ということもない。それよりも私の意識はさつきから背中に向いていたから、言わされたことにも鈍い反応しか返せなかつた。

「儀が君の顔を見てたことはも気つかなかつたな？」

絶対に間が抜けた顔をしたんだと思う。いきなり彼が笑い出したから。

1

これ以上は考へない方がいい。

思考回路を遮断して彼を軽く睨みつけた。どうせからかっているのだ。それ相応にやり返すべきだ、ここには。

をください、エサ！」

二三

そう。私たちにはこんなやり取りの方が似合っている。ずっと居心地がいい。

いつものように係長から何が食べたいかと訊かれ、フードコートに行きたいと告げた。そこなら互いに好きな料理を選べると考えたからだ。彼はいつも私の希望を優先してくれるから、たまにはこのもいい。

半円形に中庭を囲む広い客席を、更に囲むよのうに並んだ十五店舗

が出店する「フードコート」。ガラス張りの壁から入る陽の光が、客席を明るく照らしている。

全ての店をひとわたり眺めて、ふたつの間で心が揺れた。隣に立つ係長を見ると、困ったような顔をして私を見ている。

「これだけあると迷いますよねえ。何にします?」

「選べなくて困ってる。美春は?」

「海鮮丼か、ステーキ」

「じゃあ、僕もそのどっちかにしよう」

なんだ、その主体性のない決め方は。何のためにフードコートに来たと思つてるんだ。

私が不満に思つてゐるのを感じたのか、彼は苦笑いして後を続けた。

「苦手なんだよ、こいつらの。特にどれが食べたいってのがないから」

ただ好きなものを選べばいいだけなんだけど。困ること何もないんだけど。

「係長つて頭が良すぎて難しく考え過ぎなんですよ。パツと見てパツと選ぶ!」

「だからないんだって、好きなものが」

「面倒くさい人ですね。じゃあ私は鮪丼を頼むんで、係長は特選サーモンいくら丼にしてください。それで私にもいくらを幾らかくささいつ」

ダジャレを使ってうまいことやり込めたつもりでいたら、変化球を返された。

「次に『係長』って言つたらペナルティね。……網タイツ?」

早々と逃げて海鮮丼の店へ向かった。すぐに係長もやってきて注文と会計を済ませるとポケベルを渡される。毎の時間をだいぶ過ぎていたからか、空席を見つけるのも難しくはなく、中庭の見える明るいテーブルを選び腰を落ち着けた。

両肘をテーブルに載せ少し身を乗り出して、彼が真っ直ぐ視線をこちらに注ぐ。

「その服可愛いな。美春に合つてるよ」

……なぜ今日の彼は私の心を波立たせる」とばかり言つのだらう。返答に詰まる」とばかり。からかわれているとしか思えない」とばかり。

視線を避けてうつむいたり、「どうしたの?」と彼が問う。そろそろと顔を上げれば、可笑しそうな表情が皿に映つた。やつぱりそういうことかとむかづ腹が立ち、唇をつきだして文句を言つた。

「からかわないでください。」いつの慣れてないんですか」「からかってなんかない。……それと、そういう顔も可愛いよな」わざと言つてるんだろうと思ひながらもうろたえる。顔が熱くなつて、どう返事をすればよいのかも分からぬ。視線をウロウロさせた挙句、隣の席に座る若い家族連れに皿をやつてきまり悪さを誤魔化そうとした。

口の周りを汚しながら慣れない手つきで『飯を食べる幼児と、微笑んで見守る若い両親。なにげない幸せの一風景にふと思いついたことを係長に尋ねてみた。

「係……瀬尾さんってどんな子供だったんですか?」

途端に顔をしかめたのを見て訊いてはまずいことだつたのかと焦る。ところが彼が気に入らなかつたのはその点ではなかつた。

「『瀬尾さん』と来たか……」

下の名前でなんて呼べるか!

『それはムリ』という意思表示を顔から読み取つたのだろう、まあいいか、と苦笑して質問に答える。

「僕は……そうだな……つまらない子供だつたよ」

「つまらない?」

言葉の意味を自ら表現するかのよう、その時代への懐かしさと

か感傷とか後悔とかの感情をどこかに置いてきたみたいな空虚な表情で彼は言った。

「周りがいつもほしいと望むとおりに振る舞う子供だ」

「それは……良い子じゃないんですか」

「ただ言われるままに従つていただけだよ。それで周りがうまく収まるならつて。でもきっと君は……いつも君のまま、変わらず自然でいたんだろうな」

確かに私は両親や兄の望むような女の子じゃなかつた。叱られたりなだめられたり呆れられても、反抗したり逃げ出したりして自己主張してきた。子供つて皆そういうものだと思つてきたけど、彼は違うというのだろうか。

でも私は、彼にはそんなふうに思つてほしくない。私が応援したいと思つているひどが、一番になつてほしいと思つているひどが、自分の子供時代を振り返つてつまらないなどと一括りにまとめてほしくはなかつた。

だから氣づいたときには口が勝手に動いていた。

「つまらない子供なんているんですね？」

「え？」

「良い子でも悪い子でも、いつことを聞く子でも聞かない子でも、つまらなくなんかないですよ」

要領を得ない顔で私を見つめている。こんな言い方で彼を力づけたいと思うのはおこがましいのだろう。でも「あなたはつまらない子供なんかじやなかつた」と言つてあげられるのは、子供の頃の彼をよく知つている人。例えば両親とか近所の人とか学校の先生とかだけだから、私にはこんなことしか言えなかつた。

「だつて卵子に飛び込んだ瞬間に一番になつてるんですよ。子供はみんな一番になつて生まれてくるんですよ。それだけすごいことじゃないですか。だから、つまらない子供なんてこの世にはいませんですよ」

それこそつまらない言いぐせだ　自分の表現力の「なしさ」に泣きたくなつた。彼だつてほら、無言のままじらうをじつと見つめている。……呆れているんだろう、やつぱり。

やがて唇がかすかに動いた。

「どうして君はいつも

」

その言葉にかぶさつて、テーブルの上に置いてあつたポケベルが電子音を鳴らした。内心助かつたと思い、すぐさま立ち上がる。

「よかつた。これ以上待たされたら倒れるところでしたよ。ほら、取りに行きましょ？」

私を見上げる目は何か言いたげだが、やがて細くなりカーブを描いた。同様に緩い曲線を描く口もとから滑り出た「うん」という返事と共に、彼も席を立つた。

食事を終えると何か買いたいものはあるかと訊かれ、特にないと答えると、なら自分の買い物に付き合つてほしいと頼まれた。

係長に連れられて入つたのは和食器や和風小物を扱つた店。古典的様式から斬新なデザインまで、美しい和の様々な色と形は見ているだけでも楽しめる。やがて土鍋が置いてある棚の前に来ると彼が言った。

「美春が選んでくれないか

「土鍋を？　でも私でいいんですか？」

「僕にはよく分からぬから。君は鍋が一番好きなんだろ？　金子チャンはそう言ってたけど

課長の家でお鍋をじこちそつになつたとき？　そんなことを言つたよつな氣もするが、よく覚えてるなあ。

「『私の好きなもの』を買つてそういうことだったんだですか？」

「そうだよ、と笑つて彼がうなづく。

なるほど。季節柄土鍋がひとつあると重宝するだろう。我が家でも出番は多い。

選んだのは信楽焼の少人数用の鍋で、味わい深い黒地に白い刷毛でさつと一振り描いただけのシンプルな外観の品。フツ素樹脂加工だから焦げ付かず、電子レンジにも使用できるスグレモノだ。信楽焼と言えばタヌキの置物だが、そこにつながる連想は私だけに通じるものなので係長には黙つておくことにした。

「美春はこれが好きなの？　じゃあこれにしよう」

彼の好みは全く考慮されていない選択であることを告げたが、いいんだよ、と満足げに微笑んで店員を呼び、購入する旨を伝える。支払いをする係長の背中を見ていたら心に何かが引っかかった。しかし頭を軽く振つてそれを取り除く。だから彼がこちらを振り向いたときにはいつも私のだった。

「一番最初はどのお鍋にするんですか？　激辛カレー鍋？」

からかい半分で尋ねると、彼は苦笑しながら答えた。

「それだと僕以外は食べられないよな」

「……そうですね」

再び何かが心に引っかかる。さつきよりも大きくなつてかすかな疼きを伴つもの。でもそれは考えない方がいいことだった。

夕闇が落ちかかる道を照らすヘッドライトの先に、白モマンションが見えてきた。

「本当に夕飯食べないでよかつたの？」

「はい、さつきのケーキでもうお腹いっぱいです」

まるでエサを与えるのが自分の役目とばかりに、係長はやたらと私に食べることを勧めるのだ。これ以上食べたら絶対に太る。

車が減速しマンション前に横付けされた。礼を述べようとする私を制して彼が挑戦的な目付きで言う。

「金曜日、また真剣勝負しないか？　一度勝つただけじゃ物足りなくて」

「まるで自分がまた勝つみたいな言い方じゃないですか」「もちろんそのつもりだけだ?」

「どれだけ自信家なのだ。私の中に競争心がメラメラと沸き起こつて、この高くなつた鼻をポツキリ折つてやりたいといつ思つに捕われた。

「やつてやろうじやないですか。三日天下つて言葉の意味を思い知らせてあげますよ」「どつちが負けず嫌いなんだか」「今度こそ負けませんからねつ。それで、か……瀬尾さんにはスプレーさせるんだから!」

「せうか。僕が勝つたらまた君とデートだ」

あまりに自然な口調で言られて初めは聞き間違いかと思った。しかし微笑んでじつとこちらを見つめる様子は間違いでも冗談でもないのだと静かに訴えかける。

「……なんで」

「なんでだと思う?」

質問に質問で返すのはずるい。そう思つたが、漠然としていた疑念を確かめてみようかといふ気になつた。

「あの、言いづらいかもしないんですけど……もしかして、フランちゃんたとか……」

それで慰めを得たくて私と一緒にいるとか。ペシトみたいなものだから。

しかし彼はフフッと笑つて否定した。

「フラれてはいないよ。 考えておいて。宿題にするから」

好きな相手ではなく、私を連れ出す理由。宿題と言われたけれど、きっとそれは考えない方がいいことだ。

エントランスの扉が彼と私の間で閉まつたとき、そう思つた。

ふたりがこのままの距離でいるためには、心地よい関係を壊さな

いでいるためには、考えない方がいい。考えたらいけないの!』。

踵を返してエレベーターへと向かう。家に着いたらやるべきこと思い出そうとしたができなかつた。彼が土鍋を買ったときに心に引っかかったものが、今はつきりとひとつの一問になつて存在を主張していた。

彼には訊くことのできない、切なさの混じつた問い。

『係長、誰と一緒に鍋を食べるんですか?』

第四十四話 男の戦い

「お前、女の顔してるやで」

兄の言葉に面食らい、テレビのリモコンに伸ばしていた手を止める。視線を投げかけるとまるでこちらを観察しているかのような目とぶつかった。

今頃妹の性別を知ったのか、変態兄。

「今日は鳩が豆鉄砲食らつたような顔」

「……女？ 鳩？ どっち？」

瀬尾係長とのデートから帰宅した私はいつもより言葉少なで、それが兄の関心を引いてしまったのかもしない。でも言われるまでもなく私は『女』であり、今更それを指摘されれば『鳩』の顔にもなろうというものだ。

ところが兄はそれ以上の観察をやめ、代わって次の週末の予定を口にした。

「次の日曜日はお兄ちゃんと中華街でも行くか。豚まん食いながらブラブラするのもいいな」

「だめ、日曜日は係長と。…………違つ、何考えてんの、私。

係長とは一回目の勝負をするのであって、私が勝てばデートもいいのだ。でも兄と出かけたいとは思わなかつた。

「あんちゃん、次の日曜はバレンタインデーだよ？ 妹より彼女優先だよ、普通は」

カレンダーに目をやつて顔をしかめた兄は苦々しげな声を出した。

「……お前は誰かと約束しているわけじゃないよな？」

「してないよ、誰とも」

嘘ではない。約束なんてしていない。でも真実に薄衣をかけた。頭のどこかで、黙つている方がいい、とささやく声が聞こえた。

あれほど係長のことを意識していた兄が、今日に限つては何も

訊いてこない。その理由を本人に尋ねることも避けるべきだと、さやき声は告げていた。

翌日の会社で会つ係長はいつもどおり私を「越智さん」と呼び、上司の顔に戻っていた。ホッとするのとガッカリするのが、微妙なブレンンドで心を波立たせる。

同僚たちは私がどのコスプレをしたのか聞きたがったが、係長からデータのことは秘密にしておくようにと念を押されていたし、彼と過ごした困惑の時間について話すとは思わなかつた。すると口い格好をした恥ずかしさから口をつぐんでいるのだと皆が納得する。それはそれで複雑な気分だつた。

藤田さんは一言「楽しかつた?」と訊き、つつかり「はい」と返事をした私ににっこりと微笑んだ。

係長から出されていた宿題は考えない方がいいとの結論だけを導きだしてそのままにしておいた。答えは見つかつたのかと問われても、まだだと言えばいい。次の勝負には絶対に勝つ。そうすれば彼との距離はこれまでどおり、居心地も良いままだ。

でもそれはそれで何だか寂しいような氣にもなつてその理由を考えようとしたが、やっぱりやめた方がいいと結局は思考を停止した。勝負はもうこれきりにしよう。ひそかにそう決意して意識的に仕事に集中した。

私がデザインを担当したB社案件は、先方の担当者が途中で交代したせいか幾度となく変更を要求されていて、この日のB社での打ち合わせには佐久間主任が一緒に来てくれることになつていた。

クライアントの要望だけではサイトの構築はできないので、こちらの提案も織り込んだものを先方には受容してもらいたいのだが、

『経験の浅い若い女』というだけで説得力は低下する。それを認めるのは悔しいが現実は受け止めないと仕事は先に進まない。主任の存在は私にとって援護射撃のようなものだった。

ようやく最終的なゴーサインが出てB社を後にする。冷たく吹きすさぶビル風に口までかじかんでしまいそうだったが、安堵する気持ちのほうが強かった。

「あー、よかつた。主任がいてくれたお陰ですよ、ありがとうございます」

びっくりした顔をするのでどうしたのかと訊くと、お前も変わったな、と言う。

「以前ならそんなのおかしい、悔しいつつて大騒ぎしてただろ」「そうだつたかもしれないな、と我が身を振り返る。

でも今は受け入れるべきことは受け入れて、後は私一人でも相手にきちんと納得してもらえる仕事をすることが目標……になつているような気がする。自分の力量をきちんと把握できない、足元さえぐらついているような人間に係長を応援することなんてできないと思うから。

その係長は今、WebPRセミナー運営会議に出でているはずだ。主任は腕時計に目をやると、私の思いを見通したかのように気がかりを口にした。

「……今頃、会議始まってるな」

瀬尾係長と滝沢主任のふたりが出席する会議。いやが上にも不安が募る。

ビルの隙間から見える空は鈍色で、弱々しい太陽は雲の後ろに隠れていた。どこを向いたら安心できるのだろう。

「まあ課長もいることだし、そう心配する必要もねえだろ」「気を引き立てるように主任が言い、私もはい、とうなづく。

しかし会社に戻った私たちを迎えたのは、部屋に満ちた重い空気だった。セミナー運営メンバーを中心に同僚たちが深刻な顔をして

集まっている。嫌な予感がして係長のデスクに目をやつた。主のいない席にぼつんと置かれた、閉じられたままのノートパソコン。

課長と彼のふたりだけが戻ってきていない。

「会議で何があった？」

不安と焦燥感で押し潰されそうになっている私を横目に、佐久間主任が冷静な声でメンバーに詳細を求める。口を開いたのは石津さんで、私に視線を走らせたあと、会議での出来事を忌々しそうに語り始めた。

春に行われる予定の中堅企業向けWebPRセミナー。

参加企業は営業部がリストアップして個別に参加誘致をする一方で、開催を告知するホームページを作り、メディアにもリリースして、セミナー 자체をWebPRすることになっている。ホームページの制作は当然WEB事業部が請け負い、山本さんの手によるデザインが未完成ではあったが今回の会議で披露された。

それに難癖をつけたのが滝沢主任だった。

「このデザイン、ちょっと地味過ぎるんじゃないかな。もうちょっとと訴求力のあるものに変更してほしいね」

ホームページ担当である手塚さんはあっさりとは受け入れない。「派手だから訴求効果があるわけじゃないでしょ。セミナーの内容を踏まえて何度も打ち合わせしますよ、こっちだつて」

手塚さんにしてみれば、素人のくせに営業が口を出すな　と言いたいところだろう。

ところが主任も負けじと言い返す。

今回のセミナーはもともと営業部から発案されたもので、通常のWeb制作で言つならクライアントと同じ立場にあり、「デザインの出来に意見を言って当然だ。

そこで手塚さんは辛抱強く構築したサイト設計について説明した。

そう、つこときほどB社に赴いて打ち合せに臨んだ私のようだ。

しかし主任は得心した様子はなく、むしろ焦れたようになつた。

「デザイナーを替えたらしいんじゃないかな。コンテンツは同じでも個性の違いは出るでしょ？」

「デザイナーに山本さんを選んだ自分自身をも否定されたようで手塚さんは気を悪くしたが、それにも構わず主任は意見を押し広げた。「越智さんなんてどう？ この間彼女の手掛けた事例見せてもらつたけど、すごくいい仕事してるじゃない。発想がユニークだし、面白いもの作ってくれそ」

「山本がベストだと思って選んだんです。それに奇抜なデザインにするつもりもないんですよ、こっちは

彼女は彼女で山本さんとも入念な打ち合わせを重ねた上でやつて

いる仕事だから、はいそうですかと引き下がれない。

「だから一度越智さんにやつてもらつてみたらわかるでしょう」

「無茶言わないでください。ここまでやつて

「手塚さん」

静かに割つて入つたのは瀬尾係長だった。

「僕も言わせてもらつていいかな」

手塚さんの後を引き取つた係長は、滝沢主任に向き直つた。

「デザインに意見があるなら、もつと具体的にどこが悪いのか言ってもらおうか。ただ地味だと言つだけじゃ、いつも対処の仕様がない。それからデザイナーに対する意見は遠慮してもらつ。誰を選ぶかは営業部が口を出すことじやない」

「良いものを作るための会議の場で、議論がなされないのはおかしいと思いますが」

「君がやつていることは議論じやない。ただの言いがかり、根拠のないクレームだ」

意見をぶつけ合つたり。この場の空気が次第に険悪なものに変わつていぐのを誰もが感じていた。

「越智さんを『デザイナー』として評価しちゃいけませんか」「彼女がどうと申すんぢやない。デザイナーを変更する理由がないと言つてるんだ」

「僕には彼女を関わらせたくない」と聞こえますがね」「よっぽど耳が悪いようだな。耳鼻科に行つて検査でも受けたらどうだ」「うだ

毒で味付けされた応酬を止めたのは、工藤課長と営業一課の坂本課長だった。

セミナーが企画されるとすぐに運営委員会が立ち上がり、委員長は坂本課長、副委員長は工藤課長が務めていた。その下で実働部隊を指揮していたのが瀬尾係長と滝沢主任で、実質的責任者はこのふたりと言つてもいい。

しかし会議には両課長も参加しており、本来なら自由な議論を歓迎する両名も、内容が次第に若いふたりの対立に変わっていくのを眉をひそめて見ていたのだ。

そして一度は収まつたかに見えた火は、会議の後に再び燃え上がることになる　更にヒートアップして。

課長一人が営業部長への報告をしに先に会議室を出たのを見送ると、続けてこの場を離れようとした瀬尾係長に滝沢主任が声をかけた。

「あんまり熱くなるなよ」
「それはこっちの台詞だ」

波乱含みのやり取りを見て周囲に緊張が走った。入り口に立つ係長と主任の距離は、わずか一メートルほど。

元来瀬尾係長は気配りの人であつて、他人との間に揉めごとを起こすタイプではないことを営業部の連中も知っていたが、主任に向かつて毒舌を吐いたのを聞いている。何かあつたら止めに入ることになるだろうが、二メートルの距離は実に微妙と言えた。

「あの子、随分お前のこと信用してるみたいだな。お前にどうせや、女の信用を得るのなんか、朝メシ前だろうけど」

誰が聞いても挑発と受け取れる台詞だったが、係長は冷静に応じた。

「何が言いたい」

「カン違いさせんなよ？ あんな純情そうな子、あとで厄介だろ？」

「お前に何がわかる」

吐き捨てるように言つた係長。これに対しても主任は鋭く、毒のこもつた声で返した。

「わかんねえよ。何しろ誰かさんが囲い込んで、口クに話もできないからな」

「…………」

「ボロ出さないようにするのも大変だな。そんなことになつたらあの子に嫌われるんだろうなあ、『係長がそんな人だつたなんて』ってさ。ショック受けるんじゃない？」

「…………」

「でも心配すんな。そうなつたら俺が慰めてやるよ。ああいう慣れでない子つて、ちょっと強引に押し倒せばすぐに情が移つて」

係長はすべてを言わせなかつた。流れるよつに素早く大股で歩み寄り、主任の胸ぐらをつかんで壁に強く頭と背中を打ち付けたのだ。

「もう一度言つてみる」

いつもより低いその声に含まれる怒気に周囲の者は震撼したが、身体に打撃を受けたにもかかわらず主任は嘲るよつに言い放つた。

「お前、もう味見したのか？」

係長が振り上げた拳はすんでのところで同僚たちによつて抑えつけられた。しかしながら、予期していたにもかかわらず未然に防げなかつたことを、彼らはこの後すぐに後悔することになる。

なぜなら、運悪く会議室前を通りがかつた人事課長に見とがめられ、その場だけで收拾するはずだつた事態が大きくなつてしまつたから

同僚たちは話を聞き終ると一斉に憤慨した。

「何それ？ ポチのことも係長のこともバカにしてるじゃない！」

「そんなの係長じゃなくたつて怒るよ」

「何も知らないくせに」

係長と私が深刻に確執した時期を経て今の関係を築いたことを、すべてではないにしても見てきたのだ。滝沢主任のような外部の人間がそれをバカにしたり嘲り笑うなど、彼らにとつても腹立たしいのだろう。

「だいたいポチがおとなしく押し倒されるタマか」

「そうだよねえ。食べものに釣られるならまだしも」

……」こんな状況下でもツッコミを忘れないのもまた彼らだが。

「それで今、係長は？」

「滝沢主任と一緒に工藤課長と坂本課長から注意を受けてる。人事課長もその場で話を聞いてどう処分するか検討するつて。当然上の耳にも入るよ。川嶋常務とか」

「挑発したの向こうじゃない！」

「でも胸ぐらつかんで壁に打ち付けたつてのはまずいよね
水を打つたように場が静まり返った。

あのふたりは同期であるが役職は係長と主任だ。組織においては目上の者が目下の者に暴力を振ることとは、その逆よりも罪が深い。この私にだつてわかることが係長にわからないはずないのに。だからキレたらダメだつて言つたのに。係長のバカ。

「あたしが主任をちゃんと納得させられればよかつたんだけど……
そしたら係長が助け船を出すこともなかつたんだし……

しょんぼりと話す手塚さんの肩に手を回して杏子さんが慰める。

「手塚さんのせいじゃないですよ。滝沢主任は係長をライバル視してるからそうやって挑発したんだと思う

「もしかしたら狙いはそれじゃないかな」

これまでじつと考え込んでいたらしい藤田さんが口を開き、皆の視線が集まつた。

「わざと仕掛けて係長が暴発するのを待つてるとか。何らかの処分は下るだろし、経歴に傷もつくしね」

その推測は同僚たちにももつともらしく感じられ、自然と意見を一つにまとめさせた。

そういうことなら、なるべくふたりを接触させないように気をつけよ。主任が挑発できないように距離を置けばいい。常に誰かが傍にいればまずい事態も防げるだろ?」

どんよりと暗くなつていた心がそのときだけは明るくなつた。空を覆う雲の切れ目から太陽の光が差し込むよ。」

ねえ係長? あなたの部下たちはみんな、あなたのことを心配していますよ。みんなあなたを守りたいと思つていますよ。みんなの気持ち、届いていますか?

ひとり佐久間主任は私を呼びつけ深刻な顔で注意を与えた。滝沢には気をつけろよ、と言つて。

「心配なのはむしろお前なんだよ。瀬尾ひとりのことなら、あいつはいくらだって自分をコントロールできるんだからな」

「どうこう」とですか?」

「滝沢がお前に接触しようとする」と自体、瀬尾を刺激するんだよ。ましてやお前がなんか言われたりされたりしてみろ、何すつかわかんねえぞ」

「まさか」

〔冗談だろ?と半分〕わざつた笑みを返したが、主任はため息をひとつついて続けた。「もしも部下を殴つて会社をクビになつたなんて噂が広まつたりしたら、あいつ、この業界じゃ再就職すんのも難しくなる」

ひとつの悲観的な未来を示され胸がドキリとした。

係長が会社を辞める？ そんなのは嫌だ。

不安がぐるぐると頭の中を駆け巡った。

いつたいどんな処分を受けるのだろう。順当に地歩を固めてきた彼がつまずき、足元を崩されようとしている。仕事とは関係のない理由で。

そんなのフーアじゃない。彼のような人がこんなところで、立ち止まってるべきじゃない。彼は前を向いて走らなきゃならないのに。どうか彼が走る道を奪わないで。

そう願った瞬間にはもう、決意を固めていた。

終業時間になると同時に立ち上がり、同僚たちに挨拶をして部屋を出る。課長と係長はいつもと変わらない表情で戻ってきて業務をこなしていたが、WEB事業部全体が緊張感に包まれていることを口には出さなくとも誰もが認めていた。

私が退出するのを見た係長の田は何か言いたげだったが、

なるべく自然に見えるような笑顔を作つて部署を後にした。

廊下の角を曲がつて奥に進む。重役室が並ぶ一角。そこに至る前で後ろから声をかけられた。

「ポチ」

追いかけてきたのは杏子さんだった。田の前までやつてくると憂いを含んだ表情で問いかける。

「何をするつもり？」

「私には何もできません、でもこのままじゃ不安で」

「うん、わかるよ」

痛々しい目付きで私を見る。それで自分がどれほど情けない顔をしているのか想像できた。これじゃだめだ。『弱々しい女の子』のままで相手だって話に耳を傾けてはくれないだろう。

気合を入れようと両手でピシャッと頬を打つ。すると杏子さんの

目がふつと和らぎ、唇の間から柔らかな声が漏れでた。

「係長つてさ」

そこで止めたまま先を続けよつとしない。普段彼女が言いよどむことなどないので不思議に思つたが、やがて微笑むと優しく私を送り出した。

「何でもない。 行つておいで」

杏子さんに背を向け更に奥へ進み、とある扉の前で足を止めた。

川嶋真一郎常務取締役室。

あの女子化粧室での騒動の後、困つたことがあつたらいつでも力になる、と常務が言ってくれたことを忘れてはいなかつた。今こそ彼に頼るときだ。

今日の行動予定は知らない。部屋についてくれればいいけど。アポもなしに失礼だけど。

でもどうしても彼と話さなければ胸の鼓動がやけに大きく聞こえる。さすがに緊張は隠せなかつた。目をきゅつとつぶつて大きく息を吸い、静かに長く細く吐いた。

そして意を決して腕を上げ、扉を「コシコシ」と叩く。

「はい、どうぞ」

その声が聞こえると同時につぶつていた目を開け、自分を奮い立たせるよつとして扉を押した。

第四十五話 一番になれる人

川嶋常務の部屋には先客がいた。

「あれー、美春ちゃんどうしたの一？」

嬉しさと驚きを足して一で割ったような顔をした半田社長。常務の机に半分尻を落とした姿勢で手にはシルバーフレームの写真立てを持っている。正月に工藤夫妻から聞いた話を思い出した有名なウエディングプランナーだという常務夫人の写真なのだろうが、椅子から立ち上がった常務が近づいてきたので慌てて頭を下げた。

「突然お邪魔して申し訳ありません」

「いや、構わないよ。 それじゃあ社長、あなたはどうぞ戻つてください」

「ええっ、僕は仲間はずれなのー？ せつかく美春ちゃんが来てくれたのにー」

オッサンに会いにきたのではない。脱力感が私を襲う。写真立てを机に置いて彼もこちらにやつてきた。が、常務は取るに足らないことのように社長の不満を受け流す。

「越智さんは私に用事があつて来てくれたんですよ。ほら、とつとと社長室に帰つてください」

さすがに長年の友人だけあつて社長のあしらい方も堂に入つている。オッサンは渋々部屋を出たがドアの向こうから顔を出すと一いつと笑つて言つた。

「じゃあねー美春ちゃん、今度社長室にも遊びにきてねー」

「」には遊びにきたんじゃないっての。

張り詰めていた緊張感がぶつんと音を立てて切れたような気がした。予期せぬ社長の存在は良かつたのか悪かつたのか。

常務が黒い革張りのソファを指し示して座るように促した。

「何か飲むかい？」と言つてもここにはインスタントコーヒーしかないけど

突然押しかけたにもかかわらず飲み物まで勧めてくれる。感謝と断りの返事をしてから腰を落ち着けた。

何と言つて始めるべきか。思い惑つていると、対面に着いた彼の方から訪問の目的に言及した。

「もしかして、瀬尾係長のことかな？」

「は、はい」

やはり係長と滝沢主任の一件はすでに報告されていたのだ。『思い立つたら即行動』は、今回も失敗ではなかつた。

それならば回り道をする時間はない。私は单刀直入に尋ねた。

「係長は何らかの処分を受けるんでしょうか」

彼の一部下に過ぎない私が常務の部屋に乗り込んでまで訊くことではない。それに答える義務も常務にはもちろんない。しかし彼は気を悪くするでもなく淡々と口を開いた。

「気になるかい？」

「はい、係長は私のことで滝沢主任に怒つたと聞きました」
いつたいどんな処分なのか。その内容について彼が話してくれるのを恐る恐る待つた。どうかおどがめなしであつてくれればいい。そう願いながら。

しかし常務が口にしたのはとある質問だつた。

「瀬尾係長のことなどをどう思つ?」

漠然とした問いに戸惑つていると、彼は言い方を変えて再び訊いた。

「瀬尾くんはこの会社にとつてどういふ人間だと思う？」

「それならば答えは簡単だ。

「一番になれる人だと思います」

難しい言い回しなど、私にはできない。組織にとつてどうとか、

対外的にどうとか、そんなことはわからない。でも彼は間違ひなく

一番になれる人で、そんな彼について行こうとする者はたくさんいる。

彼はそういう人だ。

「一番か……」

幼稚な表現に呆れるでもなく、常務は微笑んで私を見つめた。そして再び問い合わせる。

「一番になれるかもしないのになる気がない人間に、やる気を出させるにはどうしたらいいだろうね？」

私はしばし考え込んで何とか探し当たった答えをおずおずと告げた。

「それは……エサで釣るとか……」

「うん。他には？」

「競争相手を作るとか」

「うんうん。それから？」

「……他に選択肢がないように仕向けるとか」

思い出していた。

高三の夏。病床の母の傍にいても何もできなかつた自分。一番を目指してただ走る以外にできることなど何もなかつた。最期に母を喜ばせたくてインターハイに出て、ゴールを目指したあの日。

川嶋常務は一瞬目を見張ると、次いで目尻を下げて私を見た。

「僕が考えていたのはもつと単純なことだつたんだが、君の意見も悪くないな」

単純なこと。それは何だらうと考える前に常務が話を続けた。

「……瀬尾くんは驚くほど優秀な人間だが、これまで一番になろうという気概を見せたことはなかつた。社外の女性関係では派手な活躍をしていたようだがね。」

仕事ができるから結果として昇進はした。でもそれだけのことだ。同じく優秀で一番を目指す人間が現れればそこでお終いなんだよ。ただ最近はそれが少し変わってきていた。良い傾向だと思っていた

んだが

声のトーンが変わり、目を伏せる。

「暴力はまずいな。どんな理由があつても。どんなに優秀で信頼に足る人間でも、暴力を振るうことを認めるわけにはいかない」

彼の主張には上に立つ人間としての非情さが込められていて、一部下の嘆願など入り込む隙間はなかつた。

「……係長はどうなるんですか？」

最悪の結果になつてしまふことを恐れ、声が震える。

「今回は始末書提出にとどめるつもりだよ。これまでの会社への貢献を考慮した温情措置だね。でも一度目はない」

厳然たる態度で常務は言い切つた。

とりあえずの安心を手に入れ、退出しようとしたとこまで呼び止められた。

「社長に『どうして私なんですか』って訊いたそうだね」

それは、『社長のお気に入り』という立場に思い悩んだあまり恨みを込めて訴えた言葉だった。リレーに勝つただけの私をなぜお気に入りになんかしたのだと。……社長からはフザケた答えしか返つてこなかつたけど。

「もしも君でなかつたら、きっと今日、こういう事態にはなつていなかつただろうね」

常務は非難をしているのではなく、むしろ声音には慈愛さえ感じられた。でも彼が仮定した過去は無情なまでに私の胸をえぐつた。

もしも私が社長のお気に入りでなかつたら。

滝沢主任は近づいてはこなかつたのだろうか。係長と主任の対立に巻き込まれることはなかつたのだろうか。あのふたりがあそこまで衝突することも。そ�だとしたら

「それならやつぱりお氣に入りになんてなるべきじゃなかつたんですね」

身体の奥からせり上がつてきた気持ちが声に現れたが、取り繕うことはできなかつた。こんな事態になることを私は決して望まなかつたのに。

湿つた感情から飛び出した訴えに、川嶋常務は快活な口調で応じた。

「僕は君でよかつたと思つてゐるよ。でもどうしても氣に病むのなら、こう考えたらどうかな。　よどんだ池を綺麗にするには水を流すしかない。古い水に新しい水を流し込めば池の魚は混乱するだろう。でも汚い水の中にいるよりずっといいと思わないかい？」

わかるよつてわからない川嶋常務の比喩。『池の魚』つて私のこと？　たしかに今の状態は『混乱』なのかもしけないけど、でもこれが『ずっと』といいだなんて到底思えない。

係長の処分は始末書で済んだけれど、もう次はないのだ。WEB事業部の同僚たちが団結して滝沢主任との接触をとりあえずは回避させてくれるだろうが、あのふたりは相変わらず対立したままなのだから。

主任はいつたい何を望んでいるのだろう。係長を追い落として出世するのが目的なのか、それともただ彼を傷つけたいだけなのか。それは彼が業績を上げていてることに嫉妬しているからなのか、他に理由があるのか。

彼らの間にある葛藤が謎のままで解決の糸口さえ見つからない。でも私がいたずらに動いてもかえつて事態が悪化する可能性もある。佐久間主任からも、滝沢主任には氣をつけるように言われているし。

第三者に間に入つてもうのはどうだらう。例えば比嘉課長とか。年齢が近いから気安く話ができるだらうし、直接の上司ではないから中立的な立場で相対してくれるだらう。彼の意見なら滝沢主任も

受け入れやすいのではないだろうか。

係長に相談してみよう。言いたいことがあるし。

その夜に電話で交わした会話は私からの説教で始まった。
「だからキレちゃダメだって言つたじゃないですか」

「ごめん

普段とは逆の立場で、叱られた子供のようにシコソとした声を出す係長。

「つまらない挑発に乗つて」

「ごめん

「みんなに心配かけて」

「ごめん

軽くため息をついてから、比嘉課長に仲裁に入つてもう案を話した。係長から言い出しつけなければ私が課長に頼んでもいい。しかし彼は乗り気でなく、やや虚ろな口調でそれはやめてくれ、と言つた。

君を巻き込みたくないんだ。これは僕と滝沢の問題で、君は本来関係ないはずなんだ。だから

そんな格好つけてる場合か！　いつちがいろいろと氣を揉んでいるというのに。

「じゃあもう一度とあんなことしないって約束してくれますか？」

「それはできない

「係長、何言つてるんですか」

僕のことなら我慢できる。でももしまだあいつが君を巻き込もうとするなら、何をするかわからな

思いつめたような口調が私を不安させた。佐久間主任が言つたのと全く同じことも。

「係長、またあんなことが起きたら会社にこられなくなるんですよ

？」

それでもいい。僕がいなくなればあいつは君に関わらなければしくなるよ

音を色で表現できるとするなら、彼の声は無彩色そのものだった。雨が降り出す直前の空のような鈍色。

本当はもっと鮮やかな色なのに。私が聞きたいのはこんな声じゃない。

「……そんなの無責任じゃないですか。仕事をまつぱり出して会社辞めるんですか？」

代わりに新しい係長が来る。それだけだよ

投げやりな言い方に腹が立つた。自分を何だと思っているのだろう。

「WEBのみんなはどうなるんですか。みんなが一緒に仕事したいのは『瀬尾係長』なんですよ。部下を捨てて辞めちゃうんですか？ 社長を目指す人がそんなことしていいんですか？」

一気にまくし立てたら電話の向こうに沈黙が降りた。でも私の真剣さだけは受け止めてくれたらしい。

……あれ、冗談で言つてるんだと思つてた

「冗談なわけないでしょ。実力のある人が一番を目指すのは当然のことです」

彼は再び無言になつたが、息を潜めてじっと聞いているような気がした。私の声はちゃんと彼の心にまで伝わっている。やつ信じて言葉をつないだ。

「本気で走つて負けるんなら仕方ないです。でもわざと自分から口一スを外れるのは許せません」

……そうだね

耳に届く声がかすかに色づいた。

「試合放棄しないでください」

うん

暖色が鈍色を塗り替えてゆく。

「滝沢主任には負けないでください」

わかつた

鮮やかな色が広がった。私の聞きたかった声。

「いつか自慢させてください。私は、社長にビリヤードで勝つたのよつて」

……それとこれとは話が別だ

あ、バレたか。

真剣勝負だぞ。絶対に負けないからな
耳に心地良いいつもの声。

「望むところです」

金曜日。係長との真剣勝負第一戦の日がやつてきた。ビリヤード
対決だ。

昨夜からイメージトレーニングを行なつて気持ち的にはすっかり
準備ができている。いつもかかって来い的オーラが全身から立ち
上っているはずだ。闘争心に溢れた私には怖いものなどなく、今日
に限つては社長の来訪も余裕で迎えている。チョコレートもあるこ
とだしね。

今年のバレンタインデーは日曜日に当たるため、会社関係者への
義理チョコは前倒しで金曜日に渡すか、いつそ無視するかのどちら
かだ。先輩女性社員の皆様がたと相談した結果、年に一度のお祭り
みたいなもんだし、楽しみに待つている男性もいるだらうということ
とで、合同で部署の男性全員にチョコを渡すこととなつた。不況の
世の中、財布は少しでも重くしておきたいのが人情というものだ。
そして、日頃差し入れを持ってきてくれるお礼にと、社長もチョ
コを配る頭数の中に入れたのだった。

「社長、いつも差し入れありがとうございます。これ、私たち女子
社員からのお礼のチョコレートです」

チヨコを渡すのは当然というか案の定というか、この私だ。お姉さまがたから押し付けられた役目を果たすと、社長は顔をほほりぱせて喜びの声を上げた。

「本当にもらつていいのかい？ 美春ちゃんからチヨコをもらえる日が来るなんて、生きててよかつたー」

そんな大げさな。それにそのチヨコは『私から』ではなく『私たちから』だと言つたのに、何を聞いているんだ。

訂正しようと口を開きかけると、社長の背後にある杏子さんを始めとする先輩がたが、そろつて首を横に振つて（放つとけ）（話がややこしくなるから）と田で合図する。嘆息したが、今日の私はいつもとひと味違う。

「ちゃんと味わつて食べてくださいね。女子社員みんなの気持ちがこもつてますから」

「もつたいたくて食べられないよつ。美春ちゃんがくれたチヨコは特別だよつ」

「もちろん特別です。みんなで社長のために選んだチヨコレートですから」

「うんうん、僕を想いながら選んでくれたんだねー、美春ちゃん……オッサン。なぜ人の話を聞こうとしない。

脱力する私の横を抜けると、社長は瀬尾係長の机に近づいてこれ見よがしにチヨコを持つ手を振つた。

「美春ちゃんからチヨコもらつちやつたよー、瀬尾くん」

またいつものバトルが始まるのかと全員が身構えたが、係長は爽やかさのお手本みたいな微笑みを見せた。

「よかつたですね」

これを見て「係長も一皮むけて大人になつた」と我々が胸をなでおろしたのも束の間、「正確には越智からではなく、WEB事業部の女性社員全員からのチヨコレートですが」

微笑みを絶やさずに言い切つたのは見事と言つ他はない。あから

さまたに訂正をされた社長は笑顔を凍りつかせ、なめるよつて係長を見て言い放った。

「そういえばさあ、僕知らなかつたよー。瀬尾くんが武闘派だつたなんてねー」

おそらくこの場にいる全員の背筋に冷たいものが走つた。

滝沢主任との一件が社長にまで報告されていた。エリート街道を突つ走ってきた係長の足跡に付いた黒い汚点。

しかし彼の顔は雲ひとつなく澄み切つた空のように清々しかつた。

「私の新しい一面を社長に知つていただき、何よりです」

「新しい一面ねえ。他にも僕の知らない一面があるのかなー?」

「もちろんです。いづれはお見せできる機会もありますよ。どうぞお楽しみに」

「何だか思わせぶりだねー。僕も心の準備しておこうかなあ」

「心の準備より体型管理の方を優先されたらいかがですか。最近腹回りが怪しくなってきましたよ」

「……ゴルフに行つてるからいいのつー」

係長との待ち合わせ場所は書店だつた。今回の勝負については同僚の誰にも言つていなかつたから、外で落ち合つことにしたのだ。

待ち合わせをして軽く食事をしてビリヤード。係長は勝つたらまた私とデートなんて言つたけど、今日の勝負からしてもうデートみたいだ。そう思つたらドキドキしてきて、斜め読みの情報誌のページを更にパラパラとめくる。何を焦つてゐるんだろつ。

彼と一緒に過ごす時間は楽しい。でもこの間のデートは距離感がいつもと違つて居心地が悪かつた。彼の言動が私を困惑させた。でも会社ではいつもどおりで安心していたのに。

「美春」

田の前に現れた彼は当然のよう名前で私を呼ぶ。

「『』めん、だいぶ待たせたね。……『』ひつしたの？」

「……なんで名前で呼ぶんですか」

「『』会社じゃないし。別にいいだろ？ 美春も名前で呼んで」

「今日は『』デートじゃないです」

「そうか。じゃあ日曜の『』デートで呼んでもうおつかれ」

「私が勝つから『』デートはありません」

彼は笑って、行こうか、と促す。自分の勝利を疑いもしない自信はどこから来るのか。

私だって勝つ自信はある。勝つたら彼に命じるけどだつてもう考えてある。

勝負はこれきりにしてください。ふたりつきりで『』デートもしません。私を美春って呼ばないで。係長の名前も呼ばせないで。

「腹減ったな。何食べよつか」

私を見下ろす笑顔は裏も屈託もなく心底楽しげだ。だからきっと気がついていないだろう、私がふたりの距離を意識していることに。それを知られるのは怖い。

でも勝負は決まりきれり、一度としないと言つたら、『』デートもないと言つたら。

彼は訊くかもしれない　じつところを見つめて、微笑んで。

『』どうして、美春？』

そのとき私は何て答えたらいいの。

第四十六話 銀杏の木の下で

寝ている兄を起こさないために、極力音を立てないように支度をして家を出た。見つかったら何を言われるかわからないから。

マンショントリニティを出て一呼吸。朝の冷たくて清涼な空気が鼻腔に入り込んで後ろめたさを押し流す。結果的に嘘をつくことになり、できれば兄とは顔を合わせたくないかったのだ。

でも嘘の書き置きは残してきた。

『バレンタインデー限定スイーツ巡りに行つてきます』

用意周到に有名パーティスリーのホームページをいくつかチェックしておいたから、後で詮索されてもきづらんと答えられるだろう。

日曜日の朝はまだ本格的な活動が始まつておらず、静かな住宅街をひとり駅へと向かう。瀬尾係長との待ち合せには早いが、適当に時間を潰すこととした。

脳裏には金曜日の夜に行つたビリヤード対決の映像が浮かぶ。そこには偶然とし次いで怒りを表す私と、勝ち誇つて笑む係長の姿が映つている。今震えているのは、早朝の寒さのせいではなく悔しさが身体に残っているからだ。

駅で会つたらどんな顔をしてやる。もう一度文句を言つてやろうか。

頭ではそんなことを考えているのに。

……足取りが弾んでいるのはなぜなのかな。

ふたりのビリヤード勝負。ゲームはナインボール、三セッタマッチで先に二セット先取した者が勝ちと決めた。

係長は、これは学生時代に相当遊んでいたな、と思わせるぐら

には上手かつた。しかし常に試合を優勢に進めたのは私であつて、彼が一セット目を先取したのは、四番ボールの弾いた九番ボールがたまたまポケットしたという、偶然の作用からだつた。

一セット目は順当に私が勝利し、そして三セット目。彼が八番ボールの攻略に失敗して、私がそれを難なく決め、残るはラストの九番のみとなつた。入角を計算し、ボールの軌跡を頭に描く。

よし、この勝負、もらつた。

ニヤリとしてキューにチヨークを塗り、ショットをする位置に立つ。上体を深く前に落とし、左手を山の形に作つてキューを添える。すでに私の目には突くべきポイントが手球の表面上に見えていた。そして右腕をすつとかすかに引き、再び前へ突き出そうとした瞬間、いつの間にか傍らに立つていた係長がささやいた。

「エロい」

「！」

キューがかすつた白球が、ゆるゆるとあらぬ方向へ転がつていく。
嘘だらう！？

そして私が呆然としている間に係長が、コーナーポケットと九番ボールを結ぶ直線の延長線上に手球を置き、軽くショットして黄色と白のツートンカラーの球を落としたのだつた。

「やり方が汚いですよ！」

妨害行為によりファウルは無効と猛然と抗議したが、彼は頑として聞き入れなかつた。曰く、「僕は独り言を言つただけ」「集中力が切れたのは君」

「邪魔したのは誰ですか！ 私が勝つてたのに！」

こちらの猛攻を闘牛士のようにむつとかわして彼は言つた。

「負け犬の遠吠えは見苦しい
ま、負け犬？ 私が？」

愚弄されて言葉を失つていたら、彼はおまけの一言までつけた。

「犬と君を掛けるなんて、上手いな僕も」

それを聞いて逆上したが、すかさず彼が買つてきたアイスクリームを食べていたら、なしごとくに誤魔化されてしまった。それもまた不本意なのが。

日曜朝の上り電車。車内は空いておりふたり並んで腰をかけた。

「お兄さんは何してるの？」

「兄も今日はデートです。兄のことまだ気になるんですか」

「最大の関門だからね」

それは兄じゃなく滝沢主任だろうと思つたが、何も今彼の名前を出して空氣を壊すこともないだろう。せっかく早起きして出かけてきているのだから。

今日のデートはあらかじめ場所を教えられ、それに適した服装で来るよううこと言われた。ふたりで話しあつて決めたのは、朝一番で行つて混み合つ前に引き上げる」と、都内だから電車で行こうということ。

明治神宮外苑のアイススケート場。

何でもできる『完璧瀬尾くん』のことゆえ、スケートもきっと上手なのだろうと思つたら、意外にもそれほどでもないのだと言つ。

「じゃあなんでスケートにしたんですか」

「美春が滑つてるとこ見たいから」

「私だつてそんな上手じゃないですよ。何とか後ろ向きに滑れる程度です」

それで充分、と笑つて言つ彼に少し迷つたがあることを尋ねてみた。

「……この間買つたお鍋、もう使いました？」

これぐらいなら訊いても構わないだろう。購入に付き合つたのだから不自然ではない。

「まだ。でもそろそろ練習しないといけないんだよな

「何ですか、練習つて」

「僕は鍋を作ったことがないから、本番の日には備えて練習が必要なんだ」「んだ」

「変な感じで生真面目ですね」「何感じにつけ生真面目だよ」

その後は軽口の応酬となつたが、心が向かつ先は一つだけだつた。本番の日。そうか、お鍋をする日はもう決まつているんだ。誰かと一緒に。

知り得た事実だけを胸に収めて後は何も考へないようになつた。ふたりの距離を保つためにはそれが最も賢明な方法だと思った。

開場したてのスケート場は人の出足もまだ鈍くて、リンクに立つてるのは上級者や家族連れが多くつた。アイスホッケーの靴を履いた小学生ぐらいの少年たちが、リストのようにすばしこく間をすり抜けていく。

久しぶりのスケートは氷に慣れるまで少し時間がかかつたものの、コツを思い出した後はエッジの動きも滑らかになつた。一方それほど上手ではないと言つた係長は、前に滑るだけなら充分に美しい軌跡を氷の上に描き出していた。とはいえる自分が滑るよりも、前に後ろにと自由に動き回る私を視線で追いかけてばかりで、さつき言ったように私が滑るのを見ているのが楽しいみたいだった。

あの瞳はどこかで見たことがある。楽しげに微笑んで視線を動かすところも。

どこでだつたか思い出せないまま一周して彼のところに戻り声をかけた。

「私、ドッグランで放された犬の気分なんですけど」「僕は愛犬が走り回るのを眺めている飼い主か。……違うんだけどな」

どう違うのかと訊いても笑つて答えようとしないので、のんびり

見物するのを邪魔することにした。

「係長も後ろ向きに滑つてみませんか？」

「……『達也』だけど？」

それは聞こえなかつたふりをして横に並び、足をハの字型にするよう指示する。

「少し膝を落として……つま先で蹴るんです」

子供の頃に通つたスケート教室で教わつたことを思い出しながら実際にやつてみせた。

足の動きを真似る彼。しかし最初の一歩ぐらいまでは後ろに進むものの後がなかなか続かない。

「…………難しいな」

「始めは何だつて難しいんですよ。ほらもう一回」

「鬼」「チカ

「係長は褒めて伸びる子ですか？」

「『達也』だけど。…………うん、褒められる方がいいな」

「よくできましたねー、瀬尾くん。はい、もう一回やつてみましようかー。次はもっとできるようになりまひゅよー」

「…………おー

眉間にシワが寄るのを見て、フザケ過ぎたかと慌てた。

「あっ、じゃ、じゃあ私が押してあげますから、か……瀬尾さんは

足に集中して

「押すつて……？」

彼の正面に立ち両手をとると、私は氷を蹴つて前へ進んだ。これなら慣性がつくから滑りやすいだらう。そう思つたのに、視線の先にある彼の足は肩幅の広さに開いてただ押されるがまま、氷上を後ろ向きに滑つている。

「何やつてんですか。ちゃんと足動かして……」

最後まで言つこと、彼の返事を聞くことも叶わなかつた。

顔を上げると驚きに彩られた目が私を見下ろしていた。瞳を間近からのぞき込む形になり、視線が絡み合つ。互いの瞳に焦点を合わせて。

やがてその目が緩んだのを見て、ハツと我に返り現状を客観視した。

氷上で手を取り合つて見つめ合つ男女。

「うわーっ、何やってんの、私！」

つないでいた手を瞬間的に離そうとして 逆に強く握られた。

「続けようか」

顔が熱くなっていた。きっと赤くなってる。

「マニア」と笑う彼の顔はもう見ることができずに下を向き、早口で喋つた。

「いえ、ひとりで頑張つてください！ 隠ながら応援しますから」

「始めた以上は責任もって教えてくれないと。ねえコーチ？」

「指導力に欠けるので辞任します」

「生徒を見捨てて辞めるのか。無責任つて言つたのはビビの誰だったつけなあ」

ぐつと言葉に詰まつたが、向かい合わせで手を握り合つにしても、このまま立ち止まつているよりはまだ滑つている方がマシだと考え直した。

もともと筋が良いのか、じばらくそつせつて滑つていたら彼の足の動きも形になってきた。やほど押してやらなくとも後ろ向きに進んでいる。

少しずつリンクの人口密度が高くなつてきたので、私は進行方向、彼の背後に気を配りながら前に進む。すると時折彼と目が合つ。そのたびに見せる微笑みが私を落ち着かなくさせる。

エッジが氷を刻む音。私に向けられる眼差し。そして、手袋越しに伝わる手の力強さ。

全身の神経が研ぎ澄ませたようにそれらを感じていた。

ふいに彼に手を引つ張られ、身体を引き寄せられる。驚きの声を上げるより先に、アイスホッケー靴の少年たちがつむじ風のよう私たちをかすめて通りすぎていった。

背中に回された左手に力がこもり、ふたりが更に近づく。わずか数センチとなつた彼との距離に身体が硬直した。かすかに屈くシトラスの香り。

「甘い匂いがする。シャンパーの香り？」

彼もまた私の匂いを嗅いだことが羞恥心を刺激して、その場に屈み込んだ。

「何やつてんの、美春？」

無言のままエッジで削られた周囲の氷をかき集める。そして掌で氷をすくつて立ち上がると、彼の頬を両側から挟んだ。

「わっ、冷てっ」

「エロ上司への罰ですっ」

氷を蹴つてその場から飛ぶように離れた。彼から逃げたのではないか。接近したときに嗅いだ彼の匂いに心が揺らめいたことが恥ずかしかったから。

休憩を挟んで一時間近く滑ると、氷上の脹わいが増してきた。当初の予定どおり引き上げることにしスケート場を後にする。昼時なので、散歩がてら青山方面に移動して昼食をとる店を物色することになった。

何組かのカップルと通り過ぎる。やたらと姿が目につくのは今日がバレンタインデーだからなのかな。それとも私の目が自然と追ってしまうのかな。……私たちは周囲からどう見えるんだろう。

そんなことを考えている自分に愕然とする。いつたい何を気にしているのか。

私たちはカップルじゃない。上司と部下。係長は川嶋常務からも

期待されるようなすごい人で、私は彼を応援する部下。とせんじやべ
ットみたいに可愛がつてもらえば、それでいいんだ。

彼が罰ゲームとしてデータに連れ出されのは、きっと……気晴らし
程度のものなんだろう。兄のストレスが溜まると私を構う変態度が
上がるみたいに。

自分の中で折り合ひのつく答えを探し出した頃、円錐形に先端の
鋭く伸びたイチョウ並木が視界に入ってきた。大通りの両側に二列
ずつ計四列、整然と並んだイチョウの木々。ドラマロケなどが行わ
れる有名な場所だ。兄と一緒に見にきたのは上京した年で、心細さ
を抱えて東京での生活を送っていた頃だった。

あのときは黄葉の見頃で、上を見上げれば枝に繁る葉、下は落ち
葉が歩道を敷き詰めていて、黄金色に染まった幻想的な世界はそこ
だけが現実から切り離されたように美しかった。

今は葉もすべて落ちた裸木が、空に向かって真っ直ぐ伸びている
姿がずっと連なっている。その光景は決して物寂しさを感じさせず、
むしろ力強く壯觀だった。

「葉っぱがなくても迫力ありますね」

「うん、何て言うか、静かで厳かな感じだよな」

しばらく遠景で眺めてから道を渡つて、イチョウ並木の間に作ら
れた歩道に足を踏み入れた。

一枚の葉さえない、幹と枝だけの裸の木。でも秋にあれほど綺麗
な情景を作り出すのは、この幹に潜んでいる自然の力だ。そう思う
と、今はシンプルな木々が冬の寒さの中、凜として立つ姿もまた美
しいと思えるのだった。

「手、寒くない？」

突然の問いに虚を突かれた。手袋は氷を触つて湿つっていたのでつ
けていなかった。冷たい空気に手がさらされているのが気になつた

んだろう。係長はこうこうが優しいなあとつづく思つ。

「いえ、大丈夫です」

しかし彼は苦笑していきなり私の右手をとつた。

「こういうときはね、寒くなくても寒いって言つもんだよ

「ちょ、寒くないんです、私は！」

「僕が寒いの。……何焦つてんだよ、さつきは美春の方から手を握つてきたくせに」

「だ、だつてあればつ……」

後ろ向きに滑る練習だつたし。手袋はめてたし。

それは声にならずに終わつた。彼がニヤリと笑うのを見たから。

「名前を呼んでくれるんなら離してもいいな。……どうする？」

前門の虎後門の狼か！ サつき優しいつて思つたの、撤回。意地悪だ、やつぱり。

結局名前は呼べないのでそのまま手をつないでいた。少しひんやりとした彼の指にときどき力がこもる。私はうつむいて、心の中で自分に言い聞かせた。

ただ手をつないでるだけ。寒いから。意味なんかない。意識しちやだめ。

だけどつい視線がちらちらとつないだ手に向かう。私より大きくて力強い手。

その手をたどると腕があつて、肩があつて そこで気づいた。初めてのデートで絶叫マシンに乗つた後、あの腕につかまつたこと。力強く支えてもらつて安心できたこと。

思い出したら胸がドキドキしてきた。なんで今頃。対処に困つて視線をイチョウの木に流した。

ひとつ、またひとつトイチョウの木の前を通り過ぎる。太い幹を眺めいたら、普段は忘れていたことを唐突に思い出した。

イチョウは太古の昔から生き続ける植物で、雄の木と雌の木があ

る。風が運んだ雄花の花粉を雌花が受粉して実を作る。それをずっとずつと昔から、変わらぬ姿で繰り返してきた。

雄と雌。男と女。

男と女。

ふいに係長が口を開き、私の意識は引き戻された。

「次の勝負は何にしようか」

「……まだ勝負するんですか」

「もちろん。美春が心理的負担を感じなくなるまで」

「心理的負担？」

「罰ゲームで命令されるんだつたら、僕とデートするのも抵抗ないだろ？」

それは、そのとおりだと思つ。罰ゲームでなければふたりつきりでデートなんかしない。する理由もない。だつて私たちは、自然と声が口からこぼれ出していた。

「係長は……係長なんですよ。会社で最年少の係長で、将来有望で、みんなから慕われていて。そういう人は私とデートなんかしません」卑屈になっているのではない。ただ彼と私とでは次元が違うような気がするだけ。それに私は不安定な未来を選ぶより、確実な現在を大事にしたい。彼の部下でいれば、あるいはペットでいれば、そばにいられるのだから。

私の見解には口を出さず、代わりに彼はぼそっとつぶやいた。

「美春の手はあつたかいな

「そうですか？」

「身体はもつとあつたかいんだろうな」

ぎょっとして足が止まった。「冗談にしてもきわどすぎまる。

「セ……セクハラで訴えますよつ、係長！」

「今は係長じゃない」

注がれる眼差しの熱さにぞきりとしたが、言いたいことは予測できた。どうせまた下の名前を呼ばせようとしているのだろう。

けれど唇の間から出てきた言葉は

「ただの男だよ」

時が止められたように身体が動かなかつた。彼を見上げる目も、表情さえも動かせない。

彼が望んでいること、私に気づかせようとしていることが胸に押し入ってきた。

ただの男。ひとりの男。上司でもなく、一番を目指す人でもない。

ただの瀬尾達也。

外側についている、華やかに彼を形容するものを取つ払つて、残つた彼自身。

優しかつたり、意地悪だつたり。腹黒なのに、子供みたいな表情もして。大人の余裕を見せるくせに、思いつめたりもする。

私に見せてくれた彼自身。ただの男として、私の前に立ちたいと望んでいる

イチョウの木の下で。つないだ手に、ふたりの体温が融け合つた

そのとき。

葉っぱをすべて落として裸になつたイチョウの木が、彼と重なつた。

第四十七話 冬の残滓

一日の終わり。眠りにつく前、脳裏に何度も再生されるシーンがある。

氷上を向かい合つて一緒に滑っているふたり。まつげの長さまで確認できるほど接近するふたり。手をつないでイチョウ並木の下を歩くふたり。そして。

『ただの男だよ』

耳に残る声は静かな熱を帯びて身震いをえ感じさせる。瞼の裏に焼き付いた眼差しが身体を火照らせる。じたばたしながらベッドの上で悶えるように顔を枕に埋めた。

どうしよう。以前のように彼を見られない。もう同じ関係ではない。認めないわけにはいかない。

男と女。彼と私。……彼の気持ち。

あの日、会話の途絶えがちな昼食を共にした後、今日はもう帰ろうと言い出したのは瀬尾係長だった。

「普段使わない筋肉を使ったから、疲れただろ？ 帰つてゆっくり休んだ方がいい」

理由がなんであれ一も二もなく承知しただろ。一緒にいても身の置所がなかつたから。ところが彼は私を家まで送り届けると主張する。路線も違うし昼間だから大丈夫と言つても、意見を譲ろうとはしなかつた。

「ちょっとぼんやりしてるから。独りにして何かあつたら困る」何だか熱があるみたいにぼおつとしていたのは事実だったので、それ以上強く断ることはできなかつた。駅からの帰り道には彼がまた手をつけないで、互いに無言のまま共に歩いた。

マンションの前まで来ると彼はようやく口を開いた。

「宿題の答えはもうわかった？」

彼から出された宿題。私とデートする理由。胸の中で確信に変わりつつある答えを口に出すことはできなかつた。それを言つてしまつたらもう元には戻れない。

「君が答えを見つけて納得してくれるまで勝負は続ける。それまでは『罰ゲームで仕方なくデートする』んで構わない。でもふたりで会つていれば何かが変わる。僕はそれに賭けてるんだ」

彼の狙いはちゃんと当たつている。実際この間のデートから、私はふたりの距離を意識するようになった。でも何も変わつてほしくない。

「僕の手の内は見せた。次は君の番」

「私……？」

「自分の気持ちをよく考えてみてほしいんだ。……これも宿題だね。私が考えまいとしていたことを考へろと言つ。最後通告を突きつけられたような気がして泣きそうになつた。すると困つたように笑つて手を伸ばしてくる。

「そんな顔されると」

頬に彼の指が触れた。私を見下ろす目は何かを言つたそつに、でも辛うじて踏みとどまつてこよつて見える。親指の腹を二度肌の上に滑らせて、彼は手を離した。

「じゃあ明日、会社で。金曜日はまた勝負な」

携帯電話に手を伸ばして彼から届いたメールを読み返した。

『君が戸惑つてるのはわかつてゐる。そうさせているのは僕だから。でもそれでもいいから避けるのだけはやめてほしい』

こんなメールが来るのは私の会社での態度が原因だ。彼はいつもおり上司の顔を見せて業務に当たつてゐるのに、私は気持ちが乱れてケアレスミスを連発する。これじゃいけないと仕事には集中し

ても、彼の顔が視界に入るたびに意識が持つていかかる。でも目が合つてもどうしていいのかわからずに視線を外し、よそよそしい態度をとってしまう。

寝返りを打ち、自室の天井を見上げた。そこにも彼の顔が浮かぶ。係長を応援したいと思つてきた。一番を口指す彼の手伝いをできたらいいなと思つてきた。私を支えてくれた陸上部の先生や部員の仲間たちのように。もう一度あの熱を感じることができたら、どんなに楽しいだらうと。

でも彼が私に求めているものは、そうではなくて。

男と女。

そういう形で相手から望まれる現実に不安と戸惑いを覚える。それはまるで、観客席で見ていただけだったのが急に舞台の上に引っ張り上げられたみたいで、自分が今や傍観者ではないことが恐れにも似た感情を抱かせた。

水野くんの思い出をときどき引っ張り出して満足していた恋とは全く違う、もっと実体があつて、生々しくて、ふたりの距離を心と身体の両方で測るような。

呼吸が聞こえるほど、匂いを嗅げるほど、体温に触れるほど近づいて、甘くて痺れるような感覚を互いに分け合つよくな。

そんな関係を彼と築くのだろうかと想像しただけで、胸の鼓動が速まり身体の奥が疼く。それを直視したくない。でもその先を知りたい。

自分の中で何かが目覚めた気配にかすかな慄きを覚える。

私が、どうしちゃったのかな。彼が好きなのかな。好きになつて後悔はないのかな。

こんな自信のなさでは答えなど見つかるはずはなかつた。

「美春、それ砂糖！」

兄の叫び声で我に返つた。どこかを泳いでいた意識が田の前の鍋に戻る。スパゲッティを茹でようと沸かした湯にもつ少しで砂糖を入れるところだった。

「お前は最近ボーッとしておかしい。頼りになるお兄ちゃんが可愛い妹の悩みごとを聞いてあげよう」

私が塩とスパゲッティを湯に入れるのを見届けた後で、ここが理想の兄の出番とばかりに人生相談を買って出る。が、変態兄に本当のことは言えないのに、適当な相談事はないかと考えながら口を開いた。

「んーと、実は……」

「瀬尾はやめとけ」

いきなり核心を突くな！

「あ、あ、あ、あんちゃん……なして？」

私の狼狽ぶりを満足そうに眺めて兄は言った。

「俺が気づいてないとでも思つてたのか。何年俺の妹をやつてるんだ、お前は。『バレンタインデー限定スイーツ巡り』なんて嘘つきやがつて」

バレてたのか。まさか私の身体からスイーツの匂いがしなかつたからではあるまいが。

「で、告白でもされたのか」

「違う……」

「でもあいつの気持ちに気づいた、と」

「……なしてあんちゃんが知つてんだ？」

ため息をつき、苦いコーヒーを飲んだみたいな顔をする兄。

「あんな田で見られたら嫌でも気づくよ」

「あんな田？」

「俺を羨んでる田。お前を独り占めしてる俺が羨ましくて羨ましくて仕方がない」

それはいくら何でも大げさだろ？と思つたが、係長がいつも兄の

ことを気にしていたのは事実だった。

『お兄さんは今日何してるの?』

その問いの裏側にどんな想いを秘めていたのだろう。

「お前はどう思ってるの、あいつのこと」

率直に訊かれて言葉を濁した。答えはまだ見つかっていなかつた。すると兄は得心したようにうなずく。

「お前が不安になるのも無理はないよ。女遍歴重ねてきた男だもん。自分も結局その一人になるかも知れないと思えばためらつて当然だよ」

「係長は、もうそういうんじゃないって言つたんだ。誓つて一人だけだつて」

そこは彼のために反論したかった。兄にそんな評価を下されたくはなかつた。

彼が真剣な顔で訴えた口のことは忘れない。私も彼の言つことを信じると伝えた口。

「じゃあ何が怖いんだ? お前が先に進めない理由つて何? あいつのこと信じてないからじゃないの?」

兄の情け容赦ない言葉に私は唇を噛み締めた。

信じる信じると口では言つておきながら、結局私は彼のことを信じていないのだろうか。そういう自分を認めたくなくて考えようとしてないのだろうか。

目を伏せると兄はもう一度ため息をこぼしてから、いつになく真剣な口調で言つた。

「お兄ちゃんから大切な妹への忠告。あいつはやめとけ」

「あんちゃんが心配するのはわかるけど……」

「言つとくけど、俺が反対する理由はあいつの女関係じゃない。お前が弄ばれて捨てられるつていうんなら、まだいいんだ。でもあいつにはそれ以上の危うさがあるつて気がする。だからやめた方がいい

危うせ？ 病人と言つていたあれか。

「もつと普通の男を探せよ。普通で平凡な」

「係長は、普通だよ」

変態が何を言うか。兄に比べれば係長はずつと普通だ。

「……今年の誕生日は気分転換に温泉でも行くか？」

それ以上は押して主張せず兄はいきなり話題を変えた。まもなくやつてくる私の誕生日。何だか他人事みたい。いろんなことがあってすっかり忘れていた。

「去年の今頃は病院の世話になつてた。一年間頑張ったんだし、『褒美としてさ』」

感慨深げに兄が言う。ちょうど一年前、残業続きの果てに身体を壊してすごく心配かけた。前の会社を相手取つて訴訟を起こそうとしたほどだったのだ。今の会社でつながらく働いていることは、兄にとつても喜ばしいのだろう。でも一緒に温泉なんて論外だ。

「行がね。平日だべ」

「休みを取ればいいじゃないか

取るか、普通。単に自分が行きたいだけだろ。

忙しいから無理と言つてこの話題は強制的に終わらせる。

「仕方ないな。じゃあいつもりおり食事でいいか？ 和食？」

「……うん」

小さくうなずいてカレンダーに印をやつた。明日は係長との勝負の日だった。

翌日の朝、工藤課長が例のセミナー運営委員会の飲み会が急遽行わることになつたとメンバーに告げた。委員長である坂本営業課長自らの発案なので、半強制である。前回の会議で起きた騒動の火種がくすぶつたままでは良い仕事にはならないと見た課長が、親睦会を開こうと提案したらしく。

『「ごめんな。せっかく君と約束したのに』

『気にしないでください。それより、飲み会ではおとなしくしてくださいね。主任に何を言われても』

『飲み屋で出入り禁止になつたら困るからね、おとなしくするよ。

他のメンバーもいるから大丈夫』

社内メールでそんなやり取りを交わしながらも内心は複雑だった。勝負が流れたことには安堵したが、滝沢主任の存在はもはや鬼門と言つてよかつた。

あの騒動以来、係長と主任は接触することなく日々を過ごしていく。職場のフロアが違うのだから遭遇する可能性も低くはなる道理だが、何度かニアミスはあつたらしい。しかしそのたびに彼に張り付くWEB事業部の同僚たちが接触を回避しようとするので、暫定的平和が保たれているのだった。

あの一件は係長にダメージを与えたかと思われたのに、むしろ活力源となつたかのように生き生きとして、社長に向かつて開き直つてみせたことからも、彼にとつてはマイナス要因とはならなかつたことが窺えた。会社側の評価は別として、だけれど。

ただ、主任との遭遇を心配する同僚たちがどこへ行くにもついてくるのに辟易しており、特に昼休憩に志願者が増えるのは給料日前であるがため、あわよくば昼食を奢つてもらおうという下心が透けて見え彼も苦笑いするしかないのだった。

その日の夜、飲み会がどうなつたか連絡くださいとメールを送つておいた。翌日の土曜日になつて、主任とは席も離れていたし口を利くこともなく無事に終わつたと返事が来て胸をなでおろした。

しかし飲み会に出た他のメンバーの話によると、滝沢主任は月末で退職する総務の女性社員を話題に出し、係長の神経に障るような発言を繰り返したらしく、

「その人って……もしかして」

「うん。ポチをシメようとした六人のうちの一人だつて。『好きな男に振り向いてもらいたくて少しやり過ぎただけなのに、あっさり切り捨てるつてどうよ、キツく言われてすげー泣いててさ、可哀相になっちゃつたよ』とかなんとか。そんなの、自業自得だつての『やはりまだ終わつていない。擬似的な平和の上にふたりは辛うじてバランスを保つているようなものだ。係長はもう挑発には乗らないと約束してくれたけどやはり心配で、その旨をメールした。』『彼女たちに厳しいことを言つたのは後悔してない。切り捨てたと言わても構わない。実際そのとおりだしな。それで何を言われても何とも思わないから心配しなくていい』

返信を読んで思った。『配慮の人』が見せるもう一つの顔。必要とあらばとこどん辛辣にして非情に振る舞つ　冷静に計算をした上で。そういう人だから主任との衝突は本当ならあり得ないはずだったのに。

メールには続きがあった。

『滝沢とは関わらないで。君のことに関しては自信がなくなるから』

このまま何も起きなければいい。そう願いながらあまり気の進まない次の勝負の日を待っていた。

一月二十五日。

この日は朝から春一番が吹き荒れて、通勤中の髪やコートの裾をはためかせた。気温も上がりよいよ春が出番の準備を始めたことを知る。

警備員のおじさんに朝の挨拶をすると、ウキウキした表情が帽子の下で踊った。

「おはようさん。もうすぐ春だねえ」

春が持つ魔力とでも言うのだろうか、心が浮き立つのを感じずに

はいられないのだ。非常階段を上る足取りも今日はいつもより軽く感じる。

もう少し暖かくなつたらプランターに植える苗を買いに行きたいな。どの花がいいだろう。窓ガラスの掃除もしないといけないな。冬が残していつた汚れを拭きとつてピカピカに磨き上げたい。

次から次へと春のプランが浮かんできて頭がいっぱいになり、視界の隅に何かを捉えたもののそれと認識したのは視覚ではなく聴覚だった。

「おはよう、越智さん」

はつきりと視界に入るよう視線を移動させるとそこには滝沢主任がいた。十階に至る踊り場の壁に寄り掛かつて、微笑みを浮かべている。

「おはようございます、滝沢主任」

挨拶を返した途端にもたげてくる警戒心。佐久間主任から言われていた言葉 滝沢には気をつける を思い出す。

「一階のエントランスで見かけてね。本当に毎日階段上ってんだ。すごいなあ」

少しずつ近づいてくる彼に心がざわざわと波打った。

「あの、何がご用ですか」

「一度注意してあげた方がいいかと思つて瀬尾のこと。あんまり信用しない方がいいよ」

親切そうに忠告を与えるのはボウリングの口と同じだ。何か根拠があるとでも言つのだろうか。確信的な目で語りかける彼に少なからず恐れを抱く。

「あいつ、見た目より腹黒いよ」

そう言い切つた主任の声はひどく冷たく、おそらく彼らには単に同期のライバルという以上の深い相克があるのであうと思わせた。係長は私をそれに関わらせまいとし、主任は巻き込もうとする。

もうウンザリだ。そんなことを聞かされたって私は傷つかない。それを主任にはつきりとわからせてやろうと思つた。

「知つてますよ。係長って腹黒で策士でその上辛辣ですよね。知つてます。だから何だつていうんですか」

泰然として言い放つと、彼は驚いて一瞬怯むもののすぐに表情を元に戻す。

「でもあいつが営業部時代に何やつてたかまでは知らないでしょ？」

営業部時代。彼が入社一年目の頃。

「あの比嘉さんですら何回通つても契約取れない会社があつたんだよ。なのに新入社員のあいつが一、三回通つただけで取つてきた。向こうの担当は女性部長。……これがどういうことかわかる？」

侮蔑の色が濃い声音を耳にしながら、私は息苦しさを感じ始めていた。

「枕営業したんじゃないかつて噂になつてさ。ほら、あいつあのとおりの外見の持ち主だから。他にも新規で取つてきた契約、半分以上は女性が担当だつた。あいつが一年で異動になつたのつてそのせいだよ。まずいでしょ、枕営業するヤツが大手を振つて営業部にいたら」

噂の的になる。中傷する者、擁護する者、遠巻きに見る者。様々な目に見つめられる。係長が当時受けた視線の矢はどれほど痛いものだつたのだろう。それを思うと胸が締めつけられた。

「俺、一応同期だから言つたんだよ。違うんなら釈明しろよって。でもあいつ、『いいよ別に』。どうせPR事業部に行きたかったからちょうどよかつた』って笑つて言うから、これはクロだなと思った」私は視線を足元に落として悲しみに身を任せた。その噂が真実なのかどうか　それは係長しか知らないことだ。そして彼が釈明したとしても、どれだけの人が信じたというのだろう。最初に疑惑の色がついた眼鏡を掛けて見ていたのなら。

『例えば僕にとつて不利な状況証拠があつても、僕の言つことを信じる?』

あの日に聞いた彼の声が蘇つた。何かに縋りたいように思いつめた横顔も。あれはもしかしたら、その噂のことを指していたのだろうか。

だとしたら私が取る行動はたつたひとつだ。約束したとおり彼の言うことを信じる。彼の言葉だけを。

息を吐いて顔を上げ、主任を真正面から見据えた。

「そんな話信じません。それに何年も前のことでしょう? 正直なところどっちだつていいんです。私の上司は今の瀬尾係長ですから「それはそれは、あいつもずいぶん信用されたもんだねえ。骨抜きにされちゃつた? あいつの手にかかつたら、君なんかすぐにオチるだろしね」

下卑た笑いを唇に乗せて私を嘲るこの人に、前から言いたかつたことを今、ぶちまけよつと思つた。

「……どんなに実力があつたって、独りでは一番になれないんですよ。周りに支えてくれる人がいなかつたら、信頼してついて行く人がいなかつたら、一番になんかなれない。主任にはいるんですか? 一緒に一番を目指そうっていう人がいるんですか?」

勢いに任せて言つたはいいが、彼の目が釣り上がり口元が歪むのを見て瞬時に怯えた。現状を見てみればこの空間に彼と二人きり。今すぐこの場を離れたい。

「もうすぐ会議が始まるんじゃないですか。早く行つた方がいいですよ」

それが会話を打ち切る合図だった。彼に背を向け先に階段を上り始める。

しかし主任の行動は直線的且つ動物的だった。

「待てよ！」という声と共に右肩をつかまれる。そこに伝わってきた彼の負の波動が恐怖心を呼び起しした。

逃げなくては。そう思った瞬間、肩に置かれた手を振り払いバランスを崩した。

後ろに倒れそうになり、辛うじて段の端に右足が半分だけ載る。しかし結局滑つて、次の段に変な角度で足は落ちた。

身体を支えきれなかつた右足を軸に、引力が私を強く呼び寄せる。

一瞬空に浮いた身体は、踊り場に投げ出された。

第四十八話 女が男を守るとき

「お、じょん。彼との勝負ができなくなる。

視界が逆さまになつたとき、そんな心配事が頭をかすめた。続いてすぐに身体が衝撃を受ける。息が止まり声にならない叫びが喉元でつかえた。唇を噛みしめて痛みをやり過ごそうとしても、各処から同時に襲いかかる激痛が容赦なく私を責める。

「お、越智さんっ」

真っ青になつた滝沢主任に抱き起されると、触られた箇所が再び痛みという悲鳴を上げた。歯を食いしばって耐え、左半身を下にして階段にもたれかかる。

やがて激痛の波は徐々に引いていったが、足だけはだんだんと熱を帯びてきた。深呼吸をして階段から落ちた状況を思い起こしてみた。右足首を捻った後は脚、腰、腕、肩と右半身を下から順番に強打した。とつさに頭をかばつた自分に金一封をやりたいぐらいだ。落ちた高さがそれほどでもなかつたから、打ちつけた部分は多分打撲程度で済むだろう。問題は右足首だ。これは……やつちまつたかもしぬれない。

明日の勝負、この身体じゃ無理だな。係長、楽しみにしてたのに。あつとがっかりするだらうな、一度も続けて流れたら。

がつかりする？

ふつと笑つてしまつた。さつき床に落ちるまでのわずかな時間に何を考えた？ あれが正直な気持ちなら、残念に思つてるのは私のせいに。こんなことになつて初めて、自分が本当は何を望んでいるのかがわかるなんて馬鹿みたい。

「私、本当は彼に会いたくて

「越智さん、すぐに救急車呼ぶから」

ちょっと待てい！ 人がせつかく甘やかな気分になつていたところを。

蒼白な顔で携帯電話を取り出した主任を慌てて止めた。

「救急車なんて大げさなことしないでください！」

それよりこの事態をどうしてくれのかと、彼に対して強い憤りが沸き起つた。

手を振り払ったのは私だ。バランスを崩したのも私。でも彼がこんな行動に出なかつたら、そもそも待ち伏せなどしなかつたら、階段から落ちることはなかつたのだ。

そして憤りの次に抱いたのは、このことを知つたら係長はどうするだろうという危惧の念。

これまでの経緯を考えれば怒り狂うよつた気がする。そしたらどんな行動に出るのか。挑発には乗らないと約束してくれたけど、これはそんなレベルを超えてる。主任が待ち伏せして昔の噂をあれこれ私に吹き込んだという事実だけでも、彼の負の感情を一気に増幅させるには充分なのに、怪我までさせられたとあっては

『何をするかわからない』

あの暗い声が最悪の事態を想像させた。そんなことになつたらもう終わりだ。

焦慮にかられて額に手をやると、主任は何か誤解したらしく再び同じことを口にする。

「やっぱり救急車呼んだ方が」

だからいらないって言うのー。救急車なんか来たら大騒ぎになるじゃないよ！

よく見れば気が動転しているらしい様子の彼は、本当にさつきまで悪役そのものだった人物なのだろうか。さすがに自分がしでかした不始末の大きさを思い知つたか。

大いに反省しろ、と心の中で厳しい声を上げてから、ふとこの状況が利用できないかと思いついた。彼は今、私に対し弱い立場でいる。冷静さも欠いている。これにつけこめば一気に問題解決できるのではないか。

そうとなれば私の頭がフル回転する。係長から脱水中の洗濯機並と称された速さで瞬時に黒い計画を組み立てると、薄笑いを浮かべて口を開いた。

「救急車を呼んだら警察が主任を迎えてきますよ?」

穏やかな口調と穏やかでない内容とのギャップに彼はきょとんとして訊き返した。

「警察?」

「逮捕勾留ですね。傷害とストーカー規制法違反容疑」

「ストーカー!?」

今度は顔を驚愕の色で染めておうむ返しだ。期待どおりの反応に気をよくして詳しく述べてやった。

「『何度かの偶然の出会いを運命の恋と勘違いして、被害者である後輩女性Aさんに恋愛感情を抱き交際を申し込んだが断られた。しかし諦められずAさんと仲の良い上司Bさんに嫉妬して嫌がらせを続けた挙句、非常階段でAさんを待ち伏せして交際を強要したが拒絶され逆上、階段から突き落とした』……っていう容疑ですね」

「いや、それは」

「ランチに行くのにわざわざ私を迎えてきたりとか、私たちは縁があるってアピールしたりとか、私と係長のことを侮辱したりだとか、目撃者はいっぱいいます。仮に起訴されなくとも主任の社会的信用はガタ落ちですね。それと損害賠償請求も待つてます。精神的肉体的苦痛に対する慰謝料、高くふっかけますから。こちらは敏腕弁護士が相手ですよ? 兄なんですけど」

ハッタリだつたが強氣で攻めたら効果はあつたようだ。主任は言葉を失つたまま呆然としている。冤罪をかけられようとしているのだから無理もない。我ながら悪辣だが、これぐらいインパクトがないと次に提示する条件が生きてこないのだ。

「でも今すぐここから立ち去つて何食わぬ顔で会議に出るんだつたら、ストーカーだつたことは誰にも言いませんけど」

「……どういうこと？」

「私はここに主任とは会わなかつた、一人で階段から落ちたつてことですよ」

「じめん、意味が解らない」

「主任が原因で私が怪我したと知つたら、激怒して何するかわからぬ人がいるつて言えば解りますか？」

それで理解したらしい主任は信じられないという顔をした。

「……もしかして瀬尾のことを言つてるんだつたら、越智さん、騙されてるんだよ。あいつは社長のお気に入りを手懐けるためなら何だつてやる奴だ」

係長に対する不信の根はこんなにも深いのか。彼の歪んだ声を聞いてそう思つた。ここに至るまでにどうして彼らはもっとわかり合おうとしなかつたのか。難しそうに見えて案外なんてことないという事例はいくらだつてあるのに。

係長はそう思いたい奴には思わせておけばいいって、私と彼が眞実を知つていればそれで充分だつて言つてたけど、きっとそれは間違つた。自分をわかつてもらおうとしないのは相手を見くびつている。私に素顔を見せてくれたように、主任にも同じことをすればよかつたのだ。

そしてそれは今からでも遅くはないと思つた。

「……佐久間主任に言われたことがあるんです。社長のお気に入り

である私と一緒にいると色眼鏡で見られるかもしれないのに、それでも一緒にいたいと言つ人がいたとしたら、それはどうしてなのか。滝沢主任はどう思いますか？

真っ直ぐに彼を見て質問をぶつけた。目を開けてよく見ると言わされたことが、今なら答えられると思つ。係長が自分の気持ちを優先してくれと言つた本当の意味も。

主任は質問の意図がわからないのだろう、戸惑いながら答えを口にした。

「……それは、出世のことしか頭にないか、よほど君のことを……そこで言葉が止まり驚きの形相に変わる。

「瀬尾がそうだって言うの？」

「どっちだと思つかは主任の自由です。でもこの先考えが変わらかもしれませんよ？ 係長が一番を田指すことと私が社長のお気に入りであることが関係あるのかどうか。だいたい、今のところ大本命は比嘉課長なんだから、私のことでいつまでも揉めていたら一人とも追いつけないですよ」

「大本命って……」

「『田指せ！ H & amp; G ハーフコニケーションズ社長杯』のレスですよ。主任も参加するでしょう、それともストーカー容疑で警察に捕まる方がいいですか？」

主任はしばらく呆気に取られていたが、やがて大きく息を吐き出した。

「……越智さんがそんな激しい人だったとは知らなかつたな」「ペットだつて時と場合によつては噛みつくんです」

「比嘉さん相手じや勝ち日はなさうだけなど……」

「ダークホースが勝つこともありますよ。本気になればね」

揺らいでいた瞳がこちらを見据えた。彼もまた思うところがあるので、あの係長をライバル視するぐらいの人なのだから。勝ちたいと思う人間はチャンスがあればつかむはずだ。ましてや

それしか選択肢がないとなれば。

「嫌だと言ひならストーカー証言しますよ？ 取調室が待つてますよ？ 毎日弁ものですよ？ いいんですかそれで？」

足の痛みのせいで最後はもう脅迫の質も落ちてしまった。すると主任はふふっと笑みをこぼしてボヤくように言つた。

「天丼は好きだけど、毎口じや飽きるだらうな」

ようやく滝沢主任を追い立てて非常階段にポツンとひとり残る。右足首をそつと動かしてみたが痛みがひどく、これでは歩けそうもなかつた。バッグを引き寄せて携帯電話を取り出す。杏子さんを呼び出して簡単に事情を説明するとすぐに来るといつ返事をもらつた。

田をつぶると、空に投げ出された一瞬に見た上下逆さまの景色が思い出されて、今頃になつて恐怖を呼び覚ました。床から伝わる冷たさも加わつて身体が震える。

誰も来ない階段でひとり痛みを抱えている心細さに、ふいに涙が浮かんだ。

会いたい。

ついさつき自覚した想いが自然と沸き上がつてきた。階段から落ちたときもそうだったけど、こんなときには正直になるもののかな。

自分が望んでいることが何なのかよつやくわかつたら、抑えきれなくなつた。

係長のそばにいたい。ふたりで会いたい。あの笑顔で私だけを見てほしい。手をつなぎたい。ずっと一緒にいたい。

止めどなく溢れてくる想いはもう隠すことも誤魔化すこともできなかつた。

好き。彼が好き。

私に見せてくれた彼の姿が。そしてこれから先に見てくれる、まだ私の知らない姿も、きっと好きになる。

怖いけど、それでも好き。怖い以上にずっとずっと好き。自分の中にある、ただシンプルで強い『好き』の気持ち。そして彼を求める気持ち。未知のものへの不安より、今自覚した想いはひとつと大きく抱えきれないほどだった。

だから彼に伝えたくなつた。

でもその前に私は嘘をつかなきやならない。もしも後でバレたらすごく怒られるだろうけど。後々まで嫌味を言われるかもしれないけど。……それは嫌だな。絶対バレないようにしないと。

彼だけじゃない、工藤課長にも松永部長にも、WEB事業部の全員につかなきやならない嘘。越智美春一世一代の大嘘だ。演技力を総動員して皆を騙ぐらかさないといけない。

一人でやり遂げられるのだろうかという不安は、不思議と高揚感が吹き飛ばしてくれていた。きっと大丈夫。きっとうまくいく。
そして私は彼に好きだと告げよう。

重い防火扉が開く音が聞こえた。見上げると足音と共に杏子さんと藤田さんが階段の上部に姿を現した。二人とも息を飲んで一瞬立ち止まつたが、藤田さんが先に動いて駆けつける。

「ポチ、大丈夫っ！？」

続いて杏子さんも階段を駆け下りてきて、こわばつた顔で口を開いた。

「あんたいつたい、なんでこんなことに……」

「すみません、ドジ踏んじやいました。足を滑らせて……」

「説明は後。とにかく病院に行こう」

会話を遮った藤田さんが、おぶつた方が早いと言つので、杏子さ

んの手を借りて彼の背に乗った。そして階段を下り九階を通り出 口へと向かったのだが、タクシーでも呼ぶのかと思っていたら、杏 子さんは問答無用で社用車を借りてきた。

藤田さんは会社に残つて事情説明に当たつてくれることに なつた。『足を滑らせて階段から落ちた』以上のことなど彼は知らないのだから、とりあえずは皆も納得するしかない。これで滝沢主任がいつもどおりに振舞つてくれれば嘘が破綻することはないだろう。

杏子さんが運転する後ろで横になつて、ようやく一息ついた。きつと大丈夫、うまくいく、と心中で自分を勇気づけて

治療が終わり処置室から出ると杏子さんが待つていた。浮かない顔で私に容態を訊く。

「歩けるの？」

「痛み止めが効いてますから」

松葉杖はうつとおしいが捻挫のため固定された右足では歩くこともかなわない。打ちつけた身体は幸い打撲だけで済んだ。

「どうする？ 家に帰つた方がいいとは思うけど……さつき藤田くんに連絡入れたら、あんたのこと聞いて上司連中びっくりしてるので。特に係長……いきり立つてるってよ」

「会社に戻ります。事情説明しないといけないし……」

私の姿を見るまでは彼も不安だろうし、私の口から事の次第を訊きたがつて いるだろう。嘘もつきとおせばいはずれは眞実になる。たとえ詭弁だろ うと、私自身がそう信じていればいいのだ。

ロビーは薬の処方や会計を待つ患者や付き添い人が雑多にひしめ いていた。その一角に私を座らせると、杏子さんはもう一度藤田さ んに電話をかけにいき、一人で会社に戻ると告げた。

様々な健康事情を抱えた人々が行き交う中、いつしか名前を呼ば れ会計が終わる。慣れない松葉杖に悪戦苦闘しながら建物を出て何

とか社用車の後部座席に乗り込んだ。

杏子さんは運転席に身を沈めたがエンジンをかけずにしばらく無言でいた。やがてくるつとこひらに身体を向けるとためらいがちに口を開いた。

「言おうかどうしようか迷つたんだけど……」こんなことになつた以上、あんたは知るべきだと思つ。係長と滝沢主任がやりあつた後、営業部にいる同期に聞いたの。……主任つて去年の冬ぐらじまで二年間付き合つた彼女がいたんだつて。K化粧品の広告部……ウチの会社のクライアント。彼女に好きな人ができるつていう理由で別れたらしいんだけど……それが係長だつたつて

突然もたらされた情報に言葉を失つた。それがあのふたりの間に存在していた葛藤の原点なのか。

「結局係長とその人、二ヶ月もしないで終わつたらしいの。しかも一方的な別れ方だつたつて。まあそれだけならどこにでもある男女の話だし、内心どうあれ主任だつて受け入れてたんだろうけど……係長がWEBに異動してそれが変わつたつて

「どういうことですか？」

「社外の女性関係がすっかりおとなしくなつて、ファンの子たちともスッパリ手を切つて……これまで『そういうヤツ』だからつて軽蔑してれば済んだ係長が急に変わつて、『今更そりやないだろ、変わるんならなんでもつと早く変わらないんだよ』……飲んでクダ巻いたんだつて」

別れた恋人のために怒りを溜めていたのか。結局彼女もまた係長にとつては『過去の女の一人』に過ぎなくなつて、そんな結果を迎えるために自分たちは別れることになつたのかという怒り。

「皮肉なことだと思つわよ。だつて係長が変わつた理由つてきつと

「

杏子さんはそこで言葉を止めてじつと私を見つめた。その瞳を見て彼女の言いたいことがわかつたような気がした。

滝沢主任には、係長が社長のお気に入りを味方につけて出世目的に利用しているように見えていたんだ。私を信用させるためにこれまでの態度を変えていると。

私が「一緒に一番を目指す人がいるのか」となじるよう言つたときに歪んだ顔を見せたのも、彼女への想いがまだ完結していないからなのかもしれない。もしかしたら、主任はその彼女と一緒に一番を目指したかったのかもしれない。だとしたら彼をあんな行動に駆り立てたのは私の言葉だったんじゃないか。

それぞれの方向を向いていたはずの想いがねじられてつながって予想もしない結果を生んだ。今私がやろうとしていることも、自分の想いばかりに目が向いていて、正しいことではないのかもしれない。どんな結果に行き着くのかもまだわからない。

でもこの選択をしなかつたらきっと後悔すると思った。だから私は何度も同じことをするだろう。

やがて杏子さんが沈鬱な顔で口を開いた。

「……一人で落ちたんじゃないよね？」

「一人で落ちたんですよ」

間髪を入れずに返答した私を軽く睨む。

「あなたが我慢して口をつぐむことじゃないんだよ？ 事実ははつきりさせるべきだと思う」

すでに確信しているらしい彼女には、通りいつぺんな言い方では通用しないと思つた。

「一人で落ちたんです。それが事実です。……そうでなきやいけないんです」

「……係長のため？ あなたが侮辱されてあれだけ怒れる人だから、あなたのこんな姿見たら何するかわからんけどさ。でもね」

口調を強いものに変えて彼女は言葉をつないだ。

「あたしがさつきの話をしたのは、係長のためでも主任のためでもないの。男女問題に端を発した男一人の揉めごとに、あなたが巻き込まれるのはおかしいって言いたいの。

係長がそのことを話さなかつたのは男のするだと思つし、あんたが引つ被ることなんかないよ。 たとえそれであの一人が会社を辞めることになつてもね

男のするだ。でも私にはそやは思えなかつた。少しづつ彼を知つてきた今の私には。

何があつても嫌いにならないと約束した。何があつても彼を信じる。私の言葉を疑つてはいないうけど、過去は変えられないことも一方ではよくわかつている。

今どれほど誠実に尽くしても、過去の自分は消えることなく冷ややかに意地悪な目で、今の自分を見つめているのだろう。彼は怖いのだ、ずるいのではなく。私が未来を怖がっていたのとは反対に、彼は過去を怖がつていたのだ。

滝沢主任と関わらないでくれと何度も言つたのも、営業部時代の噂と合わせて私に知られるのが怖かつたんだろう。

そう思つたら、彼のことがたまらなく愛しくなつた。怖さを抱えながらも私に自分を見せてくれた彼が。

ふつと笑つて唇を動かした。

「杏子さん。……女が男を守りたいって思つたら、おかしいですか？」

真つ直ぐ見つめた視線の先で、彼女は目を見張りやがて顔をほころばせた。

「WEBのペットがいつの間にかそんなことを言つみつになつたとは」

「ペットだつて成長するんです」

「そうだね。 おかしくないよ、ちつとも。守る価値のある男な

「

私は笑つて大きくなづいた。

「一番になれる男（ひと）です」

会社へと戻る道は逸る気持ちを抑えるのが大変だった。

早く彼に会いたい。会つて私は大丈夫だと安心させたい。彼に気持ちを伝えたい。

怖いのは私だけじゃない。でも互いに怖さを持っていることがわかれれば絆が一本増える。どちらかに笑顔が欠けることがあっても、不安に感じることがあっても、それがなぜなのかを互いにわかり合おうとすればいい。

そうやって少しずつふたりの絆は太くなっていくんだろう。

どうやって好きだという気持ちを伝えたらいいだろう。会社で言うのは無粋かな。それとも食事に行つた帰り道。ふたりだけの場所で。

そうだ、やっぱり彼と勝負をしよう。真剣勝負。この際トランプでも何でもいい。勝負に勝つて、今度は私から彼に言つ。

『私とデートしてください』

そしたら彼はきっと、大好きなあの笑顔を見せてくれるから。

第四十八話 女が男を守るとき（後書き）

次回、第2章最終話です。

第四十九話 ひと足早い春

病院から会社に戻ったとき私の頭を占めていたのは、瀬尾係長にどうやって勝負を申し込もうかということだった。すでに頭には春が来て蝶がひらひらと飛んでいたと言つてもよい。

ところが私を迎えたＷＥＢ事業部の同僚たちは懸念する様子を隠そうともせず、工藤課長は険しい顔をして私が戻つたことを松永部長に報告するため部屋を後にした。別室で話を聞くからすぐに来いと言い置いて。

雲行きの怪しさを予感したところで、佐久間主任が病院への付き添いについて杏子さんをねぎらい、打ち合わせ用の小部屋まで私に付き添つた。係長に早く会いたくて所在を問つと、会議中だとぶつきらぼうに答える。

「何か怒ります?」

「当たり前だ」

「……すいません」

「バカ、お前にじやねーよ。それより怪我はどうなんだ」

右半身の各部位は全治十日程度の打撲、右足首は韌帯の軽度損傷のため治癒には一ヶ月程かかるとの診断が出たことを伝えると、主任は事情説明が終わつたらすぐに帰れと言う。部屋に入つても常になく気を遣い、私が座る椅子ばかりか右足を乗せておけるように他の椅子も近くに用意してくれた。

「あいつにとっちゃ、これ以上の罰はねえだろくな」

ボソッと言つた一言が気になつたが、部長と課長が入室してきたのを見ると彼は部屋を出でていった。

向かいの席に着いたふたりはまず怪我の容態を訊いた。診断の内容を告げて、深刻な雰囲気を壊そくと明るく笑つて言い添える。「でも右手は健在です。仕事はできますよ。不幸中の幸いですよ

ねつ

顔の横で右手をヒラヒラさせアピールしたら、「バカたれ！」

と部長に怒鳴られた。

ひええ。おつかね。

「で、そんなひどい怪我ができるほど派手に階段から落ちたわけを聞かせてもらおうか」

課長がいつもと違つてひどく緊張した面持ちで尋ねる。不審に思いながらも私は用意してあつたシナリオをスラスラと述べた。

通勤途上の非常階段でうつかり段を踏み外してバランスを崩し、右足を捻つて支えきれずに踊り場に落下した。幸い高さはなかつたので大事には至らなかつた。

「不注意ですみませんでした。ご心配をおかけしました」

頭を下げて一、二、三とゆっくり数えてから顔を上げたが、ふたりとも相変わらず厳しい表情を貼り付かせたままだ。

「本当にそれだけなのか」

部長が念を押して尋ねる。彼にまといつぶ重苦しい空気が何があるのだと感じさせずにはいられなかつた。

私が不審に思つてゐるがわかつたのか、課長が重々しく口を開いた。

「今朝の会議に滝沢が遅刻してきた。あいつには珍しく、ずっとそわそわして落ち着きがなかつたよ。……このこととお前の怪我が関係あるんじゃないのか？ 近頃滝沢はお前をネタにして瀕尾に仕掛けたからな。何かあつたと考へてもおかしくないだろ？」

滝沢主任、もう少し肝が据わつてゐるかと思つたら、案外チキンか。彼には天丼でなく親子丼がお似合いだ。

彼らがすでに疑つていた事情がわかつたが、当事者自らが強く否定すれば受け入れざるをえないだろ？

「何もありませんよ。滝沢主任には会つてもいません。一人で階段から落ちたんです」

「本当なのか」

「誓つて本当です。どうして私が嘘をつかなきやならないんですか？」

「……それはまあそうだが

彼らは顔を見合わせると軽く息を吐いて表情を和らげた。何とか乗り切つたと、こちらもまたホッとしたが、時を置かずに部長が再度口を開く。

「お前さん、瀬尾を納得させられるか？」いつはすこと厄介かもしれないが

私が階段から落ちて杏子さんとともに病院へ向かつたと同僚たちから告げられると、係長は顔色を変えてすぐさま部屋を出でていこうとした。しかしそれを課長が危うく止める。

「どこに行くつもりだ」

「営業部に。滝沢に決まっています、あいつが

「まあ待て、落ち着け」

簡単な説明を私から受けていた藤田さんが、私が階段を踏み外したらしいこと、滝沢主任の名前は出でていないことを伝えると、課長は「ポチがそう言つてんだから」と係長をなだめにかかった。

しかし納得しない彼は「越智さんならそう言つでしようね」と、騒ぎを大きくしたくないが故に私が黙っている可能性を指摘する。今朝の滝沢主任の様子を不審に思ったこともあり、課長はまず私自身に事情を聞くことを提案した。

「とりあえずお前は会議に行け。ポチの話を聞くまでは早まつたことすんな

部長からも同様に諭されて係長は渋々了解はしたが、一点これだけは譲れないと言い張った。

「僕も越智さんから話を聞きます。お一人が先に彼女から何を聞いたとしても、僕自身が彼女と話します。いいですね？」

部長の話を聞いて確かに厄介だと思った。係長がそこまで確信してこるとは、春が来ていた頭は再び冬に逆戻りだ。ただ勝負しようと言えばそれでいいと思つていたのに。

やがてドアをノックする音が聞こえ、会議を終えた係長が入つてきた。私の右足に視線が動いて顔を歪ませる。彼の怒りが空氣を伝つてこちらまで届いた。

「すみませんが、越智さんとふたりだけにしていただけませんか」部長と課長はやれやれといった表情を作ると、「あまり熱くなるな」と言つて置いて部屋を後にした。

係長は私と直接向かい合ひように椅子を置いて腰を掛けると、最初に身体の具合を訊いた。これは嘘をつくわけにもいかないので他の上司に話したのと同じ内容を伝える。すると彼の膝の上できゅっと握りしまった拳が震えた。

「これじゃ走れない」

悲しそうにつぶやく彼の気を引き立たせるよつておどけて言つてみせる。

「治ればまた走れます。もっと速くなるかも知れませんよ?」

「僕が言いたいのはそんなことじゃない」

切なさとやるせなさで織り上げたような声が私の心を撫で上げた。

その途端、先程自覚したばかりの彼への恋情がもたげてきて、そんな場合ではないにもかかわらず愛しさと息苦しさを同時に覚えた。しかし怒りに満ちた心情に囚われている今の彼には私の心の動きなど見透かせるはずもなく、続けて口に出した人物の名によつて、決壊寸前のダムに居合わせているかのような現実に引き戻された。

「……滝沢がやつたんだね?」

「違います。私がドジ踏んで、階段から落ちたんです」

「滝沢から逃げようとして落ちたんだろ？」

「私一人だつたんです。他には誰もいません」

「階段から落ちた君を放つてあいつは逃げたのか」

「本当に滝沢主任は何もしていません。というか、主任とは会つてもいません。非常階段を使うのなんて私ぐらいのものじゃないですか」

それよりも次の勝負の話をしませんか？ 今度は頭脳戦です。ポーカーそれとも神経衰弱？

そんなふうに明るく言い出せる雰囲気ではなかつた。どんなに否定しても彼は信じてくれない。こんな話をしたいんじゃないのに。

「……わかつた。君がそんなに言つなら、警備室に行つて防犯カメラの映像を見せてもらひつ」

とんでもない発言にぎょっとして、頭の中を思考がぐるぐると駆け回つた。

確かに防犯カメラは非常階段にも幾つか設置されている。階段ダッシュシューがバレたのだつてそれが理由だ。でもあの踊り場の辺りにはカメラはなかつたはずだから映像も何も……ちょっと待つて。十階非常口のカメラ！ 主任はあそこを通つてゐる。まずいよそれは。

「顔色が変わつたね」

ハツとして視線を動かすと彼はかすかに口角を上げている。やれ……汚い。

「係長は私のこと信じてくれないんですか」

「信じるさ。君の言つことはすべて信じる。でもそれと事実を調べることは別だ

「そんなの屁理屈です」

口を尖らして文句を言つたが彼は構わずにもう一度尋ねた。

「滝沢が原因なんだね？」

もはや心理的に追い詰められているのと変わらなかつた。これで

はもう勝負の話じゃないではない。

「いくら待つても答えようとはしない私に焦れたのか、係長が立ち上がりた。

「どこに行くんですか」

「滝沢に直接訊く」

ダメだ。おそらく主任は嘘をつき通せない。もしやうなつたら、きつと係長は

そう思つたときにはもつ、恐怖を感じて口走つていた。

「主任はもう何もしてきません。係長を挑発もしないし、私のこと当てこすりも言わない。今までと同じ、ただのライバルに戻るんですよ。それでもういいでしょ?」

「あいつと取引したのか」

「取引じゃありません、脅迫です。だから係長から動いておお」とになつたら、今度は私が困るんです。私を失業させたいんですか? ずるい言い方であることは百も承知だ。でも彼の足を止めるためにはこんな手段しか思い浮かばなかつた。

係長は激情を抑えるように唇を噛みしめて私を見下ろした。

「そんなことまで君にさせて……今僕がどんなに自分に腹を立てているかわかるか? 僕のせいでこんな怪我をさせた上に……」

「係長のせいじゃありません。誰か一人に責任があることじやなくて、ただ運が悪かつただけなんです。それよりも」

「これから先の話をしませんか。

「そう言おうとした。冬の話はもういい。春はそこまで来ているのだから、心が浮き立つような未来の話がしたい。

ところが係長は私を遮つて静かに口を動かした。

「僕が今からやううすることは君の怪我とは何の関係もない。ただ僕がムシャクシャして前から気に入らなかつた滝沢を殴りつけるだけだ。それなら君は会社に残れるよな?」

決意を込めた表情を見て彼が本気であることを知った。もし再び暴力を振るつたらそこで終わりだ。私は唇を震わせた。

「どうしてそこまで……」

それを聞くと彼の瞳が大きく動き、抑えが利かなくなつたように感情がほとばしつた。

「君の足だぞ！　君の足に怪我をさせたんだ！　許せないんだよ、俺は絶対につ……」

私を真っ直ぐ見下ろす瞳の中に彼の想いを見たそのとき、すべてがつながつたような気がした。

スケート場で私を眺めていた目。水族館でイルカを追つていた視線。あの告白。

『君が滑つてるとこが見たい』

『君に似てる。自由自在などこの

『風のように自由だつた』

きっと彼は私の走る姿を何よりも愛してくれている。走るとき、風になるときにはこの世のすべての事柄から自由でいられる私。「ちつとも可哀相なんかじやない」と言つてくれたのも、そんな私の姿が彼にとっては何よりも意味のあるものだから。

私の足が地面につくことすらできない状態は、彼にはきっと苦痛でしかなくて

合わせた瞳をふいと背けて、彼は踵を返し入口に向かつて歩き出した。

テープリングを巻いた右足に田をやつて泣きやうになつた。走れない。追いつけない。こんなときに役立たず。

心が叫んでいる。　だめ。行つてはだめ。　ここにいて。

もうすぐ彼がドアに届く。　どうすればその足を止められるの？

手がドアに伸びる。

扉を開けさせない方法は？

思いついたことはたったひとつ。ずっと彼が望んでいたこと

「待つて、達也さん…」

ビクッと彼が震えてドアに伸ばした手が止まった。そしてその手が下ろされゆっくりと身体がこちらを向く。

私はいつの間にか立ち上がっていた。止めた彼の足を今度はここまで動かしたくて。

「宿題の答え、両方とも見つけたんです。だから行かないでこっちに来て。私のところに。」

表情が固まつたままの彼を真っ直ぐ見つめて想いを込める。

「私と一緒に答え合わせしてください」

強ばつていた彼の顔が少しずつ柔らかさを取り戻し、頬には赤みが差してきた。それでもまだ躊躇しているのかその場から動こうとしない。

もう一度強く想つた。きちんと彼に届くように。

しかしそのとき身体がぐらぐらと揺れ始めた。固定した足は軽く床に触れる程度で、全体重は左足にかかりていた。
「こんないい場面でこれはないだろ！」

右足を床につくのはまずい。それは避けたい。周囲を見回したが、あいにくと机は離れた位置にある。今の今まで座っていた椅子にどすんと倒れ込むのも痛そうだ。足を乗せていた椅子は立った拍子にキャスターが動いて手が届かない！

どうしよう、ぐらぐらが止まらない。倒れる

そのとき突然視界に長い脚が現れ、一瞬の後にはストライプのネクタイが目に飛び込んできた。温かい質感が身体を包み、覚えのある香りが鼻孔をくすぐる。

抱きすぐめられた私の髪に吐息がかかつたとき、彼が戻ってきてくれたことを知った。

耳に伝わってくるドクンドクンといつ音が、速いリズムを刻んでいる。愛しさがこみ上げてきて、背中に腕を回し上着をぎゅっとつかんだ。

広い胸にすっぽりと収まつた私は安心して体重を預ける一方で、布地越しに感じる『彼』にドキドキしていた。

密着した身体に響く一つの鼓動。数センチ先に見える彼の喉。交わる匂い。

非常階段で持て余すぐらいに強く求めた彼への想いは、もつとぎゅっと抱きしめたら伝わるのかなと思った。でもさすがに打撲した身体はそれを許してはくれず、もう右肩が痛くなつて身じろぎした。すると少し力を緩めた彼が声を落とす。

「……する」よ君は、こんなときに

私は顔を上げて彼の目をのぞき込んだ。

「……滝沢主任を殴らないって約束してくれますか？」

「できないと言つたら？」

「今すぐ悲鳴を上げて、瀬尾係長にセクハラされたって訴えます」「殴るよりも不名誉だな。僕のことも脅迫するつもり？」

「はー！」

「堂々と言つなよ

苦笑する彼の瞳はもう屈いでいて、私の姿を映し出していた。勝利まであと一步。

「どこにも行かないですよね？」

つかんだ上着をもう一度ぎゅっと強く握る。すると彼の顔に彩りが宿つた。

「……君のせいで行けなくなつた。やっぱりずること

「するくともいいんです。ここにいてくれるなら

私の勝ちだ。考えていたような勝負ではなかつたけど。それでも私の勝ち。

嬉しくて笑顔になつたら、それを合図としたかのよつて彼の唇が落ちてきた。

そうして幾許かの時間がたち、ふたりの唇が離れて私は目を開けた。見上げた先には照れたように笑う彼の顔。

「フライングだ。本当は君の誕生日まで待つつもりだったのに」「え？」

「課長の家で聞いたよ。三月四日、君の誕生日。……次の勝負に勝つたら、誕生日は僕と過ごすことつて言おうと思つていた」私の誕生日を一緒に。それはどんなに幸せなことだひう。ふとある想像が目の前に現れて心が弾み、一つの提案を彼に持ちかけた。

「答え合わせはそのときにしてませんか？」

「答え合わせ？」

「宿題の答え、ちゃんと言葉で聞きたいし……言いたいです」

彼は理解の色を顔に浮かべはしたが、提案には難色を示した。

「一週間も先じやないか。今すぐにだつて言つてあげるし……聞きたいのに」

「記念日の方がベタな感じがして好き」

「あらかじめ知つてるつてのはベタじやないだひう」

「一重の喜びだからいいんです」

「僕にとつては三重だな。もう勝負しなくて済む」

どちらからともなく笑つた。それが収まると彼は頬に手を当てて今度は優しく笑む。

「ふたりでお祝いしような。美春の好きな鍋、ふたりで一緒に食べよ」

鍋。……そつか、そだつたのか。

考えまいとしていたことを思わぬ形でプレゼントされたみたいで、

身体の中から震えが沸き起こり泣きそうになつた。それを無理やり笑顔で誤魔化そうとしたけれど、彼が困った顔をするので成功したとは思えなかつた。

「だからそんな顔されると もつ我慢しないぞ」

再び唇が重なつた。今度は引っ張るように吸いついては離れる。

何度も何度も。

想いの強さと深さが表れたようなキスを、私は受け止めるだけで精いっぱいだつた。

部屋を出る前に係長が、滝沢主任をどう脅迫したのか訊きたがつた。腹黒の十八番を横取りしかねない所業について渋々打ち明けると、しばし呆然とする。

「……君だけは敵に回したくないな」

苦笑してつぶやく彼に向かつてさりげなく付け加えた。

「主任も『社長杯』のレースに参戦するんです。これで勝負が面白くなつきましたね」

彼は顔をしかめて、しかし暗さは微塵も感じさせない声で言つた。「あいつには絶対に負けない。いろいろ言いたいことがあるのはわかつてるけど、それでも僕が勝つてやる。あいつに負けるようじや比嘉さんには勝てないからな。せつかく君が僕の体面を守ってくれようとしたんだから、君の気持ちに応えたい。それでいい?」

それ以上の言葉などもはや必要なかつた。彼が前を向いて走つてくれることが私の望みなのだから。

係長は屈みこんで松葉杖に縋る私にキスをひとつ落とすと、ドアを開けて「行こうか」と言つた。

唇の感触をすぐに名残り惜しく思ひ自分に驚いて頬が熱くなり、彼から目を逸らして先に部屋を出た。慣れない松葉杖での歩行がもどかしい。

「慌てるなよ。ゆづくつでいいから」

ふと隣で歩調を合わせる彼を仰ぎ見れば、ニヤニヤと笑っている。

「これは危ないと思い、念のために注意を『与える』ことにした。

「みんなには秘密ですよ。これ以上注目の的は『メン』です

「わかつてゐるよ。公私混同はしないからな」

キツパリとした台詞の割には顔は緩んだまま。その顔何とかして、頼むから。

「だからそんな顔してると、みんなにいじられるからやめてください

」「どんな顔」

「……ペシトを溺愛するおじさんの顔」

真由ちゃんが生まれた日、病院で課長をからかつた彼の言葉をもじつて言つてやつた。すると彼は眉をひそめて反論する。

「僕はまだおじさんじゃなし、君はもうペシトじゃない」

そして澄ました顔になつて語を継いだ。

「僕の女だ」

私を赤面させるのが目的としか思えない台詞に、目の中まで赤くなるかと思つた。なのに言つた当人は恥ずかしげもなく余裕をかましている。

「顔が赤いよ。それじゃみんなにいじられるぞ」

……やられた。

顔を見合させて互いに吹き出した。

同僚たちが待つ部屋にもうすぐ着く。いつもと変わらない顔でいないと。彼らに気取られでもしたら大変なことになる。

まだしばらくは、この喜びをふたりだけで味わつていていい。気づいたばかりの想いをもつともつと大きくしたい。彼の左隣が私の定位だと自然に思えるように。

彼がドアに手を伸ばして私を見る。微笑んでうなずくと彼も軽く笑んでノブを回した。

「ただいま戻りましたあ」

春一番が吹いたこの日。

彼と私にも、ひとつ早い春が訪れた。

第四十九話 ひと足早い春（後書き）

これで第2章完結です。ここまで読んでくださってどうもありがとうございます。
うございました。感想を寄せていただけると作者はとっても喜びます！

第3章では、ようやく恋人同士になつた二人のラブロア「いやいち
や……」だけでなく、すべての謎が明らかに！（大げさ）

さて第3章開始にあたつてしばらくお休みをいただこうと思ひます。
戻りましたらまたお付き合いしてくださると大変幸せです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5089r/>

カン違いにもほどがある！

2011年10月10日00時12分発行